

奇譚クラス
9月号

1965 · 9

9
月
号



9月号

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

第一回作品発表

キヤビネ版印画紙焼付

入墨女賊拷問刑罰集

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

背中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で厳しい拷問を受けた上、白洲で折檻、更に逆さ吊り、海老責の拷問、大の字磔と凄惨な拷問が重ねられるという想定である。

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられた女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかるうじて床についているが血が逆行する苦しさを耐え忍んでいるところへ、非情な竹の折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、ぐったりと吊られたままである。

笞打ち白洲糾問

三枚一組 略号(よゆ)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引き据えられた女賊は、先ず手荒なことをしないうちに有体に白状せよといわれたが、せせら笑って答えないので、打役の手でその入墨も見事な背中を、したたかに竹棒にて打ちまくられる。次第に変化する女賊の苦悶の形相も物凄く、全身を波うたせ、ムチの痛さに悶えるサジスチックな場面。

仰向け木馬責

三枚一組 略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足をがっちり四方に縛りつけられて、仰向けに固定された女賊。いかに痛めつけても参らない女囚に対して、女の最も無防備な姿をさらけだした刑罰を強要した。女囚は只顔をのけぞらして、この羞恥責めに対して必死になって耐えているばかりである。裂けるような痛さに失神しそうになりながら。

全裸入墨女折檻

三枚一組 略号(よせ)

着ているものを一切むしり取られた女賊は、入墨の裸身をさらけ出して白洲の砂の上にほうり出された。男たちの目の前に裸で放置されるのも、さることながら素早い取縄は女をきびしい高手小手にした上、更に股間縛りにしてしまった。竹棒で追いまくられ、足蹴にされ、女囚は砂の上を転りまわって呻めき泣くのだった。

海老責の拷問

三枚一組 略号(よす)

いかにしぶとい女賊にしても、この海老責めだけは骨身にしてみてもたえたことだろう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、両足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しさ。更に盛り上った肩先を竹がささらになるまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白状せよと容赦なく突きあげてくる。

大の字磔処刑

三枚一組 略号(よさ)

遂に稀代の女罪を白状した女賊は、磔合に四肢をおもい切りひろげた大の字に固定されて、いよいよこれから胸斬り、足斬り、両腕斬り、首斬りの一寸刻み五分試しの罠に殺しにされるのである。自分の身に、こんな恐ろしい運命が待っているとかわかっていても、荒縄で大の字にハリツケられている女賊はどうすることも出来ない。

全裸四這木馬責

三枚一組 略号(よも)

木馬の四つ足に手足をひろげて四つ這いに縛られた女賊。見事な刺青をさらけて、その臀部も、背中でも、肩口も、無防備のまま露出している。力まかせの竹のささが、はっしとばかり豊満な臀部に背中を炸裂する。髪ふり乱し絶叫しつつ耐え忍ぶ女賊の凄惨きわまりない光景。尚竹ムチは雨となつて裸身のあちこちに降り注ぐ。

ハリツケの拷問

三枚一組 略号(よめ)

かずかずの拷問仕置折檻に対しても、尚ますますその若さと美しさを発揮して衰れえを見せぬ女賊に対して、その美しさの残っている中にハリツケにしてしまおうと僅かに白布を前に当てた裸の女賊を磔架にかけてしまった。架上の美しい女賊の真白い肌も、やがて錆錆の穂先に貫かれて血汐にまみれることだろう。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

美貌で清潔な感じの溢れる新人美木乃々子嬢の体当りの演技と読者の責役出演により、ここに日本女性拷問刑罰集スチールの第一回作品をここに発表することになりました。素晴らしいスチールを是非一見下さい。

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手にきびしく縛しめられた腰巻一枚の女囚が、三角木の馬のところが背に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫びもだえる姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪の毛の末端に至るまで、女の哀れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

若い女囚に對する海老責めは、まことにエロチシズムとサジズムの極致といつていいであろう。交叉した足首を揃えて縛り、うつ伏せに二つ折りになるまで締めつけられ、美しい両足の拇指はくの字にそり反り、その激しい苦痛と羞恥に悶えに悶えぬくのである。二の腕に胸の膨らみに埋まるように喰い込んだ細目の痛々しさ。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白洲の冷たい粗砂の上に引きすえられた高手小手縛りの女囚は、首繩を引きしぼられて白状を強いられるが、返答をしないために竹をささらに割った笞で、後手に縛られていたため盛り上るようにつき出た肩先をしたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を肌にすり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

新刀の試し斬りに胴を真二つに斬られようとする哀れな死罪相当の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、脇を中心とした胴の部分だけをさらけだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔には白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サジスチックな静寂がある。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰い込むのでさえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるといふのであるから、その苦痛たるや想像を絶するものがあるであろう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を揺って悶絶するまで責め抜くのである。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどくまで高々と括り上げられ、二の腕と胸には、どす黒い捕縄が情容赦もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。そして白洲の砂の上で引きすえられた女囚には更に竹の棒を細目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

女性というものは、若痛に對して案外しぶとい耐久力を持つていゝものである。身動きもできない高手小手縛りの女囚を白洲に引きすえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰い込ませようというのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

白洲に悶える

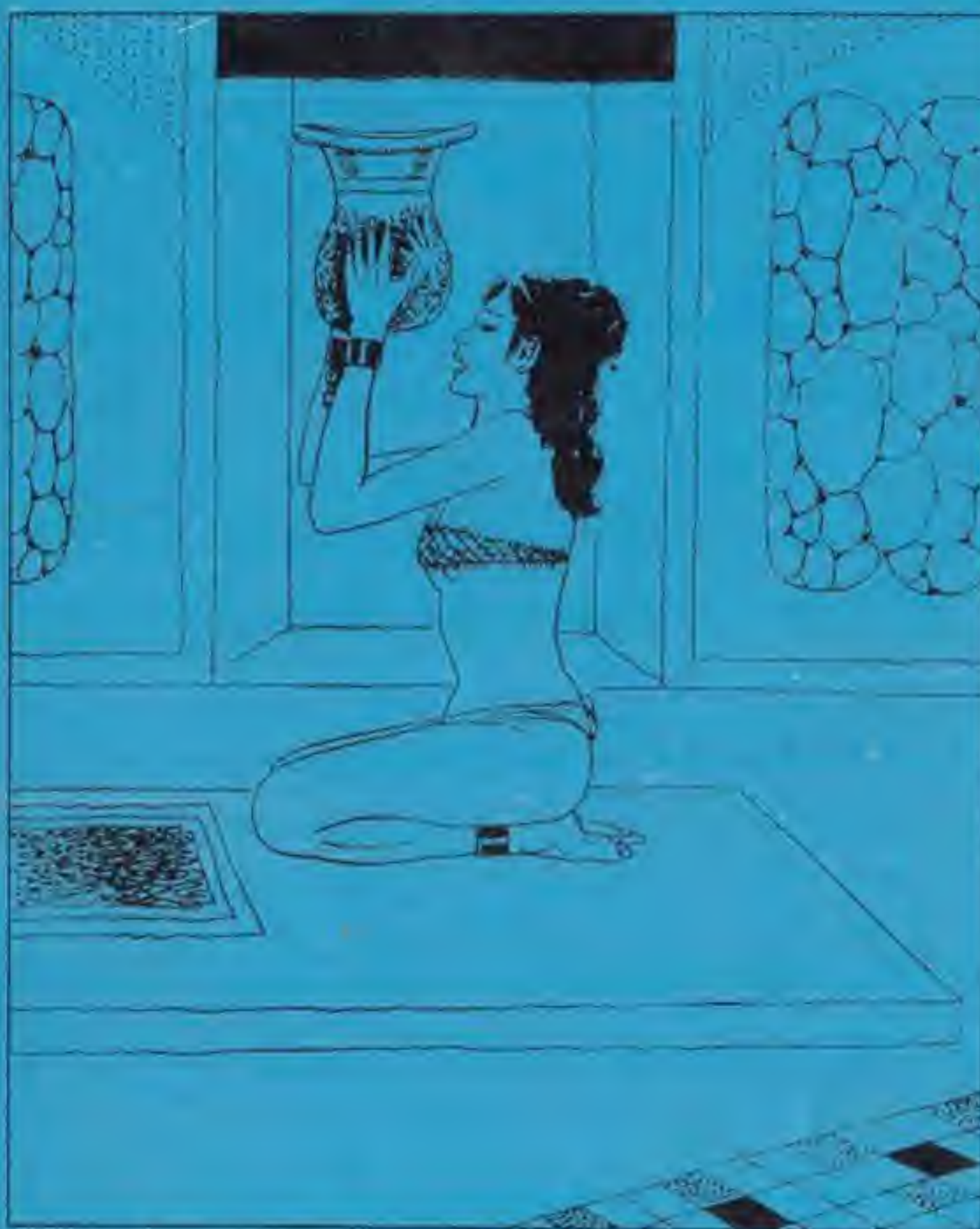
三枚一組 略号(もは)

均整のとれた奇麗な肢体と肌、殊にすらりと伸びた胫と素足の可愛いい美木モデル嬢が、白洲の上で厳しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲愴美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒していただきたいでしょう。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



9月号

¥ 300

定価
三〇〇円

アルバム「美しき縛しめ」第六集

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送料)

略号「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

●出演モデル● ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子

十二名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に徹しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三人の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さまの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。(八月十日発売)

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦軀をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く (増田)
痛めつけられるペット (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌にとまとう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)
太股の刺青をほだけ (山原)

荒縄と荒蕪で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しぼり (山原)
赤いオシメカバー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)
肉体自慢の開股縛り (長野)
火あふりにあう囚女 (大塚)

汚れた麻縄 (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカバーの艶 (大塚)
真白き肌に樹液れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中中の刺青をさらして (山原)
全裸後手縛り引回し (大塚)
両手吊りに耐えぬく (玉田)

後手吊り麻柱晒し (山原)
ネットをかぶらせる (梨花)
山の木に曝す (絹川)
庭前に見せる艶姿 (山原)
高小手足首縛り (大塚)
手ぐさり足枷 (絹川)
裸身に光と影の綾 (大塚)
後手は高々と吊り (梨花)
木馬に跨がる乙女 (大塚)
逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)
デニムの拘束衣 (大塚)
海老縛りに耐える (東浦)
女囚第六十三号 (梨花)
吐きだした布片 (絹川)
白肌にフンドシ縛り (大塚)
後手の背面さらし (山原)
麻縄は柔肌に喰い入る (大塚)
後手吊りに浮かぶ女 (梨花)
くさりに吊られた両手 (大塚)
黒革製の猿ぐつわ (新井)
スダレの中の晒し (玉田)
巻煙草責め (大塚)
日本髪腰巻しぼり (山原)
後手高小手しぼり (絹川)
立木縛りムチ打ち (桜井)
エビしぼり苦悶姿態 (梨花)
高島田着物あて姿 (山原)
臀部誇張股間縛り (大塚)
強烈な後手と乳房 (梨花)
脱げかけたズロース (絹川)
柱に後手しぼり (玉田)
強烈な鼻ひねり (大塚)
足挙げ椅子しぼり (東浦)

手摺りに開股責め (梨花)
裸身の開股縛り (大塚)
お茶目ぶり発揮 (長野)
猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)
高島田の全裸の縛り (山原)
裸身にハイヒール (大塚)
ブロックの石抱き (木村)
生ゴムの猿ぐつわ (大塚)
緊縛の悦虐表情 (梨花)
後手に縄はきびしく (刑部)
豊満に挑戦する縄 (東浦)
黒紐は白肌に映える (絹川)
裸身を踏まれる (大塚)
破られたシュミーズ (梨花)
六尺禪は白く映える (大塚)
いたぶられる足 (梨花)
蕪の中の緊縛肢体 (大塚)
鼻責めにあう晃子 (鈴木)
責めに酔う恍惚境 (東浦)
逆エビにもだえる (山原)
椅子責め媚態 (大塚)
見事な臍窩を晒す (大塚)
豊満を割る縦縛り (東浦)
足下にもがき苦しむ (新井)
黒革のフンドシ縛り (大塚)
浣腸器の恐怖 (大塚)
美肌は縄に酔う (長野)
吊られ吊られて (木村)
白禪の後手しぼり (大塚)
責めに愉悅する女 (山原)
マゾの境地露呈 (木村)
プレイに疲れはてる (絹川)
乳房は光り輝やく (大塚)
全裸美プラス縄目 (長野)



奇譚クラブ 9月号 目次

◇奇クサロン 編集部選 (9)

○新興宗教の倒錯性……編集部 (9) ○サロン楽我記 (第十五回) 辻村隆
○井里砂路 (12) ○サロンの随筆 (8) 長谷好志男 (11) ○サーカスの玉乗り……室
○蛇に寄せて……読物か小説か……久我庄一 (14) ○論壇提供 (羞恥文学「花と
方々へ」愛しい人々に捧げる……古留節人 (16) ○蛙腹通信 (妊婦花盛り
高野原美 (17) ○世相診断室……木戸川健 (18) ○女上位の夫婦……美柳輪生
○女の生首……水野弘 (19) ○夫婦の緊縛プレイ (19) ○三宅にのせられた若い
○編集部たより……編集部 (20) ○八ッボクの責め方 (19) ○アグレトリ……小川曉 (20)
○宝塚二三夫 (21) ○「体験記」浣腸犯罪……高砂浣好生 (22) ○「東京都青少年の健全なる育成
をされる少女……室井里砂路 (22) ○切腹愛好家へ一つのヒント……福井秋夫
○山原清子後援会の件……編集部 (24) ○「東京都青少年の健全なる育成
に関する条例」について……編集部 (24)

△本文

扉「本誌の信条」………保藤 久人………(25)

雑談的な散文………保藤 久人………(26)

△通信△と△文通△と其の周辺から

懸賞 (告白、手記、体験) 入選作品

黒いコートの記憶から………小妻 容子………(32)

贗作芳野眉美氏の優雅な生活………芳郎 眉美………(44)

(読者原稿) 殺人小説のすすめ………黒田 寿………(56)

耽美主義者の手記より

「自殺学校奇談」………夜乃 探郎………(64)

痴人の糧 △晒しもの△………山本 一章………(72)

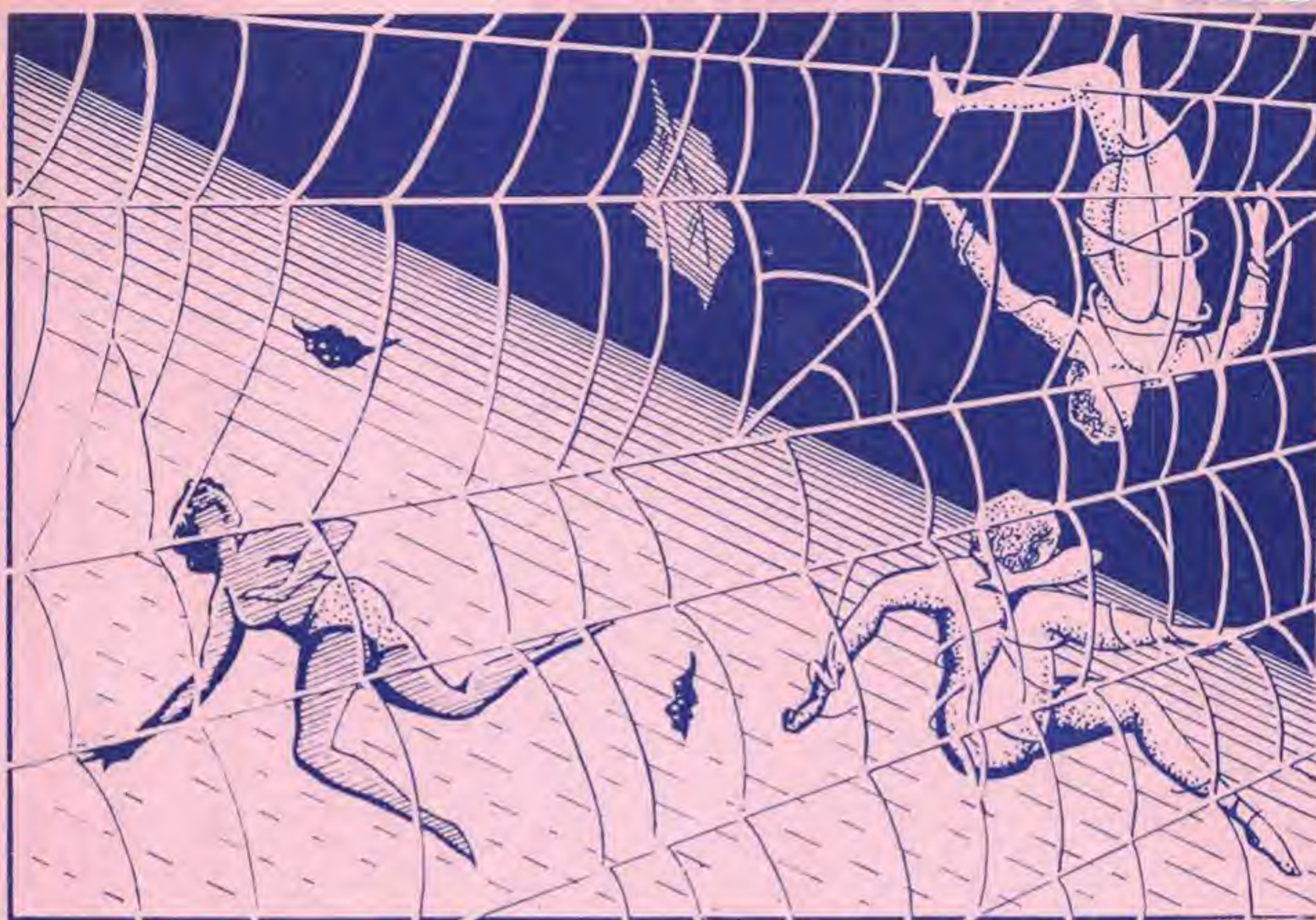
再びパリ拘置所………西条 操………(76)

心傷たむ遍歴 (第十三章そんなかみのこと (十三))

ゴム裏草履に憑かれた男の告白………須磨 孝………(84)

連載小説 花と蛇 続篇第九回………団鬼 六………(90)

ドラマ・奇譚クラブ………夜乃 探郎………(106)



浪江大五郎 △悦虐絵灯籠(13)▽……………万田 不仁…(114)

切腹研究夜話 田谷敬生論……………中康 弘通…(117)

浣腸器随想……………栗瀬 長…(120)

△S M時評▽「映画『花と蛇』遂に完成」……………橘 行司子…(123)

その朗報を背景に生きた編集ますます快調……………芳野 眉美…(126)

ガン作・マニヤのノート……………保藤 久人…(132)

濡れにぞ濡れし……………栗瀬 長…(139)

懸賞(告白、手記、体験)入選作品……………保 保…(142)

自己を分析する……………麻生 保…(142)

△珠江抄▽以前……………黒淵 嬰一…(144)

S M入門講座……………夜乃 探郎…(156)

「若き友に与う」(マゾについて)……………三原 寛…(162)

麻生保氏の生活と意見……………久我 庄一…(164)

本誌二〇〇号突破記念原稿……………芦浦素舞夫…(176)

アリアドネ(希臘神話の再編成)……………久我 庄一…(164)

贗作の贗作夜乃探郎氏の優雅な生活……………宗川 一子…(188)

△これは読物である▽……………野中 芳久…(190)

嗜虐の歴史(ソバイの記録)……………久我 庄一…(192)

責絵に生涯を賭けた一匹狼……………田沼 醜男…(194)

創作「伊藤晴雨画伯」……………編集部編…(216)

女斗美ファンタスティック・シリーズ……………久我 庄一…(164)

デパート女子プロレスリング……………芦浦素舞夫…(176)

△ゆきこ対みずえの死斗▽……………宗川 一子…(188)

一子雑感「腹切供養」のことども……………野中 芳久…(190)

交友秘録(芳野眉美氏と)……………久我 庄一…(192)

「人間、梅原北明伝」執筆後日談……………田沼 醜男…(194)

『マゾヒズム天国』……………編集部編…(216)

読者通信……………編集部編…(216)

……………編集部編…(216)

……………編集部編…(216)

限定版写真集「美しき縛しめ」(第五集)

アルバム 女性刑罰拷問特集 日本版

領価一〇〇〇円(送共) 略号「美5」

モデル……美木乃々子……山原清子

待望のグラビヤ印刷アート紙の刑罰拷問写真集成る。

先に美木乃々子嬢出演の「日本拷問刑罰集」並に山原清子嬢出演の「入墨女賊拷問刑罰集」の二集をキャビネ判の印画紙焼付にて分譲しましたところ、熱心なファンの方々から、いち早くお申込みを頂き迫力のある刑罰フォトに、非常な好評を賜りました。その頃よりグラビヤ印刷による刑罰拷問写真のアルバムの刊行を強く望まれ

△アルバムの内容▽ (山原清子、美木乃々子の熱演による刑罰拷問図譜)

○荒庭の上に荒縄にて引据えられた女囚 ○算盤責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する女囚 ○捕縄にて本縄を掛けられ棒にて乱打され髪ふり乱してもがく女囚 ○アグラ縛りで竹にてムチ打たれる女囚 ○非人の手によって不浄縄を掛けられる女囚 ○美しき素足を白洲の上に晒して鳴咽するうら若き女囚 ○海老責めにされ肩先を竹のささらで打たれて泣く女囚 ○海老責めで放置されて全身蒼白となった女囚 ○非人に囚衣を剥がされて引回しにあう女囚——等々、縛しめられた女囚の哀れさ、悲しさ、美しさにポイントを置いて編集しました。
(一般書店にては販売いたしません。限定版につき直接発行所へお申し込み下さい。八月五日に発送いたします。)

「浣腸フォト新版」

山原清子が東浦ひかるに施す

浣腸排泄おムツ着用写真

浣腸されることに對して異常なまでの執着を持つ東浦ひかるを被術者として、これまたSMに關しては、どんなことでも関心を抱く山原清子が施術者として、ここに浣腸マニヤ垂涎の浣腸フォト、おしめフォト・シリーズが登場、皆さまの高寛を待っております。実際に強烈な浣腸をしてほしいと願う東浦ひかるに、浣腸を施し同性を苦しめることに興味を抱く山原清子のコンビは、浣腸フォトとしては、最高の取り合わせといえます。

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号「かね」一〇〇〇円

浣腸をしたあとの排便の介添えを挿込み便器でやってみよう。

百CC溶液注入

大手札六枚一組 略号「かと」一〇〇〇円

一〇〇CCの大きな浣腸が清子の手でひかるのお尻へ迫ってゆく

グリセリン溶液浣腸

大手札六枚一組 略号「かて」一〇〇〇円

グリセリンを満たしたガラス浣腸器が近々と肌に襲う恐怖の瞬間

シリンドー浣腸

大手札六枚一組 略号「かた」一〇〇〇円

シリンドーのポンプが押されて溶液が嘴管の先から出る。

イルリ嘴管挿入

大手札六枚一組 略号「かち」一〇〇〇円

一リットルのイルリの嘴管が清子の手によってひかるのアヌスへ

アヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号「かの」七〇〇円

ひかるが自分から浣腸しようとするのへ清子が親切に介添え。

イルリガートル

大手札十枚一組 略号「かも」一五〇〇円

嘴管から送る溶液。ひかるは満足氣に清子の手を身をゆだねる。

オシメをつける

大手札六枚一組 略号「むし」一〇〇〇円

浣腸のあとで、オシメをていねいにあててもらい、甘えるひかる

ゴム製カバー着用

大手札六枚一組 略号「むに」一〇〇〇円

オシメを当てたあと、ゴム製のおムツカバーをしてもらう。

先日親戚に急用があったので車を走らせていると高野街道で数百人の人出があり交通巡査が出て整理に大苦戦である。夏祭りにしては早いがと思つてよく見ると、近くの新興宗教団体の社殿造営の材木を信者の人達が運んでいるのであった。数十米もあろうかという桧の巨木を、何台もの荷車の上に載せて、全くの人力だけで曳いているのだ。折柄の曇空からは大粒の雨が急に降りだしてきたが、信者の男女は誰一人逃げだす者もなく濡れながら、えいえいと、その重量物を曳っぱっていた。



新興宗教の倒錯性

編集子

車の上から、この有様を眺めていた私は、昔王侯貴族に酷使された奴隷もこんな風だったのかな、とふつと考えた。しかし、この信者の人達の違うことは、無理に暴力で駆りだされたのではなく、皆喜々として自発的に奉仕しているという風であることだ。

嘗て戦前には不敬罪にて弾圧され潰滅した宗教団体が戦後は、よそほいも新たに大発展しているのだが、そこでも神域の拡張工事をやっているのを見たことがある。その日は晴れた日で行楽日和の日曜日、ドライブの帰り途、何気な

くその工事現場に目をやったところハイティーンの美しい少女たちがデニムのズボンにズックの靴と、ういでたちで、泥まみれになりながら二人一組でモッコをかついで土を運んでいた。

道端で行楽帰りの人達が好奇の眼で見物していても、彼女たちは恥かしがりもせず、真白い手で黙々と土運びに専念しているのである。信者の子女か或は、その宗教団体の経営している学校の生徒たちか、とにかく、都会育ちらしい洗練された物腰を作業服に包んで遊びたい盛りの身を炎天下の勤労作業に従事しているのである。

私はその宗教団体が弾圧された時、教祖という人にまつわる数人の女性信者とのいまわしい噂を知っているだけに、このように無心に奉仕している美しい彼女たちの姿を見て、宗教というものの底知れぬ力に威怖の念にかられた。

トラクターやブルドーザーで一挙にかたずく巨木や土砂の運搬を、わざわざ信者の手を煩してやらせるところに、宗教活動の秘密があるような気がするし、身をもって実践するところに、絶対唯一のものに帰依する信者としての法悦境が存在するのだろう。

小児麻痺の子供を丸太の上を歩かせ、神さまのお告げだと無理強いて転落の上怪我させ、新聞の社会面を賑わしたことがある或る宗教団体に友人が関係していて、一度見学に来ないかというので、信者に混って見物にいったことがある。境内の中には、教祖家族の住む立派な御殿造りの屋敷があり信者の人達は、その前を通るたびに石畳に土下座して拝礼を繰り返すのである。

「宗教は阿片なり」といわれるが家屋敷の私財は勿論のこと、すべてのものを投げ棄てても、その御本人が安心立命を得て感泣しているのであるから、こんな幸福なこととはないであろう。既成宗教は一応の地盤も出来て落着いているが新興宗教はなんといっても新規開拓のため宗教活動も活発であるからそこに、私達の目を眩らせるような事柄が起ってくる。

狂信という言葉がある。それなくして威大な宗教団体の発展はあり得ないだろうが、宗教団体の奥深い秘密のベールに包まれたなかに、私は限らない倒錯性を見る思いがする。法灯と勤行の中にこそきらめくような倒錯の甘美な法悦と陶醉があるのではなからうか。



第十五回

辻村 隆

カメラハント、今月は思わぬ不覚をとって心ならずもぬけてしまった。というのは外でもない。この奇クサロン欄の六月号で、私に呼びかけて来た、堺市の大谷勢津子さんに、前回お断わりした、そのお詫びもかねて、一度お目にかかりたいと手紙を出した処、折返し、快諾の返事がきて、六月の初旬の第一日曜日、堺市の南海堺東駅の高島屋の前で、午後二時ごろお逢いしましょう。委細はその節といて来た。

これは脈があると、その日曜日お昼前に挿画画家の四馬孝氏から久し振りに電話あって、一度お目にかかって久潤を舒したいというのを敢えて断わって、重いバッグを抱え、約束の午後二時に十分前

堺高島屋の正面入口で待つこと、四十五分。当の大谷勢津子さんは遂に現われなかった。完全なスッポカシ。乳房責めの種々のアクセサリーが、やけに重く中ッ腹で家に戻ると、電報が来ている。「キユウヨウユケヌ。イズレマタスミマセン」セツコ。家内の話では私が出て約十五分も経たずして電報が来たそう。こんなことならもう少しゆっくり出るのだった。わざわざ堺くんだりまで行って莫迦ミタイ。

私も依固地な性分で、一度スッポカされると、こちらから、やいやい手紙を出すのがイヤなのである。先方から連絡があれば又気も変るが、なければその儘。今の処彼女からその後連絡なし。よって

未だに、彼女のマンマを責め損なっている。逃げた魚は大きいのか？

× × ×

夜乃探郎氏へ——。嗚かし、貴方が精魂こめておつくりになったであろうと思われる、ナイロンの斑ら紐数筋、確かに有難く頂戴致しました。貴方の走り書きが又奥床しいですネ。(編集子へ——。)

まことにおそれ入りますが、もし辻村隆さんとお会いする機会がありましたら、是非このひもをお渡し願います。但し私の住所は伏せて願います。本当に御多忙中おそれ入ります。夜乃探郎より)

私はこの簡単な中に真心の籠るお便りと共に、箕田氏より数条の彩色豊かな、ふんわりと柔かいナイロンの紐を手渡された時、実に感激した。出来得べくば、じかに

お眼にかかり、アブの探求に、夏のひと夜を心ゆくまで話し合い、一席設けて御礼を申したいと思っただが、夜乃氏は何らかの御事情で直接文通を希望しておられない御様子なので、私も敢えてこれ以上の追及はしません。しかし夜乃さん——貴方のこの御厚意は、決して、無下に出来ないと思っしています。早晩、このナイロン紐を駆使して、素晴らしいSMカメラハン

トを撮りたいと思っております。貴方の私に対する最大の讃辞——私は尻こそばゆい気持で読み返しています。

(ロープの魔術師たる辻村隆さんへ捧ぐ——。荒れ果てた砂漠の如き街々に、ロープとペンとカメラをもって、SMの嬉しき詩を求めて漂泊う人。そのよりよき芸術的フォト完成のために——)

リアルに徹する私に最大の讃辞を送って下さる貴方こそ、むしろ詩情豊かな、SMの探求者ではないでしょうか——。

貴方の謂う、奇ク三匹の侍の一人、芳野眉美氏より久し振りに便りを頂いたのは、奇しくもロープを頂戴したその日でしたよ。

× × ×

神酒奉拝者の彼が、東京農大のワンダフォーゲル部のシゴキ事件じゃないが、トルコ娘にしごかれた挙句神酒甘受の顛末が、愉快に楽しく書かれてあった。委細は何れ彼自身の筆で誌上を賑わすことだろう。ここ数カ月アレる小説を書き続ける由。

私はその最後の数頁が気になった。

『本当のところ、壁にぶつかっています。その壁がよく分らないの

で困っているのが本音。陽気なニヒリストも、ショボクレては、小説も冴えません。何が不満なのか皆様の好意溢れた感想を読んでもこの頃は余り感激しなくなった。欲望が強いから、好奇心も強いしいつも、何かしてやりたいのでしょう。その何かを見つけたのが困難。夏になってカラッとすれば、気が晴れるかも知れませんが、この頃少しユウツ。明るくて、健康で、その裏の、どうしようもない暗くて、淋しくて、ヘンな気持ちを理解してくれる読者を求めるのは無理だ。だから種々な方の、私に対する批評や感想は、皆さん、的外れなんだ。そんなことかまわないけど、やはり小説の活字でなく、その行間を読んでくれる人がいてもいいんじゃないか、と不満なこともある。こういうことを聞いてほしかったから書きました、(まあグチですね)……後略』

以上は芳野氏の原文だが、期せずして、八月号の夜乃探郎氏の、『芳野眉美氏への公開状』を読み両者お互いに言分はあるのだなあとと思った。『小説梨花悠起子』でも片鱗の窺える、空想豊かなロマンスメンタリスト夜乃探郎氏の仰有る事もよく分るが、既に文

通の東、ダンボール箱に一杯になりつつある、芳野眉美氏の徹底した神酒奉拝主義者としてのA遊びの一章もよく分る気がする。

私にいわせれば、飽くまで、所在をかくし直接文通をさせて自分はジェキル博士でいて、夜乃探郎にハイド氏を託して、夢と空想とロマンスのSM追求に生きる夜乃氏は、悪く云えばズルイのだし、よくいえば、夜乃探郎がそのすべてで、誌上公開主義者なのでありましょう。(羽村京子さんも同じタイプの人でした)。

芳野眉美氏は私の接する限り、解放的でフランクで、明るくてそしてチョッピリ、デカタニストです。彼の優雅な生活からユリンを離せば何も残らないかも知れませんが、悪くいえば解放的すぎて、うっかり何もかも喋れませんか(私はこの事で一度彼を誤解し、結局私の早計であやまったことがありますが……)。良くいえば、彼の流麗な文章に、詩があり、妖しいムードがあり、それは彼の優雅な生活のすべてを赤裸々に筆にしていると思われるのです。芳野氏への公開状で、夜乃氏がいみじくも謂われた如く、私のSMカメラハントには、確かに、大なり小なり

直実に立脚したフィクションがあります。真実を語って幻滅を感じるより、多少は粉飾して、美しく、リアルの中に詩情をただよわせた方が、読む方も楽しいと思うからです。

夜乃氏よ——芳野氏よ——。結論として生意気にも私なりにいわせて頂ければ、空想の中に現実を求め、現実の中に空想は更に飛躍して、吾等アブ党、それぞれの道を、ゴーイングマイウェイで行く

のが一番いいのじゃないでしょうか。恐らく私も、これから先、飽きもせず、懲りもせず、SMの(むしろS的な)探求とカメラハントを続けてゆく事でしよう。それが生活に追われ、索漠とした人生の唯一の生甲斐でもあるのですからネ。

夜乃探郎氏よ、SM探求に今後手を取りあって行きましょう。芳野眉美氏よ。クヨクヨしなさんな。貴方の私に対する私信を、



縛った妻のプロフィール

長谷好志男

「楽我記」の肴にしたことを詫びします。「VAT69」をチビチビなめて、これを書く人生も亦愉しからずやです。

× × × ×

過日、向井一也氏が前触れもなく、突然訪問せられ、舞台への行きづまりやSM劇の探求について歓談したが、いつしか彼のプライバシーの問題を打明けられ、彼の苦悶と荆の道を知った。この重大な話は一切筆にしない事を約し、再会を期して分れたが、青木順子さんは幸い静養の結果、体力を恢復し、再びペアで、新しいヴェトナム問題などを題材にとりあげ捲土重来の公演を、京都の千中ミュージックで蓋あけた。最初六月一日から五日間の予定が、好評で二十日間に伸び、元気で活躍しておられます。向井氏との約束もあって、青木順子の一件は、茲しばらくそっとしておくつもりでしたが、問合せが沢山ありましたので、一寸御報告しておきます。向井氏からは、次の公演場所等のことについて、その後連絡ありませ

× × × ×

六月二十七日、午後二時より、大阪アベノ国際観光ホテルHで、

山原清子さんを囲んでの、第一回懇談会に、箕田氏と一緒にオブザーバーとして出席し、当日参会した十五名の、彼女の熱烈なるファンの方々とは大名料理をつつき乍ら歓談した。斗病中なので酒をのめないのは残念だったが、コップ一杯のビールで我慢して、その分だけ糖分抜き料理を人一倍頂いた。

当日の内容を誌上に発表しない約束なので、皆さんはそれこそ赤裸々に、日頃の考えや、SMの在り方、又、清子さんへの注文など、談論風発で、散会の時間がきても誰一人席を立たず、遂に時間も過ぎてしまった。第二回以降はSの方、Mの方、刺青好みの方とそれぞれその好みを分離して、それに適応した内容をもった会合にしたいとの箕田氏の意見であったが、私も賛成である。Sの人々は山原清子への緊縛や責めを期待されるだろうし、Mの方は、彼女を女王の様に奉り、その膝下にひざまづいて、隷属し、被虐に身を委ねる事を熱望するに違いないし、刺青好みの方は、彼女の日本一といっても過言ではない、あの華麗でゴージャスな玉取姫に垂涎するをもって足れりとするであろうから、これらの人々を一堂に会し

「サーカスの玉乗り」

室井亜砂路画



て、すべての性向を満足させるのはチト無理であると、第一回でつくづく知らされた。ちなみに参会

の方は、東京三人、神戸四人、京都二人、大阪二人、高知、新潟、西宮、和歌山各一人宛の計十五名で、Sが八人、Mが三人、刺青が四人でした。締切後申込まれた方

はいずれ、第二回に御期待にそって頂けると思います。箕田氏に代って一言。

カメラ・ハントがぬけたので、「楽我記」が長くなってしまった。来月は何とか御期待にそいたいと思っております。

サ
ロ
ン
随
筆

＼書く＼という楽しさ

保藤久人

文章を作る……書くということ
は随分難しいものだと思つて感じ
るこの頃である。元来字を書くこ
とは嫌いな方じゃない。どちらか
というと、喋ることが苦手の方で
同じ相手に伝えたい事柄でも、喋
るよりもむしろ文字で書いた方が
上手く伝達出来、しかも、充分に
その内容を纏めることが出来るの
で、自然に書くことを覚えたらし
い。持って生れた性格でもあるの
だろう。そういう訳で、暫く文通
に精を出した時期がある。文通の
為の目的ではなかったのだが、そ
の内に、まるで手紙を書く為の交
信の様な奇妙な状態に陥り、自分



で自分に呆れ果てたものである。
奇クとは本当に永年秘めやかな
おつき合いを続けて来た。昨夏、
その細やかな孤独の状態から一気
に急転して、奇クの中へ足を踏み
入れようとしたのは、当時発売中
であった＼花と蛇特集号＼の取持
つ縁ともいえるが、それとは別に
「何か書けそうだ」と、思った為
で、そう思うに到ったのは書簡文
の実績？からじゃないかと思う。
ご好意なのか、二、三掲載して貰
えた。そうすると、今迄の長年月
の間秘匿され鬱積していたモヤモ
ヤが奔流となって噴出するかの様
に、次々と尽きることなく書く種

が出て、暇さえあればペンを執り
度くなる。が、奇妙なもので、そ
れまで（投稿以前）手紙で自由に
書けた（そう思っていた）文章が
さっぱり書けなくなり、逸る心ば
かりで＼文＼にならず冗文雑文が
ダラダラと続く。

謂うまでもなく、小説を始め其
の他総ての作文には自ら文法作法
があり、無才な素人の私などに不
可能な事である。と判っていたが
ら尚書き度い。それで、書きだけ
れば勉強しろ、と自答しつつ我が
手で尻を叩いて励ます。

そして又書く。編集部が煩雑を
想像し「申し訳ない」と心の中で詫
び乍らも投稿する。そのくせ掲載
されると、それを読み冷汗を流し
時には微かな嫌悪を覚えることさ
えある。それなのに何故？どうし
て？——結局、書く事が楽しいの
だ。唯、放言だけは慎しみ度いと
気をつけているが、皆さんに悪い
感じを与えることもあるだろうし
その点を申し訳なく思っている。

私は読者の皆さんが揃ってペ
ンを執られる様にと希っている。文
章というものは書いてある内に覚
える部分も多い様な気がする。そ
して又、身近かな事や体得したこ
との方が書き易く、其処に、小説

にない「生な」ものが存在する。
空想を綴ることも楽しいものであ
る。空想には全くの自由がある。

併しその空想を纏めることは難事
業で、それが小説の難しさなのだ
ろう。が、書くことにより、今迄
空想以外の何者でもなかったもの
が急に現実になり得る事の様な錯
覚に陥ることがある。一種の自己
催眠でもあるのだろう。唯、其の
場合の空想の限界、人間界から逸
脱するのはどうかと思うが。

投稿が増えたと編集部は益々多
忙。併し好材料が多くなれば読む
雑誌への充実の為にも、増員とい
う画期的な大英断を下して貰える
かも知れない。（虫が良すぎるが
……）

或る人に、「書くことは感情の
オナニズムだ」と指摘されたこと
がある。私の様に下手な文章を綴
っているものは、なおのことその
感じが強い。併し＼感情自慰＼で
私は結構だと思っている。独りよ
がり、エゴだと非難されても自身
で楽しさを見出し、他の人にも、
（仮令一人でも）喜んで貰えるな
ら非常に嬉しい。こういう意味で
私は皆さんにも楽しさと嬉しさを
味合う為に、精々執筆される様に
と、お願い（お奨め）したい。

『奇ク』 雑感

久我 庄一

△読者通信△に関連して

「伊藤晴雨」を書いて、私はだれかの言葉じゃないが、『夢のまた夢』ということをつぶやいた。

奇クの二百号突破の歴史は、成程、走馬灯の如き人物の現われては消える一大ドラマが展開されてきた。それは、いまになってみると、たしかに『夢』の一字につきるだろうか――。

ただし、大方、読者の心には、懐しく、または生々しく、生きていると思う。そして、これから生きつづけるだろう……。

特に真実を常に追求し、他誌とは違う『告白』及びエッセイなどに独自の編集をみせる本誌にあっては、ことさらに、生きていくという表現をつかいたのである。別な例を取り上げ、その裏付けをする、△映画△名画と評されるものは、「パリ祭」「外人部隊」「どん底」ETCなどは何年たっても見ても、いつも新しい感動をおこさせてくれる。

私は「伊藤晴雨画伯」を創作するため、奇クの旧号を、あらためて深くよんでみた。たしかに年月のキョリ感を懐しく思うことはある。しかし、その文章から受ける感動は、いささかも年月を感じさせない生々しさが、私の気持ちを圧倒するのである。これは、奇くなれば、こそだと信じていた。後世に残るとは、紙屑にならないことだとも評せられるが、よむうちにあることも意味しているのだ。

ツンドクという探書方法があるが奇クのみは、内容で勝負する唯一の新しい、そして歴史の古い風俗文献誌である。奇クは「孤独の広場」であるとはいわれている。それには、生きた文章が裏付けされなければ、一つもその言葉は意味をなさないのである。よんだ、面白かった、ただ、それだけでは一般雑誌となんら変わらないのである。いま「読者通信」が新しい転回を迎えつつあるように思う。

△本質的には奇クの頁で、生きた道をつかむべきであろうか△それこそ共通の孤独の広場だ。もしSMプレイをする相手をみつけるのみで、奇クを購入、みつけたら、奇クなど、どうでもよいということであつたなら、奇クは若い男女の交際機関のみを強調する、好奇心のみで売れる、売る、カストリ雑誌と交わらないことになってしまふ。(たまたま、真実と本当にSMマニアとして、幸いにも、通信によって相手がみつかり、それがマニアなりのエチケットをもって実現された、されうということではない。私は否定することはできない。むしろ、よろこびたいのだ)

ただし、なにか、アイマイな自分勝手な考えから「読者通信」に對するようなマニヤ? の方々の投稿、声を見るにつけて、私は奇クの△よむ雑誌△としての前途をおもって、心配するものである。書くということとは、生きることでもあるということとは、くどいようだが、奇クを共通の広場うんぬんという場合、文章が単なる活字にあらわれた世界だけでなく、生きて、語りかけることも意味していると私は信ずる。通刊二百号。

それは本誌によって、どれ程のマニアが書き、発表し、よみ、生きてきたかを物語るものだ――と、言えようか。

「読者通信」で友によびかけるのはよいことだ。SMプレイの相手を見つかけようとするのは悪いことだと思わない。むしろ私はよいことだと思う。だが奇クの読者としてのマニアなりの節度とプライドある見識をもって、慎重にすべきであろうか。そのことによって、ズバリ奇クを通俗に陥れることのないように、あまりにもSMプレイの相手を好奇心のみで性急に求めることは、新しいよむ雑誌としての生きた共通の広場たる奇クを無視することの危険が感じられる。奇クの頁は生きていくことを、より信ずるべきだろうが――。

【伝言板】

七月十日附消印でカット十七葉をお送り下さった△千葉県の洲崎三郎氏△へ。御住所が書いてありませんでしたので誌上でお答えいたします。用紙は画用紙でなくともお送り下さったもので結構ですが、製版の都合上やはり鉛筆ではなく黒インクか墨にてお願いいたします。カットは面白いものでした。

〈論壇提供〉



羞恥文学『花と蛇』によせて

—読物か、小説か—

夜乃探郎

私は、奇ク八月号に「濡れにぞ濡れし」の芳野眉美氏に対して、鳥辭がましくも「濡れなくても濡れる？」という公開状を投稿、掲載された。「公開状」は、読者の一人として、あくまでも奇ク論壇への発展を願うと附記したので、この問題については、もはや触れない。

それとは別個に、ここにまた一

つ、今度は大上段に振りかざして△論壇提供！△とまかりでる。これは、芳野氏の発言に關係あるけれど、むしろ団鬼六氏の『花と蛇』のファンと自称する大方の読者によびかけたいのである。（勿論「提供」であるから、くわしくは述べない）

「作者に失礼ですけど『花と蛇』は読物であって、私が求めている

ところの小説ではありませんから」芳野眉美氏（八月号ガン作・マニヤのノートA主題と必然性）の言葉について△私は、『花と蛇』は羞恥文学の傑作、あくまでも「小説」として読んでいたので△ショックだった。「お気にサワッタラごめんなさい」と芳野氏は言われているが、ハイ、ソウデスカ——と、だまっているのも気が落ちつかない。それでこんな一筆とはなった次第である。

「生活に立脚したSM現代小説」これも立派に文学の世界の中では「私小説」としてのジャンルの一つである。だが、これは一つの分野であって、すべてではない筈と思う。人間が書かれてあるか、どうかは、そこにロマンがあるかどうかできまるもので『花と蛇』の世界に、作者のSに対する思想が盛込まれてあり、登場人物が、読者の頭にイメージ化されるなら、（生々と語りかけ、うきほりされるなら）これは心理小説のジャンルに入るべき「官能小説」でもある。「読物」とよぶとき、少くとも文学たらしとする世界では、通俗という意味がふくめられる。読物がいけないというわけではないが、ただ、あくまでも『花と

蛇』を文学的な評価をした立場でいっているから、こうなる。極論すれば、芳野氏流で言えばドストエフスキイの「罪と罰」も、虚構の世界の出来事であるから読物だと言ふことになる。△「花と蛇」は面白いだけでなく、SMの、特にMの心理が美的な筆致で描写され、私は黒淵氏の作品と同じく毎月勉強させて頂いている。以上について、鬼六先生に問うなら笑ってこう言うだろうか「花と蛇は読物でけっこう」先生がこう言うなら、問題はない。「土曜夫人」の作者、オダサクだって二流文学論を、一流のプライドをもってうそぶいたのだから——

だが、第三者が言うことには、私は判然としないものがあるのだ。前言したように、これは提言である。しゃべりたいことは、山程あるがさし控える、大方、読者の（私の考えではなく、これはあくまでも参考として）『花と蛇』は読物か、小説かについて公平なるお声が聞きたいのである。

.....
 「編集部より」△論壇提供△の趣旨に従って何かと御寄稿お待ちしております。

コルセット・マニヤの方々へ

愛しい人々に捧げる

古留節人



日夜コルセットを締めつけられて伯母上からの激しい折檻に歓喜する林様。胴絞りで死んでもいいとまで言うコルセット・マニヤの母上に、コルセットの締めつけを強制されている一柳様。ウエストニッパを肌身離さず締めつけて普段でも四十五センチの細腰を誇

る蟻川様、いかがお暮しですか。林様には最近例のパネ付きコルセット責めの様子を承りましたが一柳、蟻川の両氏の、その後について何の御投書もないのは淋しい限りです。蟻川様、その後も引続いて締めつけを続けていらっしゃるでしょうね。ウエストに革バンド

を巻いて吊り下って三十五センチまで細くできる処までは、お知らせ下さいましたが、現在はおもった細く締まるようになられたことでしょう。キット普段でも四十センチの腰囲で暮しておられるのではないでしようか。

細腰競争をしようとの、ご希望でしたが、誰方が相手が見つかりましたか。一柳様の方は如何。あなたの胴は夜中コルセットで絞られた上、締め紐に嚴重な封をされて、母上の許しがなければ紐を解くこともできないのではないでしようか。もうそうなら、前世紀のお姫様のような優雅な生活と申せましょう。お幸せなことです。

母上とあなたのコルセット競争はどちらが勝ちでしようか。林様のパネ付きコルセット、素晴らしいですね。図解がありました、錠を外すとパネが締まるという構造が解らないのが残念です。もう少し詳しく教えて下さい。コルセットをキツク締めるとドロドロが出て来るそうですが、一体これは何んでしようか。他の物でなら幾ら締めても、そんなことはないんですけどねえ。

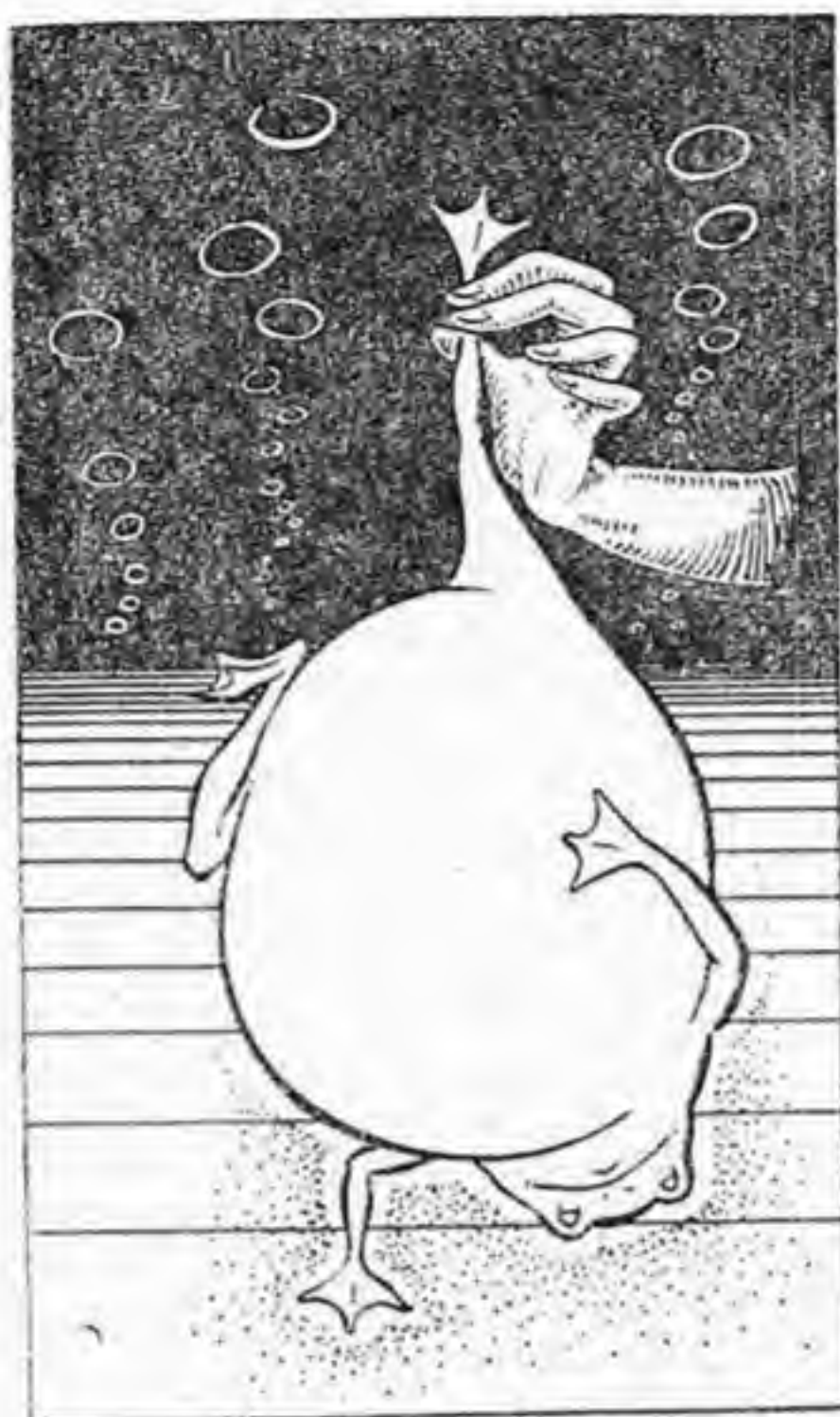
あなたはいつも女装で同性には余り会いたくないとのことですが

男性にもあなた以外に、私のようなマニヤがいるんですよ。何とかお目に掛かれないでしようか。もしもできましたら、使い古しのコルセットでもお譲り願えませんか。私もお腹を締め上げてドロドロを吐いてみたいと念願しています。

蟻川様、一柳様ご両人が誌上にあられたのは、女学生の頃でしたね。あれから何年も経った今、いずれはお勤めか家事に従っておられることでしょう。或は結婚生活に入っておられるかもしれませぬ。只云えることは現在女学生時代の頃のような身体検査は無いと思われまので、どんなに厳しい締めつけでウエストが紫色に変色していたとしても問題を起すまでもありません。

家におられるのなら全く自由に締め付けを堪能できようというものですし、結婚なさっているのですしたら、あなたの方の性向を素直にご夫君に認識して戴いて、今までより以上のご精進をお続けなさることも期待します。それがあなたの方で夫婦の生活をより豊かに楽しいものにするであろうことを信じます。蟻川様も一柳様も遠方におられる様子ですが、機会を得て

〔蛙 腹 通 信〕



妊 婦 花 盛 り

高 野 原 美

薄着の季節となり、妊婦マニヤ
にとつては楽しい季節となつてき
た。何んといつても、妊婦のお腹
の膨らみは薄着の季節が第一であ
る。衣服をとおして、その妖しい

ばかりに美しく盛り上った丸い小
山のような腹部の膨らみを見るだ
けで満足させられる。
街頭を歩く妊婦が今年はやたら
と目につく。(来年は丙午八ひの

一度拝眉致したく希望しておりま
す。林様をも含めて、ご三方様は
非共ご返信下さいますよう、心か
ら切望してやみません。
恐れるのは、皆様がこの短文を
見逃されるか、今でもこの雑誌を
読んでおられるか、どうかという

ことです。ご一覽下さいました上
は必ずお便り下さるよう重ねてお
願い申し上げます。細腰美は西欧
では一般的ですので、マニヤも多
いのですが、我が国では何故か細
腰マニヤが少いようです。痩せた
い痩せたいという女性自身すら

も、脚ばかりが細くなつても、ウ
エストの方は相変らずズン胴なの
は理解に苦しみます。誰か、ファ
ッションの大家例えば故デイオー
ルのような人が、一声「胴を細く
締めよ」と言ひさえすれば、一ぺ
んに流行する筈ですのにね。

読者の中で細腰に興味のある方
細腰自慢の方、或は胴絞めやコル
セット締めのお好きな方がおられ
ましたら積極的にご発言下さい。
同好のグループを作りたいと思っ
ておりますから、お呼び掛けを心
からお待ちしております。

えうまVになるためか)いくら妊
婦腹を好意的に鑑賞するといつて
も、じろじろと見ることは許され
ず、人格を尊重しながら楽しんで
いる。特に電車やバスの中は鑑賞
に便利で、長時間ゆっくりと近く
から偉大なお腹を愛し、目でその
膨らみを追うことができる。

ところで、誌上も妊婦の記事が
増えてきて花盛りの感がある。安
原さゆりさんが二度目の妊娠で一
日貸すからどんな責めでもやって
下さいということでもあり、この
撮影には大いに期待しているもの
です。羽鳥さんの妊婦小説をはじ
め、妊婦の記事が八月号では圧巻
であった。

妊婦ショーは、三月から書きは
じめ、仕事に追われたのと遅筆の
ため、羽鳥さんに先を越されてし
まった。六名の妊婦の楽しいショ
ーの小説を、そのうちに、お目に

かけたいと思う。妊婦のストリッ
プについても、大阪で二度見たこ
とがあり、私自身も期待している
が、その後、お目にかかっていな
い。妊婦を舞台で踊らせてはいけ
ないという法律はない筈であり、
興業者が世論をおそれて出演させ
ないのだろう。

案外、現在のストリップの行き
づまりも、妊婦を出演させたり、
マゾ・ショーを折りこむことなど
によって息を吹きかえすのではな
いかと思う。映画ではマゾ・サデ
イズムの花を咲かせているのに、
舞台ではもう一つである。舞台演
出者の頭の切り換えが必要ではな
いだろうか。妊婦ショー、妊婦浣
腸、妊婦切腹、緊縛等々、人間の
最も動物的な宿命の生理現象を、
美しくとらえて理解しつつ、新し
い見方、文芸の世界を確立してゆ
こう。

世相診断室

△木戸川健▽

横浜の南区高根町なる「セントラル劇場」にて――

踊娘は顔赤らめもせず、一糸まとわぬ肉体を誇らしげに、助平なる観客にさらしていた。だが、しかし、さすがに、その部分を覗かせる時は、その羞恥を強い言葉に置きかえて言うのであった。「兄さん、もっと芸術的に観てよ!」と――

その時、兄さんなる私は、かぶりつきに坐っていて、踊娘を三センチメートルにも満たない間隔で、とくと眺められる光栄に浴していた。好きである。全く好きである。しかし、この生命力。嗚呼私は生きている。

「芸術的に観てやろう!」と言って、私はステージに半分身を乗り出すようにして、舌でなめる真似をした。その仕草に、観客はどつと笑い、その笑いに踊娘は救われた。それでいい、それでいい。これがストリップというものさ。私は喜んで道化者になろう。このいたいけな踊娘のために――。しかし、心ない輩は言う。「紳士面をして、みっともねえぞ」と。△燕

雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや▽私は猶も、そんな仕草を繰り返す。「エッチ!」「失礼しました」

――私は昨年十一月号でも書いたように、ストリップは余り好きではない。がつがつした重苦しいたまに笑いはしても、その笑いが咽喉の奥で凍ってしまいそうな、あの雰囲気嫌いなのだ。テレビに出しても、結構やって行けそうな達者なコメディアンたちによつて、幕間の笑劇というものはあつても、私は未だ嘗て心から笑った事はない。私だけではない。観客の中には正直に「野郎は引込め!」などと言う者もいる。同感の笑い。これほど野郎の値打がない所はない。

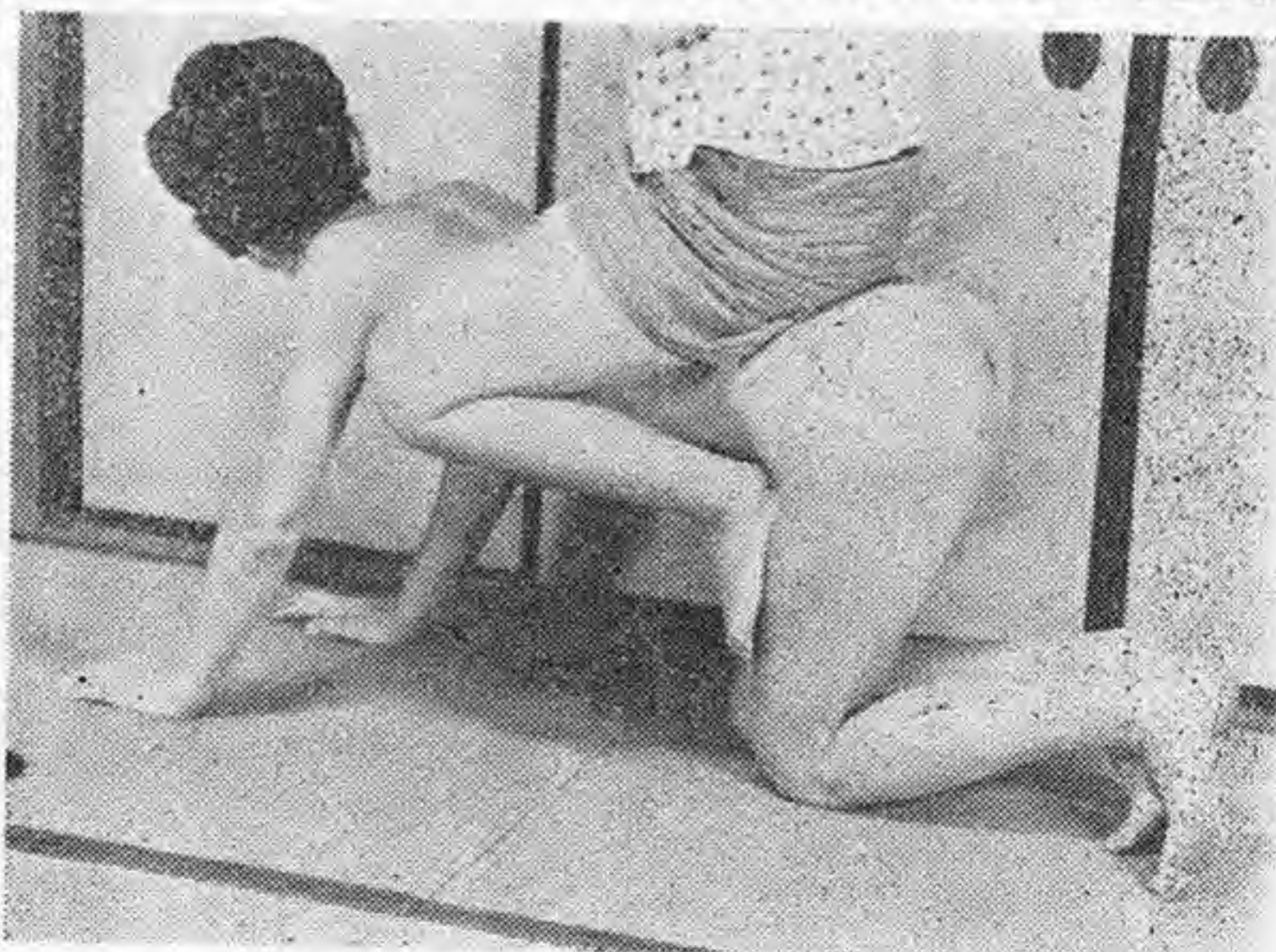
戦後、ストリップなるものが出現してから二十年にもなるのに、まだ日本の野郎どもは、心からそれを楽しむ余裕がないのであろうか。余りにもがつがつし過ぎていく。みじめなのは、あの場所をさらけ出す踊娘ではなく、実は観ているわれわれなのだ。四百円も出さなければ、女のその部分が拝めないというのは、男性として大変

恥かしい事である――と悟った時、心ある輩は私のように道化るのである。男性の恥辱をばぐらかすのである。踊娘は、無論、それを喜ぶ。真面目に、がつがつしげしげと、それを観られたら、へりはないが、たまったものではない。

公開のあの部分は、決して真面目に観るものではない。紳士のエチケットである。ともあれ踊娘は救われる。私も救われる。その接点に笑いが生ずる。この笑いはいい。元来軽演劇の笑いである。ストリップも一時に、軽演劇の一つと見なされていた時代があつた。

女上位の夫婦

美伽輪生



た。演出家にも踊娘にもコメディアンにも、意欲的な人才が多くいた。私の先輩で、現在、スポーツ新聞の芸能部長をしている男も、当時の意欲ある演出家の一人であ

った。そして、私も学生ながらワセダだったので、彼の下で助手をしたり、脚本を書いたりしていた一時期がある。楽屋で、踊娘やコメディアンたちと、ラーメンを食べながら、ストリップ芸術論を戦わせ、果てはぶん殴り合いになった事も再三である。それほど真剣だった。あの雰囲気は、高見順の「いかなる星の下に」浜口浩の「浅草紅団」のものである。焼酎、ラーメン、喧嘩、覚醒剤、共産党——そして恋、恋、恋。

そう、当時、私は恋をしていた。演劇に、そして、ある踊娘に、吉永小百合に似てたっけ——恋は冗談ではじまり、真剣になり、そして冗談で終わった。「学生さんは勉強が本職よ。私みたいに悪い女にかまってちゃあ、ダメ。バイバイね」と、彼女が言った。「アジャパー！」と、私はおどけた。「パー」と、彼女が言った。それが、別れだった。「アジャパー」という当時の流行語には、だから私にはほろにがい想い出がある。

やがて、私は演劇にも失恋した。ともあれ、私はストリップには素人ではない。だからこそ、言うのである。惜しむのである。不必要に脱いだ事を——。あの部分をさらした事を——。最早や、観客はさらさなければ満足しない。しかし、やがて、それにもあきるだろう。その時、彼女たちは一体何をさらせばいいのだろう。

カーが怒鳴っていた。「ばら色の未来を約束する自民党。来る七月四日の参議院議員選挙には——。」私は踊娘たちを想った。それをさらさなければ、ばら色の未来はおろか、今日を暮して行けないかもしれない彼女たちを哀れと思った。不覚にも、涙が出て来た。私は濡れながら、泣きながら、いつか「ロックの歌」を口ずさんでいた。それは、私と彼女が隅田を眺めながらよくうたった歌だった。その頃川はまだ綺麗であった。

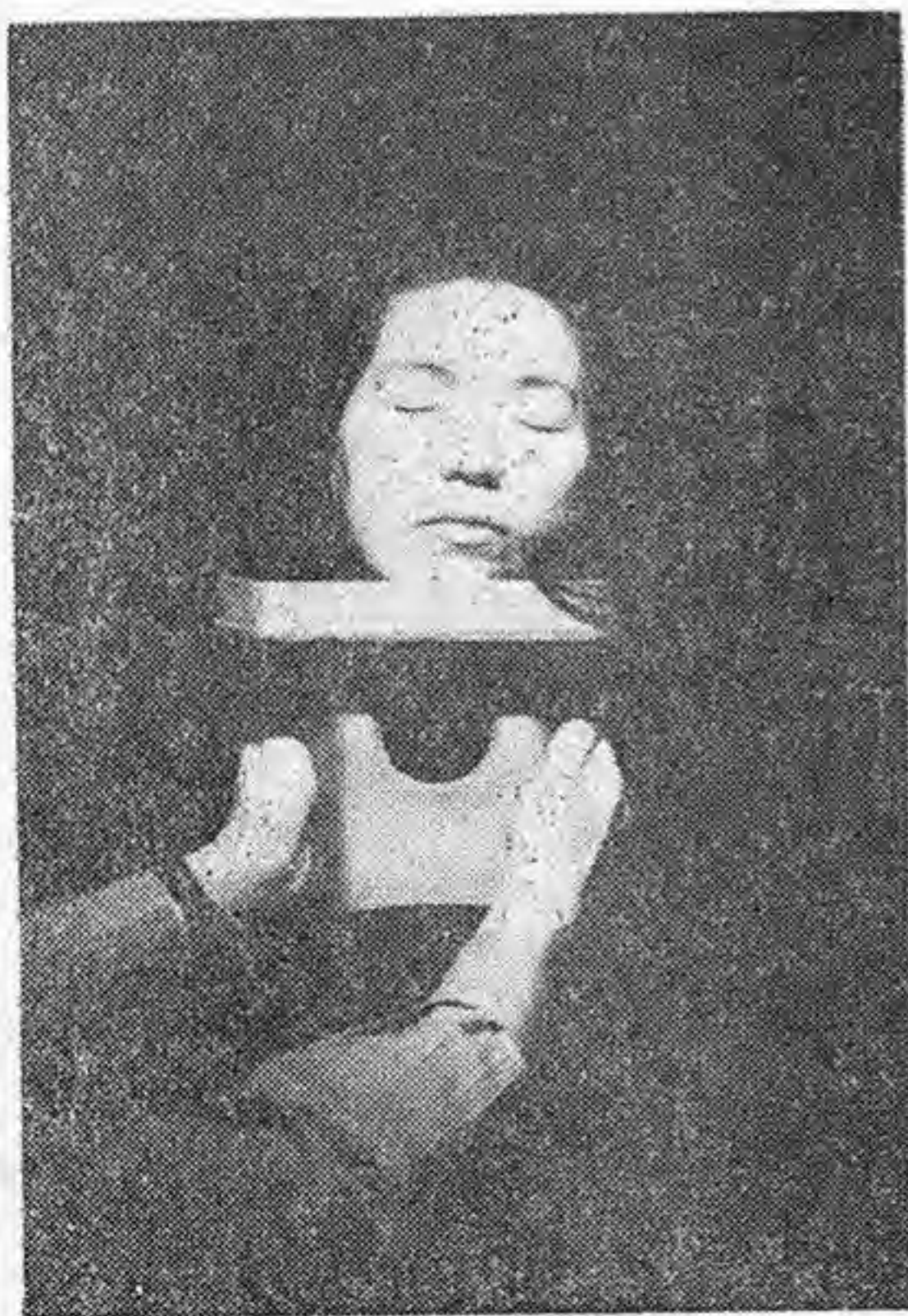
早苗さんに鼻を摘まれる杉江美津子さん——

△女装に憑かれた人々たち▽から



三宝にのせられた若い女の生首

水野 弘



△夫婦の緊縛プレイ▽……………

アグラ縛

小川 暁



毎月誌上で発表されるSMフォトには、その人の個性がにじみ出ており、楽しく拝見させていただいております。私も同好者の一人として、妻を相手にコッコツとやっております。あまり規模の大きな、協力者を必要とする様なものや奇抜なものは出来ませんが、グラビヤページが廃止され、視覚に

訴えるものが少ない間だけでもカット代りにと思い投稿しました。今回はアグラ縛？の基本的な一ポーズ。こんな名前が正式にあるかどうかは知りませんが、古来よりある海老縛の、上体の少し上がっているものを名付けたものです。この縛り方は海老縛より被縛者の疲労が比較的少なく、長時間

耐えられますので、ひっくり返えしたり上体や顔とくに鼻に各種の責を加えたりいたしております。写真としては、三角形の安定したポーズが責を加えられる事により、バランスをくずした時に面白いものが出来ます。(なかなかウデ、器材ともにたいしたことはないので傑作は出来ませんが) 過日これと類似のポーズをさせ、背中をムチで打った時のものを8ミリに収めました。高感度フィルム使用のおかげもあり、かなり成功いたしました。今後、被縛者の体が耐久性と柔軟性を増すにつれ、バック、小道具等をそろえ、時代物がかった海老責を行いたいと張切っております。私も元来、猿グツワはあまり好きでなく、この場合も本来の目的でなく、第二義的な目的に使用しておりますが、どうも手ぬぐいのかけかたに締りがなくなってしまうましたが、ここは御見逃し下さい。

女性に対する責は、ある方も云っておられますが、羞恥心を増す上からも、全裸の方がよいでしょうが、誌上発表の関係上、最少限の着衣といたしました。どなたか面白いアイデア(一人で実行出来る様な)をお持ちの方は、どうか他日御知らせ下さればと思っております。

〔編集部たより〕

○安原さゆりさんの第二回目の出産目近か、六月二十八日予定日を前にして、お腹はいよいよ膨れあがってきた、という知らせで、臨月腹の撮影実施を十四日、十五日の両日と予定していた。しかるに惜しいかな、十日に陣痛のため入院とは――。

○かくして千載一遇のチャンスを辛くも逸してしまったが、マニヤの方々には安原氏撮影による入院直前のフォトが分譲品として提供できる筈、乞ご期待。

○青木順子ショー、六月の京都に引続いて七月一日から大阪の夕風橋のダイコウミュージックにてベトナム動乱にちなんだSM劇を公演の由。

○七月号、八月号と予定より早く印刷製本完成。本誌も漸次軌道にのった恰好。北は北海道、南は九州に至るまで、多数の読者の方々からの激励文には、只々感謝の至り。中には編集費用の一部にとか、部員の煙草代にとかいって金員を贈って下さる方或は地元の名産を惠送下さる方々など、あとを断たないのには全くお礼の言葉もない。

△ボクの責め方▽余聞

ボクのマニヤ歴

宝塚二三夫

足(脛)がすきのボク。

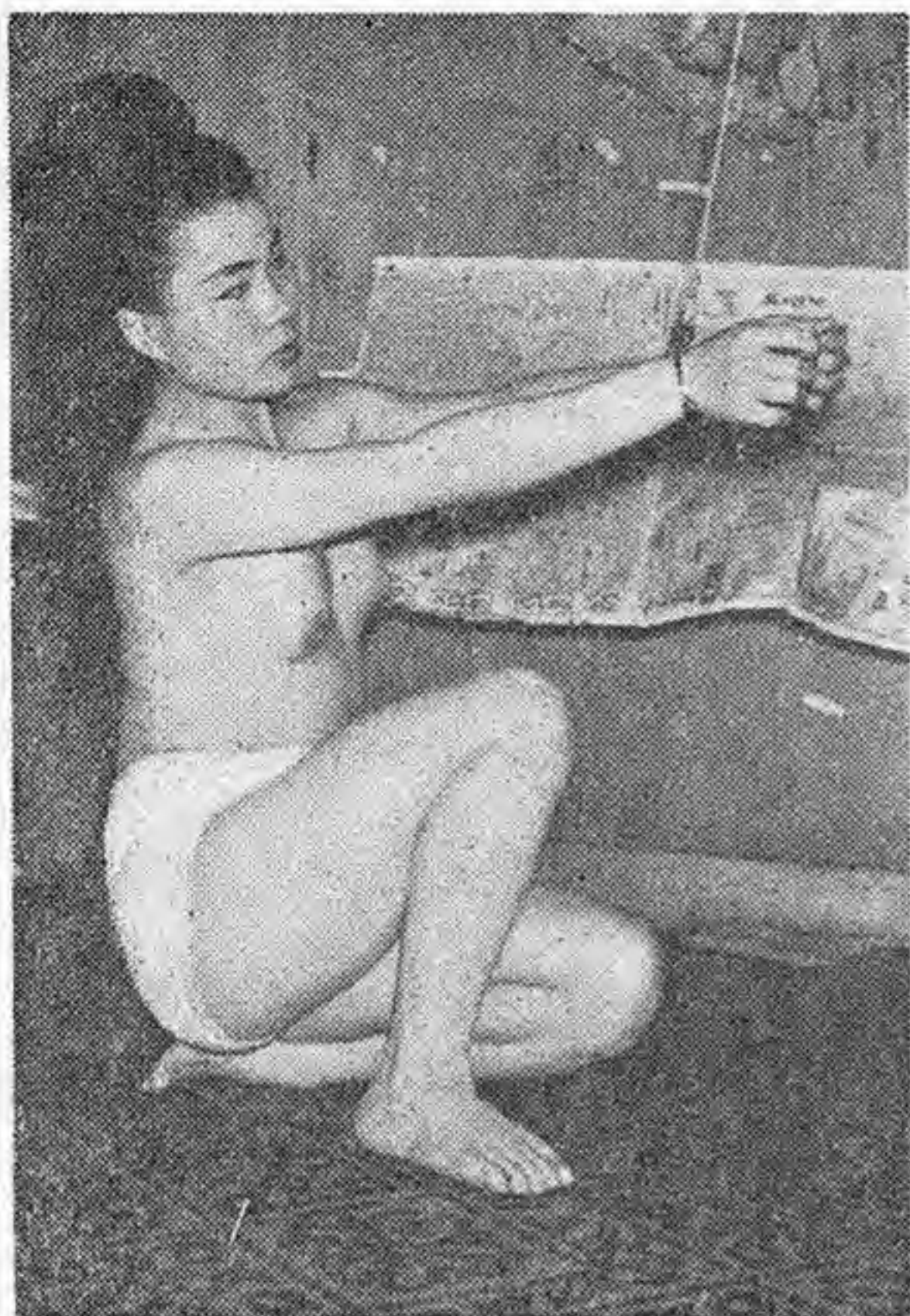
やはりハギエクボが第一だ。

ボクがそもそも、しばらくマニヤになったのは、亡父のイデンらしい。

大正五年、ズカの天津乙女が、まだ小さい時分、よく舞台上で、秋

田露子のシバリをさがして、ワクワクしたものだ。その時分は、ボクの父は宝塚の旧温泉のよこに別荘をもっていた。

そこで、よく父の芸者あそびの時、酒をのむと芸者のしびりが、父の手でよく行われたものだ。



ピチピチとした肉体を持つ節ちゃん

マニヤ(今のいう酒ぐせ)だったわけだ。父の妾宅(京都の先斗町)で舞奴をシバツタのが、昭和元年頃。よく舞妓(現存してるから特に名を秘す)をタンスにしぱりつけたものだ。その頃から文弥節がすきになった。そして、その舞妓の白くてキレイな脚が、今でも目にうかぶ。

ボクの少女の脚趣味は、それ以来ズーッと続いている。

ボクが十六才の頃
大阪北の新地「京いと」へ、父につれられて行った時、お女将が一人の舞妓を指さして「坊ちゃんこの妓を可愛がっておやりやしたらどうです。下でハダカにして、シバツテおきますから、どうぞ」と言われた時、全身がシビレテゾクゾクしたことを、今でも思い出す。こんなことから、父はやはりマニヤだったらしいと思う。だから、ボクのマニヤ歴は相当に古い。この頃からのことを話すと、一冊の本になるだろう。

その時分から考えると、今のボクは大いに成長もしているが、マニヤ道としての情熱だけは失っていないつもりだ。いずれ「ボクの責め方」で御紹介しよう。

○浣腸責めと操り責めの大好きな東浦ひかる嬢。山原清子嬢とのコンビで久方ぶりにSMフォト、浣腸フォト撮影、更に梅雨空の合間を見て、大塚啓子嬢と二人にて琵琶湖の近江舞子までロケ。若干のフォト撮影。線路の上にて大塚嬢をモデルに撮影(彼女の要求にて)していると数人の青年が線路づたいに見学? にくる。東浦嬢は羞かしがって遂にモデルにならず。

○辻村隆、芳野眉美、夜乃探郎の三ベテランを一堂に集め、三者鼎談を催せば面白からう。編集部主催にて一席を設け、その発言を誌上に発表すれば、さぞ受けることだろう。いずれ劣らぬ毒舌家? なので(失礼)司会もいらんじゃろうね。

○映画の緊縛場面のスチールや夫婦プレイの写真など、数多く入手しているが、自主規制の関係で見合わしている分を今後なんとか、差し障りのない方法でごらんに入れたいと思う。

○大塚啓子、山原清子、東浦ひかるなどの豊満な姿態を数多くのファンが目に入れるため、無代贈呈の方法を考えている。良案あれば御連絡を乞う。

【体験記】

浣腸犯罪

高砂浣好生

病院の夕食時間がきた。僕は母の入院室から廊下へ出てみた。

給食係のおばさんが運んできた患者食を付添の人々が各病室へ運んでいた。その様子を眺めてから看護婦詰所前のトイレに、僕は入って小用を時間を掛けて済まし、外部の物音に全神経を集中していた。

やがて廊下は静かになり誰一人いなくなった。トイレを出た僕はかねての調べ通り、看護婦さんの詰所へ急ぐ。勿論夏のこととてドアは開け放ったままで、外から詰所内部は見通しだし、看護婦さんも食事へ行っていて不在だ。大体半時間程は帰ってこないということもわかつている。

ワクワクする僕の気持を静かなムードが迎えている。待ちに待った絶好のチャンスだ。僕は詰所へ入った。向って右側に黒いベッドがあり、その端に硝子製の洗滌瓶が吊ってある。黒い長いゴム管の

先には黒光りする嘴管が重そうにぶら下っている。真向いが事務机でカルテ類が置いてあり、左側には目的とする硝子で囲れた器具製理箱が置かれてあった。

あった。正しく感激と亢奮の一瞬だ。その器具棚には上段に導尿用の赤く細いゴム製のカテーテルが数本と、一〇〇CC入りの大型洗滌器が行儀よく並べてあり、その他ピカピカ光った金属製のメスや鉗、鉗子などが並べてあった。中段には、これ又種々の薬品瓶や膿盆、温度計、脱脂綿、硝子のパイプ類が雑然と置いてあり、下段の棚にこそ、感激のクライマックスたる浣腸器具類が並べられている。銀色に輝く金属製の大型浣腸管、拇指ほどもある太い茶色の直腸管、同じく茶色カテーテル数本、硝子製浣腸器（三〇〇CC用）一本などが、僕を招くように置かれていた。

僕の胸は高鳴り、どれにしよう

かと一瞬迷ったが長居は無用だ。万一の失敗も許されないから、す早く手にしたハンカチで扉を開けると太くて長い直腸管を握り、くるくると巻いてポケットに入れ、そのまま詰所を出ると、すぐ前のトイレに入った。

やれやれとそこで僕は初めて深呼吸をして気を静めると、いよいよ、待望の実験だ。用意のヒマシ油を小瓶から直腸管の先へたっぷりとつける。この世に生れて直腸管だけは、その挿入感を味っていないのだ。故に今、これを選んだのだと自分に言いかけた。

太い直腸管は思った通りの抵抗

浣腸とオシメをされる少女

室井亜砂路画



を示しながら約十糎程入った。それ以上の挿入は直腸を傷つける危険性があると本にあるので思いとどまった。この実験で考えた。やはり自分では駄目だ。他人、特に看護婦さんに施行されてこそ、最

高の絶大な意義があり快感があるのだと。いつの日か、その時の来ることを祈って、僕のこの実験は終わった。

直腸管をチリ紙できれいに拭く

と、念のため一方の連結口から息を吹き込んで通気を確認してから看護婦詰所へ入り、無事、もと通りの置場へ返えすと、何気ない顔で母の病室へ戻っていった。

☆切腹愛好家への一つのヒント☆

福井 秋夫

切腹愛好家の皆様へ、一つのアイデアを差し上げたく筆をとりました。私は別に切腹愛好家ではありませんが、研究上の実験の一途上に於てヒントを得ました。

は落しておく)でこすれば、あたかも血が噴き出るように腹部を赤く染めるでしょう。

(一) チオシアン酸カリウム (通称

ご発表下されば幸いです。

ロダンカリ) $KSCN$ 一瓦

私は切腹に興味はありませんが

(二) 塩化第二鉄 $FeCl_2$ 五瓦

自分と女性に置換し、女性が男性

以上(一)の薬品を各々数CCの水に溶かして飽和溶液をつくる。

汚されることに興味を持ちます。

切腹に先立って、(一)のチオシア

そのようなことについても、もし

ン酸カリウムの溶液を腹部に塗り

さしさわりのありませんでしたら

(二)の塩溶液に浸した刃物(勿論刃

ご発表下さい。

山原清子後援会の件

(編集部)

○山原清子後援会の会員による山原清子を囲む第一回の座談会は、六月二十七日の日曜日、午後二時から大阪市内の某料亭にて行いました。

○会員で参集するもの十五名、本誌側から箕田京二、辻村隆、それに山原清子嬢を加えて、総員十八名にて和気あいあいのうちに、清談が続けられました。

○座談会の内容や出席者の方々の発言など誌上には一切発表しないという約束ですので、今回の座談会の詳細については残念ながら発表いたしません、とにかく午後

二時から六時までという予定が、七時半まで延長するという盛会でした。

○辻村隆氏が夜乃探郎氏から貰ったマダラの紐を用いて責めのプレイをやりたいというし、山原清子嬢も是非にということなので、会員一同の拍手喝采のうちに、息づまるような緊縛プレイの熱演が展開され、思わず一同嘆声を洩らしたほどでした。

○第一回の座談会は大坂にて開催しましたが、地元大阪からの出席者は案外少くて二名、他は東京、新潟、高知、京都、兵庫などの遠方からわざわざ参集下さった方が十三名という結果ですので、次回は、京都、神戸、名古屋、東京などの都市で催すことも考えております。

○第二回の座談会は大体八月中に行う予定をしております。

○尚、山原清子後援会の趣旨に御賛同の方は入金金千円同封の上お申込み下さい。写真二葉贈呈しますから、刺青、S・Mのいずれを御希望かお知らせ願います。



『東京都青少年の健全なる育成に 関する条例』について

編集部

執筆者、寄稿家の方々或は読者

の方々から、自粛自粛というが、それでは一体どのような範囲まで自粛するのか、というお訊ねが参っております。ここに、そういった方々へのお答えをかねて、最も代表的な東京都条例について、その認定基準を掲げてみましょう。

△東京都青少年の健全なる育成に関する条例の解説▽（東京都）より『東京都青少年の健全なる育成に関する条例第八条による指定に関する認定基準』

条例第八条第一項（不健全な図書類の指定）において「著しく性的感情を刺戟し、またははなはだしく残虐性を助長し、青少年の健全な成長を阻害するおそれがある」と認められるもの」とは、原則として次のとおりとする。

一、「図書類の指定に関する認定

基準」

（一）著しく性的感情を刺戟するもの

ア 男女の肉体の全部または一部を露骨に表現し、卑わいな感じを与えるもの

イ 性的行為を露骨に表現し、または容易に連想させ、卑わいな感じを与えるもの

ウ 医学的・民族的その他学術的内容であっても、性に関する描写、表現が青少年に対して性的劣情を刺戟するもの

エ 前記のほか、素材、描写表現等が前記ア、イ、ウと同程度に卑わいな感じを与えるもの

（二）はなはだしく残虐性を助長するもの

ア 社会道徳や法律に反する

暴力を容認し、かつ、賛美するような描写をしたもの
イ 残虐な殺人、傷害、暴行、処刑等の場面や、殺傷による肉体的苦痛または言語等による精神的苦痛を刺戟的に表現、描写しているもの（ごう問、私刑、虐待を含む）

ウ 殺人、傷害、暴行等の準備、実行行為を模倣う可能なように、詳細、かつ、刺戟的に描写したもの

エ 前記のほか、素材、描写表現等が前記ア、イ、ウと同程度にはなはだしく残虐性を助長するもの

〔解説〕

本条は、青少年の健全な育成を図るため、これを阻害するおそれのある不健全な図書類等を指定することができる旨の規定である。

第七条が、単に性的感情を刺戟し、または残虐性を助長し、青少年の健全な成長を阻害するおそれがある内容を取りあげているのに対し、本条第一項第一号は、著しく性的感情を刺戟し、またははなはだしく残虐性を助長し青少年の健全な成長を阻害するおそれがある内容のものをとりあげている。

これは、前者が単に関係者の自主規制であるのに対して、後者は不健全な図書類等として「指定」するという場合であり、指定により種々の法的効果を生ずるので特に要件をきびしくしたものである。

△編集部より▽

これを要約しますと「著しく性的感情を刺戟」するものや「はなはだしく残虐性を助長」するものという二つに分けられます。

それをもう少し、わかり易くいえば、△男女の肉体の全部または一部を露骨に表現▽、△性的行為を露骨に表現▽、△医学的・民俗学的学術的内容でも、青少年に対して性的劣情を刺戟する描写や表現▽といったものが前者に属し、△社会道徳や法律に反する暴力の容認或は賛美▽、△残虐な殺人、暴行や処刑場面（ごう問、私刑、虐待を含む）▽といった描写が後者に属します。

従って本誌におきましても、以上「解説」にも記してあります通り、著しく、はなはだしく、露骨に、といった制約を超えないように十分留意して編集したいと考えておりますので執筆者、寄稿家、投稿者の方々も、右の点お含みおき下さるようお願いいたします。

奇譚クラブ

昭和40年9月号

(1965年・9月号 <第19巻第9号・通刊206号>)



本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようはしません。そのためグラビア写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

雑談的な散文

△通信▽と△文通▽と其の周辺から――

保 藤 久 人

◎読者通信というもの

七月号で芳野眉美さんが昨年の読者通信に登場した女性がたを取上げていらっしやる。大変意義のある記録で、その一つ一つに価値がある様に思う。何時もながらのスカッとした切れ味の良い文章は、読んでいて気持が良く、SM共に登場する女性がたの特異性を、巧みに美化しつつ強調して、確立した強固な個性を持つ女人像を鮮明に描き尽し、何か身近い人の様に感じることとも可能である。併し対同性の批判は仲々に手厳しい。こういうと

ころに芳野さんの基本的な対女性思想らしいものも望見来るが、それとは別に、投稿者になり変った様に、親味にその長短を指摘されている点は嬉しいことで、落第……などと言われた方も、意外にスッキリと納得出来る様に思えるのだが、如何なものだろうか――。

実は私も、日頃から通信欄を重要な部分として見ている。暇のある時は印をつけたり、心覚えを記したりして、皆さんの声を興味深く（と言っては失礼だが）深い関心を以て拝見している。と言っても私の場合昨秋からで対象になるのは一年に満たない。が、その間

にも、皆さんの真摯な声に便乗して愚文を書いたことがある。〴〵（三月号）

通信の中には真剣な姿がある。切実な叫びを盛り沢山に聞く事が出来る。それは、奇くと読者の直線的な結びつきの扉であり、同時に読者の心の窓である。奇くと読者の関係を一番端的に表明している個所ともいえる。

確かに、読者にとって通信欄は心理的な憩いの場となっている。遠慮なく自分の思っていることを、空想をも加えて発表することが出来る。私自身、その中にある△呼び声▽を自分で言えず、書くことも出来ない部分の代

弁と思い、時には、まるで自分が先方へ呼びかけている様に錯覚することさえある。

しかし一方、余りに自由で開放的なので、無責任或は放言と思われるものも、少なくない。あなたも君も、つまり皆さん揃って立派な社会人なのだから、投稿文にも自ら節度が要求されるのは至極当り前。実際には、人間という生物には△夢▽を夢見る部分がある。限りなく△夢▽を追い、その望みの部分に生甲斐を感じることさえあるのだから△夢▽も結構。空想も又楽しい要素の一つではある。が、その非現実的な部分を、正常な現実には押付ける様な文章は少し慎しまねばいけないのではないか。この無責任なと判断出来る部分は比較的△M▽と自称される紳士方に多い様な気がする。私がM的なので、現実と非現実が明瞭に判る様に思えるのだが、これは偏見なのだろうか。

——通信は、矢張り真面目な声ばかりで飾り、人の中に潜んでいる、或は秘められているSM的な真実の叫びを、其処から聞き取り度いものと思う。

◎通信のいろいろ

通信の彩りを眺めて見ると、先ずその多彩

なことに一驚する。世の中には、SM的な所謂△ブ的要素を含んだものが、これ程沢山存在するのかと、今更ながら目を眩り、同時にそれ等は総て人間である以上、誰の心にもある筈のもので、これではマニアという言葉も意味を成さず、極く一般的な思考思想ではないのか、といい度くなる。それ程：多彩である。一般的なSMの感情から、悲愴美の世界に於ける生首崇拜まで登場してくる。

数え上げればキリがない。その盛り沢山なものを巧みに総合し、一つの文献誌として完成させたのが△奇ク▽である。今更言うのもおかしいが、私は其処に奇クの偉大さと重要性があると思う。今は皆さんに不平や不満が多い。私も同感である。が、この奇クの壮行を想うと、或る程度の我慢が必要だと思う。これは決して△奇ク▽に対してのお世辞ではない——。

さて、改めて通信の彩りに注目しよう。

総括的に言ってSの男性が多い。非常に目立っているが、これは、能動的な……という人間男子の本能的な風潮でもあろうか。全体の四分の一を占めている。特定の女性に、こうしたいと、具体的な意志を示し、詳しく条項を掲げていらっしゃる方も多い。総じて紳

士的だが仲には、エゲツナイ方も、おいでの様だ。私が女なら即座にお断りしたい、と思う方もある。

又、目的もなく（女性を虐めるという目的はあるのだが……）プレイプレイと仰言っている方も意外に多い。地域分布は、京浜地区と阪神地区に多いが総体的には全国に普遍化しているといえる。

二番目は、奇クに対しての意見。執筆者への言葉。批評。フォトや絵に対しての考え。更に自分が愛読者であることの表明など。この皆さんの真剣な討議事項が五分の一強。どちらかという関東地区の方に多い。

次いで意外に、浣腸マニア。ゴム愛好。下着フェチなどの多いことに気がつく。数字は全体の五分の一弱。

第四位が、Mの男性で六分の一。M女性と女斗美。女子レスリングなどの愛好の方々が同じ位の数字で続いている。特異な嗜好の方々は別として、最も少ないのが、S女性である。

◎通信の中の女性がた

私は男性なので必然的に女性がたの投稿にも強く関心を持つ。併し、男女ということ

で調べて見ると、女性の投稿は僅か十二%程度で、これでは……と一抹の淋しさを隠し切れないが、それでも、女性がたの投稿は嬉しい。そう思いながら良く見ると、奇異な数的関係を見出すことが出来る。先ず皆さんの地域分布を東西二つに分けて見よう。

その昔、天下別け目、東西の手切れと謂われ、豊臣の遺児を悲劇に追込む原因となった徳川と石田の政権争いの場、関ヶ原辺り。つまり常識的に中部地方と近畿地方を東西の境目として見る。すると、M傾向の女性は西方に多く東方の三倍という数字になる。逆にS的女性はその殆どが東方に属する。

M女性に対するS男性は一人対四・五人。分布は前述した様に割合に東西のバランスが保たれている。S女性に対してのM男性の比率は一人対十人。その詳細を見ると、S女性の東方傾重を反映してかどうか判らないが、M男性は、何と、東方は西方の三倍強ということになる。需要と供給という通念的観念で見ると、西方に於けるM女性に対するS男性の比率は一人対三人強、という確率を示し、東方では一人対八人という困難な数字になって来る。S女性とM男性の関係は東西共通している。

別の見方で女性だけを対象とすると、M的女性はS的女性の三・五倍という比率になり、男性とは対照的に（男性の場合は三分の二）人間の女性の受動的立場……可弱く、本能的にマゾヒスティックな感情に入り込む反能性の多いことが推察出来る。同じ様なことがゴムマニアの面でもいえる。他の事項よりも女性の比率が高く、男女の割合は、五と二。ゴムマニアに男性の多いのも奇妙であるが、その殆どの方が、Mであることを想うと、ゴムの持つ、あの特有の陰性的な感触と、弾みながら締まって来る緊張感が、内部心理に大きく働き掛けているものの様に想像出来る。

本質的に女性のSは少い様である。憧れる女性の稀有であることを、この通信の数字が示している。だから、Mと称する男性は、万難を排して女神を見出し、その足下に自己の位置を確保しなければならず、その為に最大限の奉仕誓約を公言する様になり、人に先んじようとする焦りと、加えて満されぬ性向に悶々とする余り、非現実的な部分まで……そう言わねばならぬと思い……本当の自分の希求以上に……M性を強調せねらない——ということになるのだろう。

◎飼育と教導と

△飼育するVという言葉がある。通常、Sの人がMの人に対して……の言葉である。が、其の語句が△飼育Vという目的だけのものがあるなら、Mの人が特定の人を自分相手のSに△飼育Vすることも可能なのではないか。尤も、この場合の言葉は△飼育Vでは不適当で、強いていうなら△教導Vとでも言うか。

——文豪谷崎の『痴人の愛』に於ける『ナオミ』の存在。私はこれをMの男が一人の女性に対して、S的教導を行った……と見るのであるが、どうだろうか。

併し、現実では、この様に男女の特異性を形成して行くには、その道程に、愛と色との感情の交流（合流でなく）が必要であり、SEXが絡まって来る。

先日、テレビ婦人の時間に、村山女史が、『源氏物語の思想について』喋っているのを聞いた。「——男女の交流を大別して愛と色とに分類出来る。愛は愛情であり、色は色欲である」……と。同じSEXでありながら愛情は交流であり、色欲は合流であるらしい。又「——古代から平安初期に到るまでの女性の立場は△愛の時代Vであり、平安末期にこ



の愛の形が崩れ始め、古くか培かれて来たその愛の思潮を、今一度自分達の手に……という希いが、紫式部の麗筆によって源氏物語となった」と解説する。そして「——以後、武家が起るに及んで人色欲への変貌が著しく、遂に江戸幕府によって人色欲の完成となり、女人の人愛の思想は圧されて見る影もなく、封建の穢土に埋れて、軍閥的な昭和の世代に到る。併し、終戦によって人色欲は崩解し、徐々に人愛の時代が築かれつつ

ある」……と。

私は古代史が好きで、務めて関係誌を読む様にしている。が、歴史に興味のない方でも古くからの男女の結びつきを静かに考えて見ると、その間柄の微妙な変遷に気付かれることと思う。これは、直接にSMと関係のないことかも知れぬ。併し人間は感情に支配される。だから合流よりも交流の方が望ましい。現代が愛の（愛情の）時代だとしたなら、密接な繋がりにより、S女教導も夢物語でない様な気がする。その可能性を人文通Vの面から拾い出して見よう。

◎文通という名の味覚

近々二年間程（昨年夏まで）私は人愛とVに関係して、その間に全国のいろいろな方より書簡を貰った。数多いその人々の中から、SM的な事柄について普通以上の関心を示された十二人の方々を選出することが出来る。その内の、半ばの方とは今もなお、折にふれ文通している。内容についての詳細は憚るが、その方々の外貌は発表することが出来る。大別すると男性が九名（ご夫婦五名、独身四名）女性三名（ご夫婦一名、既婚一名、未婚一名）ということになり、年令別に

すると、五十代一人。四十代二人。三十代七人。二十代二人。である。

SM的な言いながら、この方々に共通しているのは、皆さん現在奇クの愛読者ではないという点である。勿論、奇ク始め関係誌の存在はご存じであり、年配の方は、黄金時代の奇クを何冊か見ておられる。若い方も関係誌のいくらかは見ていられる筈である。が、その程度なので、SMマニアというよりも極く一般的な方という事が出来る。

八組のご夫婦のSM的な部分は極めてSEXが濃厚であるが、これは自然であり、そうでなければかえっておかしい。が、特筆を要するのは、皆さん最初からSM的でなかったという点である。四組の方は男性から、二組は女性からの誘導が出发点だったという。

現在、三組の方は所謂人SMプレイVの実践者で、その比率は互に四分六分。つまり、最も健全な社会人なのである。

皆さん、申し合わせた様にフォト・マニアで、緊縛姿態を撮影していらっしやる。縛りのマニアかと思ったがそうではなく、ご夫婦の間でのSMは多角的なものであることを知らされ感心したものである。残り三組の内、某氏は極端なSであり、某氏夫人は可成り嚴

しい、サジスチックな行為をも甘受しておられて、立派なMに成長していらっしやるが、フォトを拝見すると良く判る。残ったお二方は、多少毛色の変った方向へ進んでいらっしやるので書くことは出来ない。唯共に、可成り強い、心理的なMであり、芸術家であることは言える。

——私は、この方々から、人間（男女の）の結び付きも、愛情と理解によって、可成り広範囲にその内容を飛躍発展させることの可能性を教えられた。特に、夫婦という形態なので、結ばれる、という事は不可欠となりその確率も高い物である。（例外もある。私などもその例外。そんな私に、こういう事を書く資格はないかも知れぬ。が、世間には歩み寄りの可能な状態にありながら……というお方も多いと思う。そういう方々に可能性と確率をお伝えしたいのである。唯、それを具体的に表現出来ないのが残念だが——）

私は、これ等のご夫婦の歩まれた道を一つのA教導Vだと思ふのである。特に、芸術を職とする二氏にその感が強い。

◎教導の可能性について

独身の方々にペンを転じよう。男性四人は

それぞれ性向に特異なものをお持ちなので、私の関心が集まったといえる。

二十七才のAは女装して年下の女性に虐められ度いといい、三十四才のBは、相手が男でも女でも、兎に角縛って欲しいと訴えた。

結婚の実績のあるCは、自分より十才位年上の女性でないと……その様な女性を、と愛用の紐（半打のサナダ紐の様なものであった）を示した。

C、Dの両氏は既に結婚している。D氏はA飼育Vに成功したらしい。夫人は七才年上という事である。

此処ではA飼育Vの事例はあるがA教導Vの実績は見当らない。矢張り仲々に困難な事柄であるとはいえる。が、二人の女性から、私はその可能性を感じ、そして実在することを知った。

E夫人（当時未亡人）は新しい恋を得た。私が手紙を貰ったのは其の頃であった。二、三度の交信の後、E夫人は『——愛人の要求が異常なので、自分にはとてもついてゆけそうになく……』という苦悩を綴って来た。

愛人だという男性の言葉は判り易く箇条書にしてあった。それは十五の項目に分れていて『——信じられない、恐い様な気がする』

と、E夫人を嘆かせる程の行為ばかりであった。

自分のことは一向に出来なくても、他人のことになると意外に饒舌になれる。無責任と言われるとそれまでだが、私は同じ立場で男性側に同情した。彼に成り変ったつもりで返書を認めたと記憶している。何カ月かの後、彼女は新しい夫の上に傲然と聳え、希求する放射を完了したという。私はそのフォトを貰って感激し、切々と綴ったその手紙の文字を胸を熱くして、何度も何度も読んだものである。二十通に近いE夫人の手紙は今も私の手許にある。そしてそれは、一女性の変貌の様子を克明に記している。A教導Vされた女性の最も好い事例ということが出来ると思う。

E夫人との、その交信の結果が私を奮い立たせた様で、その勢いで近隣のF嬢に目標を樹てた。

文通は十カ月以上に及び、情熱を傾倒したものである。焦りは厳禁である。ゆっくりと外側を廻りながら、徐々に深部心理に入り込んで行く。

一種の修業の様なもので何度も途中で挫折（ということとは、諦めるか或は全部を喋って仕舞うか）しそうになりながらの必死のA教

導Vであった。文通↓フォト交換↓会合。

一歩づつ階段を踏み締めながら彼女の意志の確立された時に始めて逢った。だが、まだ△逢ったVだけである。そして……新しい出来事なので、これ以上はまだ書けない——。

◎人間であるということ

お若い方々はまだまだこれから新しい機会に恵まれる筈である、SM的な悩みは解決する道もあるということを知って貰い度いと思

新発足 懸賞△告白、手記、体験V原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

う。唯、飽くまで人間であるという自覚を持ち続けることが大切である。人間の結びつきだから△徹するVということ以前に、それが△交流Vであろうと、△合流Vであろうと、△愛Vと△色Vとの従属することを念頭におかねばならない。そのSEX的な部分が……そのいくらかでもが、介入することはSM騎士道に反し、不純・不倫という程のものに近くなつて来る恐れは多分にあるといえる。併し、それを超越しなければSMの真隨に触れ

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

ることは出来ない。SEX的な部分を踏み締めて、その上で其処にSMが育ったならば、逆に、自然に、感情の△交流Vが微妙に作用し、純正な形態が出来上って行く筈である。何故なら——SMは総て△人間の心Vが所有するものであるから——。



あとがき——。この記述は過去十カ月の奇クを資料にしたもので、使用した数字は本来なら一年毎に出すものであり、従って未完成で正確でない。この様な分析は、きっと編集部、或は一部の読者の手で完成しつつあるのじやないかと思うが手掛けて見ると大仕事で僅かの暇では出来そうもない。併し、編集部にとっては、読者層を知る指針となり、皆さんには、自分達の仲間を知る資料となると思う。文通資料については既に公開を許されているものも多く、中にはノート書きの日記を託されている方もある。何時か、私の拙ないペンが、それを追うことと思うが、今はまだその時期でなく、もう少し自由な文字の綴れる日にしたいと思ひている。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

黒いコートの記憶から

小 妻 容 子

御誌益々御発展のこと、お喜び申し上げます。皆様の体験、告白など拝見いたしますうち、私も彼（夫厳一廿九才）のことについて思いつくまま、何か書いてみたいと思い……小説家気取りで原稿用紙を前にしてみましたけれど、思いとはうらはらに徒らに時が流れるばかりで、今更のように不勉強を悔いている次第でございます。此の道に徹しておられるS・Mマニヤの方々から見れば、片腹痛い貧しい記録かも知れませんが、私は自分の体験を思いつくまま、偽りなく書いてみたいと思います。

彼は畸人と云う言葉が当てはまるような誠におかしな男でございます。彼のようなタイプには、およそ不似合な（彼は一見気弱な優男タイプです）人が驚くようなことを平気でやってのけたり、さんざん人が心配したり、いらいらする原因をつくつておいて、それが意外な結果に終って笑いの種になったり、子供みたい到他愛のないことで怒ったり喜んだりするかと思うと、事業を始めて（これは廿三才の頃）ただの一年で簡単に失敗して笑いにされても平気な顔をしていたり、そうかと思うと他人からみたら簡単に解決するよう

なことで深刻に悩んでいたりと、気まぐれで掴みどころのない変り者で、友人に『畸人』などと云われると本気になって怒っておりますが、自分で余り変っているなどと思っていないようです。とかく突飛な人騒がせの原因をつくりましますけれど、余り人に嫌われないのは生れついてのお人好し（私にいわせれば一番の欠点ですが）のせいでしょう。しかし私にはこんな人並はずれたところが彼の魅力だと思っております。そうでなかったら私には何の興味のない只の優男にしか見えません。

私はどちらかというと、気弱そうな二枚目

タイプの男性より筋骨隆々とした逞ましい男性の方が好ましいと思っておりますから、彼のことでは寿命が縮む程心配したり困らせられたりいたしますけれど、私は彼に従ってゆくことに生甲斐を感じております。

彼の異常な性癖を知っていながら夫婦になった私も、やはり一風変っている女かも知れません。彼の異常な性格はいつ頃から芽生えたのか、私にはわかりませんが、聞くところによると可なり幼い頃からのようです。彼は

そのことについては、余り話したがりがありませんので、彼の幼い頃のことはよくはわかりません。

私が彼と知り合った時は、既に自分の異常な性格に悩んでいた青年の頃で、その頃の彼は年齢より可なりふけて見えました。

私より年下だということは、ずっと後まで、わからない程でした。絵が好きで、親の反対を押しきって家を飛び出して生き馬の目を抜くという、東京で苦勞してきたせいでしょうけれど、そんな彼と知り合ったのは、今から七年位前だと覚えております。

す。

その頃の私は既に美容師の免許をとっており、束縛された住込みの職場に耐えられないものがあって、K市の或る美容室に転職しておりました。両親は娘の一人暮らしを可なり心配していたようですけれど、その近くに小さな離れを借りて、狭いながらも楽しい我が家と、夢多い生活を楽しんでいる頃でした。昔栄えた雪国の小さな港町K市、そこが彼の生れ故郷です。その頃K市では若者の間で社交ダ

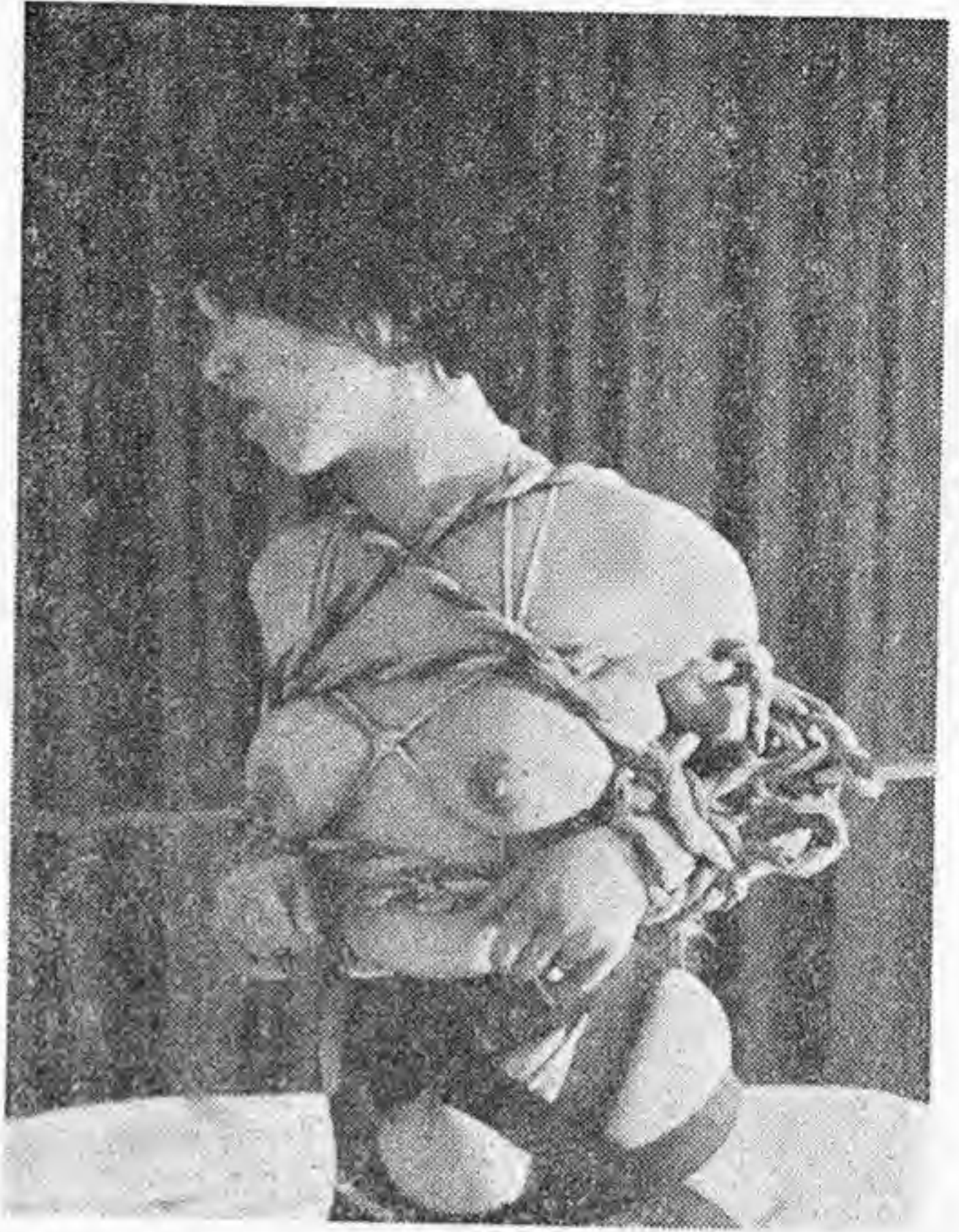
ンスが流行しておりました。もっとも何も刺戟のない田舎町のことですから若者達のエネルギーを発散するのには、もってこいの場所だったかも知れません。

ホールは三個所あって入場料もいたって安く、コーヒ一杯分に毛のはえた位で一晚遊べたのですから無理もございません。私も当時一人暮らしの気安さから暇をみては通ったものです。生々しく触れ合う異性の肌、躍動する肉体、そんな雰囲気酔っておりました。そ

んな時に、男友達が出来るのは当然のこととございました。K市では比較的名の知れている印刷会社に勤めているTと知り合いました。Tは女性関係の噂が非常に多いので気は許しておりませんでしたけれども、巧みなリードや気をそらさない話術など、私でなくとも好感を持ったことでしょう。私は誘われるままホールへ行き、青春の火を燃しておりました。

そんな或日、雨の降る十月も中頃と覚えております。土





曜日曜を前に控えた上、雨のせいでホールには活気がなく余り踊りに身の入らない目でした。「こんな日は一杯やるに限る」とTに誘われました。私はバーや飲屋などあまりいったことがありませんでしたので、不安を承知のうえ、好奇心も手伝って行くことにしました。繁華街のはずれにある小料理屋で青白い顔をして一人で飲んでいた彼を、Tに紹介されたのが彼を知った最初でした。

いって笑っておりましたけれど、彼の父も可なりお酒には強かったようです。彼はTと同じ会社に印刷デザイナーとして勤めており、入社して間もないのに、Tとはどういうわけか気が合って、時々一緒に飲みに行くのだと言っていました。

二人で酒を飲んで、街の愚連隊と喧嘩していた様でした。Tが以前から愚連隊に目をつけられていたようで、彼は多少柔道の心得

黒いコートに黒の背広でキチンとネクタイを締めており黒系統の衣裳を嫌味なく着こなしていたことが印象に残っておりま

（余り強くなかったのですけれど）があるところから時々喧嘩に巻き込まれていたようでした。彼とは時々ホールで会うようになりましただけれど、私とはいつも一、二度踊るだけですぐ他の娘と踊っていました。きっとTに遠慮していたのでしょう。彼の踊りは、どこで覚えたのか知りませんが、本格派の踊りで、私にはついて行けないことが屢々ございました。彼がその気になれば恋人の一人や二人すぐ出来る筈なのに、特に親しくつきあっている相手もいなかったようです。私はそんな彼に恋心を抱くようになってしまいました。

表面は至って明るい彼ですが、時々ホールの隅で物思いに耽っていたり、空虚な目で踊り興じている男女を眺めている姿は、何か暗い影があって、一抹の不安を感じたのですけれど、逆にそんな彼に益々興味をもって近づくようになりました。或る時妙なきっかけから彼に絵のモデルを頼まれました。私はモデルになれば彼と二人きりの時間も出来るし、彼の気持を知る為にも絶好のチャンスと思い承知しました。

しかし数日して私は裏切られたような気持ちになってしまいました。彼はこの数日間、私に対して愛情の表現はおろか、指一本触れよ

うとしなかったのです。只黙々と絵を描き続けるのみで私は彼の視線の前で、手持無沙汰で、身の置所のない思いをしているだけでした。取りつきにくい不可解な彼の気持を理解することに苦しみました。今考えて見れば、彼はその時、縄こそ掛けておりませんでしたけれど、恥しさに身をふるわせて、おどおどしている私を眺めて満足していたのだと思います。しかし、私は偶然、彼の異常な性格を覗いてしまいました。当時彼は、そのことを人に知られるのが最も弱味だったのではないかと思います。

街にジングルベルの音楽が賑かに流れる頃でした。古本屋で無心に雑誌に見入っている見覚えのある黒いコートを見つけました。彼は私が近づいたのも知らぬげに無心にページをめくっておりましたが、一瞬私の目に入った挿絵やグラビヤは当時の私には可なりショックなものでした。キリキリと縛しめられた女の身体が様々な姿態でのたうっている図柄は、しばし彼に声をかけるのも忘れてしまった程でした。そんな私に気がついた彼は驚いた様子で急に生真面目な顔になりましたが、狼狽の色はかくせなかったようです。彼は慌てて本をその場に置くと、私の腕を引っ張る

様にして雑踏の師走の街へ出ました。

鉛色に曇っていた空からは、小雪がはらはらと降っておりまして。彼は無言で人混みを避けるように裏通りの方へ歩を進めました。私も彼の後について行く事が義務であるかのように複雑な気持で後に従っておりまして。雪はその頃から本降りになっており公園の中は人影もなく、あちこちの小高い所は白く化粧されており、彼の黒いコートも髪の毛も真白でした。彼は雪を払おうともせず真剣な目ざなしで私に求婚をしたのです。初めて彼から異常な愛の告白を聞いて、私は予期せぬ彼の言葉に複雑な気持で返えず言葉もありませんでした。

その夜、私は彼のいった複雑な言葉の意味を考えて眠れませんでした。しかしいくら考えても当時の私にS、Mなどという言葉の意味など、わかる筈もございません。考えぬいた末、あの古本屋で彼が手にしていた本を見ることが一番と思い、翌日、勤めが終ってから早速、本屋の前へ行きましたけれど、何か後めたい気持で中へ入ることをためらいまして。婦人雑誌やカメラ雑誌などをさんざんじったあと、やっと手に入れた本は昭和二十八年に発行された臨時増刊号で口絵やグラビ

ヤが可なり豊富にあるものでした。もし側に人がいたとしたら、私にはとても恥しくて、その本を買えなかったことでしょう、しかし今考えて見れば、私の体内にも、あの異常な血が流れていたのでしょうか、家へ帰って本を夢中で読んでいくうち、だんだん興味を抱いていく自分を、どうすることも出来ませんでした。

初め彼から話を聞いた時は、一種の恐怖感を抱いておりましたけれど、本を読んでいくうち次第に恐怖感は消え去り、本の内容にある女体が縛られ責られる姿に、何ともいえない甘美な感情が芽生えてくるのでした。誰にも打ち明けることの出来ない悩み、自分の異常な性癖に苦しむ彼の気持がわかるような気がしました。私は或る種の期待と不安に戦きながら、彼にこの気持をどう打明けようかと迷いました。しかし彼はそんな私の気持を外に、あの日以来、姿を見せませんでした。そしてクリスマスの夜、彼から何の誘いもないまま、Tの誘いを断り切れずTの友達四・五人で「彼も来ていれば」という淡い期待を胸に抱きながら行くことにしました。

夜も最高潮に達する頃になっても皆の騒ぎをよそに白々しい気分になっていました。酔

っ払いがあちらこちらで気焔をあげる街で彼を見つけたのは、皆が酔った娘に手をやいている時でした。彼は私がTと一緒にのを見て私が彼の異常性格を恐れてTの方へ心に移したとでも思ったのでしようか、相当酔っている様子ではにかむような微笑を浮べて私の方へ視線をやりました。私は彼のそんな態度を気づかいながら、皆と離れることばかり考えておりました。やっとのことで皆と別れて彼のもとへ行った時は、意外ななりゆきに彼は呆氣にとられておりました。その夜、私は生れて初めて縛しめの感じを味わったのです。

今思えば幼稚なプレーでしたけれど、その時の私にはありあわせの帯や腰紐で縛られるだけで恥しさに戦っておりました。こうして彼と私の奇妙な関係は二度三度とプレーを重ねるに従って益々深いものになってゆき、私は次第に彼の遠慮しがちな責めが物足りなくなってきました。彼は急激に変わってゆく私に目を瞠って驚いていたようです。そうなること



私の小さな部屋では物足りなくなってプレーの場所に旅館や彼の部屋を使ってスリルを味わうようになりました。特に彼の部屋は多少気味の悪い部屋でしたが、プレーの場所としては最適の雰囲気で、今日でも、あのような雰囲気の中で思う存分にプレーが出来たら素晴らしいと思います。

彼の使っている部屋は七畳半という変な間取りで彼の祖母の話によりますと、七畳半の間は昔切腹の場に用られたということで、怨霊が籠っている縁起の悪い部屋だということ

です。(本当かどうか分かりませんが、彼の父母も縁起の悪い部屋だから改造すると云うのを彼が無理にやめさせて、気にいって使っていました。

話を聞いてみると彼の家の人が、その部屋を嫌うわけがわかります。古い話になりますが彼の祖父の兄がその部屋を使っていた時になくなり、彼の父の兄が矢張りその部屋を使っていた時になくなりました。そして彼が絵を習った叔父(彼の父の弟で日本画家)は死ななかったのですが、神経衰弱になって療養中だそうです。そして彼の兄が矢張りその部屋を使っていた時に病名は覚えて居りませんが右足を附根から切断してなくなったのだそうです。いずれも二十代の若さで、人生これからという時に不幸な死に方をしたことになります。

祖母は叔父(画家の)が、その部屋を使っていた時と彼が似ているということでも可なり心配していました。

「外に部屋がないわけでもないのに全く変っ

「た子だよ」と云って呆れておりましたが、彼は「そんなの迷信だよ」と云ってとりあいません。叔父も矢張り同じようなことを云って使っていたようですが、そう云われてみるとその当時の彼も表面には余り出しませんでしたが、神経質だったように思います。田舎の旧家ではよくある話で、私は別にそういうことは余り信じていない性質ですので、偶然の一致だったのではないかと思いましたが、祖母が真面目に、仏壇に灯明など上げているのを見ると、私は偶然にしては出来過ぎているように思えて、さすがに気味悪くなってくるのでした。

黒光りのする急な階段を登ってゆくと、部屋は陰気な感じで一歩中に入ると髪の毛を焦した様な異様な臭いがするのです。妙な話を聞いている私は思わず身ぶるいをした程でした。私が気味悪がって彼に臭いのことを聞くと、彼は笑って日本画独特の岩絵具をとく時に使用するニカワの焦げた臭いだと教えてくれましたが、何も知らない私は祖母に聞いた話が頭にあるだけに目に入る物がみな異様な気味悪く感じたものです。私は家人が嫌う因縁のある部屋を好んで使っている彼の異常な性格にはかり知れないものを感じました。

周りは古くさいのに反して壁だけが取っつけた様に真新しく真白なものかえって無気味で、彼は壁画を描く為に表具屋に張り替えさせたと云っていましたが、私は以前の壁がどんなだったかをいろいろ想像して妙な気持ちになってきました。彼はその壁に地獄の責絵を描くのだと云って張り切っていたようですが、それは下図までで実現しなかったようです。近所の人に頼まれたという掛軸の山水図だとか大黒様の絵などが、あちこちに乱雑に立て掛けてあり、そういう物が尚更部屋の雰囲気は無気味にしていたようです。私が片づけようすると彼は「そう邪怪にするな、此の絵が結構良い小使銭になるんだからナ」と云って笑っていましたが、余りはかどってはいなかったようです。

襖大位の仮張りを裏返えすと、あっと驚くような昔風の美女が様々な姿態で責られていく図が、いっぱい原色で描かれており、スケッチブックを広げれば顔を赤くするようなあられもない女体の図が描れてありますし、私はいささか常軌を逸した彼の趣味や雰囲気にもいるような気持になりました。彼は現実には出来ない事を、あのような雰囲気の中で絵に

よって欲求を満していたのではないのでしょうか、彼が異常な性格になったのも、今考えて見れば案外、あの部屋に何か原因があったのではないかと思ってみたりします。

私は初めは、気味悪い思いをしましたけれど、プレーの時など被虐の捨て難いムードを出すあの部屋が、次第に好きになってきました。と云って一人で寝起きはとも出来そうにもありません。彼が描いた様々な責絵を並べた中で荒縄で滅茶滅茶に素肌が見えなくなる程がんにがらめに縛り上げられ、荒縄の猿轡まで噛まされて、身動きも出来ずに芋虫のように転がされてもがいている私を、そのままにしておいて、彼は部屋を出て行ってしまいました。

彼と一緒にいても余り感じのよくない部屋なのに、身体を自由を全く奪われて薄気味悪く静まりかえった中で一人転がされているということは想像以上に心細いものでした。十分か二十分が何時間にも感じられて、初めのうちは周りの責絵などを眺めて気を紛らわしていたのですが、だんだん縄目の苦痛と一緒に恐怖感が襲ってきて、目を開いていることが恐しくなり、じっと目を閉じていると今度は何かが迫ってくるようで背筋が凍る思いで

した。

逃げ出すことは無論出来ません。たとえ身体が自由でも出入口は一個所しかございません。その一個所は彼が出た時に鍵を掛けてありますし、窓には格子が嵌めてあります。私は化物屋敷に監禁されたような気持で彼が一刻も早く帰ってくることを願いながら苦痛とわけのわからない恐怖感と戦っていました。彼が戻ってきて、まだ全部縄を解き終らないうちに恥かしさも忘れて身体中縄だらけのまま、彼の胸にすがって泣いておりました。彼は私の気持を見透して、夜になるとわざと電気を使わないで、蝋燭ともして私が気味悪がっている様子を楽しんでいました。私は蝋燭の灯が、ゆらゆらゆれるその部屋の中で、一人一晩中転がされていたら、どんなだろうと想像して、ぞーっとしたものです。きつと恐怖で気が狂っていたこととてございましょう。

その頃、彼が最も好んで行った責め方は、姦婦を成敗するという名目で、太い荒縄を使って行う昔風な感じを出す責めで、私が身につける物は太抵赤いお腰か、ぼろぼろの長襦袢でした。でも、プレーが終る頃には、いつも裸にされていることが常でした。またそう



いう物を使って行う責めが、その部屋の雰囲気にはピッタリ合っていたように思いました。私自身もいつか、その雰囲気は溶け込んで本

当に姦通をして夫に責められているような気持になり、なぜか身も心も云いようなない感情の囚になってしまふのでした。

爪先すれすれに天井から吊られ、身体中に男女の恥しい絵を描かれて、プレーが終ってその絵を洗い落すのに苦労したり。当時の私には気心の知れた彼とはいえ、その前で死ぬ程つらいみじめな恰好にされて排尿を強られたりした屈辱感、今でもありありと覚えております。しかしそんな彼とのこともK市では長くは続きませんでした。原因は街の愚連隊との争いが元と思いますが、私には良くはわかりません。彼が再び東京へ行くと云いだしたからです。その頃、私達は結婚の約束は既にしておりましたし、両親は別に反対もしていませんでした。

どんなことがあっても迎えにくるまで待つて呉れ、と云い残しただけで彼が東京へ行く日、私はささやかな贈物を持って約束の場所で何時間も待っておりました。しかしあの黒いコートを着た彼の姿は遂に現われませんでした。彼は予定の日より一日早く東京へ行ってしまったからです。それから二年の間、彼が東京の何処で何をしていたか全くわかりませんけれど私達の結婚を前提に苦労していた

ことは事実のようです。その間彼のこととわかったことは、彼は恐しく筆不精だということだけでした。

たった一言の口約束だけで、彼を信じて待っていた私が不安な日々を送ったことは云うまでもございません。結婚適齢期の私に縁談も数々ありましたし、病気で入院したりして精神的にも肉体的にも可なり苦しい思いを致しました。しかし、多少摩擦もございましたが、私達は結ばれることが出来ました。それから私達の異常な夫婦生活が初まるのですけれど、彼も私も異常だとか、正常などと云うことは考えずに、ごく自然にプレーを行ってきまして、表面は何の変りもない平凡な夫婦だと思っております。

あれから数年、彼の気まぐれな性格は直っておりませんが、あの頃のような暗い影は何もありません。時々私を悲しませたり、苦しい思いをさせられたり致しましたけれど、彼は必ず私の気持の中へ返ってきました。自分の行動を束縛されることを、最も嫌う彼ですが、良識をもって行う行動には今は何も心配しておりません。

結婚して五年目に入った今、願って見ると様々な奇妙な体験も数多くございましたけれ

ども、それを細々書くには余りにも繁雑過ぎて私には纏める力がございませんので、ごく最近のプレーの中から選んで一つ紹介してみたいと思います。四月にしては暖い陽気の午後のこととございました。休日を利用してドライブに行く予定が自動車の故障で駄目になり、やけになって寝ていた彼が、「よし、今日は一つ思う存分に責めてやるぞ」と云いながら急に起き出して、「食事を済ませてからにして……」と逃げる私を掴まえて無理矢理着物を剥ぎ取ってしまいました。

予想もして居なかったことで何の抵抗も示さないで小さくなっている私を振り伏せて帯や腰紐で後手に縛り上げて目隠をしてしまいました。呆氣にとられている私を正座させて「そのまま待っているよ、動いたら承知しないから」と云いながら慌てて表へ飛び出していつてしまいました。私は何にするつもりだろうと思いつながら、彼が行きかけに鍵を掛けてゆかなかったことに不安を覚えておりました。もしこんな恰好の所へ来客があったら困ると思ったからです。彼に動くなと云われていたのですけれど、こんな恰好を他人に見られるよりましだと思い、咄嗟の場合を考えて彼の布団の中へ入ることにしたのですが、縛

られて目隠しをされているので中々思うようにいきません。それでもどうやら、お尻からもそもそと潜り込んだのですが、布団が二枚折れになっていいるせいか、余りもぐり過ぎると頭隠して尻隠さずで、どうにも不自然に思えるのです。

暫くして帰ってきた彼は私が布団を被ろうとして必死になっている恰好が、余程おかしかったと見えて持ち帰った棒の様な物を傍に投げ出して、お腹をかかえて笑っております。身体をまるめて出来るだけ小さくなっている私に「さあ、布団の中で、もそもそしている私に「さあ、いいわけは聞かないぞ」と云いながら勢いよく布団を剥ぎ取って、突き出したようになっていいるお尻を「丁度良い恰好だ」といって、いきなり平手打ちです。彼は叩いたり身体に傷のつくような責めは、好まないらしく余り行いませんので、自然私も激痛を受ける責めには長く耐えていることが出来なくなっておりました。私は三十位叩かれて大袈裟に悲鳴をあげてやっと許してもらいました。

彼は先刻、私を縛っておいた紐を解いて、「さあ、初めるぞ」と私の両腕を前に水平に出させ、云われるまま黙って差し出した腕に持ち帰った棒をあてがい丁度骨折した時の添



え木の様な恰好に用意した縄で、ぐるぐる巻に、両方の腕を別々に縛り上げてしまいました。そうしておいて今度は立たされて足も同じように棒をあてがって縛り、余った縄を腰に巻いてしめつけて、その縄尻を持って、全手足の曲らなくなった私に「さあ、歩いて見ろ」と縄尻で私のお尻をピシヤリと叩きました。不自由な足でどこちなくよちよち歩く私を追いたてて、部屋の中を二、三遍回らせて

見て、それでも満足しないのか、足首も丁度歩幅が三十センチ位になるように縛ってしまいました。

彼はよちよち歩きがやっと出来る位にしておいてから、「さあ、食事にしようか」と云ってニヤニヤ笑っております。私は初めて彼の計画がわかりました。彼はきつと寝ている

間にでも考えていたのでしょう。私が不自由な姿で炊事をするのを眺めて楽しもうという魂胆だったのです。「こんな恰好で？」と私が申しますと、「当り前だ、少しでも粗相したら、こうしてやるから」と云って、机の上の紙挟みを一個取って、乳首に挟んで見せてその痛さに思わず悲鳴をあげる私に、「痛いだろう、わかったら粗相をしないように早くするんだ」と私を追いたててます。

無論反抗など許されません。反抗などしたら彼は私を身動き出来ないようにして何処かへ行ってしまうのが常ですから。彼はそんな私に、「あー待て、食事の支度をする前に部屋の掃除が先だ。まだ布団を敷いたままだ」と云って私に云いつけるのです。手足の曲らない不自由な身体でよろけながら寝具を片づけている私の縄尻を持った彼は、布団のたたみかたが悪いとか、もう少し早くやらないかなどと云って様々な理由をつけて、お尻を縄尻で叩いては私が布団と一緒に転がったり尻餅ついたりするのを見て喜んでいるのです。しかし、私は必死です。どんなに急いでも手足が曲らないのですから、はかどるわけがございませぬ。それでも私に出来ない所は彼も手伝って部屋が片づいた時は、既にくたくたに疲れておりました。

疲れても足が曲りませんので腰をおろす事も出来ません。そんな私を、お勝手に追いたてて、今度は食事の支度ですが、そんな奇妙な恰好で、まともに出来るわけがございませぬ。お茶碗を割ったり、お盆をひっくり返えしたりして、紙挟みの数が次第にふえてゆきます。彼の仕事は私が粗相をするのを見つけては紙挟みを挟むことだけです。食事の支度

が終る頃には十数個あった紙挟みはなくなつてしまい、両方の乳房は勿論のこと、お尻やお腹は奇妙に引きつれて何とも云いようのない哀れな恰好でございます。食事をする時になつて彼はその紙挟みを取れたら取つてもよいと云いましたが、手足の曲らない私に簡単に取れる筈がございません。それでも苦勞して、お尻の部分と下腹部のだけは、どうやら取る事が出来ましたが、一番苦痛の激しい乳房や乳首に挟まっているのは、どうしても駄目です。もがいてすり落そうとして見ましたけれど、痛味が増すだけで何の効果もございません。

彼はそんな私を面白そうに眺めて「もう駄目か、それじゃあ食事にするか……」と云いましたけれど、私には座することも出来ませんし第一、手が口まで届きません。「縄を解いて」と云つても解いてくれる筈もございません。彼の目的は私を困らせるところにあるのですから。私が困った顔をしてもしもじしてゐると、彼は「どうした、食べないのか」と何もかも承知のくせにわざといやがらせを云つて「立っていたんじや仕様がないな」と今度は手を床につかせ、お尻を高々と上げさせられて、と云うより、この様な恰好になるよ

り仕方がないのです。

立ち上れないように手首と足首の間巾が五センチ位になるようにしばって縛り、犬のように首に縄をつけて、それを食膳の足に結びつけます。私の前の膳の上に皿が一枚置かれ、その中に彼が入れる食物を屈辱の姿勢で食べさせられるのです。食事が終つて、犬のような姿勢からは解放されましたが、依然として腕と足は、そのままです。余り長時間のばしたまましていると、手足の節々の感覚がなくなり思いきり手足を伸ばしてみたくて、何とも云えない苛立しい気分になってきます。彼が食事の後片づけをしている間、私は部屋の角に棒の様に放っておかれるのですが、動かないでいる事が、かえって苛立しい感情を強くします。

彼はそんな私に「さあ、食事が終つたから今度は散歩の時間だよ」とさっきと全く同じように四つ這いにして縛り、首の縄尻を持って部屋の中を回らせるのです。何しろ手と足の間巾が狭い上に曲らないのですから、上手に歩けるわけがございません。犬のように追いたてられるだけでも屈辱に耐えがたい恥しい恰好ですのに、彼はその高々と持ち上つてゐるお尻に、停電用に買つてある蠟燭を一本

ずつ立てました。余り安定しないということ、糸で蠟燭が転がらないように腰を通して、幾重にも巻きつけて蠟燭をお尻に固定して、彼はこれは傑作だとばかり、私を鏡の前に連れてゆき、「どうだ、良い恰好だろう」と云つて、鏡の中から私を見てニヤニヤ笑つております。

私は、鏡に写っている余りにも珍妙な恰好に、声もなく只赤くなるだけでした。彼は、「その火を消したら今日は許してやる、しかし歩いてだぞ」と云つて私が洗濯しようと思つて押入れに入れておいた、汚れたパンティを引っ張り出してきて嫌がる私の鼻をつまんで口を開かせて詰め込み、その上手拭でしっかりと吐きださないよう括られ、只呻めくだけでした。彼は「さあ歩かないか、早く歩かないと火は消えないぞ」と面白がつて私を追いたてます。お尻を振りながら、二本の焰をゆらゆらさせて歩く、その奇妙な姿を、面白そうに眺めて尚も追いたてる彼、犬のように首に縄をつけられて四つ這いでよちよち歩く私……。

様々な感情が一緒になつて思考力もなくなりわけのわからない思いが胸いっぱいこみあげてきて、涙をポロポロ流しながら必死に

なって這っておりまして。

勿論、火を消すことは出来ませんでした。そんなことは彼は計算の上ですから、そう簡単に消せる筈もございません。彼は次々と私に対する責めを考えており、閉めきった部屋の中は熱気をおびて、むんむんしております。あくことなく続く彼の執拗な責めに私は完全に屈服しておりました。いろんな物を引っ張りだして、部屋の中はさんさんな有様です。それが又異常な雰囲気をかもしだして、又彼の心を益々たかぶらせるのです。私はX型に組んだ物干竿に大の字にキリキリと縛りあげられています。

十分・二十分・三十分と過ぎるに従って苦痛は骨身に徹し咽喉は渇き手足の感覚は既に失われ、許しを乞うにも声を出すことすらできません。「貴方、堪忍して、許して……」と心の中で何度叫んだことでしょう。しかしその声も口の中に押し込まれたパンティが唾液と一緒に吸い取ってしまい、彼の身にはただの呻き声としか届きません。そんな私を外に、次の責めの用意に余念のない彼は、時々私の顔を覗きこんでは、脇腹を抓ったり、膝の裏側や腋の下をくすぐったりして私が呻き、もがく様子を満足そうに見て、煙草の煙

を私の顔に吹き付けて「どう、御気分は……」などと云って、からかっているのです。

呻いている私の脇には早くも、次の責め道具が用意されています。椅子と棒を使った彼独得の晒台が出来あがって、やっとX型の磔から解放されたのも束の間、「それだけは堪忍して」という私を無理矢理その晒台に座らせて、足を開かせたポーズで縛りあげてしまいました。彼は顔を赤くしてうつむいている私に、「お前は死刑にされてもう死んだのだぞ、死んだ人間が恥しいことなんかあるものか」などと冗談を云って、そのまま気のすむまで放置しておくのが彼流の晒なのです。

彼はその間、牛乳を飲んだり、煙草を吸ったりして、私が身悶える姿を眺めているのですけれど、如何に楽な姿勢で縛られているとはいえ、そんな不自然な恰好で長時間放置されることは、側で見ている程楽なものではないと思います。お恥しいことですけれど第一、生理的な現象は如何に私でも我慢することは出来ません。こんなことを、あからさまに書く私を、さぞ、はしたない女とお思いでございましょうが、今の私には、彼と二人だけのプレイを発表して恥を晒すことに又新たな快感を覚えるのでございます。普通の夫婦生活

に満足出来ない女、異常な生活が身について恥かしめられ、苦しめられて喜びに身を焦がす女、何時か私は、そんな女になってしまっているのです。

今まで彼の手によって行われた様々な責苦は、彼の異常な心と一緒に私の身体に入り込んで、私をこんな異常な性格につくり上げてしまったのです。もしも彼が私の前に現われなかったとしたら、きっと私は平凡な夫婦生活をしていたこととございましょう。しかし彼を恨む気持はさらさらございません。一生何処へでも従ってゆく覚悟しております。彼の側でがんじがらめに縛りめられている時が、私にとっては最高の喜びなのですから……。

彼の異常な性格は彼が描く絵によってもよくわかります。彼の整理棚には、他人には到底見せられないようなSM画がぎっしり描き溜めてあります。最近の絵と私が知り合った頃描いた絵とは可なり好みも変わってきております。当初の頃描いた絵は、古風な美人画が多かったですけれど、最近では私など見ただけでドキッとするようなグロテスクなものを描いて悦にいらしております。

たとえば、恐しく肥満した婦人の絵だとか、極端に乳房が大きかったり、お尻が大き

かったり、そうでなければ出産まぎわの臨月腹の妊婦の責絵などで、最も好んで描く題材は、肥満体の中年婦人の羞恥責、妊婦の責絵、姦通した男女の責絵、これらの絵は写実的に細かな部分まで克明に表現してありますので、発表出来ないものが多いので残念ですが、兎角アンバランスで、五体満足な絵を余り描かなくなりました。そんな奇妙な絵を好んで描く彼の気持を理解することに苦しみます。

私が「こんなおかしい現実離れした絵を描いて何処が面白いの？」などとからかいますと、彼は「現実離れしている所に絵の良さがある。そうでなかったら写真の方が余程良い」などと、むきになって彼独得の芸術論で言いわけしておりますが、私に芸術などわかりません。なるほど現実に考えられないようなことを絵によって求める彼の気持はわかりますけれど、私から見れば、あんなおかしい絵を描いて「これが人美Vだよ」などと云って良い気になっている彼の芸術論も余りあてにはなりません。

初めのうちは何か、いやらしい感じがしてなるべく見ないようにしておりましたが、最近そんな絵も見慣れてくると、妙な気持で好

ましく思うようになりますから不思議なものです。彼はそんな絵を描き溜めては、カメラにおさめて、プレーの時の写真と一緒に、私を助手にして現像するのが又楽しみようです。「今度お前が妊娠したら、こんな恰好にしてやるからな」などと私を、からかいながら写真を現像したり引伸ばしたりしている彼は単純で子供のようです。

最近、彼の恋人よりは益々ひどくなって、相変らず突飛なことをやって心配させたり出来そうもない難題を持ち掛けては私を困らせておりますが、今度ばかりは、そんな事に慣れている筈の私も、困るより呆れてしまいました。あんなおかしい絵が好きになったせい、彼は私に「もう少し太れよ」などとしつこく申します。私にとっては彼の一時的な気分から、そんなことを強いられることは全く災難です。私はそれ程痩せているとも思っておりませんし、又他人に比べて魅力（自分というのもおかしいのですが）に欠けているとも思っておりません。しかしどちらかというと余り太らない性質の私に、それ求めることはどうかと思います。

とにかく泣く子には勝てません。彼の意に添うよう栄養を取ったり、菓を飲んだりして

努力はしておりますけれど、今のところ余り変りばえはしないようです。もう二十年も経ったら、或は中年肥りで太るかもしれません、二十代の私にそれを望むのは無理ではないでしょうか。

○

同封しました写真は私の責められているところ、彼の描いた絵です。彼の整理棚からこっそりと選びだしたのですが、なにしろ絵などなにもわからない私がないしよで選んだものですから、良い絵か悪い絵かどうかわかりませんが、余り過激でないものを選べば間違ないと思い、選びだしたものです。

こんな文章を書いたことは、すべて彼には内密です。彼に知れたら、どんなお仕置を受けるかわかりませんが、それが又私にはスリルがあって楽しみです。写真は発表出来るものがありましたら、発表しても差支えございません。生れて初めて書いた長い文章で、さぞお読みづらいことだと思いますが、（文章の巧みとか表現のうまさ）は求めませんから実際に体験されたものを……という言葉につられて、ただたどしい筆をふるってみました。拙いところは、どうか編集部の手で直して下さるよう、お願いいたします。

贗作芳野眉美氏の優雅な生活

芳 野 眉 美

芳野眉美氏が、国宝「油滴天目茶碗」

の前でメイソウすることと、何をメイソウしたかという美的内容に就いて。

翌日、朝、じゃなかった、昼過ぎに起きると、

「博物館に行つて来る」

彼はオゴソカな顔をして、両側に裸で寝ている、寝た時はネグリジェを着ていたし、パンティも穿いていたハズだったのだけど、とにかく、スッパダカ（失礼）で寝ているマミとサクラに云った。

「ハクブツカン」

「そうだ博物館だ」

と彼はまた重々しく答えた。

「サクラも行く」

「マミも行く」

「いく、いく」

「いくわ」

その時、ベッドの下から、コマネズミのネボケたような声があった。

「またやってんの、好きだなあ」

「馬鹿野郎」

と彼はどなった。

「いく、いくって、博物館に行くんだ」

「ハクブツカン」

「そうだ、博物館」

「いく、いく、サクラ、いくう」

サクラが、鼻を鳴らして甘い声で云った。どうも、サクラは、この言葉が習慣になつてゐるらしい。

「車だ、コマネズミ」

「オベントウ、コマネズミ」

彼とマミが一度にベッドの下のコマネズミに叫んだ。それから、

「わたくしのパンティ、とって下さらないこと、コマネズミさん」

とサクラがコマネズミに丁寧になのんだ。

「脱いだとき、足で脱いだでしょう、だからあなたの顔の上に落ちちゃったのよ」

山高帽のかわりに、フリルの一杯ついたレースの飾りも美しい、真紅の（市川千鶴子夫人愛用の——七月号読者通信参照）パンティをかぶって寝ていたコマネズミは、落ち着いて、自分の顔からサクラの小さなパンティをとると、裏がえしだったので、わざわざひっくり返してから、ベッドの下から手をのばしてサクラに手渡した。

「あら」

とサクラが叫んだ。

「汚れているわ」

「穿きかえるのを忘れていたんだろう」

彼がサクラに云え、

「忘れっぽいからな」

サクラは、優雅なしとやかな二本の指でその真紅のパンティをつまむと、ふわりとベッドの下に落とした。

「これ洗っておいて下さらない、コマネズミさあーん」

ベッドの下のコマネズミは、落ち着いて、再び、サクラの汚れたパンティを、顔で受けた。

「早くしろ」

彼はイキリ立って、三人に叫んだ。

「夜になってしまおうぞ」

「夜って好きよ」

と、まだ、裸のままのサクラが、彼にささやきかけた。

「あなたを、抱けるから」

「マミも、好き」

と、これまた、まだ、裸のままのマミが、のんびりした声で彼に云った。

「夜も、昼も、ないくせに」

山高帽子をかぶり、よれよれの燕尾服の正装をしたコマネズミが、サクラのパンティを手でブラさげながら、誰となく云った。

「早くしろ」

彼はイラだって、また三人に叫んだ。

「朝になってしまおう」

まったく、話が先に進まないな。

さて、やっと、一人になった彼は、歯をみがこうと思ったが、歯みがきは生まれつきキライだから、キライなものはキライなのだから、いつものようにチューインガムですまして顔を洗おうと思ったが、顔を濡らすとタオルで拭かなければならないので、めんどくさいからやめて、パンティを穿こうと思ったけ

れど、ああ、あの野郎、裸で寝ていやがったな。裸で寝ていたのは、マミとサクラばかりだと思っていた。俺が今頃気がつくなんて、昨夜の神酒がまだキイテいる証拠だ。ウン。

あの野郎に早くパンティを穿かせなければ

話がますます進まない。彼は、パンティを穿

こうと思ったけれど（ここまですましたな）え

えと、思ったけれど、だ、コマネズミが洗っ

たばかりでまだ乾わいていないから、サクラ

が忘れていった唇をふいたガーゼで間に合わ

せ（ガーゼをパンティがわりにするのは、テ

クニックがいるんだよ。とにかく、生き物を

相手にしているんだから。ホント）たまにセ

イケツにしないといけないから、コマネズミ

がクリーニングに、だしておいてくれたけれ

ど、洗濯したんだかしらないんだかわからない

ようなブルージンを穿き、長袖の赤いセータ

ーじゃ暑いから、ちよっと考えて、考えなく

ても何も無いんだけど、バーのパーテンから

グイスでぶんどったチョッキを着て、冬物の

チョッキなんだけど、袖が無いだけ涼しいか

らオカシくないだろう。これで、できた。ま

ったく、彼の支度はくたびれる。

と、サクラがドアを開けた。いやになるな

あ、また事件だぞ。

「どう」

サクラは彼を見て艶然と笑った。

「なんだ、そのカッコ」

「ステキでしょう」

「それで、外を、歩く、つもりか」

「そうよ」

「そうよ、って」

サクラは、白い花のレース模様のチュールの、ショートジャケットと細身のスラックスを着て来たのだけど、そのまっ白なレースがサクラの黒い肌に映えて美しいのだけど、それはいいのだけど、網の目のようなレースではサクラは服の下に何も着てないし、サクラのちよつと突起した乳首や、すっかり何もかもみんな、全部見えてしまうのだ。

「それ、ネグリジェだろう」

「あら、そうかしら」

「それじゃ、ワイセツブツチンレツザイだ」

「チンレツ」

「なんでもいいから、オッパイとソコをかくせ」

サクラは、竹箆の中から、花模様のスカーフを二枚とりだすと、ブラジャーとパンティの代用にした。サクラは案外器用なんだ。

「フンドシをしているみたいだけど、ま、い

いだろう」

「オベントウつくってきた」

その時、サクラと同じ竹箆を持って部屋に入ってきたマミを見て、彼はホッとした。マミは、ちゃんとした服を着てきたからだ。

シンプルなピンクのブラウスも愛らしかったが、ちよつとまでよ、スカートが落下傘のようにやたらに横にひろがりすぎてはいませんか。歩くと、それだけで、マミの可愛い小さなお尻が見える。嗚呼。

「マミよ」

と彼はやさしく云った。

「おパンティ、穿いてないのか」

「そうよ」

とマミは、にっこりしながら彼に云った。

「穿いてないほうが、好きなんですよ」

とにかく、だ、彼とサクラとマミは、博物館に行くため、アパートの入口で、コマネズミが用意してくるはずになっている車を待った。

サクラが葉巻をつけて、彼の口にくわえさせた。

十分ほどして、コマネズミが、第一次世界大戦頃の映画に出て来るような、なんともすげえオンボロ車をヨタヨタと運転して来た。

「なんだそりゃ」

「外車」

コマネズミはすまして答えた。

「外車だと」

「スポーツカー」

「スポーツカー、まあ、ステキ」

サクラとマミが胸に手をあてて叫んだ、と書きたいところだけど、そんなジョウチョは二人に欠乏しているから、ただ、サクラとマミは、コマネズミのケツ（失礼）をひっぱたいて、叫んだのである。

「スポーツカー、ヤッホー」

「ヒスパノ・スイザ・アルフォンソ」

おごそかにコマネズミは答えた。

「アルフォンソ・XIII一九一二年」

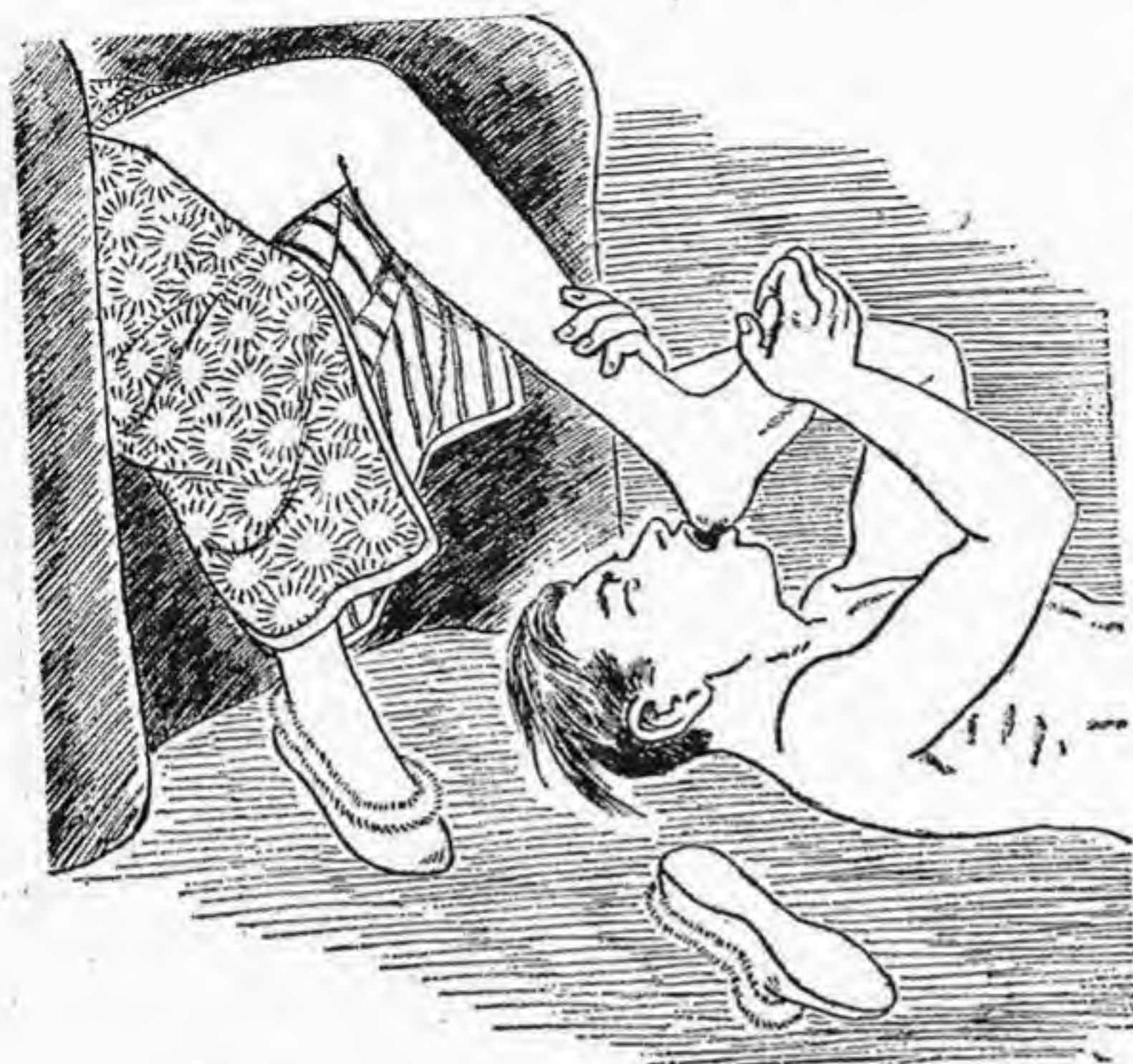
ホントカネエ。

——で、その「一九一二年」に四人は乗り込んだ。

国道に出ると、東京都御自慢の曲りくねった制限時速五十キロの高速道路を、五十キロでフットバしたいのだけど、お金がもったいないからやめて、それで、デコボコの国道を走ると、

「フットバセ」

と彼とサクラとマミは口々に叫んだ。



「この車の最大時速は」

ゆっくりとコマネズミが三人に云った。

「百キロ」

「百五十キロ」

とサクラとマミが同時に云った。

「二十キロ」

自転車がゆっくりと追い込めていく。

「俺は寝るよ」

と彼は運転手に云った。

「ウバグルマのほうが早えや」

それでも、だ、オールドカーのヒスパニーは、老齡にもかかわらず、途中なんの事故もなく、無事に、養老院じゃない、博物館（似たようなものだ）に着いたのである。

やっと、博物館に着いた。

ちよつとオトイレに（失礼）

チョッキとGパンとゴム草

履と首に巻いた赤いハンカチ

ーフ（これは、彼）と、山高

帽子と燕尾服と右が灰（本当

は白）で左が黒のシューズ、

（これは、コマネズミ）と、

肌もあらわな網の目のレース

のジャケットとスラックスと

二枚のスカーフと銀色のサン

ダル（これは、サクラ）と、

パッパッとまくれあがるとお

尻が丸見えの落下傘スタイル

のスカートとブラウスと金色

のサンダル（これは、マミ）

の、どう考えても博物館とエ

ンのない四人が、大日本帝国

博物館にダダッと入って行ったのだから、おしとやかな観覧客は驚いただろうけれど、そんなことはかまわない。

彼は、すぐさま、左に折れて、仏像の部屋をすたすた通りぬけ、陶器の部屋にまっすぐに行った。彼は、部屋中をちょこちょこかけずりまわり、何やらさがしていたけれどあるチツポケな陶器の前で、

「これだ」

と叫んだ。そこには、

「国宝、油滴天目」

とあった。そして、彼は動かなくなった。

「つまらない」

とマミがサクラに云った。

「動物園じゃないのね」

「オベントウたべようか」

とサクラがマミに云った。

そういうえば、昼に起きてから、まだ何もたべていないのだ。

「そうしましょう」

「芝生に行こう」

サクラとマミは、なんだかわからないけれど、ヘンなお茶碗にカンシンしている二人の男をおいて、元気に外に飛び出して行った。

コマネコミも、国宝だからといって、別に

その陶器にカンジいつているわけではなかったが、彼があまりにもカンジいつているので、そこに一緒にいて、カンジいつていなければ悪いと思ったから、サクラとマミと一緒にオベントウをたべたかったのだけど、そこにいたのである。

居たのだが、いつまでたっても彼が動かないので、シビレを切らしたコマネズミは、やはり、オカシナ茶碗を見ているより、オナカを一杯にしたほうが利口だと、足音をしのばせて彼から離れて行った。

サクラとマミの竹籠の中には、コマネズミの大好きなヤキイモはなかったけれど、ヤキイモばかりたべていると、へ（失礼）がクサイから、今日は、生のラッキョ入りサンドイッチをたべることにした。

サンドイッチに味噌をつけ、生ラッキョを並べたものだが、パンとラッキョと味噌で、全部で百円買えば、四人分あるから、経済的にも適しているのである。

サクラとマミとコマネズミが、ラッキョをバリバリやっている図は、まるで動物園のオサルサンだけど、そんなことはかまわない。「彼は」

とサクラが指についた味噌をペロリと舐め

ながら、コマネズミに云った。

「彼は」

コマネズミは、マミの口のまわりから頬にかけて、ベトベトになっている味噌を、丁寧にふいてやりながら、ホントは口で舐めてやりたかったのだけど、胸がドキドキして、やっぱりできないから、ハンカチでふいてやって、重々しく答えた。

「お茶碗の前で、メイソウしている」

「哲学者ね」

とサクラがにっこりして云った。

「彼は、美学者だ」

とコマネズミが、知ったかぶりをして云った。油滴天目の茶碗は、宋のやきものの名器で、天目の黒い肌の中に、美しい油滴といわれる紋様が浮かびあがっている。

この油滴天目を、今日、再現させる陶芸家はいないといわれる。どうして、それが作られたのか、わからないのだ。

油滴茶碗は神秘的であり、美的価値がそこにある。

三人ですっかり籠の中を空にした頃、やっと、彼が外に姿を現した。

「腹がへった」

と彼は云った。

「何もないわ」

とマミがのどかな声で答えた。

「みんな、たべちゃった。」

「何をメイソウしていたの」

サクラが彼にきいた。

「うむ」

彼は、哲学者らしく答えた。

「国宝の油滴天目で、マミとサクラのオシッコを飲んでみたいと思った」

「――」

「世の中に、こんなゼイタクはあるまいよ」

H 芳野眉美氏の頭の中には、食糞餓鬼が

住み込んでいるらしいということと、

彼の宗教心に就いて。

それからしばらくの間、オナカが一杯の三人と、腹がへった一人は、博物館の裏庭の芝生に寝たり、坐ったり、おしゃべりをしたりしていたのだが、腹がへると妙な幻想にとらわれるもので、すぐそこに、釈迦如来だとか如意輪観音だとか、千手観音だとか、十二神像だとか、種々な仏像がニョキニョキ立っているせいでもなかるうが、彼は、自分の頭の中に、食糞餓鬼が、なんとなく住んでいるよ

うに思えてならないのだ。

食糞餓鬼は、鎌倉時代の絵巻、曹源寺本の「餓鬼草紙」にあり、飢餓のために、女や子供の排便中の糞を、なまなましく食べあさる餓鬼をいう。

これらの餓鬼は、高僧の説教をきいて、救いの道に入るといふものであり、六道輪廻の仏教思想をといた絵巻である。

彼の場合は、腹がへったから飢餓感に悩まされる、という単純なものではない。

仙台藩の医官、庄司玄啓の著いた「天保荒侵伝」の中に、山中で人間を食っている図があるけれど、いくら、竹に花が咲き、竹の花は天候不順のときや、干ばつのときに咲きやすいそうで、竹の花が咲くと凶作という俗説があり、今年が天保の大飢饉によく似ているそうだけど、現代は、人間を食うほど、飢餓に悩まされることはあるまい。

彼の飢餓感は、より、精神的なもので、なんとなく、飢餓感を感じるけれど、その理由がわからないという、やっかいなものなのである。

いつから住みついたか知らないけれど、彼の頭の中に食糞餓鬼が居て、「サクラの……をたべろ」

とか、

「お前の食事は、ママの……でたくさんだ」とか、彼に命令しているのである。

いくら命令されたって、現実の話、命令されるようにはいかないよ。

彼の心の中に、宗教心が芽ばえて、浄瑠璃寺の吉祥天女に救いを求めたのだけど、女性美の典型ともいうべき吉祥天女の豊満なほほや、小さく、くくれたあごの肉感的な美しさに、王朝美人はかくやと思ひ、そのみづみづしさにあこがれ、惚れて、旗美也子夫人（七月号——いちぢくの実を持つ女参照）ではなけれど、吉祥天女の懷石膳をたべたくなってしまうのだから、宗教心なんてあてにならないね。

気がつく、いつのまにかサクラがいないので、ママに聞くと、

「ちょっと、遊んで来るって」

「一人でか」

「二人よ」

「誰と」

「知らない男の人」

「知らない男」

「イイ男」

その時、サクラが数多くの視線に迎えられ

て、博物館に入ってきた。網の目のようなレ

ースのジャケットとストラックスでは、まったく、人の眼につきやすい。

「早かったでショ」

「何処に行ってたんだ」

「下のホテル」

「ホテル」

サクラはスカートの代用ブラジャーから、千円札を十枚だすと、にこにこしながら彼に見せつけた。

「お肉、たべに行かない」

「運転手」

と彼は昼寝しているコマネズミに叫んだ。

「あの男ね」

とサクラがママに云った。

「サクラの裸を見たらね」

くすつとサクラが笑った。

「すぐ、でちゃったのよ」

「キスしたのか」

と彼がサクラにきいた。

「食いついてきたわ」

「さぞ、ラッキョクさかったでしょうね」

「夢中だから、気がつかないわよ」

さて、オールドカー、アルフォンソさんに乗り込んだ四人は、朝鮮料理の前でストップ

し、コマネズミやサクラやマミは、ロースやカルビやレバーを焼きながらたべただけで彼は、焼くのがめんどくさいから、なま肉のオサシミを注文して、ビールを飲みながら五人前たいらげた。よく食う奴だ。

I 「エルチョコクロ」をジャズにアレンジしたのが「キスオブファイヤー」だが「エルチョコクロ」の原題は「とうもろこし」で、どうして「とうもろこし」が「火の接吻」になってしまったのか世の中は不思議なことばかりだということ、
「とうもろこし」は豆がタクサンあるから、夜の豆は多い方がいいから、それで「火の接吻」になったのかと、芳野眉美氏がコマネズミに相談することと、相談されたコマネズミがアキレテ、あまりにも大きく口を開けたので、アゴがはずれてしまったということ。

彼は、オナカが一杯になっても、ロクなこととは考えない。

J 芳野眉美氏が、アングルの「オダリス

ク」に惚れること、このことは、その歴史的学術的意義とはなんの関係もない。

食事が終ると、さて、これから何をしようか、ということになった。せっかく四人集ったのだから、いつでも、四人は集っているのだけど、四人で面白い遊びをしなければつまらない。彼は、新しい女の子をダッコしたいのだけど、サクラとマミが居ては、許してくれそうもないし、道徳的なコマネズミがそれ以上にうるさいから、何も云わないでダメでいた。どうせ、サクラの云う通りになってしまうのだ。大蔵大臣には弱いよ。

とにかく、彼を除いて、三人でガヤガヤ云っていたが、突然、

「海に行こう」とサクラがストンキョウな声をあげて、巨頭会談は無事終了した。スポンサーの鶴の一声である。

「海」

彼は興味無きように云った。

「夜だよ、今は」

「夜の海って、すばらしいわ」

とサクラが祈るように云った。

「夜の海は詩だわ」

「ねえ」

マミがサクラをそそのかすように云った。

「海岸でキャンプしようよ」

「それがいい」

とコマネズミも賛成した。

「朝、泳ごう」

「決定」

サクラが裁判官のように重々しく叫んだ。

「準備しよう」

サクラとマミとコマネズミが、いそがしうに家に飛んで返ったのに、彼だけは、ビヤホルのテーブルに置き去られた。もっとも部屋にもどったって、海パンもありやしないのだから、帰る必要もなかったのだ。三人が準備したものを、食い使い寝れば、彼の存在価値は認められるのである。大ジョッキ(二百五十円だよ)をかかえながら、女の子のコンボを、彼はうっとり聞き惚れていた。女の子であれば、彼は、誰でもいいのである。

さて、そうこうしているうちに、話は早く進めなければならぬから、四人は、オールドカーのヒスパニー・スイザ・アルフォンソ・XIII・一九一二年君で出発した。テントと、毛布と、小型冷蔵庫と、食糧を詰め込んだバスケットと、飲料水の大瓶と、ゴムボートと

よくもまあオールドカーにのったものである。だからモノモチはキライなんだと、彼は一人でブツブツ云ったのだが、三人に聞えないように、そつと云ったのは勿論である。

走りだしてから、

「何処の海岸に行くの」

と彼は運転手に質問した。

「三浦半島」

「葉山か逗子だと思った」

「あそこは海がキタナイのよ」

とサクラが運転手に代って答えた。

「それに、コンデイルわ」

「静かな海がいいわ」

とマミが、マミらしからぬことを云った。

マミはごみごみした江之島や鎌倉しか知らないはずである。

「キャンプするのなら三浦半島」

「日本海かい」

「馬鹿ね、太平洋よ」

どうも、彼は、地理オンチでいけない。オンチなのは地理ばかりではない。彼は、ヒューズが飛んでもオオサワギするし、ステレオの三十三回転と四十五回転がわからないし、だから、ダンスなんてテンデだめだし、水を見るとガタガタふるえてくるし（だから、彼

は海に行きたくはなかったのだ）故に、彼は泳げないし、泳げないから海パン持っていないし、モノは順番にいつている。

彼のデキルことといったら、何も無いね。

つまらねえ男を主人公にしちゃったな。

「この車、二十キロでしたね」

彼はまた運転手に質問した。

「いつ、その、目的の海岸に着きますか」

「さあ」

「そうですか」

彼は、サクラの膝の上に顔を埋めると、

「お先に、寝かせていただきます」

少々飲みすぎて、酔っていたから、すぐ、軽い寝息をたて始めた。サクラは、その時もまだパンティを穿いていなかったで、彼のスウスウという寝息で、ちよつとくすぐったくて、コウフンしたのだけど、彼の髪の毛をやさしく愛撫しながら、恋人の可愛い寝顔をうっとり眺めていた、（経験者じゃないとこんなフウには書けないよ）

とにかく、一九一二年君は走っているのだし、走っていれば、いつかは目的地に着くのだし、着けばいいので、夜が明けようと、昼過ぎになろうと、そんなことはかまわない。そのうちに、マミもサクラも寝てしまった

ので、コマネズミも寝ようと思ったのだけまだ心中だけはしたくないので、寝ることはあきらめた。忠実なるコマネズミは、夜通し走ることになる。全く、友情の厚い男だ。

朝、眼がさめてみると、テントが砂浜の端の草の上にチャンと張られていて、ハンゴウで温かい御飯がたけているのには驚いた。三人はテントの中で寝たらしいのだが、彼だけはヒスパノスイザさんと一緒に寝ていたらしい。まったく、寝ると、二十四時間ぶっ続けて寝る癖があるから、月日や曜日や時間の觀念がゼンゼン無く、今年は昭和のナン年なんだとか、十二月だったとか、ホントにくだらぬことばかり聞くから、彼はおとなしく寝ていたほうが、ミンナから喜ばれるのである。

砂浜に人がたかってワイワイ云っているから、何事が始まったのだろうと近づくと、彼は頭をかかえて、そこにしゃがみ込んでしまった。

「なんということだ」

海から上がって来たサクラが、ナンニモ、着てないのである。そう、スッパダカ。

砂浜に集った男たちのピュウピュウという口笛と喚声の間を、全裸のサクラは、ユウゼ

ンと、ウインクしながら、彼のところに来ると

「ダーリン」

と抱きついた。そして、サクラは、彼に熱い熱い接吻をしたのである。

「ウヘ、ショッペエ」

それよりもだ、保安課の、コワイおじさまに見つかったら、どういうことになるのだろう。

「水着はどうした」

と彼はどなった。

「着てるわよ」

「着てる」

そこで、彼は、抱いているサクラをしみじみ見たのだけど、水着など、そのカケラすら何処にも無いのである。

「着てねえじゃねえか」

「あら」

とサクラが彼の胸に顔を埋めた。

「波で、脱げちゃったんだ。はずかしい」

「コマネズミが、あわてて、代りの水着を持って飛んで来た。サクラは極小のビキニを着て、朝飯前にスイと泳ぎに行ったらしい。」

さて、その代りの水着なんだけど、ビキニはビキニでも、ビーズのビキニで、乳首はま

る見えだし、オヘソどころか、ビーズの隙間から、大へんなところまで、見えてしまうので、ストリップの舞台衣裳じゃあるまいし、もう少しマシな奴はないのかと、波がサクラに聞くと、まだ、あと、二枚ある、というから、それを持って来いと、彼はコマネズミに命じた。

また、その二枚の水着なんだけど、一枚は貴族的な、高価な総レースの水着で、豪華ですばらしく、彼もウットリしてしまって、こんな恋人を持って俺は幸福だと、鼻の下をチーリップのようにのばしたのだけど、レースの目があらずで、全裸よりセクシーで、朝だというのに、彼はモヤモヤして、イッチョヤルカ、などと神もおそれぬ言葉をサクラにささやきかけると、サクラもソノコトが、飯より好きだから、朝飯前にイッパツヤルカと、二人の意見が一致した。

そこで、二人はマミとコマネズミをテントから追い出したのである。もう一枚の水着の話はあととする。ちょっと休憩。

処女保存会の会長であるコマネズミは、マミの処女さえ、自称処女ボクメツ運動の会長たる彼の魔手より守ればいいので、彼とサクラが、朝から、昼であろうと砂浜であろうと

車の中であろうと、人が見ていようと、偉大なる宗教的儀式にふけたところで、そんなことは問題外なのだが、コマネズミが気になるのは、彼がやたらに、マミのジュース、この奇巧的飲物を、直接に、水道の蛇口に口をつけて水を飲む様に……しようとするケシカラン行為で、サクラだけにしておけば、イイ奴なんだがと、いつでも思っているのだが、とにかく、彼は、マミの処女を守る条件に、マミのジュースを飲むと宣言しているの、いくらコマネズミがマミに恋をしていても、アワビのカタオモイなのだけど、どうしようもないのだ。

いくら待っても、彼とサクラがテントから出て来ないので、コマネズミとマミは、クジラ肉の牛肉のカンヅメをあけて、温かいハングウの御飯をたべ始めた。

さて、そこでだ、マミは、食後にならずオトイレに行くというヤツカイな癖があるのだけど、残念なことに、この海岸には有料トイレは無いのである。男なら、ソコイラで、ネ、岩陰とか、島の中とか、よくやってるじゃないの。アレ、気持がイイね。澄み渡った青天井の下で、塩の香もこうばしく、波の音に合わせて、さ。太陽が強烈だからすぐ乾燥

する。

「おいそがしいところを失礼します」

とマミがテントの中の彼に云った。

「マミ、おトイレなんだけど」

「ああ」

とテントの中で彼の、消え入りそうな、息も、絶えだえな、苦しそうな声がした。

「マミのおトイレ」

とマミは叫んだ。

「早く」

「おトイレって、俺かい」

彼の首が、テントから出て、マミにたずねた。

「早くウ」

「今、手をはなせないんだけどな」

「手なんかいらわないわ」

「いらわないわ、って云ったって」

「どうぞ、そのまま」

「そのまま」

マミは、テントから亀の首のように突き出た彼の首を、空のほうに廻すと、彼の顔の上にしゃがんだのである。コマネズミがあわてて、毛布で囲を作った。

「ちょっと待ってくれ」

驚いて、彼が叫んだ。マミの水着は、花模

様のおとなしいセパレーツだから、ひょいと

脱げば、それでいいのだ。

「ジュースなんだろう」

マミが首を横に振った。

「違う」

「うん」

「うん、じゃないよ」

あわてて飛び起きようとしたけれど、彼の下半身は終身刑だったし、まっ白なお尻が、彼の顔にチンマリと坐っていたし、あわてたってもうオソイよ。

あつ、という間に、彼の食道を、マミの朝飯の残りが通過して、胃の中に落下した。

それは、ほんの小さな、小指ぐらいの、なんでもないものだったのだけど、彼は、それこそ、クジラ一匹、丸ごと食ったような錯覚にとらわれて、失神したのである。気の弱い男。そんなものだ。

海水をぶっかけられて、彼が失神からさめたのは、それから、二十三秒たってからである。

サクラとマミとコマネズミが海で泳いでいても、彼は生まれてこのかた水に沈んだことはあっても、決して浮いたことはないのだから、テントの中でゴロゴロしていたのだが、

レースの水着はあまりにもセクシーだからと云って、もう一枚の水着をサクラに着せたのはよかったのだけど、サクラの肉体にヒモが巻きついていてだけのようなビキニで、角度によってはまる見えもいところで、彼は、他の男たちと同様、サクラの肉体ばかり見惚れていた。海岸で、見知らぬ男共に取り囲まれているサクラを見ていると、俺の彼女なんだぞと自慢したくなるから、それでも、あまりにも露出的なサクラには困ったけれど、露出症はオール女性がすべてソウなんだから、サクラばかりじゃないし、まあいいだろう。「でもやっぱり、ここはカンヌじゃねえぞ」

と彼は一人でブツブツ云っていた。今年のカンヌの映画祭も、無名タレントの裸の売り込みがすさまじかったらしい。カンヌに行ってみたいよ、まったく。

砂浜に横たわって、もともと黒い肌を、まっ黒に焼いているサクラを見ていると、どういうわけか、彼はアングルの「オダリスク」を思い出した。

ドミニック・アングル。フランスの国宝。その写真的な、巧緻なデッサン。端麗、典雅。実感のこもった生き生きとした美しさの再現。古典派絵画をイタリアからフランスに

持ち帰った巨匠。十九世紀の近代絵画は、アングルより始まる。「オダリスク」の、この婦人裸体像の比類の無い、肉体の柔軟な感覚、細やかな官能の美。かすかな柔らかな光線の中で、うずくような官能が、彼を「オダリスク」に惚れさせてしまうのだ。

サクラと「オダリスク」では、比較にもならないけれど、砂浜に横たわったサクラが、偶然にも、「オダリスク」と同じ構図をしていたので、その瞬間、彼は「オダリスク」を思い浮かべたものである。

「オダリスク」の腰のあたりを見てごらん。あまりにも美しすぎて、神秘的で、見ているうちにイヤになってくるよ。こんなに麗しく

死にたくなるような官能にあふれた裸体が、この世の中にあるものだろうか。

彼は、かくして「オダリスク」に恋をしたのである。「オダリスク」の体内を通過したものなら、夢心地のうちに、彼の食道を落下し、彼の体内に沈没していくことだろう。それが、たとえば、なんであろうとも。

K 大思想小説を書くより マミとサクラを両側に抱いて、実存主義的快楽にフケルのが、意志薄弱な芳野眉美氏にはテキしている、ということと、かわつて、コマネズミが「ヤキイモとへの関係」という大思想小説を、ベッドの下

で書き始めること。しかし、コマネズミは青木昆陽となんの関係もない。

青木昆陽。將軍吉宗の書物奉行。さつまいもを普及して甘藷先生と呼ばれた。蘭学者の先駆。墓は東京目黒に有る。

なんで、ここで青木昆陽がでてこなければならぬんだよ。

ああみんな、寝ちゃったの。海はクタビレルからな。俺も寝よう。

オヤスミナサイ。

よかったね、オゲレツな話が、やっと終わって。

(終)

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」
〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号(美3)を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえ

かなわぬ稀少な文献となっております。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思ひます。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するためにも、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) V

(一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
(二)、グラマーの縄目……………長野 良子
むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
(三)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
(四)、鼻をいためつける……………長野 良子
指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
(五)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
(六)、黒と白の対照……………大塚 啓子
白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
(七)、責めに疲れて……………大塚 啓子
責め抜かれてぐったりとなった女体。
(八)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
(九)、襲いくる魔手……………新井マリ子
恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。

(一)、首締め縛り……………新井マリ子
のびやかな肢体が疼れんする首絞め姿態。
(二)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
開股しばかりの上に非情の猿ぐつわが。
(三)、開股棒しばかり……………新井マリ子
革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
(四)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
(五)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
責められて急所の痛さに思わず呻めく。
(六)、首縄と足縄……………大塚 啓子
首に掛った縄と足の縄が女体を変える。
(七)、縄に狂う……………大塚 啓子
悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
(八)、足首の縄目……………大塚 啓子
反りかえった足の指が縄目に可愛い。
(九)、縄による姿態の変転……………大塚 啓子
二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
(一〇)、緊縛美の誇示……………長野 良子
誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
(一一)、美しき肢足……………長野 良子
投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
(一二)、全裸緊縛の羞ら……………長野 良子
はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
(一三)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
両手両足を縛られて一本棒に晒らされる。
(一四)、けがされぬもの……………五月亜紀子
清純な美しさ、この全身に漂っている。
(一五)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
(一六)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
(一七)、噛まれた猿轡……………大塚 啓子
珍しく完全に噛まれた息苦しい猿轡。
(一八)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。

(一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
(二)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
(三)、棒責めの序曲……………新井マリ子
両足首の両端に縛られて、さて、
(四)、答打ちのポーズ……………新井マリ子
さあ、打って、とながし目の艶なこと。
(五)、素晴らしい美身……………長野 良子
輝くような美しい裸身もあらわに。
(六)、ポリウムを縛る……………長野 良子
縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
(七)、むくれた双丘……………長野 良子
情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
(八)、開股しばかりの表情……………大塚 啓子
開股しばかりになった女の顔のアップ。
(九)、開股しばかりの全貌……………大塚 啓子
両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
(一〇)、伸ばされた足の表情……………大塚 啓子
ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
(一一)、開股ざらしの表情……………大塚 啓子
放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
(一二)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
押し入った強盗は女を縛って転した。
(一三)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
自宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
(一四)、炊事場の嗜虐場面……………新井マリ子
台所で縛られていたぶられるシーン。
(一五)、美しきトルソ……………大塚 啓子
胸、臍、ウェストが縄によって捕捉。
(一六)、遅ましき臀部……………大塚 啓子
くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
(一七)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
後手高小手の美しさは素晴らしい。
(一八)、ビニール・コード……………大塚 啓子
柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。



△読者原稿▽……………

殺人小説のすすめ

黒田 寿

またまた殺人小説を御紹介します。今回もまた空想が入りまじり、実際の作品とはかなり違ったものもあることを、あらかじめおことわりします。お忘れの方も多いでしょうから念のため。

一、続女忍者の最期

山田風太郎忍法全集については、さきに書きましたが、その後も続刊され、他の出版社からもいろいろ出ています。どうみても山田氏は我が同志としか思われません。そのいくつかを紹介します。

大名の家にしのびこんだ女忍者は、足裏を

ピタリと天井裏にはりつけ逆さにぶらさがっている。しかし不運にも発見され、一刀のもとに、その細首を刎ねられ、血汐がどっと噴きあがる。いや、正確に言えば滝となつてふりそそいだ。

しばらくそのままの姿勢を保っていたが、やがて力つきてドサリと落下する……。

翌日この大名家に將軍が来訪し、好物の西瓜が供される。將軍の前で二つに割ってみると、表面には傷一つついていなかったのに、真赤な実ならぬ美女の生首があらわれた。この生首こそ昨日殺された女忍者のそれではないか。

將軍は怒って席を立ち、まもなくこの大名家は廃絶となったが、私なら生首は喜んで持ち帰り、加増してやるところだ。

敵の両腕を斬り落して一安心したのが運のつき。敵は足指で大刀をはさむと鋭い一撃を加え、哀れ美女の首は笑ったまま、黒髪を長く横にひきながらとんだ。そのあまりにも美しい死顔にみとれた敵は、思わず生首を抱きあげ愛撫するが、死後の一念をこめた恐ろしい反撃をうけ倒される。全く忍者同志の争いは油断できない。生首マニヤは御用心ください。

これほどの女忍者でも八人も登場すれば、

ろくな働きをせずに死ぬものもある。敵が手に持つ刃の影が夕陽をうけて長くのびた。その影が軽く頸すじにふれたと思ったら、彼女の首は胴体からはなれてしまった。

一緒に旅をし共に宿をとる二人の女忍者。その相手が敵と知ったのは咽喉笛を刺された時で、次の瞬間、首をとられるという呑気な話もある。

首を斬られてもまた生えてくる忍者。しかし敵もさるもの、やっと生えてきたところをみはからって、その細首をキューと締めつける。死体を焼いて灰となつては、もはやいたしかたない。

切腹する話もある。同僚から恥ずかしめをうけ、一気に左脇腹から右まで切り裂き、返す刀で喉を刺す美女。戦い敗れたとみるや、大刀逆手に自らの首を掻きおとす乙女。更に自分の心臓を停止させる術を知っている娘までがあらわれる。

忍者以外の美女たちは専ら殺され役だ。二人の女の首を刎ね、これをべつべつにつなぎあわせたら、全く性質の変わった女に生れかわった。この二人が主人公となる話。

この奇怪な術を知っている忍者は、物語のなかである女の首と、もう一人の女の脚が必

要になる。そこでこの二人を胴体からチョン斬り、必要とする上半身と下半身をつなぐ。残った方はいらないからとすててしまう。しかもつながれて生き返った方も仕事が終ればハイ、ソレマデヨと片付けられる。

主役の二人も、魔女となった方は遂に悪運つきで首を刎ねられ、例の忍者も死んでいるので再生できず、空しく獄門へ梟けられる。善女の方も背に矢をうけて、彼氏の腕のなかで息絶える。

別な作品では話の始めに大虐殺がある。槍で二、三人芋刺しにしたままぐるぐるまわすと、遠心力のため死体と変った女達はどこかにふっとんでしまった。

髪の毛で作ったムチ様のもので撲ると、これが刃物以上の切れ味で、首も四肢もバラバラになってしまう。

四尺余の大太刀で脳天から股のつけねまでバラリと唐竹割。次なる女は逆に股から脳天まで薙がれ、三人目は頭から、かくして六人の美女は十二片の肉塊となる。

残った何人かは更に運が悪く、ライオンみたいな猛犬のために食い殺される。

幸い難を免かれた七人の美女がこの仇を討つため修業する。ラスト近くいずれも捕われ

て逆さハリツケになる寸前、残念にも(?)無事に救われてめでたしめでたし。

現代ものでの傑作に、戦争末期「食通」気どりの何人かが集って最後の晩餐をする話がある。

どうせ非国民ばかりだ。ニュースならぬ「報道」などそっちのけ、大平楽を並べたのちいよいよ夕食の時間。

並んだ料理の材料は牛か豚か、それとも羊か鶏かはわからぬが、

胸肉と腿肉のステーキ

腎臓の串刺焼

トリップと称する胃や腸のごった煮

肝臓のトマト煮

舌のブドウ酒煮

セルボと称する大脳の刺身

つまり、こちとらジンミンの愛好するヤキトリやホルモン鍋と、あまり変りないと思うのだが、一番美味なのは牝猿の大陰唇ということになる。

宴の終ごろ、ふと一人が気がついた。仲間のおこがれのまとであった美女の姿がいつのまにか消えているのに……。

山田氏は一般ジンミンが好きだ。同じ戦争

シリーズに、無人島に漂着した将校と水兵、看護婦と慰安婦の話がある。誰が誰をいじめるかは想像がつくでしょう。

ところが、いざ米軍が上陸してみると、将校は看護婦をつれてサッサと降伏し、残された水兵の指揮のもと、慰安婦たちが銃をとって奮戦する。さすがの私もこの様な話には、彼女たちの首をとるような空想の入る余地はない。

“女死刑囚”というそのものズバリの題名。彼女の履歴その他には何の興味もないが、ラストの二ページがすごい。刑場に歩み十三段階をすかにのぼる美女。やがてその首にロープがかけられ、踏板がはずれると同時にその身体が宙に浮く。

十三分間の生と死との争いが、ことこまやかに画かれ、最後検死官の“絶命しました”の一言で終る。

奇想小説となると私の自分勝手な空想がむやみに加わり、わけのわからぬこととなる。

今から百年もたてば、戦争といっても核兵器やナパーム弾を使う野蠻人はなくなるそうだ。勝負はすべて代表者同志の戦いで決定される。

日本代表として昭和時代の山本富士子みた

いな美女がえらばれ、敵国の代表選手とアフリカ砂漠で決闘となる。この試合は宇宙衛星によって全世界にテレビ中継される。

武運つたなく、我が代表は敗れざる。画面にうつる無念そうな美女の生首。その遺体は遂に帰らなかった。なぜなら相手は食人種だったから。

吉永小百合みたいな清純可憐の処女が、その実驚くべき殺人者であったお話。

彼女は喜喜として親友を背後から刺し、その生首を集める趣味をもっている。日頃の言行があまりにも無邪気なので、誰もそれに気がつかない。

しかし遂に一枚上の相手のために、硫酸の池に追い落され、悲鳴をあげながら足首より膝、股から下腹、更に乳房とドロドロにとけてゆく。残った首がコレクションとして新殺人者の手におちるのは言うまでもない。

(こんなことは書いてないで！)

二、迷探偵萬歳

江戸川乱歩もごひいきの一人。

ご存じ明智三郎君は脅迫をうけた一家より二人の娘の護衛を頼まれるが、早速姉の方が誘拐されてしまう。

間もなく彼は近くの見世物“八幡の薮知らず”にこいと無名の手紙をうけとる。入ってみると無惨やハリツケになった女、獄門台に晒された女、絞首刑になった女と、胆だめしの人形がズラリ並んでいる。

終点の座敷には一糸まとわぬ美女が寝かされていた。これこそ姉嬢の死体ではないか。

明智君は、このあと妹の方までさらわれてしまい、その死体は水族館の水槽のなかに投げこまれていた。これでは犯人を捕えてもなんにもならない。

ほかの話でも護衛すべき女たちは次々と殺される。虎に何一つ残さず食い殺された娘。木箱に花と共におさまって送りとどいた踊り子。コンクリートにぬりこめられた人妻。同じく石膏像になって学校に売られたBG。剥製人形と化した女子大生。自宅玄関前に生首となって帰ってきた乙女。

大富豪の一人娘にも脅迫状が来た。常に身辺をはなれぬようにと頼まれるが、風呂のなかまでは入れない。そこで忠実なる女中兼遊び相手の娘が見張りを買ってでるが、これが犯人の手先だからたまらない。間もなく富豪の御令嬢は首なし死体となってタイルの上に横たわる。

女中も逃場に困った末、近くの沼にとびこみ、竹筒を口にくわえて底にもぐって追手をやりすごそうとするが、明智君もさすがにこれを発見、舟をやとって竹筒の先をふさいでしまう。かくしてグツタリとなって浮きあがった美少女を見事捕えたかに見えたが、なんと船頭が真犯人ときて、この少女の口は簡単に永久に閉ざされる。

どうみても明智君は名探偵とは思われないが、私にとってはこの方が有難い。それでも

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交換は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

数十人の美女を無事に救いだす話もあるのでオヤオヤと思っていると、追いつめられた犯人はこの女たちに向って、自分に殉死するものはいないかと叫ぶ。三人がそれに答えて犯人の手で首を刎ねられ、彼は三つの生首を抱いたまま塔からとびおりる。

こちらでクイズをだしましょう（解答は最後にあります）。

その部屋に犯人がいると言われ、おそろおそろカーテンのすき間からのぞきこんだ幸代

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

は、一瞬たちすくんだ。

部屋の正面にも、カーテンがあつて、その向うから、一人の若く美しい女が顔をだしたので。

犯人は女だと言った。するとこの美女が犯人なのかしら。

しばらくみつめていた幸代は、やっとそれが鏡にうつった自分の姿と氣附いてホッとしたが、次の瞬間世にも恐ろしい表情と共に、絹を裂くような悲鳴をあげて、その場から逃げだした（何故でしょう：問1）。

サーカスの見世物に、箱のなかに美女をおしこんで四方から短剣をつき刺す芸がある。なかでは大あばれするが、やがて動かなくなつてしまったのをみはからい、蓋をあげて血の滴る生首を掻きとって獄門台にのせる。すると、その美女の生首がニッコリ笑つて挨拶をする。

千秋楽の日。演技は、まさに真に迫っていた。箱のなかからあがる悲鳴は、この世のものとは思われぬほど。あまり熱演しすぎたため、獄門台の生首は、挨拶ができぬほどだった。このサーカスは、この日限り解散しました（何故でしょう：問2）。

島田一男、横溝正史、角田喜久雄の諸氏も

よく美女を殺してくれます。これらを私が勝手に脚色すると更に血汐の量は増すのです。

浴槽のなかに、ほどよくふやけた女性の死体がプカリと浮いている。一目で死体とわかるのは首がないためだ。

上をむいたまま手をのばし、足はいくらかひろげて……首はとみると三面鏡の上にチョコナンとのおつてゐる。

鏡には正面と左右の横顔がうつっている。

若く美しい女性のそれが、ちよっと顔をしかめ、舌の先がチラリと口からはみでているが苦痛はあまりなかったらしい。

むしろ「ああ、いいお湯だ」とウットリしているところ、首だけポロツとはずれて鏡の前にとんでいったよう……。

これこそ殺人の楽しさでしょう。美女の首が「はずれた」「もげた」「チョン斬った」と軽く片附けるのは良い気持ですね。

スパイ同志の争いに登場する女たち。全員が活躍したのでは、話がいつまでも終らぬから、一人は軽く首を絞められあつてなく死んでしまふ。端役の悲しさをはかなんだのか、口をポカンとあけたまま……。

相手を誘惑しようとして失敗、下腹部に拳銃をブチこまれ、朽木を倒すようにひっくり

かえり、病院にはこぼれたものの「死にたくない」を絶叫しつつ死んでゆく美女。

この探偵も「迷」の方だ。自分の恋人が犯人とは知らない。やっと気がついた時、彼女は高い塔のてっぺんに爆薬を持っていたのぼり、別れの言葉をのこして四散する。

江戸一番の美女が、思わぬ罪をきて哀れにも獄門となる話。勿論その前は黒山の人出だが、いつのまにか晒し首が消えてしまふ。犯人は娘の恋人で、生首を風呂敷につつんで逃げるが捕えられ、彼女の首は再び獄門に梟けられるが、よく見れば別人ではないか。

二つの生首と二つの胴体が入りまじり、お家騒動にまで発展するが、そんなことはどうでもよい。美女の生首を俵につめ、棒をさしこんで二人でかつぐ姿を想像するとゾクゾクしてくる。

女同志の短剣を握っての決闘で、すでに数カ所の痛手を負っていた王女は、最後の強敵を迎えるが、刃をまじえる寸前に力つきて絶命、永遠の謎を秘めたまま美しい首を落されてしまふ。

あるホテルの四号室か十三号室に泊った美女は、翌朝、必ず素っ裸にむかれて死んでいく。この話はちよっとさしひかえます。

コールドタールの樽に漬けられた美女は、腐らないから便利だ。英国ではよく絞首刑に処した死体にタールをぬって、いつまでも吊しておいたそうです。顔だけはよしてと願いながら吊された女囚もあったとか。

寒中水泳をやっている美女。川の流れと同じ速度でゆっくりと泳いでいる。余程の名手らしく首だけ水面にだしたまま、殆んど水しぶきもあげない。

次第に近づいてくるのを見ると、その顔色は真蒼で死人のよう。急いでボートを出し救いあげてみたら、彼女は首だけであった。

彼女の生首を板にうちつけ、さながら獄門首のようにして川に流した犯人は、誰でしょう。全く意外な女性で、更に殺人を続けるうちに、自分自身が首を斬られるはめになる。

彼女は花園のなかでうたたねをしている。スラリとした足を、あられもない恰好に投げだし、あたたかい春の陽をあびていた……と思いきや、なんと彼女は下半身しか残っていない。

花園のなかの花は、すっかり引きぬかれ、かわりに植えてあるのはいくつかの美女の生首だ。花の名札のかわり、彼女たちの名と年令を書いた札がその前に立っている……。

花園はすばらしかった。しかし、その上に二本の脚を宙に浮かせて死んでいる彼女は、どの花よりも美しかった。

死せる美女を花にみたてる話。私は大好きですが皆様はいかがですか。

竜子、銀子、桂子、香子のカワイコちゃんのところは無名の手紙がとどいた。なかには一枚の詰将棋の図だけ。いや、それもおかしい。五枚の駒がおいてあるだけだし、だいいち味方の駒ばかり。即ち

3七銀、4一竜、5五香、6八桂。そして

★お知らせ★

「美しき縛しめ」第三集（略号美3）

在庫僅少になりました。御入用の方は今の中にお申込み下さい。ここ一、二カ月で売切れになると思います。

「悦虐小説と緊縛写真」 特集号

第一集から第五集まで、全部売切れになりました。補充はできかねます。

○最近号の誌上に広告されておりませんものは、たとえ本誌の旧号に広告されておりまして、在庫いたしておりません故、最近号の広告により御注文下さるようお願い致します。

7九の王の右肩に女の字が書いてあった。

何気なく読みすてていたが、間もなく三月七日に銀子が、生れたままの姿にもどされ、木の枝からダランとさがったロープの先に、首をくくりつけられて死んでいる。

四月一日には竜子が、左乳房を短剣で柄までも通れと刺し貫かれ、全身紅に染まってこときれている。

五月五日には香子が風呂のなかで、うつぶせになって倒れていた。誰かにおさえつけられ無惨にも溺死したらしい。

首なし美女（？）の死体が街角にころがっていたのは、六月八日の朝だ。明らかに桂子の変りはてた姿。

四人の看板娘を失ったマダムは、やっと手紙の意味をさと、自ら河に身を投げて、二十八才の女盛りでこの世を去ってゆく。その日は勿論七月九日！

三、サーカスの殺人

ライオンが真赤な、大きな口をあけているそのなかに、美女がおそれもなく首をつっこむ芸があります。

極めて好評なため、当然彼女をねたむ女性もあらわれるわけ。かくして一計を案じ、彼

女の髪型を直すふりをしてコショウをふりかけました。

それと知らずにいつもの通り口のなかに首をつっこんだから、さすがのなれたライオンもたまらない。けんめいにこらえたものの遂に大きなクシャミをしてしまった。彼女、ハッときずいた時はすでにおそく、哀れ美しい首は無惨にもかみちぎられて舞台の上をころがりました。

象の足の下に横たわる美女。特に彼女の方は芸がなくとも美しければよい。舞台の上には寝ていれば象がきて、静かに足をその上におろすだけだから、せいぜい乳房を軽く押さえる程度です。

名もなく芸も貧しく美しくもない女性にとって、彼女が面白くないのは当然。かくして象の餌に興奮剤を混ぜておく。

満場のお客に充分美しい肢体を見せてから横たわったところ、象君は元氣よくドスンとふみつける。「ギャッ」と蛙の潰されるような声を残して、さすがの美女も紙のようにのされ一巻の終り。

虎使いの美女と大蛇使いの美女はライバルだけに仲が悪かった。

ある日、同じ檻の中でリハーサルをやって

いたが、虎使いはひそかに自分の虎に命じて蛇使いを襲わせる。

虎は命令通り飛びかかり、たちまち押しふせて蛇使いのふくよかな下腹部をガブリ、続いて喉をも引き裂いたから、彼女は一瞬にして即死。

虎使いはニッコリとほほえんだ。これで自分分は文句なくNO.1だと、しかし次の瞬間蛇に襲われ、あつというまにグルグル巻き。

蛇がギュッと締めれば、虎使いは血を吐いて絶命し、さらにクタクタになるまで締め碎かれたのち、頭からまるのみにされる。

他の団員が急を聞いてはせさんじたとき、蛇使いの美女の生首と数個の骨片がころがっているだけ。虎使いの美女に至っては影も形も見えなかった。

空中ブランコは右に左にとび違いつつ、次第に高くのぼる。ところが最上段のブランコの綱に刃が入っていた。それにとびついたとたん綱が切れて、美女は舞台めがけてまっさかさま。首が胴にメリこんで死ぬ。

大きな円板に大の字に縛られ、おへそを中心としてクルクルまわりながら剣投げの的となる美女。丁々発止と投げられる剣は、その身体すれすれに突立つわけだが……………。

例によってライバルが登場。円板の回転速度をちよつと変えたため、剣は乳房や咽喉に突き刺さり、あぐくのはて「動かぬ一点」おへそにも命中してしまう。

四、殺される欲び

以上、殺人また殺人の楽しみについて書きましたが、反対に殺される身はどう感じるでしょう。

拙作「絞首刑にされる女」で、私はリンチされた女に「絞首刑」がこんなに気持のよいものとは知らなかった。何故もっと早く死刑にならなかったのだろうかと言わせました。

「女武者の討死と生首」「女斗美八景」では女性たるものは、自らの若さと美しさに自信がある限り、討死して首をとられても満足だ、と書かれています。始めから死を楽しむつもりで出陣したわけでもないでしょうが、死の瞬間に彼女たちが最高の恍惚感を味ったことは想像できます。

水野夫人、新宮夫人は死刑されることを楽しんでおられます。しかし単なる責めと違つて本当に死んでしまつては大変です。さきの女囚も「一度しかできぬのが残念だ」と惜しがりましたが。

私は女死刑囚に対し興味をもち、いろいろ調べています。全くとんでもない話ですが、どうにもこの性質は直りそうもありません。

英国で十年間に十一人の女性を絞首した刑吏の話を読みました。このうち七人まではその執行にあたって、明らかに興奮が認められたと言われ、検死の医務官もそれを裏書しています。

しかし、別な刑吏の書いたものを見ると、五人の女性のうち苦しまずに死んだのは一人だけで、残る四人はロープの先でジタバタもがき、死体をあらためてみても失禁その他、恐怖と苦悶をあらわす状態があったと言っています。

このほかもう一人、二十分も吊されながらよく締らず、結局息をふき返してやり直しとなった女囚が、二度目はむしろほえみを浮べて死んでいったと言います。しかしこれは正式の文献ではないので真疑不明です。「十三人の女死刑囚」にも書かれていました。

キリシタン受難史に、ハリツケになった女性の話があります。

錆び鎗が彼女の脇腹から胸へとつきぬけた時、彼女は「天国、天国」と叫び、それこそウットリとした表情を示しました。普通女性

の場合は三本目の槍で咽喉を刺し止めるのですが、彼女の場合は絶命まで二十数本も刺され、絶えず歓喜とも悲鳴ともつかぬ声をたてていました。

鮮血リンリとして息絶えた彼女は、教徒の誇とたたえられ、間違ひなく天国に行ったと語り伝えられましたが、彼女にしてみれば執行中が天国に居た間ではないでしょうか。

火あぶりを宣告された女を、例によって白紙一枚を下腹部にあてただけにしてみたら、全身火傷のあとだらけ。薪を山と積んだ上に

立っても顔色ひとつ変えません。

ところが彼女に対し特別の慈悲がくだり、火を点ずる前に首を締めて殺すことになりました。首に紐をまいたとたん、彼女は恐怖して泣きわめき、人が変わったように暴れだしました。

刑吏も気がきかない。Mだとわかったら、望み通り生きながら焼いてやればよいのに、命ぜられた通りにしたのだから、彼女の死顔には無念の形相すさまじいものがありました。

どうです皆さん。特にM女性の方々、自分が殺される場合を想像した作品を書いて下さいますか。お願い致します。

△終▽

（解答）

- 1、幸代こそ真犯人でした。見破られたと知ってあわてて逃げましたが捕えられ、間もなくあの世に行きました。殺人者として絞首台にかけられて。
- 2、この日の演技にはタネもシカケもなかったのです。生首は本物でした。

【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙（9×13） 焼付

一組一枚	一五〇〇円
五組五枚	五〇〇〇円
十組十枚	九〇〇〇円
二十組二十枚	七〇〇〇円
三十組三十枚	五〇〇〇円
四十組四十枚	三〇〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り	（新井）
A2	手吊り乳房責め	（五月）
A3	ハリツケ猿ぐつわ	（新井）
A4	全裸正面柱しばり	（遠藤）

A5	亀甲強烈乳房縛り	（遠藤）
A6	全裸手吊りムチ打	（遠藤）
A7	豊満乳房いじめ	（遠藤）
A8	乳房責め股間縛り	（遠藤）
A9	鼻責鼻梁いたぶり	（遠藤）
A10	全裸後手高小手	（遠藤）
A11	膨隆臀部さらし	（長野）
A12	全裸正面強烈縛り	（長野）
A13	うねる緊縛裸身	（長野）
A14	色禪の開股しばり	（長野）
A15	正面縛蛙股ひらき	（長野）
A16	裸自慢縛りヌード	（長野）

A17	正面アグラしばり	（長野）
A18	正面大の字開股縛	（長野）
A19	遅ましき裸しばり	（長野）
A20	荒縄縛豆絞り猿轡	（大塚）
A21	両手前縛り髪首絞	（大塚）
A22	両手吊り股間吊り	（桜井）
A23	両手膝下しばり	（関谷）
A24	疼れんする裸身像	（関谷）
A25	両股縄掛け開股縛	（大塚）
A26	正面裸身強烈本縄	（梨花）
A27	乳房晒し肉体自慢	（長野）
A28	責衣にはみ出る肌	（東浦）
A29	投げ出した全裸縛	（長野）
A30	捕われの全裸緊縛	（梨花）
A31	羞らいの両股縛り	（大塚）
A32	猿轡乳房いたぶり	（遠藤）
A33	荒縄全身縛り豆絞	（大塚）

A34	盛り上る乳房縄目	（長野）
A35	亀甲本縄鼻いじめ	（大塚）
A36	ムチ打悶えポーズ	（関谷）
A37	椅子またぎ汚辱責	（東浦）
A38	縦縄股間縛り正面	（関谷）
A39	ゴム猿ぐつわ全身	（大塚）
A40	くさり乳房責め	（長野）
A41	強制片足挙げ責め	（大塚）
A42	正面乳房くびり縛	（関谷）
A43	鴨居正面ハリツケ	（梨花）
A44	手吊りパンティ落	（絹川）
A45	白バンド後手吊り	（東浦）
A46	豆絞り高手小手呻	（絹川）
A47	裸縛り鼻いじめ	（梨花）
A48	ガンジガラメ立縛	（愛川）
A49	亀甲本縄股間縛り	（絹川）
A50	立木縛竹棒責め	（桜井）

☆耽美主義者の手記より☆

「自殺学校奇談」

夜 乃 探 郎

「あてもなくバスに乗ること並に自殺
学校教授と称する男と会うこと。」

現実の世界はいつも無であり、幻の妖しき世界こそ『現実』である——と、私、自称耽美主義者の夜乃探郎は「見世物放浪」を振出しに「巷に責めのある如く」と、くちずさみながら、指圧治療院にて責められる美少女に「美」を感じたりETC……果てもない放浪記をつづけるわけだが、——今宵もまた、いつものくせをどうしようもなく、月が出るのを合図かのように、これ一張羅のやぶれコートを身にまとして下宿の屋根裏部屋から表に

飛出したのである。（まるでコウモリだね）
いまは昔、これからの一節を無声映画は活弁調でやるならば、まさしくこうだ。『世はこれまさに春である。おぼろなる月のもとでは、屋根にミイ公・ハー公のどら猫たちがいと悩ましくのどを鳴らし——下では若き恋人たちが、あら随分待った』煙草を五本もすったよ」と、ささやき合いながら、手を取り足音も軽く、青い灯赤い灯の街の彼方に消えて行く。ただし、ここに一人の哀れな中年男あり、彼はなんの目的もなく、ただあてもなく、バスの停留所の前に、立つのでありました』

——てな、ことになるわけだが、これはあくまで表面から見た私で、「哀れな」ということに、自虐的なよろこびをひそかに感じているのだから仕末におえない私はセンチな男だ。さて「あてもない」ということは、実は私にとっては、一つの「あて」を意味しているのだから、ますます、ややこしい次第である。（すみません）

私は、ときたま行きあたりばったり行先も考えずに乗物にのることがある。そして気のむいた地点で降りるのだ。このせちがらい世の中に、これは貴重な私にとってのゼイタクなあそびでもある。（諸君もためして見ると

よい。ほんの煙草錢位で異国旅行の気分を味わいえること受け合いだ。まあ、とにかく、ここしばらくは私の行動をだまって見つめて下さるよう」

バスから眺める夜色は、まるでぐるぐる廻る走馬灯のように街の灯りが流れるように去って行く。自宅よりほんの歩いて十分位より離れていないのに、早くも私は窓外の景色を見るうち深い哀愁にうたれるのであった。私はどちらかと言えば、もう皆さんも先刻御承知のように放浪詩人を気取る男だが——そして耽美主義者だ。

その反面、まるで子供のように私の小さな城、薄汚れた万年床がある屋根裏部屋に離れがたいあいちやくを持って居るのだ。だからここから少しでも離れるとすぐ淋しくなる。そのくせ、日暮ともなると、もう街の灯りが恋しくなって表に飛び出る。なんとムジユンした人間だろう。私はときたま、そんな自分という存在が判らなくなり、とほうにくれることがままあるのだ。

——「もしもし終点ですよ」

女車掌のそっけない声。取りとめもない考えに耽けつていた私は、いつのまにか一人残されている自分に気付いた。やがて、夜風の

中に立つ。黒々とした建物の窓々からはテールをばはさんで夕餉にむかう人々の影が、楽しそうな話声と共に、私の孤独な心情をよりゆさぶるのであった。それは甘いせつない感傷をとまなつて……

「夜は魔物だ。そして貴方は、その毒氣に当たられている。だが毒かならずしも害ならずか」

ダブルの背広に蝶ネクタイをした一分のスキもない中年紳士が、私の前に立ちふさがった。

「とつぜんでおどろきでしょうが——」と、大型の名刺をつと差出した。「自殺学校教授黒岩大膳」と印刷されてある。「わたしには用のない学校のようなですね。いま死にたくない。ただし、その内容にちよつとスリルは感じますが」と、私は正直なところをひれきした。自称自殺学校教授は、うなづくなり、「だから、入学資格はおありです」

かくしんにみちた口調でいった。おぼろ月夜の道を教授と私は話合ひながら、しばらく歩いた。教授はふと立ち上り煙草ケースを取り出し私にもすすめ自分も口にくわえた。煙りをおいしそうにふうつと吐くと

「自殺学校は、自殺マニヤの学校です、お判

りかな自殺という手段にこの世ならぬスリルを感じるそれを研究する世界です。たしか、シヨーペンハウエルでしたかな「自殺こそ人間にとって最大の課題である」という意味のことばをいつている。「世界中の人間はみんな死んじまえ」とさげんだ文学史上空前絶後と思われる、とほうもない自殺讚美の作品をものしたロシヤの異色作家、アルツイバーシエフ（十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時代）。彼は、当時の若き知識階級のダブルとまで、もてはやされた自由恋愛の書「サーニン」を発表したことで有名だが——

それにつぐ第二の長篇が問題の『最後の線』だ。もうこれは何んと言つてよいか、とにかく飄然と、とある田舎町に現われた年若い技師の「死の福音」によって、作中のおもなる人物がことごとくわが生命を断つてしまふ。作者の処世哲学がありとあらゆる「芸術的形象」と多弁な論議の助けをかりて、美事に死の文学を結実させた。ところで先にも述べたように、ばくのところは『自殺』そのものを実行させる場所じやない。それに到るありとあらゆる方法を、種々と研究し合い「死ぬ」というよりは、その手段によって「美」を最高の刺激を満喫させる特殊な学校なんで

す。そのことにプラスになるならばショーペンハウエルけっこう。文学けっこう。芸術けっこう。ただし、これは、ぼくのように自殺に関するオーソリテイの指導がなければ、むづかしいことだ。」

私はいくらか、教授の話が判りかけてきたが、まだまだ意味がのみ込めない部分もあった。

「そんな学校が、はたしてこの地上に存在するんですか？ 貴方は失礼だが、わたしをからかっているんじゃないでしょうか」——「世界中にただ一つです。しかも秘密組織による絶対に会員以外には、もれないようになってる。ぼくのおめがねにかなった貴方は、その偶然さをよろこばなければならぬい……。」

「では、先生」と私は彼のよび名を変えて質問をつづけた。（私の本来の耽美的な性傾向が、ここでむくむくと、かま首をもち上げてきたからだ。）

「耽美的な最高の刺激は『ろまん』にも通じる筈です。それは、どのようなであれ、一つの生き方にも、つながっている。死ぬのではない。その手段が問題だといっても事実死に死によってのみ『自殺』の本質は解決されるので

あって、自殺とろまんの結びつきは不自然です。」

教授は少しもあわてず。むしろ微笑を見せて答えた。

「それはありふれた文学的な常識です。貴方はバスから降りて、あたりを眺めながらしばらく立っていた。たしかにボヘミアン的な体臭をにじませていた。放浪者という言葉には現実拒否というふうか『ゆくえ定めぬたびまぐら』的なニヒルな影が付きまとう。ところが奇妙なことに、人一倍、故郷に懐しさを抱くのもこの人種です。俗な文句に『波の音きくがいやさに山家に住めば、またも気になる鹿の声』というのがある。これは色んな解釈も出るが、ぼくはこう思う。あまりにも知りすぎる浮世に、いやけがさして、種々な方法で、そこを逃れようと努力する——だが、しよせんは人間。飛び出してきた地点が無性に恋しくなるのだ。人間なんて、そんな複雑な気持をもてあます存在です。」

貴方は自殺とロマンは結びつかない——など言いながら、実は恥部をさらけ出すのを恐れている。『自殺』という現象をいたずらにもてあそぶことは不道德だ——という既成のモラルを言葉に出したにすぎないのだ。白状

し給え！ 君だって、アブノーマルな……ま……って下さいよ、単に『異常』とぼくは意味してこの言葉を吐いてるんじゃない。特に選ばれた者たちの、妖しき美への衝動ある世界」と解釈してだ。さあ、このへんでアクシユをしませんか」

教授は、私の反応を、探るかのよう待った。いつのまにか、私たちは人影少い裏通りを歩いていた。『中華そば』の、のれんをさげた屋台が、あたたかそうな湯気をたてて店を張っていた。

「要するに『死に方も生き方だ』と言いたいわけなんです」

私は頭の中で教授の言葉を整理しながらいった。

「だんだん判ってきましたな」

教授は眼を輝やかせて、そうあいづちをうつなり言葉をつづけた。

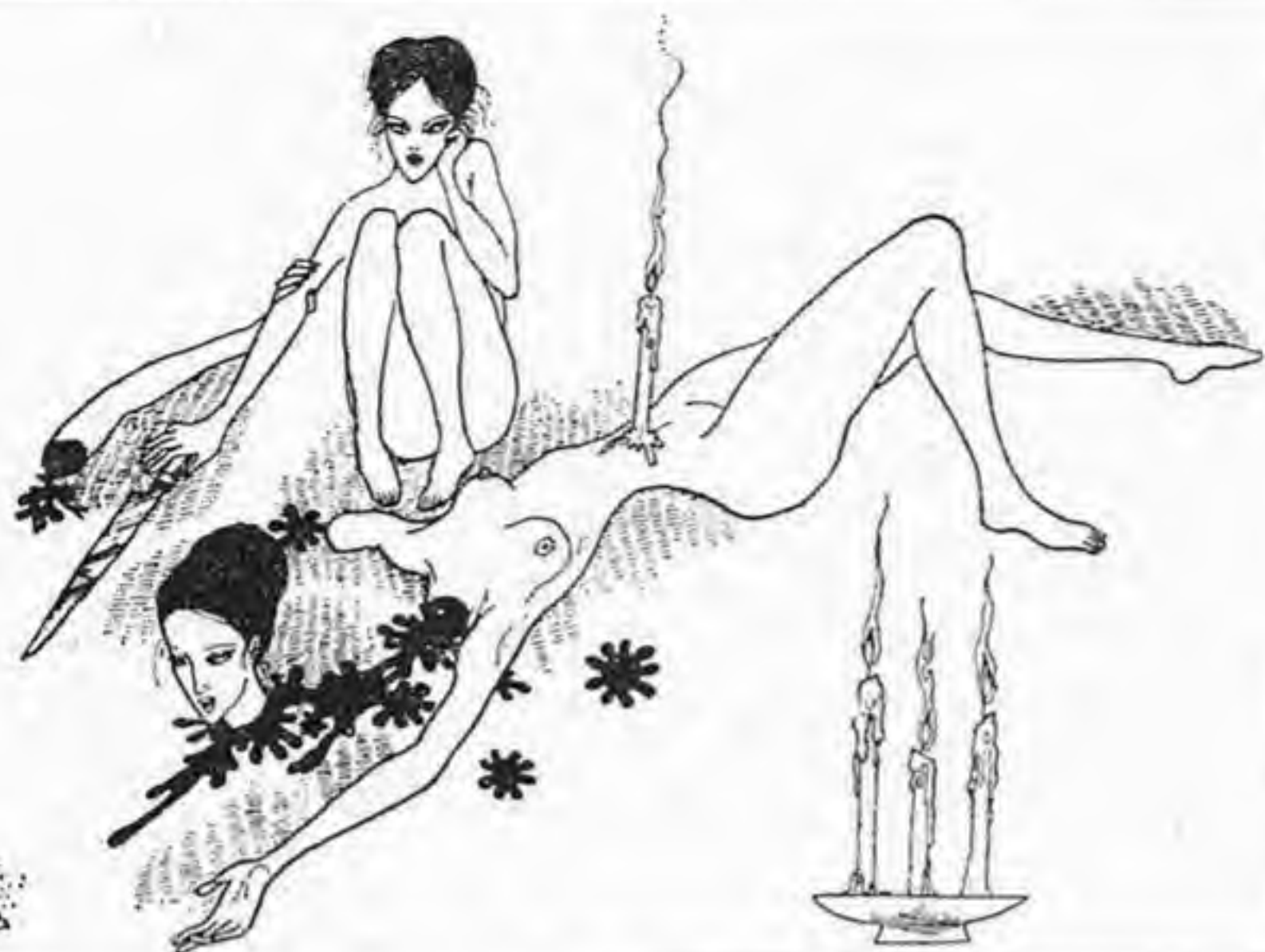
「モラルだとか、なんとか——それはすべて不完全な人間どもが割出した計算で、この世の中にそれが『絶対』だというキメテはないのだ。だから、マニヤはマニヤらしく常に『新しい発見』をするべきです、そう、奇譚クラブっていう文献誌がある。ほう君も知ってるね、これでもぼくは心理学をやってる、

すぐ表情で判るんだ、ちょうどこれから、この雑誌を教材として講義をはじめることにな

っている、そうだと学校でつづきをきいてくれ給え」

「蠟 涙」

室井亜砂路画



「自殺マニヤはマニヤらしい規則があること並に劇薬入りのコップのこと」

——そこは、学校とは名ばかりの、まことに粗末きわるる廃墟のようなビルの地下室である。裸電球がポツンとつり下って居り、老若男女が七、八人ばかりこわれかけたイスに腰を掛けていた。多分、教授の言う、これらの人達が自殺マニヤたる学生たちであろうか。私は、真中あたりの席にそっと腰をおろした。正面にある黒板だけは、どこから運んできたのか、この場に似つかない程、それは立派だった。やがて、自称、自殺学校教授、黒岩大膳は、気取った一礼をするなりさっそく黒板にむかって、なれた手つきでチョークを走らせた。

『自殺を研究することは、高級なる芸術である』ちよっとそれらの文字をながめていたが、すぐ学生たちの方にむかって話かけるような口調で、

「本来ならば、すべての設備が整った教

室なりで講義をはじめるべきでしょうが、ともかく資金はあっても、その限られた学校というよりは、『自殺研究クラブ』とも称すべきサークル化した現状ではこのような状態で、進めていくより方法がありません。その点、お集りの学生諸君は、社会にあれば相当の地位もあり、豊かな生活もなされていられる方が多いのですから、『風流』とも解して御了承願うものです。いや、そればかりでなく実はこのビルは、経営者の某氏が不渡手形を乱発した為に左前となり、この地下室ではんの十日程前に自殺した。やっとな、ここを教室に拝借したばかりの苦勞も、おさっし願いたいのであります。」

後の言葉で私はうすら寒いものを感じて思わず立上りあらためてあたりを見渡したが、——他の学生たちはむしろ妖しい光りを、その眼にやどしはじめたのを発見したにすぎなかった。

「さて、後程に、みなさまの前に御紹介致しますが、今晚は新入生を、一人つれてきました。この学校にまいります道のり、その方と種々と『自殺』について話を取りかわしたのもっともよくが興味を持った課題は、相当、文学をやっておられ、耽美的な傾向を有して

いると思われる方が「自殺とロマン」は結び付かないというような——既成的モラルを平気で、言葉に出すという事実をたしかめたことです。

これについては、その際も色々と説明しておきましたが、さらに今晚はもう一步、つっこんだ話を致したいと思う。まず、自殺マニヤは、死なないこと”を前提とします。ちよっとムジュンしているような言葉でしょうが問題を別な面から考えて見ましょう。ここに文献的に高く評価される風俗研究誌があります。この一九五五年五月特大号に「縊死を憧れる男」という告白がのっている。これは貴重な文献ですよ。——この文章の冒頭に「縊死に憧れるなどと云ったら」自殺志願者かと早合点されるかも知れません。ではそうではないのかと云うと、ハッキリそうも云いきれないのです。何故ならば、現実、に於て自殺の意志がないとしても、やはり自殺を夢想しているのに違ひはないからです。（傍点は筆者）

「この告白には」首吊りの真似をしようと思つた。そして「糸もつけない素裸体で梁からブラ下った私は、心ゆくまで脱糞しながら恍惚と我を忘れているのです」とも記されています。自殺的手段は、甘美なエクスタシー

までともなうことを、この告白者はさらけ出している。しかも縊死を夢みるこの男にとつては、もう、だれが何んといつても、生きることの妖しい刺激をとまなっているのです。

「死んでしまえばそれまでよ、死なないうちが花なのよ」——というたしか流行歌が昔あった筈だが、死、そのものはナンニモナイ。そのギリギリの一線が問題です。原則としては「死なないこと」を条件としても、万に一つ——ということだつてあるかも知れない。しかし、そんなことを言ったらオートバイにだつて乗れない。もしか——ということがあつて、その世界に悲愴美もありスリルもあふれることになるのです。」

私は発言した。

「そうすると、自殺マニヤは広義な意味でマゾヒストと解釈してもよいでしょうか」

教授はすぐ答えた。

「いいでしょう。ただし、そこに美を発見する芸術家であることを条件としてですね。それと「マゾヒストによって鞭は極めて重大な意味を持つ」と言われているが、自殺マニヤにとつては、縄とか、ピストル、薬品など自殺を連想させるものがより関心の対象になつてくるわけです。勿論、例えばピストルを手

に取るという行動だけでは問題じゃない、その際にお芝居気ではなく、本当に死ぬんだなあ」という気持が大切です。これは、はじめはなかなか単独ではむりでしょう。やはり、ばくのような人間がそばに居て、暗示をかけることが必要だ。そうすれば、前に引用した「縊死を憧れる男」のように性的に受入れる刺激が生じてきます。やはり人間なんだからばくは「美」と「性」のつながりを重要視しています。本当の快美感は思想的なものにもなつて生理的なこうふんも生じるのが自然です。」

私はその奇妙な論理に引きづられて行くのを、どうしようもなかった。

「そう、同号に『続々、女性切腹断想』がのっている。また最近号では昭和三十九年一月号に「読者体験記」として『グループ切腹プレイのレポート』がケイサイされている。この雑誌にはよく切腹に関する記事が多々あるが、これなども自殺マニヤにとつては見逃せないことだ。ただし、切腹マニヤは、どのような方法であれ腹に刀をつきたてるといふ単純な動作が、その根本をなしているが、ぼくたち自殺マニヤにとつては、古今東西の、種々なる自殺手段がすべてプレイの対象となつ

ているだけ、複雑であり研究しがいがあるというものです。」

そのとき

「失礼しちゃうわ」と、薄鼠色のスーツをきた若い女性が立上った。

「わたしは、あくまで『切腹マニヤ』の一人として、自殺学校という言葉に引かれて出席しています。この学校で教えられた色んな方法をためしてみました、やはり、いまのところ、あの『ぞりっぞりっ』と肌の切れる手ごたえと刃の重さは『何ものにもかえがたい最

高のスリルがあります。』

教授は、その烈しい意見を、やんわりと受けた。

「何も、切腹マニヤを批判してるんじゃないやありません。自殺の手段として『切腹』もチョンマゲ時代の昔は数多かった。ただ、自殺マニヤは一つのことには捉らわれないで種々と実験研究して行こうと、言ったまでです。」

——やがて、実習時間に移った。いわゆる「自殺プレイ」というもので、まず会社の重

充実させてゆきたいと思います。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽に寄せ下さい。

「読者通信」欄へ

読者の皆さまの共通の広場としての読者通信は、毎月多数の投稿文によって賑々しく飾られておりますが、広く読者の方々が読んで楽しい家庭的な雰囲気味わえるものの中から、つとめて選定してゆきたいと思ひます。従って三行広告的なものや自己宣伝に類したものは、ご遠慮いただきたくので、本誌読者通信の使命だと考えます。どうか、その意味あいでもし御投稿下さるよう、お待ちいたします。

(本誌編集部)

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上の発表につきましては、出来るだけの謝礼を差上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれてい

役らしい、でっぴりと太った男がまっさきに「首吊り」を志願した。

そこはベテラン教授の指導下だけあって準備はすぐできた。その男は学友に抱きかかえられるようにして吊られた輪の中に首をさし入れた。彼は経験者らしく、すぐ舌を出して見せた。息づまるような一瞬だ。それをキツカケとして、さまざまなプレイがはじまったが——どちらかと言えば、責めたり責められたりというロープと鞭によるフライ級的、S Mプレイを好む私は、やってる御本人はエクスタシーを感じ、高級なる芸術とスリルを研究、プレイしているわけだが、あっけにとられて見ているに過ぎなかった。

「自殺プレイは、実際にプレイすることがカノンです。自分がやってみて瞬間的な一線に、すべてを賭けるのです。あるいはぶざまでみじめな姿体をさらけ出すことに恥しさをおぼえるかも知れませんが、それこそ、自虐的なエクスタシーに入る大切な条件なので、よ。」

私は、思わず言葉が出た。

「たまに緊縛プレイをこころみることがありますが、わたしはどちらかといえば空想する方で、『幻の現実』に最も妖しきスリルを感じ

る手段と信じているものです。」

教授は苦笑した。だが、その顔にはいささかも困ったような影はなく、むしろ相手の無知をとがめるような意味がこもっていた。

『では、夜乃探郎君の入学式を行ないます』

教授は、私の気持を無視して宣言した。私は、なおも発言しようとしたが、学生全員が服装をなおしプレイをやめて、集合したので成行にまかすことにした。

私は、黒板の前に立たされた。「入学式」という言葉に、まさかプレイではないだろうという安心さも、いくらあったのだ。

ここで、自称、自殺学校教授黒岩大膳は、黒表紙のぶあつな背に金文字「世界自殺学大全」という書物を、まるでバイブルかのように小わきにかかえて登壇した。

「まだよく自殺マニヤについては理解されない点もありますが、広い意味のSMマニヤの研究生として、耽美主義者、夜乃探郎君の入学を許可します。」

と教授はおごそかな口調で言った。学生全員は、拍手をもつてこれに答えた。

——やがて、教授はコップを五つばかりテーブルの上に置いた。それは、どれも同じ形をしたものであった。さき程「首吊り」プレイ

をした重役タイプの男が、赤く腹れあがった頸部をなでながら、それでも恍惚さのさめない顔つきでブドウ酒を両手に捧げもって近づき、教授に手渡した。

教授は、ことさらに無表情な顔つきで受取りスローな動作でコップにそそぎはじめた。真赤な液が、にぶい灯りに反射して、それはおどろな美しさをはなっていた。

「いいですか、この五つのコップにブドウ酒が入りました。そこで、一つのうつわに「劇薬」をたらす」

教授はポケットより小型のピンを取り出した。私はすぐどのような事柄が行なわれるのかさっした。私はこのころの中でさげんだ。

「自殺学校などと称して、これはマニヤというより自殺拝信者の集りじやないのか。プレイなど言って、いつかは、ホントウニ死ンデシマウ……」

私は急に不安にかられた。その時、学生全員起立して、あの「暗い日曜日」を合唱はじめた。私はこのメロディにおぼえがあった。遠く色あせた彼方、黒いドレスに身を包みしゃがれ声でシャンソンをうたうタミア。この重たく暗いリズムは、自殺者を続出させたという伝説までともなって流行したことがあ

ったのだ……。

——あやふくむーどに弱い気持を、ふるえたさせて私はやっと叫んだ。

「やめてくれ！」

そこで教授は、がらりと表情を変え、さも愉快そうに腹をかかえて笑った。

「どうです、これでも妖しきスリルを感じませんか。これは江戸川乱歩の『吸血鬼』からヒントを得たものです。いくつかのコップのどれかに毒が混入されている。そして、どうしても、その一つを、のまなければならぬ。そんなプレイです。本当の劇薬を使用します。ただし、口に液体を入れるという寸前に、かいぞえ者が止める。この「止める」ということに技術が要求されるわけです。止めるまでは絶対に、のもうとする本人は動作をやめられない、あとで手にもつコップの中身がどうであったか調べます。その中に毒が……というときの戦慄はまた格別なものです。ただしこれは、強制されるという限界状況が必要な意味で自殺的プレイとしてはどうかと考える、だからめったにしないあそびです。」

「……また私は、あの幻の現実の世界が、私をよんでいることを知った。」

——そこはキラキラと輝やく太陽、海にはヨットが二つ、三つ白波をけたてて走っていた。雲が流れる。ビキニスタイルの多くの若い美女たちが何か叫びながら、それに乗っているのが見えた。私は海水パンツ姿で、飛込台の上から、望遠鏡を片手に眺めていた。ポ

ンと肩を叩かれ、後を振りむくと、まさしく自称、自殺学校教授黒岩大膽が立っていた。「あの叫びは、あたいたちは、こんなきれいな海で死にたい！」という讃美なのだ。彼女たちはヨットに乗る前、プロバリンを百錠あて服用している、睡気を催せば、そのまま海

にとび込む。そして溺死……」私は何かさげぼうとした。——そのとき、青い空から銀色に輝やくロープがするすると降りてきた。その先は蛇のようにくるくると教授の首筋に巻きついた。やがて、その身体は宙に浮く、そして黒点となり消え去った。

山原清子
大塚啓子

对抗

女相撲

女斗美

女斗場面

女相撲連続写真

相撲着用、四つ相撲
大手札 十枚一組 略号(めめ) 一〇〇〇円

互いにがっつき、上手下手の両方に組み合
った二女は、上手下手の両方に組み合
を充分にとり合って、上手下手の両方に
下手投げ、内掛け、外掛け、刻々の
変化を繰り返して、シヤッターを切つ
たもの。躍動する女性の筋肉がよ
くキヤッチされて、逸品。

女相撲連続写真

相撲着用、投げ術
大手札 十枚一組 略号(めめ) 一〇〇〇円

酬いは、よい機熟して、投げ術の応
げに、サバ折りから高々と吊り上
開かれてゆく。投げのきまつた瞬
間を狙ったシヤッター、どのよう
にマニヤの方々の眼を、どのよう
に楽しませてくれるか。

女相撲連続写真

相撲着用、投げ合い
大手札 十二枚一組 略号(めめ) 一二〇〇円

首投げ、外掛け、小股すくい、等
内掛け、外掛け、小股すくい、等
を重ね、その激しい投げの打ち合
ど、優美な筋肉美の躍動する瞬間
撲美が、二人の肉体美女性によつ
て、所狭ましとくりひろげられて
ゆく十二枚の組写真。

女斗美立業

黒フン白フン着用
大手札 十枚一組 略号(めめ) 一〇〇〇円

黒フン白フン着用
く締め込んだ二人の裸女が、激し
く両手で組み合ひ、ヘッドロック
から、腕の逆とり、首絞め、片足
どり、腕の逆とり、首絞め、片足
から、腕の逆とり、首絞め、片足
る二人。躍動するメトマーズの美
しさをくらんだ下さい。

女斗美寝業

黒フン白フン着用

大手札 十枚一組 略号(めめ) 一〇〇〇円

立業の激しい斗争から寝業に入
った二人のメトマーズは、しなや
かな真白い四肢に渾身の力をこめ
て、相手を屈伏させようと必死に
なつて押さえ込む。手と足と、足
と手が、悩ましくも妖しく交錯
するメトミのエロシズム。

女斗美固め業

黒フン白フン着用
大手札 十二枚一組 略号(めめ) 一二〇〇円

激しくも悩ましい寝業の激斗を
経て、ここに優劣の位置がはつき
りしてくると、相手のメトマーズ
に最後の止めを刺す固め業に入つ
てくる。しかし、押え込まれた方
も、むざむざと敵の軍門に降る筈
はない、苦痛に歯を喰ひしはりつ
え、反撃のチヤンスを狙って、悶
え、もがきまわる。

女斗場面(白、黒揮)

髪のかみ合い
大手札 十枚一組 略号(めめ) 一〇〇〇円

これはルールも何もない女と女
の憎悪をむきだしにした斗争であ

髪をかみ合い、馬乗りにな
り、操りあい、揮一本の裸身のあ
るかぎりの力を奮って、只相手を
痛めつけようという争い。

女斗場面(黒、白揮)

押さえ込み合い
大手札 十枚一組 略号(めめ) 一〇〇〇円

相手をお互い自分の膝下に組み
敷いて降参させようと、二つの裸
身がうごめきあう筋肉と筋肉の交
りあう美しさ。

女子レスリング

首絞めの業
大手札 十二枚一組 略号(めめ) 一二〇〇円

肉づきのよい太股で、或はふく
よかな腕で相手の首を絞めつけ、フ
ォールしようとする女レス。

女子レスリング

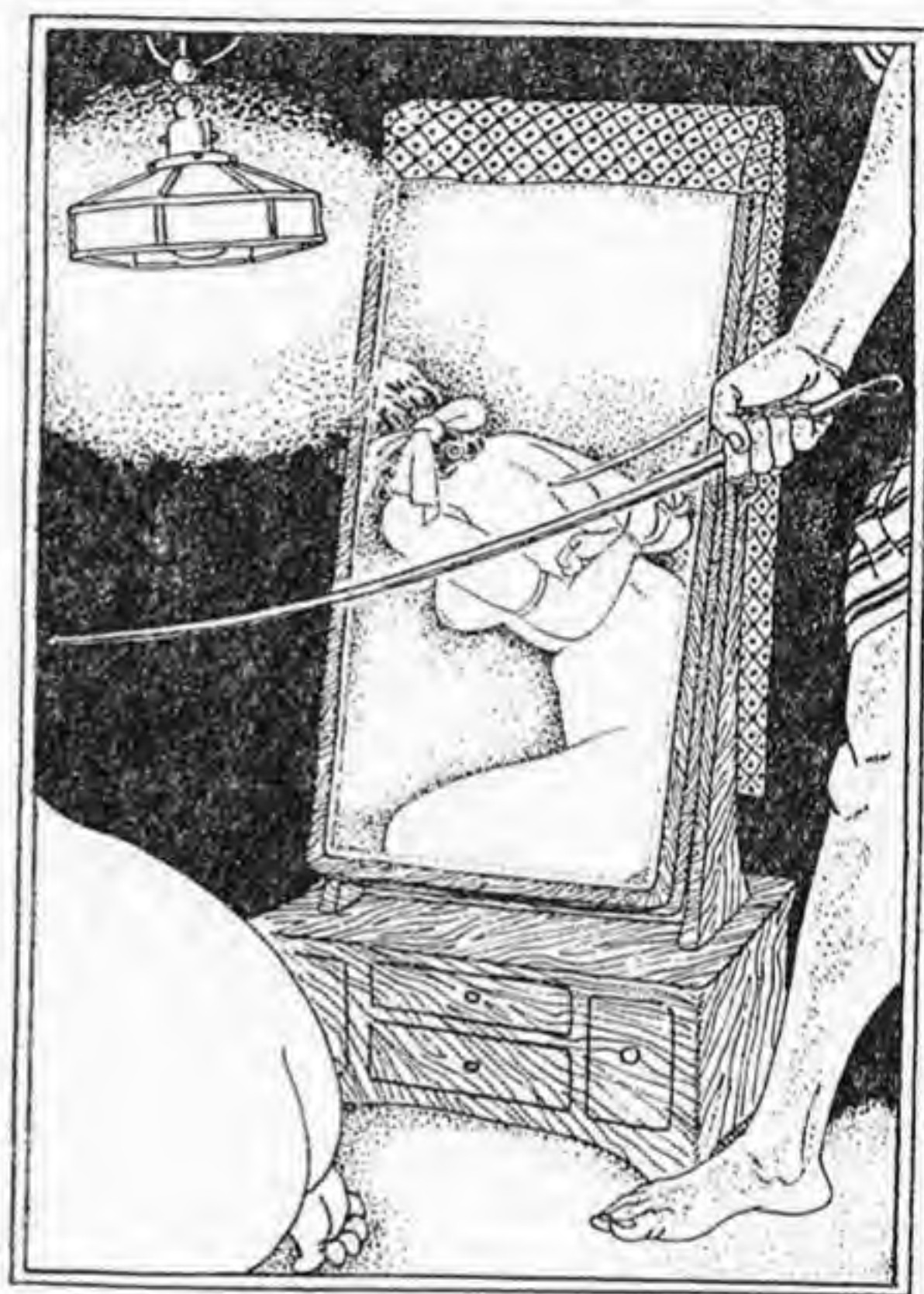
押え込みの業
大手札 十二枚一組 略号(めめ) 一二〇〇円

豊かで美しい裸身が、ねじれ合
い、からみ合い、互いに押さえ込
んでフォールしようとして必死にな
る女体相搏つ女レス。

「痴人の糧」

△晒しもの▽

山本一章



明美は、その日純潔を失わなかった。大山に口づけを受けて酔ったように身を委ねた彼女だったが、大山は貞操を求めようとはしなかった。彼に欲望がなかったわけではなかった。最も屈辱的な方法で彼女の処女を奪うことが、彼女に最もふさわしいと大山は信じ、その実行のために抑制したのに過ぎなかった。

た。

後手に手首を縛り合わせ、足首を結んだだけで、布団を上から掛けた大山は自分の書斎に戻った。彼は激しい心の昂ぶりを鎮めようとコーヒを飲んだ。口の中をネトリとしたほろ苦いものが彌漫した。

呼鈴が鳴った。大山は瞬間、百合子が来た

ことを覚った。彼女以外、この家を訪ねる者は殆んどなかったからだった。

「誰か女が来てるのね。」

百合子の言葉は棘を持っていた。

「いやな人ね。一体誰なの？ どこにいるの？」

大山は説明をするのが億却だったので、明美から来た手紙を抽出から取り出して百合子に渡した。彼女は苦笑を頬に浮べながら黙って読み終った。

「ふん、いい気なもんね。じゃ、わたしが可愛がってあげようかねえ。」

少し痩せ気味の百合子の顔が、一層骨ばって感じられた。

「ああ、まかすよ。好きなように料理したらいい。しかし、傷をつけたり、怪我をさせたりしたら駄目だよ。隣の部屋に寝かしてあるから……」

大山は百合子に彼女を責めさせるのも面白いと思った。少しばかり陰險な性質の百合子が、嫉妬して加える責めが、どんなものか興味があったし、それを受ける明美の精神的な恥辱と肉体的苦痛を想像することは不愉快ではなかった。しかも百合子自身、被虐の経験があるのだから、女の心理を最大限に利用し

た責め方を考え出すに違いなかった。

大山は百合子に軽く口づけをしてから家を出た。そして夕暮の迫る住宅街を駅の方まで散策した。電車が着く毎に善良そうな市民や学生が三々五々家路へ急ぐのが見られた。

俺は違うんだ——彼は何か優越感のようなものを感じていた。

駅前の古本屋に入った大山は、彼が学生の頃から欠かさず買っている雑誌を手にした。

大判から現在の型に移った時の最初のグラビヤが鞭打たれる女でなかったかなと記憶を追ったが、はっきりしなかった。その雑誌は彼の半生近くを支配してきたように思えた。

何人かのモデルを愛し、いくつかの小説をむさぼり読んだが、彼は殆んど投稿したことはなかった。十年程前に一度『赤い部屋』と題した小説のようなものを投書して、雑誌と別に発行されたKK通信の一部が載せられたことがあったが、それっきりになっている。その内容がどんなものだったかは彼自身記憶していない。

グラビヤのなくなった雑誌ではあったが、本文中に載せられた写真は案外迫力のあるもので、彼はそれだけのために、買い続けていると云って良かった。

大山は雑誌を置くと、傍に並べてあるヌード雑誌をとってパラパラと頁をくった。

女、女、女……若い女の肉体は、それだけではもう強い刺激を彼には与えなくなっていた。しかし美しい肉体の若い陰影は彼を快い気分にしてはくれた。

再び家に戻った時には、もう日が暮れて、懐かしいような街燈に明りが入っていた。

書斎に入った大山に、ソファに腰を降ろした百合子が言った。

「面白い娘じゃない。それに可愛いから、あんた参っているんでしょう。仕方ないと思うわ。でも、わたしも忘れちゃいやよ。あの娘、ずっとこの家にいるんでしょう。それなら、わたしも手伝うわ。いろんなことさせてやりましょうよ。」

百合子の気分は落ついているようだった。

「どこにいるんだ？」

「ええ、隣にいるわよ。少しわたし、くたびれちゃった。」

大山は隣の日本間に入ったが、中は暗くてどこにアケミがいるのか、わからなかった。

電気を点けた大山は瞬間どきっとした。床柱に白い女体が円くなって縛りつけられていた。頭と肩で体重を支え、尻を上にした恰好

で、全身に縄がぎっしりと喰い入っていた。折り曲げられた下半身は、太腿を開いて胸の両側に密着し、胴と一緒に縄がかけられていた。

「温順しく言うことを聞いたわ。イイコチャンだわ。」

後ろから百合子が云った。

口には大山好みの縄の轡が強く咬まされ、折り曲げた姿勢のためアケミの呼吸は荒く、ウンウンと呻いていた。上になったむき卵のような円い臀部は美しく汗ばんでいた。

「あとで浣腸してやろうよ。」

女の体にとって如何にもみじめな姿勢だったし、それに最も動物的な排泄部に加える責めは、百合子らしいやり方だった。

「そうだわ、灯台にしてやろうよ。蠟燭は、なかった？」

百合子は戸棚を探していたが、太い蠟燭を見つけた。マッチで火を点けると、百合子は電気を消した。

「まだ暗いようね。もう少し、明るくしようね」

円い二つの丘に、半分切った蠟燭が立てられた。三本の火は相当明るかった。

「動くとも倒れるわよ。だから、じっとしてなくっちゃ駄目よ。」

汗ばんだ明美の肌を、三本の蠟燭の火がキラキラと光らせた。苦しそうな呼吸が彼女の圧迫された胸をせわしく動かしていた。

百合子は自分で洋服を脱ぐと、少し大柄な裸身を布団の上に横たえて、大山を呼んだ。

.....

しばらく横になっていた大山は、そっと明美を見た。汗みずくになった体が、三つの明りを忠実に支えていた。蠟涙が白く不規則な模様を作っていた。

明美は、目かくしの下で泣き続けていた。

涙のために絆創膏が少し弛んでいた。みじめな、余りにみじめな仕打だった。熱い蠟涙が肌に落ちる度に、ビクビクと体をけいれんさせ、そしてなお、その蠟燭を支えていなければならなかった。熱さは大したことにはなかったが、体を折り曲げたままにいる息苦しさとも屈辱感で彼女の気持を一層みじめにした。

「さあ、この娘、どうする？ わたし眠くなつたわ。」

疲れたような百合子の声だった。

「外は寒いかな？」

「そうでもないわ。何か着せて置けばいいじ

やないの。」

「うん。じゃ外で眠って貰おう。」

大山だけがガウンを引っかけて外へ出た。街灯が荒れた裏庭を、ぼんやりと照らしていた。

大山は物置から少し短い杭を取り出すと、柱の横の雑草の生えた土の上に一本ずつ木槌で打ち込んだ。二メートル位の間隔で、正方形に四本の杭を打ちながら、ガウンを脱ぎ捨てた。曇った空はむし暑かった。

正方形の真中に花むしろを敷くと、部屋へ戻った。支柱から解かれた明美は、白い体をぐったりと横たえて、百合子の手で撫でさすられていた。

「いい体をしているわね。ほんとに羨しくなっちゃうわ。」

大山が入って来るのを意識して百合子が云った。

「ほら、こんなに涙をためているわ。可哀そうにね。」

絆創膏を外すと涙がこぼれ落ちた。その跡をタオルで拭くと、再び新しい絆創膏を貼りつけた。口に咬まされた縄はそのままだったが、手足の縄は全部解かれ、蠟燭も抜き取られてあった。

大山は放心したような明美を裸のまま担ぎ上げると庭へ出た。なま温い彼女の体温がじかに彼の肌に伝って、彼はちよっと可哀そうな気がした。パジャマ姿の百合子が後から随いてきた。

花むしろの上に仰向けに明美の裸身を横たえると、その手首を別々に綿の縄で縛った。血行を妨げないように少し弛くした。両手を左右に広げさせて、縄尻を打込まれた杭にしっかりと結んだ。百合子は彼の意図を直ぐ理解して、明美の両足首を縛って左右の杭に結んだ。よいしょ、よいしょと掛け声までかけて足首の縄を引張って杭に縛ったので、明美の脚は大きく開かれ、文字どおり大の字の型に地面に磔つけられた。

「ねえ、どう剥ってしまった方がいいじゃない。その方が綺麗だし、いい恰好になるでしょう？」

百合子ははしやぐように云うと、大山のうなづくのを見て家へ入って行った。

「もうこりたかい？ 帰りたい？」

大山は仰向いたままのいましめられた顔に向って言ったが、明美の返事はなかった。

「どうなんだい。いやなら解いてあげるよ」
大山は少し強く明美の頭をゆすった。内心

彼女がこりた意思表示しても、解いて帰すつもりはなかった。じっとしたままの明美に焦燥を感じた。

「じゃ、かんにんしてくれといったって許さないから——」

大山は、円く盛り上った乳房をぐいと握った。ううんと呻いて、彼女は広げられた四肢を僅かにくねらせた。

剃刀や石鹸と湯を用意して百合子が戻ってきた。腋の下が先ず綺麗にされた。

「暗いから照らしてよ」

大山は懐中電灯で照らしながら、自分が奇妙な役割をしているのにおかしくなつてにやりと笑った。明美は剃刀が当てられるや、烈しく悶え、呻いた。しかし百合子は容赦なく剃り上げてしまった。

「さあ、でき上り。これは大切なものだからしばらく置いてあげてね」

百合子は石鹸のついた毛髪を、形良くくぼんだ臍の中へ押し込むように載せた。

「雨でも降って風邪でもひくと可哀そうだから、何か着せてやったらどう？」

大山は家へ戻ってゴム引の男用のレインコートを持って来て、明美の身体に掛けてやろうとした。

「ちよっと待って。これじゃオッパイが淋しいようよ」

百合子はそう云いながら、小走りに家へ戻った。手にヒューズ用の鉛線と、赤い銅線を持っていた。鉛線で小さな乳首の根元を縛り端をねじった。それから銅線を明美の首に環にして掛け、身体の中央から背へ廻わして首の後ろの環に繋いだ。針金の股間縛り——強くはなかったが残酷な一本の細い金属線が明美の肌を美しく彩った。大山は顔面だけを残して、彼女の身体にレインコートを掛けてやった。

「じゃバイバイ、ねえ、いい考えでしょう。彼女とても眠れはしないわよ。それにあのままで用を足すの、素敵じゃない？」

二人は家へ戻った。街灯が消え、静寂が訪れた。明美はもう泣いてはいなかった。みじめに大の字に縛られた自分の身体がいとほしく思えた。冷たい金属が乳首を圧迫し、そして体を少し動かそうとすれば縦にかかった針金がぴんと張って肌が痛かった。

（ああ、わたしって、どうなったのかしら。こんなに残酷な仕打ちを受け、屈辱的な恰好をさせられているのに、涙が出なくなっているのだわ）

彼女はもう完全に身体の自由を奪われ、自分の意思では、もうどうにもならなくなった苛酷な運命を心で受け容れ、そして自分がこうされることが定められた宿命であるかのよう諦めていた。

諦めていたというよりは、甘受していたといった方が当たっているかもしれない。

大山が先刻、いやなら解いてあげると云った時、彼女は返事の仕様がなかった。もっとひどい目にあわしてやる、もうお前の身体も命も俺のものだ——そんな強い言葉が欲しかったのだった。絶対的な支配——それなら諦めもつくし、諦めるための心への口実もできるからだった。優しくされることは、もう今の明美には反って苦しかった。

細い雨が、彼女の顔を音もなく濡らし始めた。蔽われた胴体だけを残して、露出している手足にも水滴を作り始めた。

雨中の晒しもの——明美は泣いてはいなかった。そして次に来る羞恥の一刻をこらえながら待っていた。

〔続稿予告〕

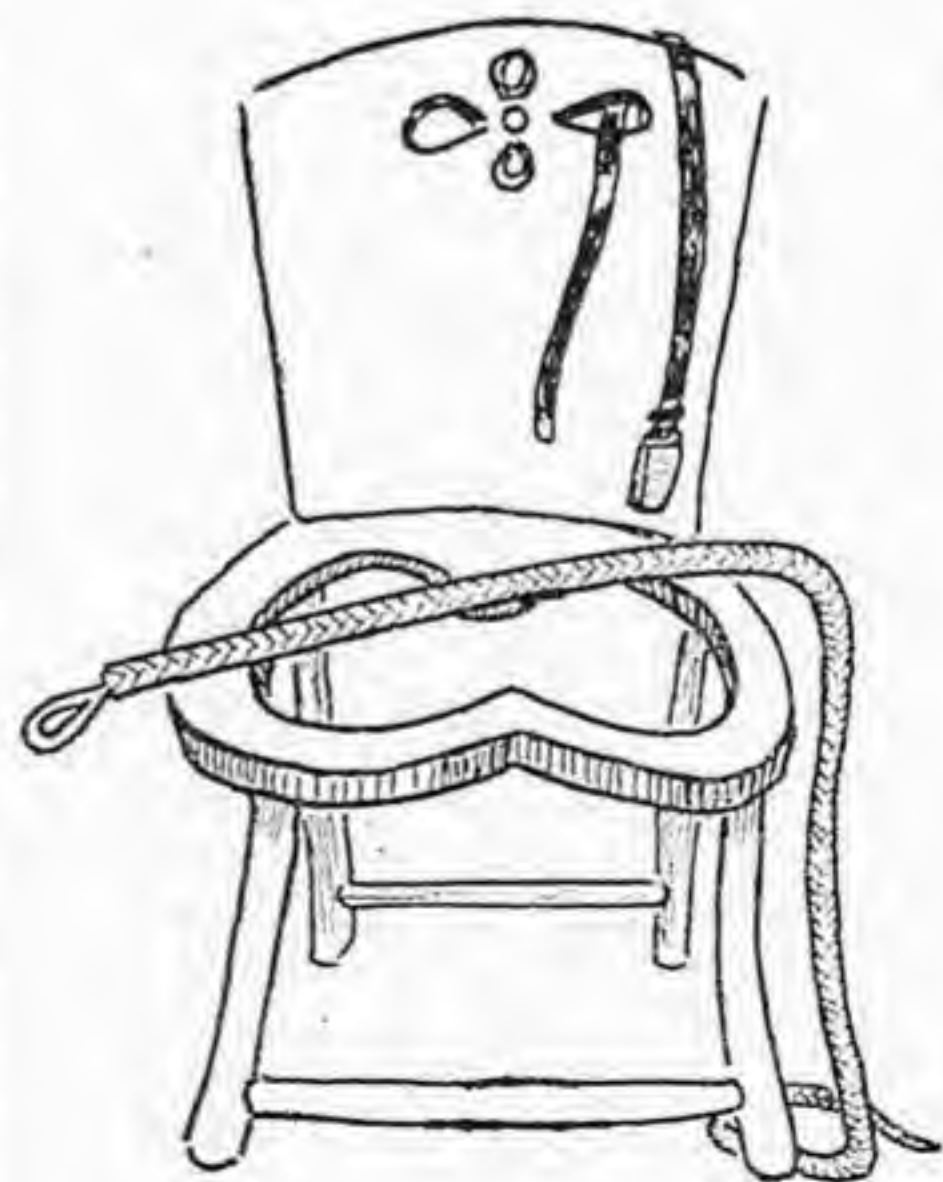
次号 十月号

△吊られて▽△屈辱の夜▽

再びパリ拘置所

心痛たむ遍歴 へ第十三章そのかみのこと(十三) V

西 条 操



パリ拘置所に於けるミシュリーヌの独房にも、初夏の風が少しは爽やかに忍び込む様になった。マイヨール弁護士が二度ばかり来てくれた他は、誰の面会も手紙もなく、日がな一日を唯坐って暮らすと、退屈で気も狂いそうだった。弁護士の話によれば、ラグランジュ氏は彼女のことを気にしながら、商用で長期の外国旅行に近く出発すると云うことだった。

(ああ、ラグランジュ様。一度でいいから面会にいらして下さればいいのに。いえ、そん

なこと考えたらいけないわ。罰が当るわ。けど、いつまで待たせとくのかしら。早くケリをつけて欲しいわ)

激しく襲って心身を苛んだ不安と焦燥と恐怖も、数カ月の拘禁生活を経た近頃では、次第に諦めめの気持ちに変わって来て居た。番号で呼ばれても自然に返事が出るし、ビンタを受ける要領や手の踏まれ方も身についた。

立つ時には両腕が勝手に背へ回わるし、婦人看守が手錠を取り出せば両手が自然に前で揃う。耳掩いたい心地だった鉄扉の施錠の音も

左程気にならなくなったし、粗末な食事にも馴れた。教会へ行けないのは悲しいが、化粧は夙に諦らめて居た。所詮、罪を犯して法の巨大な鉄爪に捕えられた身なのだ。

寒冷は地獄の監房は、それ自体が囚人にとっては拷問に等しい。しかし其の冬も過ぎた今日此頃では、ミシュリーヌはともすれば居眠りしそうだった。居眠りはおろか、壁にもたれることも厳禁だ。ミシュリーヌは其の都度、自分の腿をねるのだった。犯した罪を悔い、諦らめ切った気持ちのミシュリーヌも、誰

かが保釈されて出て行く気配を近くの房に感じる時には、流石に悲しく情なくて、身を切られる想いがする。

ウトウトしかけたミシュリーヌは、一つおいて隣りあたりの監房の鉄扉が開く音に姿勢を正した。婦人看守の何か云う言葉は聞き取れなかったが、続いて聞えた手錠の音に、女囚ミシュリーヌは、ホッとする心地だった。手錠のかかる音は、自分でなくても嫌なものだ。しかし、今は其の音が快よく聞える。

(保釈じゃないらしいわね)

そう思って心休まる自分が、我ながら恥しかった。しかし、保釈の当てもない彼女にとつては、他人をそねむ浅間しさを恥じつつも、ともすればひがみを抑えられなくなってしまうのだ。

(どうせ刑務所へ入れられるんだもの。保釈になった所で同じだわ。あとか先かだけの違いよ)

そう考えて強がっては見るものの、矢張り自由は恋しい。一週間、いや、たった一日でもいいから自由の身を味わって見たいと思うミシュリーヌだった。

「七十八号。面会よ」

監窓が開き、若い婦人看守の赤い唇がそう

云った。常に侮蔑をこめた口調で云う其の声は、忌々しくも恐ろしいベル看守が

「ムシュー・サンシール。逢うの？ 断わってくれた方が、手間が省けていいんだけど」
マイヨール弁護士だと思って居たミシュリーヌは、サンシールと云う男を思い出せなくて戸惑った。

「けど、殿方が来てくれたのに断わる女囚には、お眼にかかったことがないわね」

ベル看守は返事も待たずに鉄扉を開いた。

其の錠の外れる金属音は、何度聞いても耳に嬉しく響く。ミシュリーヌの足は無意識の中に、開いた鉄扉へと動いて居た。ベル看守が握る革ロープ付き手錠が少し哀しいが、此の独房を暫くでも出られる喜びは大きい。

(誰だっていいわ。嫌なら、すぐに戻るだけよ)

ミシュリーヌは両手を差し出しながらそう思った。囚人に錠と鍵はつき物だ。錠のかかった室から出す時には其の体に錠をかけ、鍵を監視者が持つ。例の法務大臣通達以来、朝の運動の時にも何等かの戒具を施すべきだと言ふ意見も出て居る。ベル婦人看守は、女囚の足が通路に踏み出して居ないのを確認し、其の両手首に手錠を叩き込んだ。此の若い娘

のかけ方は、かけられる身にとっては毎度のことながら忌々しい。狭い独房から出ると、通路の湿った空気さえも何だかすがすがしく曳かれて行く一步一步が自由の世界に近づく心地だった。弁護士接見室しか知らなかったミシュリーヌは、初めて一般面会室へ連れて行かれた。

二重の鉄網の向うに坐って居る男を、おずおずと盗み見て、彼女は忽ち思い出した。それは、パリ警視庁の刑事、ロジェ・サンシールだった。

「やあ、ミシュリーヌ。元気かい。僕を覚えてくれてる？」

「ええ。其の節はいろいろと」

膝の上に束ねて置かれた革ロープを指先でまさぐりつつ、ミシュリーヌはそう呟やき、男の顔をちらと見上げて訝かった。

(此のひと、一体何の用なのかしら？ 又、取調べ？ まさか)

「案外元気そうだね。安心したよ。君のことはいつも気になってたんだけど、とうとう何もして上げられなくて」

見詰める男のまなざしを額に熱く感じたミシュリーヌは思い当った。パリ警視庁の地下取調室の午後の一刻、二人きりで居たあの時

の彼の態度や言葉や眼の色、今にして思えば彼女に気があったのだ。

（そうだったの、私のこと、一目で好きになつてくれたのね。それで、わざわざこうして逢いに来て下さったの、でも、仕方ないじゃないの）

彼女は膝の両手の手錠を見詰めて吐息を洩らした。余り好きなタイプの男ではないが、それでも今の境涯の彼女には心嬉しく胸暖まる。

（それとも、私の自惚れかしら？　そうよ、そうに決つてゐるわ）

ミシュリーヌは眩しげに男の顔を見上げたが、化粧の跡すらもない自分を思つて忽ちまつげを伏せた。

「君のこと、いろいろ調べたよ。君の生れや育ちや人柄の良さは、僕には一目で分つたものね。ほんとに気の毒だと思ふよ。辛いだらうね」

「ええ、とても、とても、もう。堪まらないわ」

素直にうなずいたミシュリーヌは涙声で答へ、両手を揃えたまま思い切つて上げ、髪を掻き撫で顔を掩った。革ロープが一緒について上がり、膝に残る束が解けて落ちかける。

あわてたミシュリーヌは手錠をガチャつかせ、ままたらぬ手で革ロープを膝に束ね直した。端が床に触れてもすれば、ベル婦人看守のビンタで頬がはれ上がることだろう。

ロジェ・サンシールは、そんなミシュリーヌを悼ましげに眺め、そして熱っぽい眼と口調で、世間のあれこれを話してくれた。

「しかし、こんな話ばかりしてると、何だか悪いみたいだね」

「いいの。今、スカラ座のオペラは何やってます？　フランス座は？　ラグランジュ様のこと御存知ないかし？　ジェラールですって、彼のことは聞きたくもないわ。それより私、どの位の刑になるの？　教えて」

長いまつげに頬が弱り、其の顔を斜めに打ち仰いでミシュリーヌは必死に問う。乳色の咽喉の両側に、筋肉のすじが柔かくしかし張り切つて盛り上がり、男性なら生唾を呑む色気が漂った。

「さあ、それは。先ず、二、三年かな。気を落とすかも知れないが、執行猶予は先ず難かしいと思ふよ」

「そう、矢張りね。いいの、私、覚悟はしますわ」

午後の面会室の狭い仕切りの中に暫し沈黙

が流れ、女囚の背後少し離れて坐るベル看守が欠伸を抑えた。もう、時間も残り少い。

「ね、ミシュリーヌ」

サンシールが思い切つた口調で云つた。

「君が出る時には、きつと迎えに行くよ。僕あなたが好きなんだ。気持はもう分つてくれるだろ？　今はもう何もして上げられないけど、きつと迎えに行くよ。そして、誓つて幸福にして上げる。だから、ね。いいだろ？　承知してくれるわね？」

ミシュリーヌはうろたえた。

（あのジェラールだってそう云つたわ。私、信じないことよ。でも、こんな所にまで逢いに来てくれて、こんな姿の私なのに、そうまでおっしゃつて下さるんだもの、ほんとかも知れないわ）

ミシュリーヌは複雑な自分の気持を胸にまさぐりつつ、それでも頬に血の色が染んだ。「そうおっしゃつて下さるの、とても嬉しいですわ。けど、奥様が、おありなんでしょう？」

彼女は男の指環を見やった。正直な男だ。「うん、正直に云うよ。あることはある。しかし、名目だけで今はもう他人同然なんだ。君が承知してくれりゃ、すぐに離婚するよ。」

ね、たとえ君がこれから何年間入って居ようと、僕はいつまでも待ってる。誓うよ。あ、君はそんなにして居てさえ、とても美しいよ」

こんな姿を、とってつけた様に美しいと讃えられて、ミシュリーヌは却ってみじめさを味わった。微かなみじめさと哀しさは突然怒りに変わり、こみ上げる感情のままに彼女は思わず叫んでしまった。

「美しいですって、此の私が？ 皮肉云わないで頂戴。もう何カ月も、碌に顔さえ洗ってないのよ」

更に衝き上げて来る激しい感情の嵐。彼女は両手を台上にガタンと置いて身を悶えた。

「これからの何年間かを刑務所で暮らす此の私に、あなたのことをずっと想ってる、と云うの？ そりゃ、あなたはいいでしょよ。けど残酷だわ。それに、あなたとお逢いするのはこれでたった三度目。私、あなたのことは全然知らなくてよ。あなたは私のこと、存分にお調べになったことでしょうけど」

ミシュリーヌの言葉は次第に高くヒステリック気味にさえなり、泣き声が混り、サンシールは驚いて口をあけた。

「こんな私に言い寄れば、喜んで感激でもす

ると思ったんでしょ？ そりゃ、今の私は御覧の通りの女囚よ。こんな服を着て番号つけられて、手にはこんな物を嵌められてるわ。でも、馬鹿にしないで頂戴。出して貰えたら迎えに来るって、何年先のことなの？」

ミシュリーヌは、固い台にしがみついて身を揉む。

「私のこと、そんなに好きなら、今、たった今、ここから出して下さらない？ 私のために何かしてやりたいとおっしゃったわね。なんなら、これを今外して下さるだけでもいいわ。はずして頂戴。手錠なしで歩きたいのよ」

女囚は手錠を台上にこすって鳴らせつつ、肩震るわせて訴え泣き、ベル婦人看守がきびしい顔で立ち上った。女囚の分際で、苦味走った殿方に美しいと讃えられたのが気に喰わない。ミシュリーヌは鉄網に指を伸ばした。しかし到底届きはしない。

「私を好きなんでしょ？ だったら、一日でいいの、ここから出して頂戴。そしたら、あなたの思う通りになすっていいわ」

ツカツカと近寄ったベル看守が、女囚ミシュリーヌの腕を強く掴んだ。

「お黙りッ。何と云うことを言うの？ さ、

時間だよ、お立ちッ」

革ロープが握られてグイと曳かれ、女囚はハッと我れに返った。

（何とひどいことを云ったものかしら。折角来て下すったと云うのに。ほんとに恥かしいわ。私、やっぱりひがんで来てるのね。悲しいわ）

手荒く引かれる革ロープに、手錠が手首に喰い込む。立ち上って曳かれかけながら、ミシュリーヌは振り返って男に詫びた。

「悪かったわ、あんなこと申し上げてしまって。ひがみっぽくなってるのか、つい気が回わってしまうの。気を悪くなさらないでね。ほんとに有難うございました。私、ほんととはとてもとても嬉しかったのよ」

男は立ち上がって鉄網に指をかけ、何度もうなずいて見送った。

「お怒りになっちゃ嫌。ほんとに嬉しいと思ってるのよ。先刻云ったことは忘れて頂戴。お願い」

扉の所で振り返り、ミシュリーヌは更に甘えた。留置場でステラだったか、が云った様に、ミシュリーヌは芯底から女なのだ。その柔かな撫で肩を、ベル婦人看守が舌打ちして押し、扉の外へ荒々しく突き出した。

「今のひと、お前の何なのか知らないけどさあんなに拗ねたり甘えたり、ここを一体どこだと思ってるの？ 報告しといたげる。特に、ここを出してくれて大声で喚き散らしたことをね。何れ処罰が来るわ。そのつもりで居るがいいよ」

ベル看守は女囚を引き立てながら憎々しげに横眼で云い、ミシュリーヌは重い足を引き摺りながら震え上った。

監房区画に戻るや否や

「処罰は処罰としてね、眼の前であんなダメなことされて不愉快だったわ、私。しっかり立っというで」

鉄格子戸を入った所で、ミシュリーヌは猛烈な往復ビンタを喰ってよろめいた。

「う、ヒーッ。お、お赦し下さいまし。どうかして居たんです、私。七十八号が悪うございました」

「ふん。どうかして居ましたで済まされちゃ堪まらないわ。面会はね、静かにさせて頂くのが規則よ。まだまだ済んでないのッ。四つ這いになって、腰を高く上げてッ」

若いベル看守は、上衣の内側から手頃なゴムホースを抜き出した。

「あんた、ゴムホース専門ね。ベル」

近くのデスクの日直看守が声をかけ、四つ這ってわななく女囚を面白そうに眺めやる。「あら、その七十八号はおとなしい方よ。どうしたの？」

「面会室で騒いで、反抗的態度に不穏な言動よ。さあ、いい？ 膝を伸ばすんだよッ。フ、フ、いい恰好なこと。先刻の殿方に見せて上げたいスタイルね」

ミシュリーヌの胸が煮え、汗ばむ両掌に床が冷たい。振り下ろされるゴムホースが尻の肉に鈍く鳴り、広く高い監舎内に悲鳴が低く高く流れた。

（これで又、坐わるのが当分辛いことね。ああ、痛い。どうしようもないけど、ほんと口惜しいわ）

一ダース程打ち据えられたミシュリーヌは火のついた様な尻や腿の痛みに呻きつつ、漸く許されて身を起した。

「おや？ 悪いことをして罰を加えて頂いたんだろ？ 黙ってふくれていいの？ 足りないで不服なら、もう一ダースお願いして見る？」

若い癖に底意地の悪いベル婦人看守は、いつもの趣味のとおり、お仕置きのお礼を言わせる気なのだ。ミシュリーヌは唇を噛んで膝

を床につき、束ねて持たされて居た革ロープを差し出し、手錠の両手で胸を抱いた。

「ありがとうございます」

はしたない自分の振舞いを悔いて居るミシュリーヌだったが、撲られたお礼を申し上げると流石に口惜しかった。相手が年下の娘だけに余計忌々しい。

鼻を吸り吸り二階の独房に戻って見ると、婦人看守が二人がかりで房内を捜検して居た。捜検と云った所で主として寝棚だけの話、初まったばかりらしい念入りの検査もすぐに済んでしまう。何も身に覚えはないが、それでもミシュリーヌは恐怖に息を詰めた。「どうしたんですの？」

とベル看守が訊ねた。

「いえね、例の抽出捜検よ。ここが当っちゃたの。でも無駄ね、ここは何も出る訳がないわ」

答えて白手袋の手を払うのはエメリーヌ、もう一人はアネットだ。二人とも、動作は静かで言葉も穏やか、いつもの通りにやさしい眼でミシュリーヌを眺める。ベル看守はミシュリーヌの手錠を手荒に外して去り、女囚は身体捜検を受けた。

「悪いけど全部脱ぎなさい。仕事だもの、仕

方ないのよ」

「はい」

素直に脱いだ囚衣のすべてをアネットが調べ、体の方はエメリーヌが隅々まで注意深く検査した。やさしくされればされたで、矢張りみじめに情けない。

「あら、先刻打たれてたのは矢張りお前だったのね。可哀想に」

赤くはれた尻や腿を見て、エメリーヌが眉をひそめた。

「ベルはひどいのよ。何かと云うと、すぐゴムホースだし、斜めに背負わせて手錠かけるし、少し注意しようかしら」

アネットがそう云って、最後に調べ終えた下着の一枚を床に投げた。

「うるさいから、ほっといた方がいいわ。好きなようにさせときましようよ」

髪を束ねるゴム紐を女囚に返してやり乍らエメリーヌが呟いた。

「あの、もう着てもいいですかしら？」

ミシュリーヌは立ちすくんで訊ね、アネットとエメリーヌが、キッチリ着込んだプレスに投げられて居る汚れた下着が恥かしい思いだった。

「あ、いいのよ。もう」

「お前、どうして打たれたの？ いつもおとなしいのに珍らしいじゃないの」

「はい。あの、面会室で、つい興奮して大声出してしまったんですの。自分じゃ決して騒ぐつもりなんかありませんでしたのに、あの若い担当さんたら、騒いで反抗的だったとおっしゃって」

「あーら、そりや大変だわ。反抗に取られると重屏禁よ。勿論、面会は当分禁止だし」

震え上ったミシュリーヌは囚衣を抱いたまま、うずくまってわなないた。

「いいわ。私達が何とかしたげる。お前なんか重屏禁の一週間も喰ったら半死半生だわ」

「おお、お願いします」

ミシュリーヌには未だ経験はなかったが、重屏禁の恐ろしさは、受けて出て来た懲罰女囚の姿を見ただけで想像がつく。

「お尻が痛いだろうけど、我慢してちゃんと坐ってなきや駄目よ」

そう云い捨てて出て行くエメリーヌとアネットは、何れもミシュリーヌと同じ年頃だった。其の二人の計らいのお陰で、ベルは忌々しげだったが、ミシュリーヌは重屏禁を免れることが出来た。面会と文通は一カ月の禁止

を喰ったが、孤独なミシュリーヌは、そんなに辛いこととは思わなかった。しかし、彼女は知らなかったのだ。面会禁止を喰って一週間後、ラグランジュ氏が面会のためにひそかに立ち寄ってくれ、そして空しく旅立って行ったのだった。

尻の痛みも薄らいだ数日後、ミシュリーヌは監視窓のアネットに、思い切って哀願して見た。サンシールから娑婆のことをあれこれ聞いたせいか、独房の明け暮れの退屈さに堪え切れなくなったのだった。

「あの、何かお仕事をさせて下さいませんか？ お掃除でもお洗濯でも靴磨きでも、何でも致しますわ、お願い」

「退屈なのね」

監視窓で、アネットの瞳が笑った。

「そりやねえ、どうでも云うのなら働かせて上げるわ。でも、云っとくけど、労役なのよ。矢張り嫌だからやめる、と云う訳には行かないことよ、一旦初めるとね。辛抱できる？」

「はい」

「そう。けど、お前、もうそろそろ公判の頃じゃなくって？ 若し実刑を打たれば、嫌でも労役よ。辛くて苦しくてみじめなのよ、

労役って。甘いものじゃないのよ」

「……………」

「それに、ここで労役すると、恥かしい思いもしなくちゃなくなつてよ。どうしたって社会の人達の目に触れることになるわ。鎖つけられて法院の廊下を磨いて回わるのよ。それでもいいの？」

ミシュリーヌは頭を垂れた。

「やめた方がいいわ。何も自分から進んで嫌な思いをすることはないでしょ」

アネットは低く笑って監視窓を閉じた。嘲笑ではなく、好意といったわりに満ちた笑い声だった。

其の頃、法務省矯正局の明るいオフィスでは、コリンヌ・ルノテールとフランソワーズ夫人とが談じ合つて居た。

「やはり文句云うひとが出て来てる様ねえ」

と、マダム・フランソワーズが新聞から眼を上げ、分別臭そうな声音で云う。読者欄には今日も囚人達の浅間しい姿が街なかで繁々と見受けられる様になったのは、どう云う訳なのか、見苦しくて困るという苦情が出て居るのだ。犯罪抑圧策の一環として打出した行刑実務面の変化がもたらした影響だ。

「その様ね。詰まらないことを喚く連中が居

るものよ。教育上好ましくないなんて、そんな考え方は私には理解出来ないわ」

コリンヌ嬢が眼鏡を光らせる。コンタクトレンズは工合が悪いらしい。

「見苦しいと云うのは分るわ。でも、それなら見なきゃいいじゃないの。そんなこと云つてる連中に限つて物見高く見物してるのよ」

「そうねえ」

「そうよ。私に云わせりゃ、青少年の教育上いいことだと思つて。悪いことすれば、ああなるって教えりゃいいのよ」

「ずい分、割り切っちゃつてゐるのね」

「何だかだと云う連中は偽善者よ。それでなきや、思い上つたエリート意識を持て余してるのよ。こう云う言い方は悪いけど、大衆は、善良なる大衆達は、案外素直に見て受け取つてると思つて」

「そうかも知れないし、そうでないかもね。ま、ともかく、自分達がああならなくてよかった、とは思つて眺めるわね。そして、矢張りどんなに暮らしが苦しくても悪いことだけはするまい、と思つてくれるかしら」

「そりや思うわよ。そして、ささやかな優越感を味わうわね。俺はロスチャイルドみたいな金持じゃないけど、彼よりは正直でまっとうだつて」

うだつて」

「そう、あたしはロレンス夫人みたいな美人じゃないけど、彼女より貞淑だわつてね」

「フ、フ、フ。そうして、彼等大衆達が如何に豚の如く幸福な眠りに就いたことか。あら、何の話してたっけ？　ともかく、閑人達の寝言を気にかけることはないわ」

「護送車を走らせるよりも、荷物列車に乗せた方が安上がりだしねえ」

「そうよ。ウダウダ云う連中は、或いは自分も、ああなるかも知れないと思つてゐるのかも知れないわ。人間社会に悪と犯罪は常に在るわよ、それを無理して隠そうとするから話がこんぐらかつちゃうんだわ」

事務服の娘が書類を届けに来た。

「そうら、遂に来たわよ。これ、労働省からよ。ツーロンあたりで働かせ過ぎたのね、きつと。これ、そのまま課長のデスクへ回わしちゃおう。ちよつとあんた。詰まらない書類ばかり持つて来ないでさ、今度来る時はコーヒーでも持つて来てよ」

(未完)

限定版……………写真集

美 し き 縛 し め

第四集

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号 (美4)

△華々しき女体緊縛の組写真集△

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに、加えるにベテラン大塚啓子の極最近撮影のフォトなど、ここ数ヶ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アートの紙によって、皆様にごらんいただけます。写真はいつでも未発表のとおき

の傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴をそれぞれに十二分に發揮した文藝的価値豊かなフォト揃いです。春の暖気に匂う花の如く全紙面から、にっこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に見ていただけます。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

待望久しきアルバム「美しき縛しめ」(第四集)ここに完成、御注文下さいました皆様へいち早く発送いたしましたところ、予想通り、素早い出来ばえと讃辞を頂いております。目下のところ、本誌に於けるグラビヤ写真の掲載が自粛せざるを得ない情勢です。マニヤの方々のコレクション用としての写真集の充実が叫ばれる所以であります。

本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によって、部数は極めて少くはありますが、秀なフォトを盛沢山に収容しております。今後、御期待にそいたいと考えております。今後、次発売してゆきます写真集を全部お揃え下さいますと、本誌女体緊縛の主要なものも網羅されることになり、文獻蒐集としても極めて有意義なものとなることでしょう。

◇写真集(アルバム)内容◇

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)
ブロック石抱き責め (木村洋子)
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
革拘束具による組写真 (大塚啓子)
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)
セーラー服緊縛組写真 (大塚啓子)
野外に於ける晒責写真 (玉田、木村)
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
両足吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉△

以上の通り、本誌のグラビヤにして、何れ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アートの紙に対する鮮明なるグラビヤ印刷によって、写真集を完成いたしました。必ずや皆さまの御満足を得ることと信じます。限定版につき、御満足を得ることと信じます。数にお限りがあり、売切れになります。早くお申込み下さい。

愛読者告白原稿

「ゴム裏草履に憑れた男の告白」

須磨孝

無くて七癖、有って四十八癖とは、昔より今に伝えられて来た古い諺ですが、確かに広い世間の人達には様々に変った癖を備えている事実を見聞するものです。

私は、本誌を愛読以来二年数カ月になりましたが、読者の皆様の熱心な投稿記事を拝見するにつけ益々其の感を深めます。斯く言う私自身が、余り他に例をみないと思える性癖の持主であってみれば、本誌の記事内容の一言半句をも熟読翫味するのは勿論、私が三十の坂を越える今日迄、誰にも秘めて語り得なかつた病的な性癖の有体を告白の手記として発表し、広く皆様の意を問うと共に、或いは、

これを機会に同好の志を発見出来る僥倖に恵まれる事を期待しております。又の希いは、惨じめな性癖の実体を幾歳月秘めて語れなかつた結果が、最近では精神的に内攻の極に達した現在、自分の恥部を公表する事に依り、一刻も速く内心の重圧より脱したいと念ずる事が、全く偽りのない今の心境です。

然し、それとて、自身の恥部を露わに表示する事の苦痛には日夜煩悶しましたが、この様な機会を逸しては生涯言えぬ悔を残し泣く事は必条と思ひ意を決しペンを執りました。処で博識の皆様は、先刻御存じの様に、人間と言う生きものは、洋の東西、男女の別を問

わず、加虐性、被虐性いずれかの性向を、具體的には勿論、潜在的にも奥深く保有しているものでありとする事実には就いては、多くの該博な心理学者や精神分析学の権威者が、種々の事例を挙げて説いている処です。特に本誌愛読者各位の体験談、告白の手記、或いは創作等に見る緊縛、浣腸、鼻責、鞭打、更には斬首、絞首に、切腹への憧憬等々は、其の例の最たるものと思いますが、私自身はなんの経験はなくても其の辺の悦虐の醍醐味は観念的には十分理解出来ます。私も又、緊縛された五体を、草履を履いた女の足で心行く迄責めて貰い度い欲望はなんとも否定出来ない

事実です。

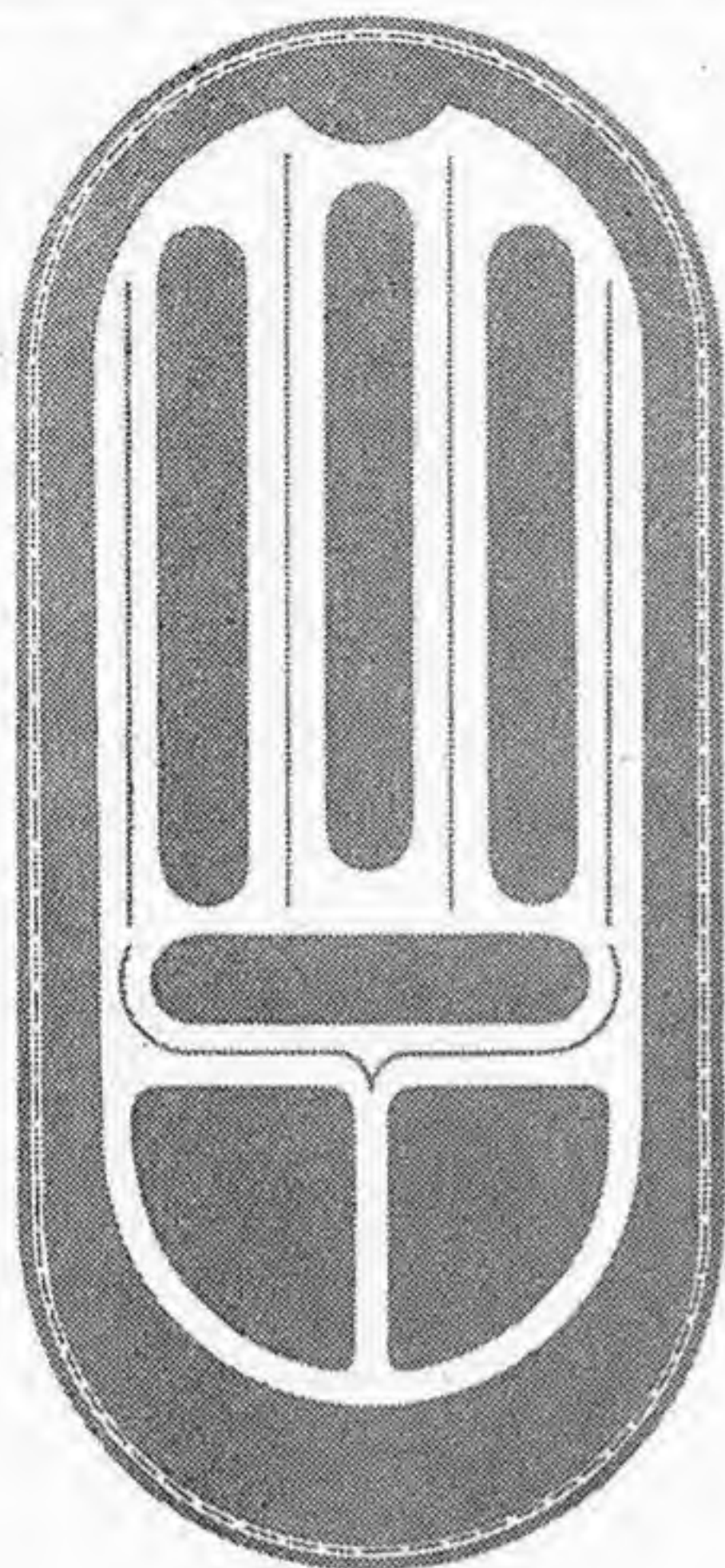
ならば私の性癖の有体は？、言う事になりますと、それは所謂『ゴムマニア』と言う一言に尽きるのです。特に私の性癖の傾向は、物の本に拠る処の『履物崇拜癖』と言う、大変に角度の違った形で具現される性質のものなのです。今迄に本誌に紹介されて来たゴム党の人々が愛好する対象物は、ゴムの手袋、パンツ、ゴムレインコート、海水帽ゴムの猿轡等々でありましたが、これ等の品々は私の意に、十分に叶う物ばかりであります。しかし唯これだけの事ならば殊更に特異な傾向で

はありません。私の場合は、同様のゴム党であつても、真に愛好の対象となる物が、もつと異質な、それも厄介な条件を必要とする物で有るが故に、今日迄、随分と懊悩して来た訳なのです。

私は異質な物とは書きましたが、私同様に『履物崇拜癖』に憑れている人々は、内外国人共に決して珍奇な傾向のものではなく、特にこの癖の傾向は、外国人の男性に著しく多く、彼等の一部は、ハイヒール等の女の靴の臭いを嗅ぎ、接吻し、或いは肌身に抱いて寝、果ては自慰に耽けるとも説いてありまし

た。私の場合の所作事は全くこの亜流で、唯私の欲する物の対象は、女性のゴム裏草履か、ゴム底のスリッパ、或いはサンダルに限る事の違ひなのです。それと、更に特筆をすべき条件には、右に挙げた履物の総べてが、商店の店頭で、商品として販売されている新しい物ではなく、それ等の履物が、実際に一度ならず女の素足に履かれて、有る程度迄使い慣された物でない事には、私の欲望を遺憾なく満たしてくれる事にはならないと言う事実です。

履物崇拜癖の私では有つても、女の履物ならば総べて好いと言う事ではなく、それが皮革製、木製の物には全然食指は動かない事は勿論、仮に、裏がゴム裏ではあったとしても、靴と名の付く履物には、興味はありません。かと言って草履ではあつても特に最近の海浜等で多く見掛ける総ゴム製の草履などは論外の沙汰と言うに至っては、吾々ら、この不思議な心理状態に就いては、どう説明の仕様もありません。前に記しましたので、多言を要する迄の事もなく、私が常時、寝てもさめても忘れる事のない異型的な女の履物は、昔から履かれていた、あの畳表の付いたゴム裏草履の事なのです。特に戦前の人々はご存



ゴム裏草履のうら

じの様に、当時、学校病院等で多く上履き用として履かれていたゴム裏草履で、其の頃は現在売られている様な、自転車の古タイヤを廃物利用して草履底ではなく、草履用専門に造ったあのゴム裏を使っていました。（カット参照）それも最近では、其の姿を垣間みる事も出来ないのは、全く、やりどころのない腹立たしさと寂しさを覚えるのです。

どうも大変に草履談義が永くなり誠に申訳なかつたと思いますが、履物崇拜癖の私が、心中より欲する女の癖物に対しての好み、条件と言うものの輪郭だけはこれである程度迄掴んで頂けた事と思います。サテ、大体私が女のゴム裏草履やゴム底スリッパに魅惑を感じると言うような性癖が、何時頃より私の体内に芽生えたのか私自身識る由もない事なのですが、最初の衝動は、確か私が、小学校の三、四年児であつた頃、私達の受持ちの若い女教員が、上履きに履いていた紅緒のゴム裏草履に得も言われない憧憬を覚えました。

三十年以前の女教員の服装と言えば、現今の様な洋装一辺倒とは異なり、学校の先生、それも特に地方の学校の先生の服装は、例外はあつたけれど大多数の女教員は、海老茶か紫の袴を腰高に締め、清潔な白足袋の足に若

ければ紅緒、中年の教員ならば紺の緒の付いたゴム裏の上草履を履いて教壇に立つと決まっているような時代でした。

私は生意氣にも、其の若い受持訓導が大好きで、彼女が二階への階段を昇っていく時など、私はよく後から数歩遅れてついていきました。それには私なりの目的があつた訳なのです。それは、彼女が一段昇る毎に翻える上草履の裏を間近かに覗き見度い、と言う欲望に外なりませんでした。然しそんな程度の事では我慢の出来なくなつた或る日私は例の様に数歩遅れて昇る階段の途中で、故意に躓いて転び、驚いて顧り立停つて彼女の足下に顔を寄せると「痛い」と言う素振りをみせながら尚彼女の草履に鼻を密着させ、彼女が心配気に私の背中を労わり撫せている間に、寸秒を惜んで、床に接したゴム裏草履特有の素晴らしい匂いを夢中で嗅いだものでした。今思うと冷汗三斗の事も、この頃ではそんな遠い日の一駒が昨日の事の様に懐しく、鮮明な記憶で残っているのです。

そんな私の事ですから、一歳を重ねる毎に女のゴム裏履物に対する執着が、育ち募つて来るばかりでした。昭和十七、八年頃と言えば私は中学校を卒えたばかりで、当時、横

浜に在つた或る大軍需会社に、一工程係として、毎日なんの感激もない明け暮れを過していました。私の配属は、精密機器の組立て工場で、男二割に対し女八割を占める其の配属工場に勤める事は、毎日の仕事に対する無自觉とは逆に大変に楽しい限りでした。

それは、精密機器の組立てと言う仕事の内容上、土足に依る入室は堅く禁止された室内では誰もが上履きを履く事になっていましたので、百名を越える女子社員も例外ではなく、皆草履やスリッパを履いていました。当時の事を想い、私流に言うところにはゴム裏草履の黄金時代でした。広い工場内部の作業台には、上履きを履いた娘達が何列にも並び熱心に作業を続けていました。銘々の作業台の前には各自で記入する作業進捗表が吊してあり、それを午前と午後二回に集計して歩くのが私に課せられて仕事の一部であつたのです。毎日毎度の厭な仕事も、其の集計時間だけは、或る意味にて譬え様もなく素晴らしく楽しい一刻でした。向う側の椅子に掛けて仕事をしている娘達の姿態は皆一様でしたが、作業台の下に見える彼女等の下肢は思い思いの楽な形を工夫していました。

班点のある太く汚ない肢、血管の透けて見

える様な清潔で可愛い肢、意地の悪い肢、素直な肢のそれが上履を履いて台の足掛けに載せていました。この状態は集計をして歩く私の側よりみると草履やスリッパの裏を完全に視る事が出来、特に私の意中の娘の作業台の前では、仔細気に首を傾けて台帳に数字を記入している様子を相手に与えながら、其の美しい素足に履かれたゴム裏草履を、ときめく胸を鎮めながら喰入る様に凝視したものでした。時には誤って彼女達の足から床に落ちてゐる上履きをみると、私は黙って拾い足掛けの上に戻してやりました。其の動作はほんの瞬間の事でしたが、ゴム裏の冷たい感触を掌にした時の感情は、胸に火花を散した様は快感で下腹迄も突通る様な思ひでした。

そんな私の心境など、娘達は知る由もなく拾ってやれば「有難う」と素直に笑って礼を言う彼女達の間に「須磨さんって親切な人ね」と言う評判を買ったのは、情けなくも又皮肉な事でした。そんなこんな毎日は楽しみ、反面、なんとも言えない自己嫌悪で厭になる事もありましたが、ゴム裏草履に憑かれた男の執念は、唯単に『見るだけ』では納まらず、飽く事を知らない現実的な欲望に抗し切れずに、自分の醜い『行為』を嫌悪しながら

も、煌めく様に瞬間『感じる』快樂に身を委ねる結果になるのでした。

私は自分の醜い行為を浄化させる方便ではなく、其の行為を『魂の祭典』と、自身の心に言い聞かせていました。そして月に何度か行う祭典の日は、夜になるのが随分と永く思われた事でした。私が鬼の祭典と呼ぶ儀式の場は其の工場の表面出入口の内部が選ばれました。其処は広いコンクリートの土間になっていて、右左と中央に三段造りの下駄箱がズラッと並び、下には、履き替えに必要な簀の子板が敷いてありました。其の場所は、朝の出動時と退場時間の際は、それぞれの履き替えを急ぐ娘達の群れで、溢れる様な混雑を呈しました。

然し退社の時間が過ぎ、残業者もない時の工場内部は、森閑として気味の悪い程の静けさの中に沈んでしまします。当時は戦争中の事として僅かに一ツ点灯してある土間の灯も管制用の黒い布を捲いてある為に光の散逸を防いでいて、そんな深海の底の様は静寂の土間に、唯一人秘めたる想いを抱いて佇む私の胸の内は、毎度の事ながら、早鐘を打つと言う形容の通りでしたが、淡い光の中に浮ぶ下駄箱の棚には、あの娘この女の上草履やスリ

ッパが様々な姿態で並び、私の行為を待つて一様に息付いている様でした。

私は四辺に人の気配の全くない事を認めると、特に意中の娘の草履を熱した掌で掴み取り、興奮で燃える自分の頬に無二、無三に押当てながらゴム裏の匂いを存分に嗅ぎ、時には甜め、噛む事もありました。適当に踏み減ったゴム裏の匂いと、女の足裏の臭いの染みだ畳表の匂いとが渾然と融け合い、益々私の五管を刺激しながら羽化登仙の想いと導いていくのです。女の体重を受けて減ったゴム裏の傾きや畳表に薄く印された可愛い足指の跡等をみていると、鮮烈なゴムの匂いとが一体になって、素晴らしい感覚で直接其の女に結び付き、女が常時身に着けている下着類から果ては其の裸身の有体をも如実に想像出来るのです。そしてそれ等の虚像を想念の上で益々明確なものに仕上げ乍ら何時しか其の感想が極限に達しつつ、爆発的陶醉に至る終幕までゴム裏草履が介在するのです。これは又なんとも恥ずべき所業ではありますが、この瞬間にこそ生甲斐を覚える、所謂、私の桃源境であってみれば、この性癖だけはなんとも制し兼ねる仕儀で、一般的にこの種の行為の事後にくる虚脱感とは逆に、私の場合は、一種

崇高とも言える魂の鎖りを感じるのです。

ここ迄書いては参りましたが、私の性癖の实体を、などの程度皆様に御理解頂けたか、大変に心もとなく思い乍らも、一度ならず実際に女の素足に履かれた履物でない事には満足出来ない云々——と、前述した条件に対しての理由に就いては、御納得頂けたかと思ひます。事ほど左様な私のこと故に、ゴム裏草履やスリッパと『女性』は実に密接な関係にあり、異性を想う時の底辺には必ずこれ等履物の幻影が介在し、又ゴム裏草履を見れば女を連想すると言う、こんな因果な『性』（さが）は恐らく私の五体が灰になる迄消え去る事はないであらうと、なかば観念をしている昨今です。

尚蛇足乍ら付け足しますが、且つて遠い日の私が童貞を失った夜、友と二人で散々に歩き廻った紅灯の街でふるえながら吾が体を託した娼婦は、決して其の女の容姿に魅せられたのではなく、女の青白い小さな足に赤い鼻緒のゴム裏の上草履が履かれていただけの事で、敢えて『聖夜？』を共にしたのでした。薄暗い部屋で枕を並べ乍らの私は、思い迷った揚句、飲んだ酒の生酔いの力を借りて自分の恥すべき愚癖に就いて、細々と女に語りま

したが、始終、苦笑しながら聞いていた娼婦に、耐え難い屈辱を覚えしました。然し、其の女は暫らく思い惑う風にありましたが、遂には自分より進んで私の意に添う様に懸命な心意気を示してくれました。私は其の一夜を機に何度か女の許に足を運びましたが、それも東の間の幸福で、とうとう私が恐れていた軍籍に入る事に依り終止符が打たれました。

ゴム裏草履の想念に憑かれた男に、次のような挿話がありました。戦後の年月も大分経た或る日、私は所用があつて田園情緒も豊かな静かな午後の文化住宅地を歩いていました。私はと或る一軒の家の前で思わず立ち止まり目は一点に釘付けになりました。私は見たのです。其の家の垣根の上に、無造作に一足のゴム裏草履が隅に干してある事を。それは青い緒も大分色褪せた草履でしたが、道に面して向けられているゴム裏は夢寝にも忘れた事のない昔の姿の俣の形でした。

私は胸の動悸も激しく総べての思念は其のゴム裏草履の存在に集中され、汗ばんだ掌を固く握り締めた俣、歩く事の意志を全く失っていました。其の内くだんの家の庭に四、五歳位の男児が姿をみせ、私を認め暫らく佇んでいましたが、間もなく家の中に入って行き

ました。すると、直ぐに一見其の児の母親と思える女と連れ立って、再び庭に出て来ました。其の女は美人の部に入っている人ではありませんでした。好く均整のとれた体を黒ばいセーターで包んだ立姿は、如何にも人妻らしい余裕を感じさせる雰囲気漂わせた好ましい感覚でした。然し、私を直視する瞳は、得体の知れない男に対する恐れのような咎める様な、そんな動きが察知でき、私は心中の動揺を見透かせられたような狼狽を覚え乍ら意味もなく軽く頭を下げると足早に其処を離れたが、明らかに道路迄出て来て私の姿を見送っている女の視線を痛い程に背に感じて歩を運ぶ私の心境は、複雑以上のものでした。

それは、あの主婦になんと間違えられたかは、容易に想像出来る事に対しての自己嫌悪と、脳裏に焼付いた俣の絶品とも思える草履が、あの家の何処の場所で履かれているのかと、言う想像と共にあの女の素足に履かせ、其の四肢を思う存分に自由に出来る事の権利を持つ女の夫に対し、激しい憎悪と限りない嫉妬の為に、恐らく私の顔は蒼ざめていた事と思ひます。ほんとうに惨じめです。私と言う男は。こんなおぞましい『性』（さが）を身につけて生れた私は、この身をこの世に送

り出した両親を恨む術もなく唯々天の配剤を呪うだけです。

然しその私も、自分の恥部を拙文に託し発表をした事に依り、全く重い肩の荷を今卸した、と、言うそんな安堵に似た感に浸っている現在の心境を、大変に満足に思っているのですが、ゴムのレインコートに身を包んだ身体に、ゴム裏草履を履いた女を理想像とし、女の足許に常に注意を怠らない又明日よりの

明け暮れは、避ける事の出来ない宿命と思ひそれは又それで観念しています。

最後に一言、この私の拙文を御読み下さる光栄を与えて下さいました方々へ万々のお願いは、私の希求するゴム裏草履が、御近辺に売られている様でしたら姓名住所在社にしてありますので、是非共御一報下さいませ。狭いとは申せ、日本の国の津々浦々の何処かに、私にとっては幻のゴム裏草履が、秘そか

に隠れている様な気がしてなりません。何卒心ある方々よりの吉報を、心待ちにしています。

尚履物崇拜癖の私が、ゴム裏草履を履いた女の足で、責められ度いと思う余りの妄想が、どの程度のものかを、知って頂く事も決して、無意味ではないと思いますので、又の機会に投稿の節は、御披見の上、皆様方のご批判を頂き度いと思います。

(完)

本誌既刊号在庫一覧表

残部僅少！ お申込みはお早く

○本誌の既刊雑誌は最近発行の分を除いて殆ど残り少なくなつてしましました。

○左記一覧表の中、価格の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。

○送料は当社にて負担いたしますが、定価一五〇円の雑誌のみは送料を含めてお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和35年6月号 (定価三〇〇円)
昭和35年7月号 (売切)
昭和35年8月号 (売切)
昭和35年9月号 (売切)
昭和35年10月号 (売切)

昭和35年11月号 (売切)
昭和36年1月号 (売切)
昭和36年2月号 (送共一七〇円)
昭和36年3月号 (送共一七〇円)
昭和36年4月号 (送共一七〇円)
昭和36年5月号 (売切)
昭和36年6月号 (送共一七〇円)
昭和36年7月号 (売切)
昭和36年8月号 (売切)
昭和36年9月号 (売切)
昭和36年10月号 (定価二〇〇円)
昭和36年11月号 (定価二〇〇円)
昭和36年12月号 (売切)
昭和37年1月号 (売切)
昭和37年2月号 (定価二〇〇円)

昭和37年3月号 (定価二〇〇円)
昭和37年4月号 (売切)
昭和37年5月号 (売切)
昭和37年6月号 (売切)
昭和37年7月号 (定価二〇〇円)
昭和37年8月号 (定価二〇〇円)
昭和37年9月号 (定価二〇〇円)
昭和37年10月号 (定価二〇〇円)
昭和37年11月号 (定価二〇〇円)
昭和37年12月号 (定価二〇〇円)
昭和38年1月号 (売切)
昭和38年2月号 (売切)
昭和38年3月号 (売切)
昭和38年4月号 (売切)
昭和38年5月号 (売切)
昭和38年6月号 (売切)
昭和38年7月号 (売切)
昭和38年8月号 (売切)
昭和38年9月号 (売切)
昭和38年10月号 (売切)
昭和38年11月号 (定価二五〇円)
昭和38年12月号 (定価二五〇円)

昭和39年1月号 (定価二五〇円)
昭和39年2月号 (定価二五〇円)
昭和39年3月号 (定価二五〇円)
昭和39年4月号 (定価二五〇円)
昭和39年5月号 (定価二五〇円)
昭和39年6月号 (定価二五〇円)
昭和39年7月号 (定価二五〇円)
昭和39年8月号 (定価二五〇円)
昭和39年9月号 (定価二五〇円)
昭和39年10月号 (定価二五〇円)
昭和39年11月号 (定価二五〇円)
昭和39年12月号 (定価二五〇円)
昭和40年1月号 (定価二五〇円)
昭和40年2月号 (定価二五〇円)
昭和40年3月号 (定価二五〇円)
昭和40年4月号 (定価二五〇円)
昭和40年5月号 (定価二五〇円)
昭和40年6月号 (定価二五〇円)
昭和40年7月号 (定価二五〇円)
昭和40年8月号 (定価二五〇円)
昭和40年9月号 (定価二五〇円)
昭和40年10月号 (定価二五〇円)
昭和40年11月号 (定価二五〇円)
昭和40年12月号 (定価二五〇円)

○極め、在庫の僅少な分がござい
ますので、第二希望品がござい
たらお書き添え願います。

「ま、浅草で一流といわれた調教師、鬼源が奮闘してるんですから、その点、まかしといて下さい」

と、川田は自信ありげに笑っている。

森田も、それに調子を合わせて、

「何しろ、社長、御婦人方が、素人とはいっても、どれもこれも飛びきりの美人ぞろいなんですからね。見る者の度々モを抜く事、受け合いますよ」

と、これも自信充分である。

映画女優の山本不二子そっくりの静子夫人が舞台に立った時、あっけにとられた観分衆の顔が眼に浮かぶよ、と田代も上気嫌であった。

そこへ、ひよっこり、鬼源が入って来る。

「ああ、朝から御苦労だな。どうだい、奥さんと京子嬢は？」

田代は、眼を細めて鬼源を招き、コップを渡して、ビールを注いでやる。

鬼源は押し頂くようにしてコップを持ち、うまそうに一息に飲み乾すと、

「ま、色々苦労した甲斐があつて、同性愛プレイは完全なものになりましたよ。それだけではありませんよ。今朝は、あの令夫人、とうとうバナナを切つて見せましたぜ」

それを聞くと、田代も森田も顔を合わせて大声で笑い合う。

「そうかい。あの遠山令夫人、遂にそこまで進境したかい」

鬼源は、出歯をむき出して追従笑いをしながら、

「最初は、泣いたり、わめいたりして、ずいぶんと手古づりましたよ。だが、ここまできりや、こっちのもんてさあ。午後からは、生卵を使つての芸当を仕込み上げますよ」

そういう鬼源の報告を聞くと、田代も森田も、すこぶる満足げな顔をし、盛んにビールを鬼源にすすめる。

ところで、美津子や小夜子達はどうかという事の相談になったが、鬼源の意見としては、第一回目のショーに出すのは、まだまだ無理、しかし、第二回目までには、徹底的に調教して、必ず出演させる、ということである。

「俺の考えなんです、こうしちゃどうでしょう。あの文夫っていう若造と美津子をですね——」

鬼源は美津子と文夫とが恋人同志であり、その激しい愛情を逆用して——と彼の着想は田代達の舌を巻かせた。

「てっとり早くいえば、二人の思いを遂げさせてやるんですよ」

鬼源は、ニヤリと口を歪めて、田代の顔をうかがうようにしている。

「吉沢兄貴にや悪いが、まだ、起き上れない怪我人だ。一つここは、森田組のためにゆずってもらわねえですよ。美津子だって、好きな男とそうなりや案外素直になつて、そのままショーに——」

なるほどな、と森田は、大きくうなづく。

「そりや名案だぜ。そんなコンビが出来上りやショーもバラエティに富むつてもんだ。どうです。社長」

田代も、楽しそうに幾度もうなづく。

「その役目は、銀子と朱美達にさせようじゃありませんか」

川田がそういうと、森田も鬼源も賛成し、早速、川田は、銀子達のいる二階へ向つた。

恐しい計画

二階の隅に近い一部屋を当てがわれている葉桜団のズベ公達は、花札、トランプ、丁半バクチなどをキャツキャツ笑いながらやっている。

川田は、彼女達の部屋へ入るなり、大声で

どなった。

「明日から、いよいよショーの開幕ってのに何をのんきに遊んでやがるんだ」

「大きなお世話だよ」

とズベ公達は声をあげて笑う。

「一体、あたい達は何をすりやいいんだよ。閑で困ってるんだ。仕事がありあ、何でもするよ」

悦子が、力一杯めくった花札を布団にたたきつけていうのだった。

「へへへ、おめえ達の喜びそうな仕事さ。美津子と文夫の二人をよ。夫婦にするんだ」

川田がいうと、ズベ公達は、一せいに川田の顔に眼を向ける。

「美津子と文夫を——」

銀子と朱美も、眼をパチパチさせる。

「美津子は、吉沢兄貴のスケにするんじゃないかったのかい」

「事情が変わったのさ。吉沢兄貴は、あの通りまだ起きられねえ怪我人だ。ここは一つ、森田組のため、ないてもらうより仕方がねえ。つまり、美津子と文夫をコンビにするってわけだよ」

そりや愉快だわ、とズベ公達は調子づく。

吉沢には川田から説明し、納得させるとい

うからには、ズベ公達に異存のあろう筈はない。

「ね、美津子と文夫の調教は、あたい達に任せておくれよ」

悦子が何か魂胆ありげにいうのだった。

「よし、任せるぜ。ところで、美津子の断髪の方はすんだのかい」

「まだなんだよ。吉沢兄貴にハサミを入れさせるのが筋だと思ってたからね」

「そんな事にこだわる必要はねえ。今日中にてっとり早く仕上げるんだ。何しろ、客は多いのだからな。静子夫人と京子のものだけじゃ、足りねえかも知れねえ。」

川田は、いやらしく唇を舌でなめて、そういうのだった。

川田が、再び森田達とショーの打合せのために部屋を出て行くと、銀子は、悦子や義子に命じて、地下倉に押しこめてある美津子はこの部屋へ連れて来させるのだった。

言語に絶するズベ公達のみだらな責めを、それも恋人の文夫と一緒に加えられて、一時は全く虚脱してしまった美津子であったが、二三日休養を与えられたためか、かなり生気をとりもどしていた。

「ホホホ、段々と女らしい身体つきになって

きたわね。あたい達も仕込み甲斐があったというものだわ」

朱美は、悦子にひき立てられて来た美津子を、ギラギラする眼で眺めながら、そういうのだ。

その上と下を細いロープで固く緊縛されている白磁のようにふくらと成熟した乳房、弾力のある盛り上った尻、すらりとした肢、健康な美しい十八才の肉体である。

緊縛された姿を悦子に縄尻とられて入って来た美津子は、これから、この場所で、このズベ公達に何をされるか、大体、想像はついているのだろう。銀子と朱美の顔を見た途端、それだけはしないで、と哀願するように美しい顔を振り、その場へ身をちぢませ、剃られるのをこばむように、びったり立膝をする。それは何ともいじらしい風趣にズベ公達の眼に映ずるのだった。

「三日も延長してあげたんだ。充分お名残りも惜しんだでしょ。今日は、遠慮せず、きれいに剃ってあげるから、ちゃんと覚悟をきめて頂戴ね。さ、物置に行きましょう」

朱美はそういうと美津子のスベスベした背の途中で交錯され、固く縛り合わされている両手首に手をかけて、美津子を上へ引き起す

のだった。

「一階の物置には、貴女の恋しくてたまらない文夫さんが監禁されているのよ。ね、もう覚悟は出来てるわね。文夫さんに、一切を見せてあげるのよ」

マリが含み笑いしながら、美津子の耳もとにいうのだった。

「あれだけの事を二人で見せ合ったじやないの。今更、恥かしい事なんかないでしょ」

マリは更にそう浴びせて、真赤な顔を伏せつづけている美津子の顔を、のぞきこむようにするのだった。

さ、行きましょ。と、朱美が美津子の縄尻をとり、邪怪に美津子の背を押した。

ふらふらと二、三歩歩いたものの、美津子はたまらなくなったように涙にうるむ美しい瞳を、背後で縄尻をとる朱美に向けるのだった。

「お、お願い。どのような目に合わされてもかまいません。けど、そ、そんな姿を、文夫さんに見せるのは嫌っ、後生です。それだけは許して——」

引き立てようとする朱美と銀子にさからって、美津子は身をよじり哀願し始めたのだ。

銀子は、フンと鼻で笑いかえす。

「もうすっかり、あたい達に従順になったとばかり思っていたら、まだそんなことで駄々をこねるの。これじゃ、また考え直さなくちゃなんないわね」

つづいて朱美が、

「仕方がない。姐さん、やっちまおうじゃないか。」

「何をさ」

「美津子の前で、文夫をバツサリさ。」

それを聞くと、美津子はハッと血の氣を失った顔をあげる。

「もともと足手まといなんだから、やっちまおうと思っただけだ。じゃ、文夫をここへ連れて来なよ」

銀子にいわれて、マリ達が出て行こうとすると、美津子は、悲痛な声をはりあげる。

「待って、待って下さい」

「じゃ、もうあたい達にさからわないと約束するんだね」

朱美に笠にかかって、美津子をつつく。美津子は、消え入るようにうなづいた。

「そうかい。貴女がそういう風に素直になっしてくれらなら、あたい達も、貴女に対して、すばらしいプレゼントがあるのよ。つまりね貴女を吉沢さんの女にする事は中止したの。」

それほど嫌ってる人の女にするのは可哀想だからね。まあ、くわしい話は断髪式がすんでからしてあげるわ」

銀子は、そういつて、美津子の背をつつき前へ押し始めた。

「そのかわり、何時かのように、あたい達が今から教えてあげる科白をいいながら、心から感謝して、剃ってもらわなきゃ駄目よ。いいわね」

朱美は、銀子に引き立てられて行く美津子の耳もとに口を寄せながら、ニヤニヤして何かささやき始めるのだった。

千代夫人

その頃、川田は、遠山家に住み込ませてあった妹の千代と彼女が連れて来た伊沢という弁護士を名乗る男と、一階の応接間で対していた。

千代が至急話したい事があると先程電話をかけてよこし、寸時の中には、このキザなふちなし眼鏡をかけた自称弁護士なる男と連れ立ってやって来たのである。川田にしてはスパイとして、遠山家に住みこませてある千代の訪問を受けるのは、尾行などされているのではないかというような不安で、むしろ迷

惑な気分であつたが、千代と伊沢の話を知っているうち、川田の顔は、喜色に満ち、思わず立上つて、奇声を発するのである。

——というのは——遠山が発狂し、勿論、美しい最愛の妻が行方不明となつた事が原因であるが、千代を静子夫人と間違えて、或る日、肉体関係をむすんでしまったというのである。千代は、三角眼で顴骨が出っぱり、おかめにあらずひよつとこに近い醜女で、そのため、三十近くなつても嫁の口もなく、女中奉公をつづけている哀れな女なのであるが、それを、絶世の美女と評される静子夫人と間違えて、関係をせまるなど、遠山の狂いようは尋常のものではないようだ。だが、都合のいい事に、人眼には狂つたとは見えず、側に仕える千代だけには、わかつているものだといふ。千代は、遠山に自分は静子夫人ではない事を声を大きくして説明したが、傑作なことに、遠山は、静子でなくとも、静子にお前はそっくりだ、結婚してくれ、とかきくどいたそうさ。それだけではなく、この遠山家の財産は半分はお前にやる、うそと思うなら、弁護士を呼んで、正式の手続をとつてもよい、というので、千代は、知り合いの悪徳弁護士伊沢、酒と女とバクチで、半分身をもちくず

し、事務所も、借金の抵当に入れているのだが、頭はなかなかきれる男——に相談し、遠山家に連れこんで実際、法律上の手続をとらせたというのである。

——というのだから、川田が眼を廻さんばかりに驚いたのは無理もない。

「とにかく、狂つた奴ほど、扱いやすいものはありませんよ」

と、悪徳弁護士の伊沢は、奇妙な声で笑いながら、黒袍から、色々な書類を出すのであつた。

川田は、眼をギラギラさせながら、その一枚一枚、つまり、妹の千代が遠山から譲渡された財産目録に等しいものを眺めるのであつた。

「——結婚は来月の一日、フフフ、兄ちゃん驚いたでしょ」

驚くも驚かないも、川田にしてみれば、まだ夢見心地であつた。遠山財閥の半分、それは何億という巨額なものである。それが実際に法律的にはつきりした書類となつて、眼の前の卓につまれている。静子夫人や小夜子を誘拐して、身代金一千万円たらずをせしめようとしたことなど、千代と伊沢が組んでやつた仕事に比べれば、ものの数ではない。

「どう、私、来月には、もう遠山夫人よ。大した出世でしょう」

——そういつて、千代は、立上つて、上流階級の貴婦人のようなポーズをわざとらしくとつたが、そういえば、千代の着ている眼もさめるようなアフタヌーンは、以前、静子夫人が着ていたものである事が川田にもわかり、千代がそれだけ遠山家の奥深く、自分の座を作りあげた証拠だと、川田はほくほくした気分になるのであつた。

「とにかく、この社長にも報告しなきゃ、きつと眼を向いて驚くぜ」

——何分かの後には、千代と伊沢は、二階のホームバーのソファに腰をおろし、卓の上に山と積まれた料理をつつき、カクテルを飲んでゐる。円型のソファには、田代、森田それに葉桜団の銀子、朱美、鬼源まで加わつて千代と伊沢の接待をつとめているのだった。

色々といふお世話になつた礼に、何か事業でもなさるのでしたら投資させて頂く、という千代の言葉に、田代は顔中、しわだらけにして、

「ま、どうぞ、どうぞ」

と、カクテルをすすめる。

「伊沢先生、どうぞ一つ、どんどんやつて下

「さい。次は何にしますか」
森田がもみ手をするように伊沢にいうと、
「じゃ、ボルト・シックスナインを頂きまし
ようか。大好物なんです」

「なるほど、シックスナインね」
田代も、森田も、ゲラゲラ笑う。壺型の緑
色のびんが、卓におかれると、伊沢は、嬉し
そうに、それを指さし



「僕は、アノ方でも、これが好きでね。いや
お恥しい話だが——」
銀子も朱美もキヤツキヤツ笑う。
「ね、鬼源さん。静子令夫人も、そういう事
教えておかなきゃだめよ。お客の中には、そ
ういう事望む人、ずいぶん多いようだから」
と、笑いつづける。

すると、田代が

「そうそう、事の次第を、あの美しい奥様に
聞かせておいた方がいいな。おい、川田、こ
こへ奥様と桂子嬢をお連れしな。このビッグ
ニュースを遠山夫人と遠山令嬢が、どう聞く
か拝見しようじゃないか」

合点だと川田と鬼源が、静子夫人と桂子を
この場へひき出すために、ドアを開けて出て
行った。

とにかく、田代や森田にとっては、この悪
徳弁護士伊沢と千代は、今後、何かと役に
立つ、いわば、大へんな金づるである。それ
だけに下へも置かぬもてなしをするのも当然
である。

「ねえ、先生、今夜は、ここでお泊りになっ
て下さいよ。何もねえが、美人だけは、揃え
ております。お好みに合ったものを、お世話
致しますぜ」

森田は、えびす顔になって、そんな事をいうのだった。

「そうですか、ははは、そりや、実に光榮ですわね」

伊沢は、照れくさそうに、グラスを口に運んだが、満更でもない顔つきである。

千代が、ホホホと笑いながら、伊沢にいった。

「ねえ、先生、いつかおっしやってたでしよう。慈善パーティーで、ちらと見た静子夫人の美しさがなかなか頭から去らないって。その静子令夫人は、今では兄が世話になっている森田組の商品なんですの。煮て食おうと焼いて食おうと、お気に召すまま、——ねえ、森田親分」

千代は、かん高い声をはりあげて笑いながら、森田の顔を見た。

「なるほど、たしかに、お目が高い。あれだけの美貌と教養を身につけた女は、めったに手に入るもんじゃありません。まあいうなれば、こちらのとおきおきの女なんですわ、他ならぬ先生のためだ。今夜、お相手をつとめさせましょう」

田代は、伊沢のグラスに、ウイスキーを注ぎながら、いうのだった。

「はあ、そりや、全く、どうも、恐縮です」
伊沢は、嬉しさを包み隠しえず、そわそわしながら、

「ま、色々な美人を見てきましたが、あれだけの美人は、たしかに、そうさらにいるもんじやありませんな。ハハハ」

伊沢が、そういつて笑った時、川田と鬼源は、静子夫人と桂子の二人を引き立てて来たのである。

柔軟で、ねばりのある裸身を麻縄で固く後手に緊縛された静子夫人と同じく弾力のある若々しい裸身をきびしく縛められている桂子の二人は、前かがみに身を伏せ、賑やかに酒をのみ合う連中の前へ押し立てられて来たがふと、その中で女王の如く、端然としてグラスを口にあてている千代を眼にした静子は、思わずあつと声をあげた。長い間、遠山家に女中として住みこんでいる千代が、悪鬼に等しい田代や森田の間に入って、酒を飲んでいゝるのは、どういうわけなのか。

「千、千代子さん！」

静子夫人は、我が身の羞しさも忘れて、悲鳴に似た叫び声をあげるのだった。と同時に自分の身の廻りの世話などしていた女中の眼に、こんな羞しいみじめな姿をさらさねばな

らぬ口惜しさに、ハッと紅潮した美しい顔をそむけてしまふ静子夫人である。

ホホホ、と千代は、特徴のあるかん高い声をはりあげて笑い出した。

「まあ、おどろいた、奥様もお嬢様も丸裸にされちゃったのね。お可哀そうに——」

千代は、グラスを手にしたまま笑いつづけている。

静子夫人と桂子は、たまらない屈辱にぶる身を震わせ、お互の肩に顔を埋め合うようにして、千代の前に立たされているのだ。

しかし、千代が川田の妹である事は知る由もない静子夫人と桂子である。一体、どういうわけでこんな場所に——静子夫人は一縷の望みをもったのか、気弱な眼差しを千代に向け、

「千代さん、お願い、助けて、助けて頂戴」

そんな静子夫人の哀願を、はねとばすように銀子が、

「ま、あきれた。助けてくれたとき。貴女、まだ助かる気にいるの、冗談じゃないわよ。明日から、ショーが開幕だというのに。」

銀子はそういつて、朱美に眼くばせし、川田と鬼源の二人に手伝わせて、壁にそって、打ちつけてある二つの柱へ、夫人と桂子の背

を押しつけ、ひしひしと縄をかけ、立縛りにしてしまふ。

二人の美女は、酒を飲み合う卑劣な男女の団の前に、身動き出来ぬ立縛りにされてしまったわけだ。

川田が、ビールをコップに注ぎながら、千代にいう。

「お前も、いい気分だろ。今までこき使われていた奥様とお嬢様の、こうした姿を眺めて酒が飲めるなんて。へへへ」

千代は、かなり酩酊したらしく、のっそりと立上り、ふらつく足どりで、立縛りにされている夫人と桂子の傍へ近づく。

「私しや、このお二人に、恨みなんかは毛頭ないさ。むしろ、この静子奥様には、色々親切にして頂いたし、感謝している位ですよ。だからさ、これからは、奥様になりかわって、いや、奥様以上に、遠山老人の面倒を見てさし上げますわ」

千代のいう言葉の意味がはっきりのみこめず、というより、その裏に何か不気味な恐ろしいものを感じとって、静子夫人は、涙に曇った美しい二重の瞳をふと上にあげた。

「ホホホ、奥様、実を申し上げますとね」

千代は如何にも楽しそうに、遠山隆義が発

狂したこと、自分に結婚を申しこんだこと。そして、遠山家の財産の半分は自分の名義になった事をとくとくと話し出すのであった。あまりの事に、静子夫人は、打ちのめされたように首をのけぞらす。夫の隆義が発狂して千代と結婚の約束をする。何んという事であらう。

銀子や朱美も、千代をはさむようにして、ショックのため気持の顛倒してしまった静子夫人の前に立ち、

「フフフ、静子夫人、これで貴女も安心出来たでしょう。御主人は、この千代さんと結婚することになったのよ。だからさ、これから家の事なんて何も心配いらぬのよ。一生懸命、森田組のため働くことね」

ああ、そう、大切なことを忘れていたわ、と千代は、ソファに坐っている悪徳弁護士を手招きした。

伊沢は、先程から、静子夫人の見事な肉体に圧倒されて、ただ眼だけを夫人の全身に注ぎ、ウイスキーをなめつづけていた。縄に上下を固くしめあげられたはち切れるばかりに豊満な夫人の乳房、たくましいばかりに美しいカーブを描くウエストからヒップにかけての曲線、むっちりとした脂の乗った肉づきの太

腿、それらを伊沢は、ため息の出る心地で、眺めつづけていたのである。

「伊沢先生、ちよつと」

再び、千代に呼ばれて、伊沢は、はっと正気にかえったよう視線を千代に向けた。

「ビネスだけは、ちゃんとすませてしまいましょ。例の書類、お願いしますわ」

伊沢は、黒鞆の中から、二、三通の書類をとり出し、静子夫人に対していう。

「伊沢先生に調査してもらったら、遠山老人に譲られた奥様名義の土地不動産が約五千万円もあるのね。こんなもの、もう奥様必要じゃないでしょう。一応、この譲渡書に署名、捺印をして頂くわ。と、それから、これは、遠山氏に対する離婚承認書。手まわしがいいでしょ。ちゃんと、ここに奥様の実印も用意して来たの」

静子夫人は、次に、伊沢がペラペラ話しためた法律上の説明を、放心した気持で聞いていた。

「それじゃ、この書類に、署名捺印を——」

伊沢がそういうと、川田と鬼源が、静子夫人の足もとにそれを開げ、ペンを夫人の足の指の間へはみこみ、サインをさせるのだった。夫人は、もう抵抗する気力もなく、川田

と鬼源の二人に片足をあずけて、させるがままにさせてしまっている。次に、川田は、夫人の足の指の間に、彼女の実印をはさみこみ幾枚もの書類に捺印させるのだった。

「へへへ、さ、静子夫人、これで、離婚承認書も出来上ったし、熱海や伊東の土地不動産それに、銀座に出ている洋服店、渋谷のレストラン、すべて、千代子に譲渡した事になったんだ。これで、文字通り、裸一貫、何も心配することはない、秘密ショーのスターとして修業することが出来るってわけさ。嬉しいだろう」

川田は誇らしげにそういって、静子夫人のペソをかきそうをのぞきこむように見る。

「ま、一生懸命、働けば、特別に、禪の一本ぐらい新調してもらってやるからな」

川田、書類を伊沢にかえし、更に夫人に向かって揶揄するのだった。

銀子と朱美も、ニヤニヤして、屈辱の極にある静子夫人と桂子の横に立つ。

「フッフ、よかったわね。これで、奥様もお嬢さんも肩の荷がおりたでしょう。ところでここまで苦勞して下さった伊沢先生に、今夜は充分楽しんで頂きたいと思うの。貴女達二人、感謝の心をこめて、今夜は二人がかりで

お相手してあげてね」

それを聞くと、静子夫人と桂子は、同時にハッと顔をあげた。銀子はそれには知らんふりをして、朱美に向かっていう。

「ね、朱美、先生には、二階の六号室に泊って頂こうじゃないの。あそこのWベッドが一番豪華じゃない。両手に花には丁度いいわ」「そうね。じゃ、黒い枕一つに赤い枕二つ用意するわ」

静子夫人は、ひきつったような顔になつて口ごもりながら、銀子にいった。

「後、後生です。それだけは、それだけは、カンニンして。嫌、嫌よ、そんな畜生みたいなこと——」

あとは言葉にならず、激しく泣きじやくる静子夫人であった。

「なにいてんの」

と、朱美がくすくす笑う。

「この先生はね。何時か週刊誌に出ていたけれど、精力絶倫で有名な方よ。一日、三回以上プレイしないと、身体がもたないんですって。ねえ、そうでしょ。千代子さん」

「そうなの。それが、ここ一週間、御無沙汰しているというのだから、大変よ。奥様一人だけじゃいくらいい身体してるっていったって

続かないわ。やはり、お嬢さんにも手伝って頂いた方がよくはないかしら」

千代は、ホホホとハンカケで口をおさえて笑いこける。

が、お二人ともお二階へ行きましょ、と銀子と朱美が身体に手をのばしかけると、静子夫人も桂子も、狂ったように身をよじり、
「お願い、そ、それだけは——」
と、泣きわめくのだった。

「フッフ、よっぽど、それは嫌らしいわね。どうしてなの。一応、親娘ということになつてから」

朱美は、処置なしといったポーズをとって泣きじやくる二人の美女を眺めるのだった。
「ど、どうしても、そうしなければならいのでしたらお願いします。私、私一人で——」

静子夫人は肩を震わせて泣きじやくる。
強制的に離婚承認書にサインさせられ、一

切の財産もことごとく没収された上、一枚の布すら与えられぬ哀れな姿で、しかも、まだこの上、憎みてもあまりある悪徳弁護士の伊沢のなぐさみものにならねばならぬとは——
静子夫人は胸のはりさける思いで、それも甘受し、ただただ桂子の身をかばうのだった。
卑劣な一人の男に桂子と自分が同時に罵られ

るということにくらべれば、どのような責めも苦痛ではないはずである。

「じゃ、奥様お一人で伊沢先生のお相手をするとおっしゃるの。でも、大変ですわよ」

千代子は、含み笑いしながら、静子夫人に一步近づき、ふと眼をやって、

「あら、奥様、お薄いのね。まあ、お刺られになったの。いやーね」

静子夫人は、耳たぶまで真赤にして、美しい面長の顔を横へ伏せる。

「へへへ、こう見ると、桂子の方が大人ってわけだな。」

川田も、そういつて、笑ったが、すぐ、銀子に、

「ベッドに入るのが、それほど嫌なら、仕方がねえ。この場で、お二人に演じて頂こうじやないか」

「何をさ」

「おめえがいつてたじやないか。ママのベッドで桂子を仕込むってな」

「ああ、なるほどね」

銀子は、声を立てて笑い、すぐ、静子夫人に、

「じゃ、二階のベッドに入るのは、桂子の方は許してやるよ。ただし、この場で、少し、

伊沢先生のごきげんを二人にとって頂くよ。わかってるね。」

静子夫人は、新たな恐怖に全身を硬化させる。

川田や鬼源は、極めて事務的に、その辺のテーブルや椅子を隅へ持ち運び、空間をつく

ったが、そこへ銀子と朱美が、どこからか布団を持ち出して来て、てきばきと敷き始めるのだった。

「一体何を、何をなさろうというの？」

必死に緊縛された身をよじり、叫ぶ静子夫人であったが、これらの悪鬼達が考えている事はわかってる。体中の血が逆流するよう

な屈辱。静子夫人と桂子は、あまりのことにもうまともに顔を上げる気力もなかった。娘にあたる桂子とそのようなことを――。

「さて土俵の用意は出来たわ。」

朱美が、柱に緊縛されている二人の美女を楽しそうに見ていった。

水色のシーツのひかれた布団が、床の上へ敷かれている。それに赤い枕が二つ、ぴった

りと揃えられているのだ。ふと、それに視線を向けた静子夫人と桂子は、電気に感電した

ようにビクと全身をけいれんさせ、狂おしげに首を振る。

「さ、準備OKよ。いいわね、静子夫人、桂子をみっちり仕込みあげて頂戴。」

銀子は、すすりあげている静子夫人のあごに手をかけて。その美しい顔を上へこじあげた。

「――お、お願い、お願いです。ああ――」

静子夫人は、涙でキラキラ光る切長の美しい瞳を銀子に向ける。

「あんまり手古づらせると承知しないわよ。二階のベッドに入るのも嫌、ここで演じるのも嫌、それじゃ何もないってわけかい。貴女

がたはね、森田組の商品なんだよ。勝手な事をいうんじやないよ」

銀子は眼をつりあげて、そういい、鬼源に向かつて、

「鬼源さん。お道具の仕度、たのむわよ」

鬼源は、うなずいて、それをとりに外へ出て行く。

「さあ、先生も千代さんも、どんどん召上つて下さい。そうね。ここのお布団のまわりに

皆んなで円座を組みましようよ」

朱美が提案したので、ソファに坐っていた田代や森田達も、手に手に、グラスを持ち、布団の周囲に円座を組みのだった。

千代は、銀子や朱美が、静子夫人と桂子に

演じさせることの意味がはっきりのめめめなかつたが、川田の説明を聞かされて、声をあげて笑い出す。

「まあ、奥様とお嬢様が元女中だった私に、そのような事をして見せて下さるというの。光栄だわ」

銀子と朱美は、桂子の顔を二人がかりで化粧し始めている。涙をガーゼでふきとり、乱れた髪を撫でずきあげてローションをかけ、赤いリボンを結んでやり、

「さ、お嬢さんの方は、一足先にお布団に行つて、ママの来るのを待ちましょね。ママはこれからお仕度をしなきゃならないのよ。わかるでしょ」

二人のズベ公は、桂子を柱から外し悪鬼達が円座を組む、その中央へ引き立てて行くのであった。

「——嫌、嫌、ああ、ママ！」

桂子は朱美に縄尻をとられながら、静子夫人の方へ顔を向けて、泣きじやくる。

「桂、桂子さん！」

静子夫人も、あとは言葉にならず、後の柱に顔をすりつけるようにして、号泣するのだった。

狂乱の静子夫人

桂子は、野卑な男女のギラギラする眼がとり囲む布団の上へすえつけられると、猿のように小さく身をちぢめ、顔を布団のシーツに押しつけて、すすりあげている。

無残にも、銀子と朱美は、そんな桂子を後手に縛つてある縄すら解いてやろうとはしないのだ。

「お客様の方に尻を向けていちゃ失礼じゃないか。枕をあててお寝んするのよ。行儀よくしてママのお越しを待たなきゃ駄目」

銀子と朱美は、桂子の身体のおちこちをついたり、くすぐったりして、悲鳴をあげさせる。

桂子は、ズベ公達の哄笑を背に受けながら遂に枕に顔を押し当てるようにして、うつ伏してしまった。

「そんなお行儀の悪いお寝んねは駄目よ。ちゃんと上を向いて横になってごらん」

銀子は、川田から皮バンドを借りると、びしゃりと桂子の尻に打ちおろした。

桂子は悲鳴をあげて、布団の上をのたうち廻つたが、遂に、枕に頭をあてて、仰臥した

姿態をとらされてしまふ。周囲を取囲む卑劣な男女の酒に濁った眼が、桂子の身体の隅々に痛いほど突きささるのだった。

「ああ、桂子さん！」

柱に固定されている静子夫人は、眼の前でひどい仕打ちをうけている桂子を見るに忍びず、ただ首を振りつつ泣くだけであつたが、そんな静子夫人を、ニヤニヤして見ていた千代子は、のっそりと立上り、再び、近づいていく。

静子夫人は、キラリと憎悪のこもった瞳を千代に向け、口惜しげに唇をかみしめる。女中であつた千代に、しかも、何くれと面倒を見てやり大事にしてやつた女中に、静子夫人は裏切られ、いや、奈落の底に突き落されたわけなのだ。しかし、もう呪いの言葉さえ口に出す氣力も、今の静子夫人にはなかつたのである。

「——ホホホ、ねえ、奥様、私、奥様にせひとも、お願いしておきたい事があるの」

千代は、キラリと残忍なものを眼に浮かべていうのだった。

「もうこれで、奥様のものは、すべて私のもの。奥様はもう帰るお屋敷もなければ、御自分の財産は一銭もない。それだけじゃなく、

お腰のまわりを隠す布一枚もない。ホホホ、つまり、これからは一生、森田組の商品としてこの屋敷でお暮しになるのだから、私も安心なのですけど、何しろ奥様は絶世の美人、何だか私としても油断がならないわ。だから身も心も森田組のショースターになりきってもらうためには、もっと大切な事をしておかなきゃならないと私、考えましたの」

千代は、妖気をただよわせるように、ネチネチと恐怖に身を硬張らせている美しい静子夫人に語りかけるのだ。川田の妹だけあって千代は、口数は少ないが、銀子や朱美より、陰険で残忍なものゝ内秘めているようだ。

「ホホホ、何もそう恐がらなくてもよろしいのよ。シヨで男役などする時は、困るでしよけど、私は奥様に一日も早く妊娠して頂き

たいのですわ」

何という毒婦であろう。千代は、静子夫人の身も心も完全に屈服させるためには、妊娠させる事が一番いい方法だと考えたのだ。

「女ってものは、誰の子供でもいい、生んでしまえば、やはり母性愛というものがわいてきて、一生懸命働く気になるのですわ。わかり」



千代は、そういつて、再び大声で笑うのだった。

静子夫人は、千代の恐しい言葉に、身を小刻みに震わせながら、

「——千、千代さん、あ、貴女は、貴女という人は——」

というや、がっくりと首を落し、大声で泣き出すのであった。

「勿論、奥様のような美人なら、男は誰でも自分の子供を作りたがるでしょうけど、それじゃまずいの。奥様だって、そんなの嫌でしょ。だから、誰の子かわからない子を孕んで頂きたいのよ」

静子夫人は、首を振りつけ号泣するだけである。

千代は、田代や森田に向かい、

「——今いった通り、出来るだけ早く、この奥様を妊娠させて下さいね。出来れば、そのお嬢さんも——ホホホ、そうすりや私も安心だし、皆さんも安心じゃありませんか」

千代は、ハンドバッグの中から、二枚の小切手をとって、田代に渡した。

「種つけ料なんていうとおかしいけど、とりあえず二百万円お渡ししておきますわ。三カ月以内に見事に種がつけば、あと二百万円、現金でお渡ししますからね」

小切手を受取った田代は、へへへ、と顔をしわだらけにして、

「何しろ、これぐらいの美人になると、なかなか妊娠しないものらしいですね。ま、しかし、何とか努力して、種をつけますよ。僕のところも妊婦ショーという企画もあることですしね」

田代は、小切手をポケットに入れると、川田に向かつて、

「一応、明日から始まるショーの期間中、お疲れのところ御苦労だが、この奥様とお嬢さんにや、夜の客をとって頂く事にしようじゃないか」

「それで駄目なら、竹田達、チンピラのごろ

ごろしている部屋に、二、三日ほりこんでみてもいいじゃありませんか。血の気の多い連中の誰かが、うまく種つけをやるかも知れませんぜ」

森田も笑いながら、そんな事をいうのであった。

銀子と朱美も、酒に酔ってふらつく足を踏みしめながら、号泣している静子夫人の両側に立ち、

「わかったわね。静子夫人。こちらで貴女を一日も早く妊娠させるよう努力するけど、貴女もその気になって、努力してくれなきや駄目よ。フフフ、桂子嬢もうまく妊娠してくれて、ママと娘が仲良く妊婦ショーに出演出来るってことにでもなりや傑作なんだけどね」

銀子がそういつて笑うと、朱美が、

「ねえ、姐さん、静子夫人、つまり、前遠山令夫人より、新遠山令夫人にお祝いの言葉をかけさせようよ」

そりや面白いわ、と、銀子と朱美は、さ、奥さん、遠山千代夫人に、こういう風にお祝いの言葉をかけてごらん、と右と左から、くすくす笑って、夫人の耳に何か吹きこむのだった。

静子夫人は、嫌々と緊縛された美しい裸身

を悶えさせ、銀子と朱美のおぞましい言葉を耳から払い落そうとする。

「貴女、お客さんの前で強情はるなんて、まだ性根が出来ていないのね。」

朱美は、狂ったように泣きじやくる静子夫人の頬を平手打ちし、円座を組んでいる男達の方に向かつて、桂子をムチでブチつづけるよう頼むのだった。

川田は立上って、再び、腰から皮バンドを外しはじめる。

それをチラと見た静子夫人は、もう抵抗する事の空しさを悟ったように一切をあきらめた気持になって、

「お、おっしゃる通りに、い、致します」

美しい顔を横へ伏せて、激しくすすり上げながらいうのだった。

「ほんとに、世話のやける奥さんだことねーフフフ」

銀子と朱美は顔を見合せて笑い、千代に静子夫人の前へ立つようにいう。

「さ、静子夫人、今、教えてあげた通り、ここにおられる新遠山夫人に御祝の言葉を申し上げるのだよ」

銀子と朱美は、相変らず静子夫人の両横に仁王のように立って、言葉を強要するのだっ

た。

「さ、早く、おっしやいってば」

静子夫人は切長の美しい瞳を固く閉じ合わせたまま、顔をあげる。唇がピクピク震えている。

「ど、どうか、お幸せに、千、千代奥様」

「だめだよ、遠山千代子様というんだ」

「——遠山千代子様」

夫人は、たまらなくなつて、顔を横へそらしてしまつたが、銀子が邪怪にあごに手をかけて、千代の方へ向け、次をつづけなと催促する。

銀子と朱美が静子夫人に強制して、やっと口に出させた千代に対するお祝いの言葉は、大体次のようなものであった。

臨時増刊号 「花と蛇」 特集号

昨年五月に刊行いたしました臨時増刊号の「花と蛇」特集号、(略号「花」)は本年一月をもって売切れしました。以前の広告により未だに御注文なさる方がございますが、在庫も再版の予定もございませんので御諒承おき願います。

「——今まで千代夫人を自分のような者の女中として働かせました無礼を心よりお詫び申し上げます。本日より、静子は遠山家とは何のゆかりもない女、私名儀になっております資産、及び遠山家に残して参りました衣類、宝石など私の所持品一切もすべて千代夫人のものでございます。なお、娘の桂子と私は、ここ森田組の皆様方に、これより一生の面倒を見て頂く事となりました故、千代夫人もどうぞ御安心下さいまして、幸福な家庭を築いて下さいまし。最後に、千代夫人及び森田組の皆様方に安心して頂くため、私は三カ月以内に必ず妊娠し、妊婦スターとして働かせて頂くつもりでございます」

やうと、ここまで、静子夫人にしやべらせた銀子と朱美は、ほっとして、互いに額の汗をふき合ふのだった。

「千代夫人、どうです。これで御満足頂けましたか」

銀子は、千代の顔を見ていった。

千代は、肉づきのいい白い肩で息をし、屈辱をこらえている静子夫人を満足げに眺めながら、

「ホホホ、よくいって下さったわ、奥様。これで私も安心というわけ、じゃ、ほんとは、

今度、私がここへ来るまでに、必ず、このおボンポンを大きくしておいて下さいね」

千代は、身を低めて、静子夫人のお臍のあたりを何度も手でさするのだった。

女中であつた千代に、そのような恥辱を受け、腹部をなでさすられて、その虫ずの走るような嫌悪感に、静子夫人はキリキリ歯を噛みしめ、美しい眉を八の字に寄せるのだったが、鬼源が小脇に桐の箱をかかえて部屋へ戻つて来た。

「フフフ、さあ、静子夫人、お待ちかねの道具が到着よ。千代夫人と伊沢先生に、すばらしい親娘ショーをお見せして御機嫌をとつて下さいね」

朱美は、口元を歪めて素晴らしい、鬼源の持つて来た桐の箱を受取ると、そのふたを開けて千代に中身を見せるのだった。

「まあ、そんなものを、この奥様に——いやーね、ホホホ」

千代はふき出して笑いこける。

銀子は、箱を千代の手からとり、それを屈辱にあえぎつつづけている静子夫人の眼の前へ持っていく。ちらとそれに眼をやった静子夫人、再び、火がついたように美しい顔を真赤にして、眼をそらせるのだ。

「フッフ、鬼源さんが苦心して、奥さんのために作ってくれたものよ。京子とコンビの時は、何時も奥さんは女役だったけど今日は始めて男役ね。しっかり頼むわよ」

銀子がそういうと、千代もいよいよ悪女の本領をむき出して、

「つまり、それを奥様にとりつけるわけなんですよ。わかったわ。ね、それ、私にさせて下さいな。ホホホ、女中の千代として、静子夫人に最後の御奉公をして差上げるといわけなのよ」

そりや、愉快だわ、と銀子が桐の箱を渡すと千代は、円座の中にあつて、ニヤニヤ女達のする事を眺めている伊沢を手招きする。

「先生、面白いじゃありませんか。私にも手伝って下さらない」

伊沢は舌なめずりをしながら、立上り、千代の傍へやってくる。田代も森田も川田も、キヤッキヤツ笑って手をたたくのだった。

じゃ、ここは千代夫人と先生にお任せするわ、と銀子と朱美は、少し離れた所に立って千代と伊沢のすることを興味深げに眺めている。

「——千、千代子さん！」

静子夫人は、身体の内部分からふき上げてく

るような屈辱感に、石のように身体を硬化させ、びったりと肉づきのいい太腿を閉じ合わせて、迫って来た千代に必死な瞳を向けるのだった。

如何に観念したとはいえ、そんなものを、しかも女中の千代と自分から一切を奪い取った伊沢の二人に、とりつけられる恐怖と口惜しさ。

「馬、馬鹿なことはいしないで！ 嫌っ」

静子夫人は、狂乱したように柱に固く縛しめられている裸身をゆすり、自分の足もとに身を沈めた千代と伊沢に向かって叫ぶのであった。

「お願いっ、嫌っ、ああー、そ、そんなことやめて！」

激烈な苦痛に、静子夫人は傷ついた獣のように歯をかみ鳴らし、脂汗を流して、悶えつづけている。

「ずいぶんと嫌われたものだわ。こんなに固くなられちゃ仕事がいやにいくわ」

千代が閉口したようにいうと、伊沢も苦笑して、

「少し時間をかけなきやそりや無理ですよ」という。

見ているだけじゃつまらないと思ったのか

川田が立上って来て、先生、少し、手伝いましょうか、と柱のうしろへまわり、いきなりうしろから両手を開けるようにして、静子夫人の豊満な乳房をわしづかみにしたのだ。

静子夫人は、美しい眉を八の字に寄せ、嫌嫌をするように首を振る。

千代さんは、少し、休んでいなさい、と千代を退けた伊沢、これも本性をむき出した如く、上着を脱ぎ、ワイシャツの袖をまくりあげるのだった。

静子夫人は、艶やかな白いうなじを大きく見せて切なげに首をのけぞらせる。

千代は哑然として、二人の男に責められ始めた静子夫人の狂乱図を眺めている。

雪山のような見事な胸の隆起は、川田の毛むじやらの手の中で暴風雨にあったよう激しく揺れているのだ。それに呼応するように伊沢も必死になって責めつづけている。

銀子と朱美は、顔を見合わせて、

「さすがに先生はベテランね。うまいものだわ」

川田と伊沢の荒々しい攻撃の前に、遂に静子夫人は身体中をずたずたにされる思いになり、美しい乳白色の肉体は火柱のように燃えさかってしまったのだ。

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しほり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しほりと浣腸器	(玉田)

G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しほり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる女	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しほり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカパー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもたえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繋縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に嚴重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺棒巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

「ドラマ・奇譚クラブ」

夜 乃 探 郎

△口上▽

通刊二百号突破。それは、「奇ク」を舞台として、あの人、この人が現われては消え、現われては消えるSM的な懐しの人生ドラマが展開されてきたことを意味するわけだが――。特に二百号突破前後にわたる「見る雑誌より読む雑誌」への一幕は、編集部の人絵並にグラビア写真全廃▽という大英断があつて、まさに後世「奇ク」出版史をひもとくにあたって特記すべきことではなからうか。ここに、いま私は『ドラマ・奇譚クラブ』を編

集部及び大方の読者に捧ぐ。『読む雑誌』としての発展を祈りつつ……。

△さてどん帳は上る！▽

昭和三十九年八月の下旬。「奇譚クラブ」編集部では、夜も大分、更けたというのに、まだ電気が皎々と輝やいていた。読者の投稿が山積せるデスクには、編集長の箕田京二が一人物思いにふけていた。△四馬孝氏の四十枚ばかりの口絵は、没にせざるを得なかった。又、辻村隆氏のフォトも駄目。挿絵も一々細部に亘ってタブーの個所をやかましく指

示するから、先生たち大むくれだ。読者からは、そんなに堅くばかりしたんじや、もう買ってやらないゾとドヤされる。そこへもってきて巷には悪書反対の声いよいよ上るか……、編集スタッフからも、そんなに自粛自粛でビクビクするなら、もう協力してやらないゾとオドカされる。カット・ノイローゼ寄稿家は、もうペンでハッスルすることもないに違いない。▽とつせん、彼は原稿用紙を手もとによせ、まず、一行、ペンを叩きつけた。

『四面楚歌をうたう』

◇

現代人の風俗雑誌

奇譚クラブ

女体相撲艶色史

1952 8月号

27年8月号 定価90円

奇譚クラブ

現代人の風俗雑誌



1952

27年6月号 定価90円

「奇譚クラブ」十一月号は、九月二十五日に市販された。手首にクサリをまきつけられた半裸の女ドレイ。ハレムを思わせる異国情調豊かな表紙ではあったが——「奇クサロン」冒頭・編集子の「四面楚歌をうたう」のタイトルが、大方読者の胸をえぐった。グラビヤ写真も着衣の緊縛フォトがめだち、口絵の枚数も少く、昭和三十六年当時の百花繚乱と咲きみだれる第一・第二グラビヤ。第一口絵・第二口絵時代を知る読者にとっては、口惜しい限りであった。だが、その反面、この号より、連載がはじまった、「SMカメラ・ハント」マゾ願望の人気者、青木順子を縛る——辻村隆。「花と蛇」(続篇) 団鬼

六。——は、やがて近づく新しい発展。読む雑誌への布石ともなり、絶讃を浴び迎えられた。

◇

十月号の社告および団先生の「花と蛇」に寄せる嘆きの一文を読み、その筋の制約が日毎に厳しさを増し、ついに、小説や挿絵の描写にまで具体的制限を加えるまでにいたったことを知り、激しい怒りと悲しみを心の底から覚えます。東京、佐土浩志氏などの悲痛な声が、「読者通信」に見られるようになったのは、昭和三十九年度もこれ一冊という「十二月号」の中からであった。また、「奇クの入手困難をこれほど知らされた事はショックでした」という便りも見られ、制約の手が、書店扱いポイコット運動にまでおよんだことを知らされた。

「愛読者のみなさまへ、おねがい」として、「裏窓」「風俗奇譚」「奇譚クラブ」の三社連名の「青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく」という、自主規制の申し合せわが、本文、冒頭に掲げられ、前途の多難さを思わせた。

そんな中で、刺青の女王山原清子嬢のグラ



28年1月号 定価100円



27年11月号 定価90円

昭和四十年の新年号は「見る雑誌より、読む雑誌」へ脱皮する波乱をふくんだ記念すべき年に入ったことを意味するのだが、まだ、巻頭・グラビヤ「K氏邸での撮影」：塚本鉄三撮影構成、モデル・山原清子嬢のボリウムある緊縛フォトが、華麗なる刺青を紹介して素晴らしいお年玉ともなっ

びや初登場は、せめてもの明るい話題を読者に提供した。また、長い間、好評連載をつづけてきた辻村隆氏の「奇譚三十九夜物語」が十一月号で終わったことを記念して「わが体験を語る」座談会並に「緊縛野外撮影会」の内容誌上紹介がなされたことも、この号（十二月号）での圧巻であった。

◇

ていた。

絵物語も二篇掲載。ただし、往年の全盛期とくらべれば、特に絵物語と副タイトルを付ける程のものではないが、制約下にあつての編集部としての精一杯の読者へのサービスと受け取れた。「奇クサロン」のバラエティさは、号を追ってめだつてきたが、同好夫婦の方々へ私達はSMプレイ夫婦V長谷好志男」など、SMプレイ夫婦の、フォトが、サロンにも、堂々とかざられるようになった。○筆者註、雑誌「裏窓」一月号限りで遂に廃刊さる。

◇

口絵並にグラビヤ写真が制約されたことが分譲品の活発な動きをもたらせた。『二月号』の表紙、目次の各裏面には「四馬孝秘蔵版画集」「刺青女性緊縛フォト」モデル・山原清子・塚本鉄三・撮影などが広告された。編集子の言葉も「奇クサロン」冒頭「最近の二つのこと」頭ペコペコむーど？より、がぜん、かま首を持ち上げはじめ、心強い舌戦振りをみせた。特に「都条例の条文に『残虐性』という項目を重視しているにも拘らず映画としての『日本拷問刑罰史』が問題になったということを知れないという点であ



29年5月号 定価100円



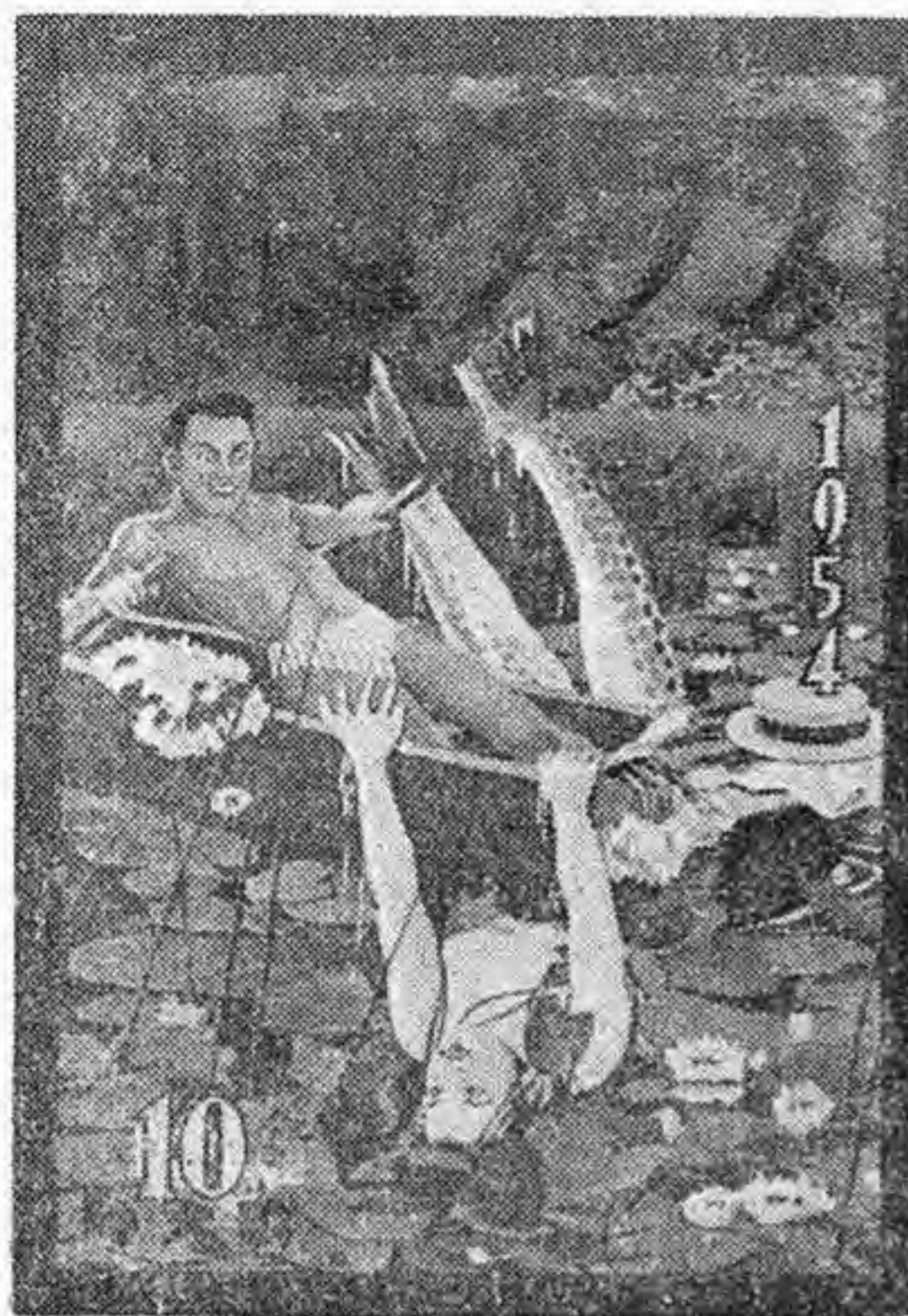
28年12月号 定価100円

る。この映画自体、映倫の成人向としての審査をパスしているの、当然といえば当然なのだが、この映画のスチールを口絵に掲載した雑誌の十二月号が、この写真の件りが指定になったということは、一応注目すべきことであつた——と、映画と雑誌の、都条例がからまる、「世にも不思議な物語」をひれきした。また「それが必要とあれば、グラビヤ写真や口絵挿絵の全廃をさえ断行してもいいと思っている」と、なみなみならぬ決意がよみ取れた。これはあと一步で、通刊二百号を記録する新しい風俗文芸誌を標榜する「奇ク」が多くの読者の支持を背景としてこそ吐き出された言葉でもあつた。「奇クサ

ロン」の「まにあのメモ」「奇譚クラブのあり方について」佐仲晴成の「最近の奇譚クラブでは、毎月のように「愛読者のみなさまへお願い」と題して読者に対して自肅編集のお詫び？ をかねて、お願いを申し上げておられる。」にはじまる「私などは、現在の奇譚クラブのほうが、かつてのそれよりも、より好ましい」という編集部への激励文が、「最近の二つのこと」編集部の言葉と同号に掲載されてあるのも注目すべきことであつた。「鬼六談義・SMプレイの知恵」は、羞恥文学の最高傑作と評される「続花と蛇」が連載されている時でもあり、まずは好随筆。その作家の楽屋裏をのぞく興味深いものだった。



『昭和四十年三月号』この号で通刊二百号を記録した。そして、口絵並にグラビヤ写真が全廃された。増頁され近頃になく本文の充実した号であつたが、表面的には、まだ「見る雑誌」への声は聞かれず「奇クサロン」の編集部の言葉「桐一葉の淋しさ」がすべてを物語っていたようだ。心ある古くからの大方読者は一人ひとりに「奇ク」二百号達成を乾杯したこともあろうが、客観的に眺めて、どこかわびしい二百号発刊でもあつた。そ



29年10月特大号 定価140円



29年7月号 定価100円

こで本年の課題として、グラビヤ写真と口絵の絵画をどのような形で皆様の前に提供するか、という編集子の言葉が、クローズ・アップされ、努力と冒険への「昭和四十年度」をあらためて読者の胸に認識させた。だが、この号でハッキリ見せた本文充実という「奇ク」ならではの底力が、やがて「読む雑誌」への新しい脱皮発展という方向にむかったことも見逃せないことであった。いやすでに、昨年、十一月号「SMカメラ・ハント」及び「花と蛇」連載がはじまったことをケイキとして、その切札は、投げられていたのだ。

目次裏のお知らせで「新人モデル、美木乃々子嬢の熱演入日本女性拷問刑罰集」が分譲品として出されることを読者は知った。（本来ならば本誌グラビヤでという所だが……）

によって取上げられ、好話題を提供した。（註「日本拷問刑罰史」について八おもだかしのV「映画『日本拷問刑罰史』とS子」八辻村隆V）

読者の声も活発になり、「SEXの考え方に就て」芳野眉美。「SMの混同と作品への希望」岩井鬼輔ETC。「奇クサロン」でも「縛り映画展望」として、東山映史氏が「日本拷問刑罰史」の凄じさ——を、投稿発表していた。

「SM」よりみた世界史シリーズ「ベリサリウスとアントニナ」黒潮要一の重厚な作品が前号（悲劇の女性「ゼノア」）に引続いて、よりSM世界への博学多識ぶりを示した。

独自のエッセイ「想うこと」（続）西条操は、ズバリ直言で、大方読者の讀否両論をわきたたせるものがあつた。

○筆者註この西条氏の一文には、後に五月号で、「高級なる遊戯精神について」——として、久我庄一氏が受けて立った。



別冊 マゾヒズム特集号 35年



30年5月特大号 定価140円

この四月号、奇クサロンの冒頭「グラビヤ廃止その後」編集子の「中途半端なものでお茶を濁すよりは、むしろグラビヤを中止してそれだけ本文を充実した方が得策だ」という意見が圧倒的で「フタをあけてみたら、本文充実せよ!という『読む雑誌』への今後のあり方の反響がつかめたことをあきらかにしていた。

「SMカメラ・ハント」(刑部典子の巻)「耳責めに微笑む娘」・辻村隆一は、SMプレイと、詩との見事に結実した作品と好評。特にこの号より積極的に小説によりスペースが取られ、創作陣の強化がなされたことは、カツ目すべきことであつた。

(註・懸賞応募入選作品

「革の盛装」第一部・革の招く運命、山口広同入選作品「花散る里」、瀬川泰子)

『短信往来』で、小川曉氏が「三月号を読んで編集者へ」として「グラビヤページがなくなった貴誌が今後、多くの読者をつなぎとめておくことが出来るか」という、疑問について、編集長、箕田京二氏が「許容される範囲内での充実を計ることに最大の努力を払いたいと考えます」と、至極キマジメに答えているのが、注目を集めた。

◇

何事も、三度目とか。三号雑誌とか。とかく、試みは三度目の正直で、ある程度の結果が如実に判るようだ。さて、口絵並にグラビヤ写真が全廃されて三冊目の五月号が発刊された。「奇クサロン」の「編集部たより」で「グラビヤ写真に関する論争も一段落をつけ本誌の三月号・四月号・五月号と、ともかくにもグラビヤ口絵なしの号が三号も続いた」ということは、特筆大書していいだろう」と編集部としての考えが述べられて居り、『読者通信』八赤井茂の「三月号からグラビヤが姿を消した事は、何か知ら物淋しい思いですが、それだけ記事が増ページされた事は喜ばしい事です。さぞ、これから充実した内容



サド特集号第二集 34年

読者もいよいよ、シャベル”と、やはり、橘行司子氏が△SM時評▽でおどるような、ペンさばきで、唄い文句を並べていた。そして『八月号』はいま、まさに発刊近し。

△再び編集

局では▽

昭和四十年六月も中旬
昼下りの一時。此処「奇

譚クラブ」編集局では、

の本誌が毎月読めるかと思うと楽しいです——にも、読者の気持の一端が判る。そしてこの号からより表面的に「読む雑誌」への転換、本文充実という編集がハッキリ打ち出されてきた。

◎『六月号』の「奇クサロン」で山本達雄氏が、遂に“奇ク万歳／＼最近の充実▽”ともりもり充実してきた愉しさを述べていれば、「SM時評・新刊五月号を見て」で、初登場の橘行司子氏が“奇クは読者の声の花ざかり”と、うたっていた。

◎そして『七月号』は“編集子も乗り出せば

デスクを前に、編集長の箕田京二をかこんで編集部員数名が腰を掛け雑談していた。すでに八月号の編集もおわり、印刷所に廻し、後はインクの香もうれしい本誌が届くのを待つだけの、忙中の一息という時間だった。いつもこの僅か二・三日の期間が、編集スタッフにとっては、またとない骨休みのときでありすぐ忙しくなる明日への活力を養う時であったのだ。「このデスクで、四面楚歌をうたう」という原稿を書いてから早いものだ。もう、十カ月近くもたっている。ともかく、通刊二百号突破前後「見る雑誌より読む雑誌」への一頁は、まさに波乱万丈、よくきり抜け

てきたものだ」箕田編集長がつぶやくようにいった。そして彼は考える。△まったく苦しい、ふんだりけったりの一幕もあった。だがあのときも、いまでも、いやこれは新しい風俗文献誌として「奇譚クラブ」が創刊されたときより、いつも、やる気十分だった。勿論これからだってそうだ▽、編集部員のAが言った。「日本一うるさかった神奈川県児童福祉委から、四月号は、従来に比べると編集上はやや自粛についての努力している点が見受けられたので、指定の措置をとらなかつた——という申入れがあったが、何にしてもうれしいことだ」

箕田編集長が笑いながら言葉をはさんだ。「それみる、いまになってみると、そんな言葉も出るが去年の十一月号発刊当時。“そんなに自粛自粛でビクビクするんなら協力してやらないゾ”とオドかしたのはだれだっけ」「いやあ、これはまいった」と、Aは頭をかいた。箕田編集長はつと投書の山の一番上にある封書を手に取り、「商売、商売」と明るい表情で、ていねえにハサミで封を切った。「ドラマ・奇譚クラブ」夜乃探郎のくせのある字体が眼につく。「この読者の乱筆には、いつも手をやく」と箕田編集長は苦笑しつつ赤インクの万年筆を手にとった。

(おわり)

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

各組一枚一組 (送料共)

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀飲 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向け囚人の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬ姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

浪江大五郎

△悦虐絵灯笼（その十三の二）▽

万田不仁

庭の芍薬に細い雨が光る。なま温い南風が若い女の肌をしめっぽくする。

不忍池のほとりの粹な寮のひと間で、ふたりの女が盃を交わし合っている。

紫の縮緬の大振袖に亀甲続きの錦襦の帯を締めた女は萩路。今日は念入りな化粧で誠に美しい。

うしろの低い棚にはオランダ船の模型、床の間に琴と半弓ふた張、壺のやなぐいが飾つてある。それに朱羅紗の袋に収まった薙刀三ふりがなげしに掛かっているあたり武芸自慢の居間らしい。が、萩路は日本橋の裕福な小

が大五郎を誘ったのだ。

「いや、いや、そなたは確かに浪江どのに氣を奪われているかに見える、女角力のおりも盲人との組討のおりも、そなた浪江どのから目を離さぬ、伏目のようにしているが、実は浪江どのを追うている、大五郎、そなたほんに浪江どのが好きなのか」

酒の酔に目のふちを染めた萩路が絡むように問う。その膝の傍、卓の上に骨牌が散らばっている。

「いえ、そんなことはございません、あたしはもう氣が小さいもんで、あんなお女中衆の姫御前のあられもない……おや、これは失礼申しました、いや、その勇ましい角力など拝見致しますと、もう胸が動悸をうってなりませぬ。ましてやあの盲人相手の組討ちなぞ、どうして穆翁さまはあんなことをお女中にさせるのでございましょうか、そりやどちらかが喉を締められて氣絶するだけで命に別条はございませんが、何ともむごたらしいさまで……わたしはおそろしくてなりません」

と、大五郎は伏目がちに云う。彼はしかし内心もう萩路がうるさくなっている。

梅の咲くころ芝居茶屋海老屋に招かれた。客は萩路と父の徳兵衛だった。働き者だが無

間物問屋の娘、いかにさきの一ツ橋民部郷治濟、只今の穆翁のお氣に入り女中のひとりはいえ、町人の分際で武家の娘のような部屋のさまは、いまひとりの女の目を見張らせた。彼は黄八丈の着物に麻の葉模様の帯で町家の娘らしい。が、娘ではなくこれが市村座の女形大島大五郎。もともとこの寮は萩路の父駿河屋徳兵衛の隠居所なのだが、六十過ぎても元氣な徳兵衛は仲々おとなしい長男夫婦に店が任せきれず、めったに隠居所で骨休めなどしないので、結構な寮も留守番の老婆がいるきりという有様、そこへ宿下がりの萩路

類の芝居好きの徳兵衛は新進の女形に温い目を向けた。大五郎も彼が内福な商人と知ると一層辞を低くした。大五郎の胸には巧名心が燃えていた。江戸中の評判を一身に集めたいと、意欲は高ぶっても座頭はまだ自分の芸を高く買ってくれぬ。時に芸に色気が乏しいなどと小言も食う。穆翁も当代の我僇者で権力もあるが、しんから自分を後援してくれる気があるのやら解らぬ。大五郎は少々あせってもいた。

徳兵衛が廁へ立ったとき、萩路が寮で逢おうと云った。そのとき、ふっと大五郎の頭に浪江の大柄な白い体が浮かんだ。

「これ、ごらんないナ。骨牌で占ってみても、そなたは浪江どのに気を引かれている。なんとかして、こうして逢ってみたいであろう。ホホホホ、でもそれは叶わぬ、浪江どの旗本とはいえ貧しいお家の娘、父上は労咳とか、それで角力で勝った褒美の頭のものや衣類も、みなひそかに奢侈ご禁制を犯すよからぬ商人に売っているそうじゃ。そなたも何ぞ、みついであげねば欲心は買えません、ホホホ」

風が少し強くなった。上品な姿がまた酒肴を運んできた。婆の老眼では大五郎の女装が

見抜けないのだろう。

「そなた、わたしをあざむくことはできませんん心がすぐ顔にあらわれる、ホホホ、わたし同様若いから……浪江どのは何というてももう年増じゃ、もう大五郎、ここで誓おう、互に離れまい、裏切るまい、そうしておくれ」

畳み込むような萩路の口説に、若い女形はそっと目をそらして、芍薬を眺めるふりをした。ほんとうは女の熱い、酒に熟れた息がうとましかった。ひと夜のあくなき欲楽のあとで男の精気は未だ全く蘇っていない、男の血も尚静まっていた。

雨が米粒になった。いきなり雷が鳴った。「あっ」と大五郎が腰を浮かせた。彼は雷が嫌いだった。高台の湯島天神の方角で、どろどろと鈍く雷が鳴りだした。

「まア、弱虫な、わたしの言葉も聞かぬ」

つと萩路が立った。振袖が紫の大きい濃い花びらが揺れ落ちるように仄暗い部屋を色どった。黄八丈がその花びらの陰に一瞬隠された。まるで黄色い蝶が喘ぐかたちに。低い萩路の声が気味わるく雷の下にひびく。

「殺してあげようか、大五郎」

錦に包んだ懐剣を帯から抜いて鞘を払う。「こ、これはむたいな。萩路さま、ひどく酔

われましたナ、乱暴はおよしなさいませ」

たった今まで女を鬱陶しく思っていた大五郎の腋には忽ち冷汗がにじみ出てきた。そのきれいな顔は恐怖に歪んでいる。

「ホホホ、臆病な、刃の光がそんなに恐ろしいか、さもあるう、私が今その気になりさえすれば、それ、そちの白い喉ぼとけにぐさ」と懐剣を突き立てることもいとやすいこと。

さすれば舞台にも立てず、江戸の女の血を掻き立てるせりふも言えぬ、暗い死の世界に落ちていくのじゃ、ホホホ、さアどうしようか

ひと思いに大五郎の命を貰おうか、ホホホ」

萩路は懐剣の峯を馬乗りに組敷いた大五郎の喉ぼとけに当てがっている。

「ど、どうか、お助けくださいまし、萩路さま、おたわむれもほどになさってくださいまし、いいえ、私が浪江さまをお慕いするなど、とんだ邪推でございましょう」

女の両膝の間にはさまれた大五郎の顔は蒼白、何とかこの場を収めようと額に脂汗を浮かべて女の気持ちを静めようと努めるが、

「フフフ、そなたこの剣の表を見なさい。そなたのおののく顔が映っている、弱虫」

嘲笑い、更に悪戯とも本気ともつかず萩路は大五郎を虐げる。大五郎は酔っている女の

体がときどきぐらつくのを見ると、もう夢中で両足をばたつかせて跳ね返そうともかく。

「ホホホホ、役者のそなたの弱腰では、とても逃れることは叶わぬ、そんなに足掻くと剣の尖が突き刺さるではないか」

「ど、どうか御勘忍を、私の悪いところは幾重にもお詫びいたします」

「ホホホホ、そなた、何を私に悪いことしたの。ああ、してみると、やはりそなたは浪江どのが好きか」

美しい女二人の争い。はた目には一幅の異常美図絵であるが仰向けに倒され、胸の上にしつかと跨られた女装の男の方は恥も見栄も忘れ果てて、ひたすら女の情を乞うている。

酒癖のよくない裁路は右手の懐剣をおりおり光る稲妻に光らせて、一層くどく大五郎をおびやかす、さいなんてやまぬ。

丁度その時分。

同じ不忍池のほとりにある板倉周防守の邸に忍びで遊んだ穆翁は、三階の手すりに凭つて、四辺の風景を遠眼鏡で眺めていた。傍には女中の浪江が控えている。雷が鳴る。

「これ、浪江、ちと面白いものが見ゆるぞ、ほほう、女同志の戯れじゃナ、艶めかしいことじゃ。やや、危ないことをする、何を争っ

ているのであろう、懐剣など抜き放って……無法なことをするものかな、ううむ……」

あとは何やら低く呟きながら穆翁はじつと遠眼鏡を一点に向けている。浮世絵にも遠眼鏡で遠い家の中でいとなまれている男女の秘戯を見て楽しんでる図などあるが、穆翁も何かそんな人間の秘密な姿を見出すかも知れぬ期待を持っていたかどうか、とも角彼はいたく興深げに見入りやがて愕いた風になり、そしてその好色と大酒に疲れむくんだ横顔に皮肉な笑みを刻むと、浪江をふり返った。

「見よ、そちにも興味深い絵が見えるわ、見よ、あでやかなけものがじゃれておるわ」

と言って浪江の肩を右手に抱き、遠眼鏡を恥じらうしなを作る女の目に押しつけた。

「上様、どこでございます」

「それ、それ、ただ目をすえて見ればよいのじゃ」

「ああ……」

裁路は唇を少し開け、声を呑んだ。遠眼鏡の視野の中では、紫の大振袖と黄八丈が妖しくもつれていた。着物の裾を乱し、白い腿にくれないの色がからみ、紫の濃い色合いが遠目鏡のレンズを暗くすると、また赤い花がひらくように、派手な色彩が息づくように開い

た。ふと大振袖の女のほしいままな体のこなしの陰に黄八丈の女の顔が、はつきり大きく浮き出たような感じに拡がったとき、裁路はあつと、声を立てざるを得ない驚きに打たれた。

「うふふふ、裁路、わかったかな、女二人の正体が、うふふふ、うふふふ、河原乞食にうつつをぬかすあの女は、どこぞで見たことがあるような……ふふふふ、剣でおどしたりして、手がこんでおるわ」

低く、濁った笑を残して、穆翁は和蘭渡りのギヤマンをはめた障子をしめた。

「そちには目の毒であらうの、ハハハハ、階下へ参ろう、周防を相手にひとさし舞おう」

熊野のひとふしを微吟する穆翁の後に従う浪江の目には憎しみの光があった。

(つづく)

本誌旧号(既刊号)在庫について

○本誌の旧号は在庫が僅少なため、売切品が続出し、折角御注文下さいました方々にも大変御迷惑をおかけしまして申し訳ありません。在庫一覧表に載っています分は只今でしたら在庫しておりますから御希望品はお早くお申込み願います。

【切腹研究夜話】

田谷敬生論

中康弘通



こうした昭和二十年八月十五日前後に壮烈悲痛な最期を遂げられた烈女たちについて、かつて本誌に分載された田谷敬生氏の論考ほど精緻なものはない。

そこで今回は、氏の論文の数々を思い起してみたい。

昭和二十八年八月号の本誌に、はじめて田谷敬生氏は「女性切腹例と女腹切の考察」を寄稿された。筆者の雑駁な史話ものに比し、是は余りにも精密な研究考察であった。

何よりも驚かされたのは、第一部として田谷氏が、満洲より帰国されたH氏と、H氏の友人であるもと軍人の、某氏から提供されたという、まことに凄烈悲愴な女性切腹例が、四例も発表されたことである。

殊にH氏提供の第一例と、A氏提供の第四例は、いずれも敗戦の現実を痛哭しての自刃であるから、感銘が深かった。

新しい読者のために略述を許して頂くならば、第一例三浦某女満十八才は、満洲某市においてソ連軍の進撃接近を知ると同時に切腹したというから、恐らく八月九日か十日ごろのことであろう。予ねて覚悟を語ってもいた彼女は、刃わたり一尺余もある用意の脇差の

本誌に思い出ばなしを書き続けるつもりでまず「信太蓉子論」を書き、そのまま日が経って、また八月十五日が近づいて来る。

往年、一口の剣に憂国の至情を托し、身みずから刃に伏した烈士烈女の、悲史秘話の数々もいよいよ埋ずもれて、遂に筆者の耳目に触れることがないであろうかと、まことに淋しく思われることである。

二十年も経過して、もう書いても話しても

差し障りはあるまいということになっていようが、今度は当時烈士烈女自刃の場に、たまたま行き合わせたり、あるいは請われて立会ったりされた方々も、往時を思い起せども茫漠たり、というところで、何うにもならなくなっているまいか。

そう思えば、烈士烈女の文字通り生命を堵けた熱袴も、夢のように忘れ去られてしまいかと、一層痛惜の念に耐えないものがある。

鞘を払い、立ちながら腹に突き立てた。そのまま引き廻そうとするが柄を握っているので刃が横に引けず、苦しみつつ横坐りに腰を落した。たまたま居合わせたH氏が駆け寄るのを眼で制した彼女は、脱ぎすていた肌着で白刃を包んだ。両手で刃を握り更に深く刺すと、悲痛な呻き声とともに、右脇までかき切って凄愴な割腹を遂げたのである。

しかし第一例の少女の場合、地名が明らかではないが、万一自刃しなかったとしても、無事に帰国出来たかどうかは判らなかったと思われる。

第四例、軍人の妻松田某女二十六才に至っては、内地に在ったものと思われ、従って死を必する事情が必ずしも絶対的なものではなかったのではないか。彼女は日本の敗北が決定的になると、先に戦病死した夫の親友に、「亡夫に代り切腹して、皇国の安泰を祈念したい」と検分を依頼した。もとより依頼された青年将校は諫止したが、彼女は聞き容れず自刃を遂げたものである。

その従容たる最期は第一例の凄愴さと対照的で、八月十一日朝まず身を清め東方を拝し、徐かに和服の双肌を脱ぐと、切先四寸巻き残した九寸五分で臍下を強か真一文字にかき切

り、臓腑を掴み出して果てた。腸を掴み出すのは遺憾腹、従って怨念を残し潔くないと昔は云われたが、この婦人の場合、むしろ魂魄をとどめて護国の鬼とならんことを期する気魄がうかがわれ、純烈きわまりない。

この第二部は翌九月号に発表された。H氏描くところの女性切腹図により、その凄絶な状況を更に明らかにされた。三葉の図版のうち、美女一文字腹が上述の第四例に、裸女自決が第一例に当るものと思われる。

田谷氏は第二部では女性切腹の心理的医学的考察を進めておられる。そして更に最後に明治三十八年以降昭和二十年に至る検視記録から女性切腹例を集録し、詳細なデータと共に表示しておられる。過去に於て高田義一郎氏の自殺学など文献に散見した事実を、医学的データと共にまとめられたもので、非常に特異な資料であった。

是は医学に携わっておられるという氏の特殊な立場が十二分に生かされたものであり、従来の故実に偏した研究分野を、その面で一步も二歩も進められたものであった。

その後、氏は読者の方々から寄せられた、終戦前後の実例を整理分析し、

女性切腹断想 (29年4月号)

続女性切腹断想 (29年12月号)

続続女性切腹断想 (30年5月号)

を発表された。

続女性切腹断想には、平時二十五名、戦時十五名の切腹例が、年令、既未婚の別、一文字切腹、十文字切腹の別、致命傷の有無などが表示されており、続続女性切腹断想では、实例に基づいて医学的に見た切腹の経過を詳述しておられる。

何れも特異な論考で、更に加えるところは何もないのであるが、その中で特に感銘が深かったのは、やはり戦時殉国者についての氏の分析である。例えば続女性切腹断想には、

第二表は戦時の例である。第一例を除きすべて終戦時に起ったものである。平時の例とは逆に、十五例中十一例は未婚であり、年令的にも十代六例、二十代七例、三十―四十代各一例で、若年者の多いのが目立つ。(筆者註、平均年令約二十二才) これは既婚者が係累の関係から一般に最後まで生命に執着をもつに對し未婚の若年者はそれらの要素がなく、敗戦――純潔の危機をより大きく感ずるためではなからうか。四例は十文字切腹、

五例は立腹で、十五例中九例まで腸管が溢出し、平時例に比べて著しく惨烈さを増している。これは戦争のため残酷な痛苦に慣れたこと、切腹者が敗戦という衝動のため興奮状態となり、周到な準備もなく夢中で切腹を企てたことにもよるものである。

前記のように立腹の例もあり、五例はほとんど全裸に近い状態で切腹していることも、平時では想像も及ばぬことながら、切迫した状況を充分物語っている。

とあり、更に続続女性切腹断想に於ても、

前にもものべたように戦時の女性切腹例

は一般に惨烈なものが多いのであるが、その原因の一つはそれらの女性が切腹についての科学的な知識を欠いていたことであると思う。切腹者の大部分は若年の農村女性で教養の程度が高くないまま、いわゆる講談調の切腹礼讃をすなおに信じたのではあるまいか。彼女らが惨烈な割腹を完遂できたのは、生恥をさらすまいとする極度の責任感と、実見記に出てくるように、彼女らが開拓できたえた頑丈な体躯をもっていたためであろう。

おそらくこのような切腹は今後ほとん

ど跡を絶つにちがいない。
と論じておられるのは、何れも正鵠を得ていると思う。

その後、氏は32年1月号に女性切腹例抄記(上)を寄せ、七例を示された。何れも先に氏の論考の基礎となつた終戦時の実例である。

第一、二例は満洲での二十二才と二十才の姉妹の例で、先に女性切腹断想で、

声を合わせて十文字に掻切っている。

と記された姉妹のことと思われる。妹は出刃で正十文字、姉は鎌で鍵十文字と、用器こそ正式ではないが、作法は戦国武士さながらの壮烈なものである。

第三、四例の四十才前後と二十才前後の母子、第五、六例の二十才前後と十五才位の姉妹は、いずれも満洲で暴徒に抵抗、力尽きて立ちながら腹一文字にかき切って果てたもので、ずいぶん悲愴である。

それにもまして悼ましいのは、第七例、外地で暴徒に連行され、切腹を強いられた十八才の娘である。覚悟を定めた彼女は用意の座に端坐すると、貸し与えられた軍刀の切先四寸も巻残し、深々と腹一文字にかき切り無念の最期を遂げている。

この女性切腹例抄記は、続編を待たれたが遂に今日まで発表に至らず、貴重な資料により精細な論考を続けられた氏も、以後筆を絶たれたのは惜しまれる。

最後に腰折れを記して田谷氏に和し、筆を措くことにしよう。

身を清く保たむがため腹切りし

処女の一と生動し真哀し

望郷の思いを断ちて真哀しも

処女は我と腹切りけり

深く腹切り果てし真処女の

血汐に黄土赤く染みけむ

(旧稿)

いま筆者は終戦当時の殉国自決者につき調査を続けています。当時の女子軍属、日赤救護班、開拓団、農業訓練女子青年、その他一般内外婦女子を含め、殉国自決された方々を記録する文献、資料をお持ちの方、実話をご存知の方はお貸し、又はおゆすり下さいませんでしょうか。小著「切腹」と交換でも結構です。

浣腸器随想

栗 瀬 長

『圧力が水の中を伝わるようすについて調べよう。』

「用意するもの」——かんちよう器 二個

スタンド、ゴム管

(1)、かんちよう器Aにゴム管をとりつけ、三分の一位水をすい上げる。

(2)、かんちよう器Bに水を三分の一ぐらいすい上げてから、ゴム管の他のはしにとりつけ、空気がはいらないように注意して、二つのかんちよう器をしっかりとつなぐ。

(3)、かんちよう器Aをスタンドに固定する。

(4)、かんちよう器Bのピストンをおして、かんちよう器Aのピストンがどう動くかを観察する。また、Aのピストンを指でおさえて

おいて、Bのピストンを押してみる。

(5)、かんちよう器Bの向きやピストンをおす力をいろいろ変えてためしてみる。

『水圧機のはたらきについて、実験してみよう。』

「用意するもの」——スタンド、かんちよう

器、注射器、ゴム、管糸

(1)、かんちよう器にゴム管をとりつけ、水を少しすい上げてから、空気が入らないようにゴム管の他のはしに注射器をはめて、糸でしばる。

(2)、かんちよう器をスタンドにとりつける

(3)、かんちよう器のピストンを指でおさえて、注射器のピストンをおしてみる。

「問題」

注射器の断面積を二平方センチメートル、かんちよう器の断面積を十平方センチメートルとして、注射器に二〇〇グラムの力を加えたときの、かんちよう器にあらわれる力はいくらか。

『空気の圧力と体積との関係を調べよう。』
「用意するもの」——かんちよう器、ゴムのせん

グリセリン

(1)、かんちよう器のピストンにグリセリンをぬって、すべりをよくすると共に、空気がもらならないようにする。

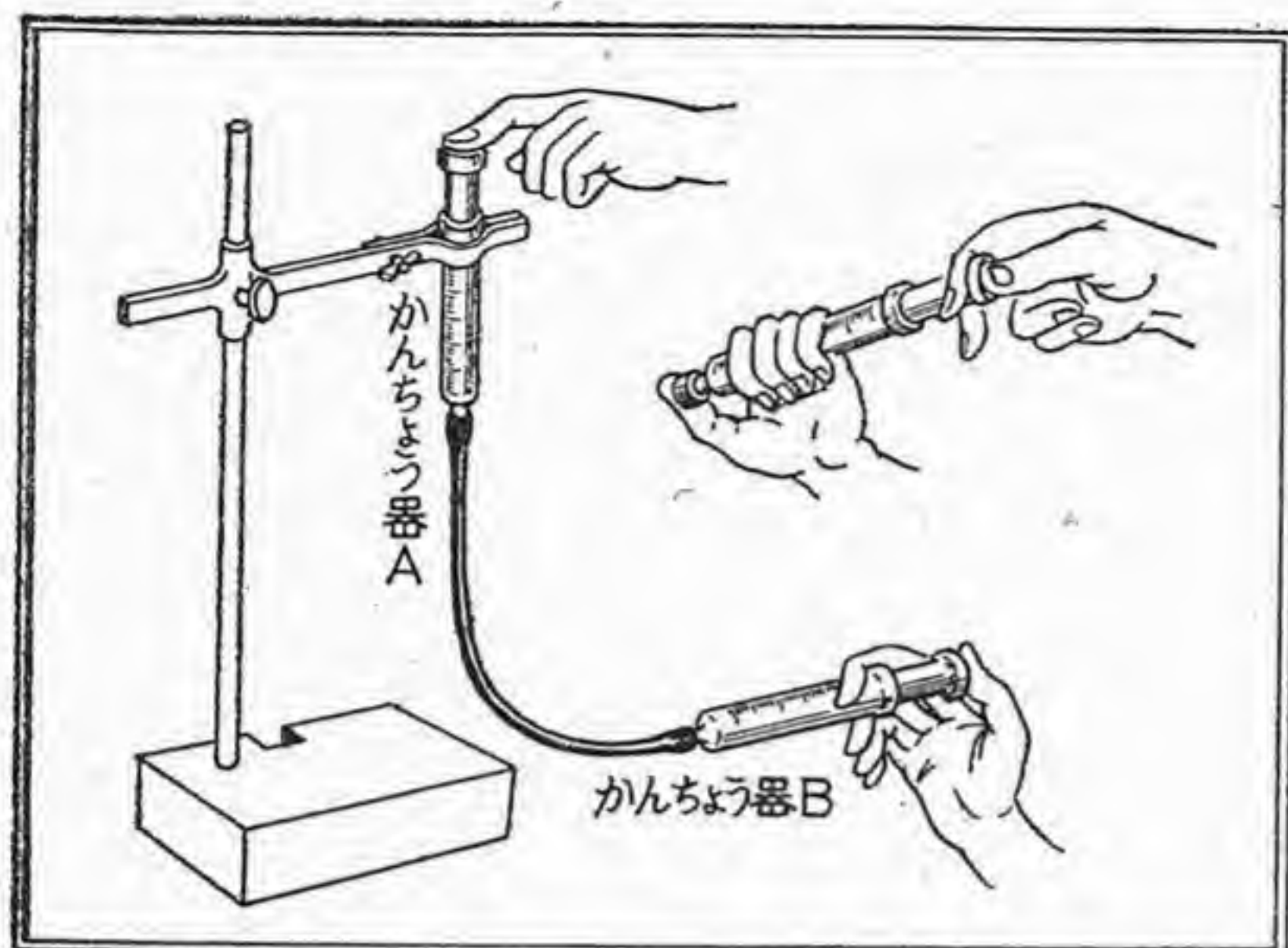
(2)、かんちよう器に空気を三分の一ほど入れて、先をゴムせんてふさぐ。

(3)、指でかんちよう器のピストンをおして空気の体積をおしちぢめると、中の空気の圧力はどうなるか。

(4)、反対に、かんちよう器のピストンを引き出すと、中の空気の圧力はどうなるか。

「問題」

かんちよう器の中の空気の体積が三〇立方センチで、圧力が一気圧のとき、かんちよう



器のピストンをおして、体積を二十四立方センチにちぢめたならば、空気の圧力は何気圧になるか。

東京書籍発行の中学一年、新しい科学「水と空気」からの抜粋である。

我が子も、とうとう中学一年に今春進学した。得々として持ち帰った新しい教科書、若しやと思って、秘かに開いてみた「水と空気の実験」の頁には、果せるかな、浣腸器を用いての実験が、五枚の図版をそえて、のっているではないか。親父、何才になっても、エネマの虜は仕方のないもんだなあと、我ながらあきれるばかりである。

それにしても、懇切丁寧な図解と実験方法、グリセリンをぬってすべりをよくするなどとはまさに心憎いばかり、あまつさえ、浣腸器の断面積に関する問題など、我々マニアにとっては、三〇CC、五〇CC、一〇〇CCの浣腸器を想定して、夫々計算してみると、その圧力の大きさに驚くと共に興味のつきないものであった。

それから既に、二カ月、学校の教科過程は進み、水と空気はもうとっくに終わっている。その間、私は、我が子の反応を静かに注意深く見守ってきた。親の血をひいて、まさか、浣腸に深い関心がありはしないかと。

しかしそれは、杞憂にすぎなかったようだ。半分、大人になりかかっている彼女は自分の勉強部屋に入ることすらう。

まして机の中をひっかけ廻されるなんてことは、大変な侮辱だと思うらしい。勿論、私も我が子の「秘密」など知らうとも思わない。しかし、この浣腸器を使った実験の反応だけは別である。

そこで、学校に行っている折、丁度理科のない日に、そっとノートを開いてみた。水と空気——水の中ではたらく圧力、きれいに整理されたノートには、

「注射器の断面積を二平方センチ、かんちょう器の断面積を十平方センチとして、注射器に二〇〇グラムの力を加えると、注射器の水に加えられる圧力は二〇〇グラム÷2平方センチ＝一〇〇グラム平方センチである。この圧力はそのままの強さで水中を伝わり、かんちょう器のピストンにはたらく。そのときのかんちょう器のピストン全体にはたらく力は、一〇〇グラムセンチ平方×一〇平方センチ＝一〇〇〇グラムで、注射器に加えた力の五倍になる」

と、臆せず堂々と整理してあるではないか。たどたどしい「かんちょう器」という文字が印象的であった。何でもないとだ、よかった。よかったと私はつぶやいた。

それにつけても、私は二十五年前を思い出す。私にもその時代があったのだ。勿論、理科実験の日であった。

「ここにある浣腸器、いいかな」

こう先生が切り出した時、二三の生徒がクスツと笑ったものである。戦時中、スパルタ教育の行われていた当時、授業中に笑うなどとは、とんでもないこと、

「何がおかしい。誰だ、笑ったのは。浣腸器がおかしいか。え。君等だって、浣腸器の世話になったことがあるだろう。急病の時、浣腸器が人の命を救うということをよく考えてみる。いいか、分ったか。では続ける」

教師の剣幕に、シュンとした我々悪童共は黙って授業を続けた時の印象が鮮明に思い出されるのであった。

私は一人で真赤になっていたように思う。

もうその頃では、家人の留守の折など、家の救急箱の中の、グリセリン浣腸器を秘かに取り出してはいたずらをしていただけに、授業中の浣腸器をみるだけで、恥ずかしかった。誰かが、私の性癖を知っていて、笑ってやしないか、そんな被害妄想が幼な心をいためつけるのであった。

「では、いつものように、六人宛組になって

自分達で実験してみい。戸棚に、浣腸器が十本ある。一組一本ずつ。いいな、はじめ」

どやどやと悪童どもが群がって、実験器具戸棚から、浣腸器をもって来る。そんな時はやはり、一番の腕白者がリーダーシップをとる。私も、可成り腕白の方だったが、今日ばかりは、一番うしろの方でもぞもぞしているのだった。

「お、でっかい浣腸器だな。お前の尻に、浣腸してやろか」

「いやなこった」

「いいぞ、いいぞ、やっちなえ」

「こら、何をがやがや騒いでおるか」

果せるかな一喝がとんできた。神妙になっ

た生徒、先生は一段と声をはりあげて

「いいか、浣腸器はガラス器具だ。だから、特に注意して扱わねばならん。さて、浣腸器

のピストンを、おしたり引いたりすると、体積が変わることがわかるな。このとき、空気をおしちぢめて、体積を小さくすると、空気の圧力が増して、指をおし返し、反対に、空気をひろげて体積を大きくすると、圧力が小さくなって、ピストンは引きこまれる。このように、とじこめられた空気の体積を変える

と、空気の圧力が変化する。いいな。こら、

二班の栗瀬、なんで下をむいとる。こっちを見い。お前、ここへきて、今の説明を實際にやってみい」

浣腸器を見るのが何か恥ずかしくて下をむいていた私は、とうとう先生につかまると同時に、教壇に上って、全生徒注目の中に、大きな浣腸器の操作をさせられる破目になってしまった。

日頃、いたずらで馴れ切っている浣腸器、そのピストンの操作など朝めし前のことながら、私は顔から火の出るような思いだった。何でも無い、何でも無いことだ、自分に言い聞かせながら、私は、黙ってピストンを操作した。心なしか手がふるえるようだった。

「よし、分ったな」

放免された私は、一気に力がぬけたように感じた。「お前、真赤になってるな」なんて言われたらどうしよう、その危懼も杞憂に終った。

そんな幼き日の思い出が、今、長女の教科書、ノートを見ながら、次から次へと思い出されるのであった。

お、もう三時だ、やがて学校から帰ってくる。これはいかん、私は元通りの位置に教科書、ノートをしまおうと、何でもなかったような顔をして、自分の書斎にもどってくるのであった。馬鹿に、煙草がほろ苦かった。

△ S M 時 評 △

「映画『花と蛇』遂に完成」

その朗報を背景に

生きた編集　ますます快調

新刊八月号を見て

橘　行　司　子

東西、東西、天下御免は S M 時評。新刊八月号を手取る、ペラペラめくる。うわァーとその場でこおどりする。さっそく冷めたいビールを冷蔵庫より取り出し「ブラボー・奇譚クラブ」ペンもつ手もうれしく、さて、これで四回目——。

「映画『花と蛇』遂に完成」その朗報を背景に、生きた編集ますます快調」これが奇くは八月号の駄ベル眼目だ。

「この原稿が K K 誌に掲載される頃には、スタッフ・キャストもはつきり決定する事と思うが、その後の撮影の経過など、また、鬼六談義の章で」と、本年二月号「鬼六談義・S M プレイの知恵」で団鬼六氏は書いていたが遂に、その約束通り「鬼六談義・映画『花と蛇』」で、ようやく完成。試写会まで催され大いに好評との発表がある。まずはパンザイト、特筆大書して誌友のみなさんと共に、行

司子もよろこびたい。特に、水と油でもあるう無理解な社会と S M マニヤの世界を結ぶための、一つの突破口としても——だ。

「S M 世界と美」。多少でも、ありふれたエロ映画ハンランに食傷している人達の眼をひらかせたいものである。（頁の設定もあるもので、後は読者の声にバトン・タッチ）

◇団鬼六氏へ直言。

羞恥文学の最高傑作とも評せられる『花と蛇』という親があって、子の映画『花と蛇』が生れた。それなら、なおのこと、親はガンバラなければなりません。本家、本元が二回も休業状態では、こまります。（小説『花と蛇』に期待のあまり失言はお許しを——）

○

『読者通信』に、（東京入道谷生）が、
「七月号のカット、挿画の充実はまことに、欣快です」と言っておられるが口絵及グラビヤ写真が全廃になってから、本文充実によってカット、挿画等への、編集部苦心は頭が下る程に誌面から、よみ取れるが、それがまざまざと反映された——のが、新刊八月号ではなからうか。どの頁のカット、挿絵を取っても、本腰を入れてきたことがハッキリ判る。それから編集構成の点から見て、フオート入り

『小説、「梨花悠紀子」夜乃探郎』、『鬼六談義・映画「花と蛇」団鬼六』の二つが、サービス万点。本文・扉の「愛読者の皆さまへ」の上段カットは、奇クならではの華麗な緊縛画。

『奇クサロン』冒頭の「生首と残酷シーン」編集子の言葉は「戦争とは、残酷で陰惨なものである。二度とあのようなことに駆りだされたくないものだ」の結びが生きていた。推理作家が、その血みどろに書く作品の外は、まことに紳士的であるように、SMマニヤも耽美の世界の他では、みな、平和愛好者なのだ。そう、私は思う。

このへんで、読者のオシャベリ振りをのぞいて見よう。

◇「拝啓、箕田編集長殿」木戸川健氏が、六月号で「女陰芸術論」をされ、私が「新奇」とレッテルしたことで、再度、御判定とオイデナスッタ。とかく、男の全裸ヌードが、それも前向きですネ。よほどの芸術（私も使わせていただく）的なフォトでないと、（後は説明不要でしょう）それと同じで六月号のは「新奇」と怪く逃げるにしかずと思ったわけです。今回の民社党？ 木戸川先生の御提案は、いただけます。（どうです。先生、みず

から、フォトを投稿されませんか。編集長がどうでるか？「女陰芸術」でなければ、とにかくハッキリした軍配は、「拝復」として編集長が書くでしょうから？この問題については、私はコレマデー。後は七月号の「読者通信」で通信文の扱いについて、のことで一言。これは、編集部の上と、私は解釈する。「読者通信」ランで連絡取れたら後は、おれ達の勝手だ——ということはありませんかね？一度でも本誌に通信がのれば、後々までも、編集子は責任を感じていられると思う。何かあれば、「奇ク」の名が出るんですから。いつでしたっけ。おれは、ナニ子に、オカネをいくら取られた——など喜劇が記事になったのは。（これも、編集長殿から返事あるでしょうから、デシヤバリはこれ位で。）

◇「お詫びと弁解とお礼とお願い」黒淵加集子さんには次の一言を。久我庄一氏が「人間、梅原北明伝」の中で言ってられますようにときに「真実は事実を超える」、その意味で貴女の文章の底に流れる真実の叫びに私はうたれたのです。ともかく、御主人、嬰一氏が元気になられたことは、うれしいことです。これを機会に御夫婦で、本誌の常連寄稿家と

して、ドウゾ。

◇芳野眉美氏が「濡れにぞ濡れし」で、保藤久人氏の「SMよ、今日は」を「A主題と必然性」で取上げている。これは、私も、八月号のこのランで「ザックバラナ好エッセイ」として特記したので、その裏付けとして正直の所、ウレシクなった。ただし、芳野氏よ、もっとスッキリ書けないものだろうか。ペランメイ調は面白いのだが、文章があまりにも生すぎる。お山の大将われ一人のシャベリ方では、いつか、くたびれますよ。（トルコ風呂でもゆっくりお入りになって、のんびりしたとこで御執筆を！）

◇「芳野眉美氏への公開状「濡れなくても濡れる？」ということについて」——奇ク六月号「ガン作・マニヤのノート」を見て、夜乃探郎「行司子いわく、コレハ、面白くなったわい。片や「俺は生きている女体のほうがいい。」「——片や「幻の夢男のために」とか。私は、第一回目の「SM時評」以来、勝った負けたの軍配は、上げないことにしているの、オセツカイだけさせていただく。芳野旦那は、このところ神酒をのんで一杯ゴキゲンだし、夜乃旦那は幻を食べすぎて足元フラフラ。これは、是非、オカタイ旦那達（木戸

川健・山口広・西条操の各諸氏ETC)に御登場、オシャベリを願いたい所だ。

◇『人間、梅原北明伝』試作メモ・久我庄一氏となると、もう、デンとかまえちゃって、学のない私には、どうも、ナントモ・イヤハヤ。とにかく「編集後記」(八月号)の言葉におまかせするよ。

◇奇ク文化勲章とやらがあるとすれば、さしあたり牧高志氏に捧げたい。その長い間のひたむきなSM世界に対する御研究と、本誌への独自の御寄稿に——。(今回は「懐古趣味」)さて、創作陣に眼を移そう。

○西条操氏の本格サディズム小説の、「心傷たむ遍歴」に(第十二章まで連載され、まだ未完)そのオーソドックスな御執筆振りに、拍手を送る。そのドッシリとした作品よりにじみ出る風格は「SM」より見た世界史シリーズ・黒淵要一氏と共に、本誌の双璧をなすものだ。(『花と蛇』を別格として)。八頁の設定もあるので後は「妙姫抄」山口広・「啓子散華(続)」高野原美・「奴隷」平伏人「小説? 奇ク三匹の侍」夜乃探郎・「小説梨花悠紀子」夜乃探郎・「痴人の糧」山本章——各氏の作品名を上げ、興味深く拝見させていただいたことのみ記すにとめる。

つづいて、今回の「特別期待賞」について。

『SM入門講座・若き友に与う』栗瀬長氏のその実感的文章に期待するあまり、「特別期待賞」を贈らせていただき、より今後の御健筆を祈る。

「努力賞」について

万田不二氏の「悦庵絵灯籠」も、「その十三」となる。今回は「浪江大五郎」努力賞を捧げ一層の御健筆を望む。

○

◇異色的なエッセイとして——は「妊婦ヌード・ハント」瀬沼四郎氏と「再び直腸鏡検査について」八羽鳥水江さんへVおもだか・しの氏を上げ、ますます筆に油が乗ってきた羽鳥水江女史の(「子を孕んでいるナルシス」「バー」「ぼて」の妊婦たち)に敬意・脱帽。

◇懸賞入手記・告白・体験V入選作品「ある夏の間奏曲」木原榮二氏には、私の信条「書くことは生きることだ」をおくり、氏の結びの一文を引用「この佻びしさをまぎらわす一つの手段として、拙い手記を書いた次第である」——。

◇奇クサロン寸感。

○辻村隆氏よ『七月号「SMカメラ・ハント」を見て』夜乃探郎氏の一文でもよく読んで元氣を出して下さい。私も、声を大にして辻村氏よ、ガンバレ!

○瀬沼四郎氏の「孕み女をうたった二句」は文献的に評価。

○吉村英子氏の短歌は、どれもそこに人生が唄ってある。特に「熱たかき日の淋しさやほそぼそと漫瓶の中を尿走る音」がよいですね。

○ビニール人形の娘相撲の写真、葉山夕起子氏よ、アリガトウ。本当に楽しく拝見させていただきました。

○八新しい雑誌からV保藤久人氏。実は、私もこの「小説現代」不毛の愛・倒錯の性・人間深奥の歪みを衝く」の帯封には、ドキリノ興味を引かれた一人と告白して置く。だから、氏の一文には、興味深いものがあつた感謝です。

——まだまだ書きたいけど、時間一杯(いや、頁の設定限りか)ともかく、パチパチと拍子木鳴ってこれで幕——。

(オシマイ)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 東雪枝さんとの対話（やさしい鞭）
 B 伊根子との対話（シゴク）
 C 沢井和雄氏との対話（殺菌作用）
 D 高岡久人氏への返書
 E 香織との対話（でない）
 F 八月号への返書

夜野探郎様
 黒瀬賀集子夫人
 羽鳥水江夫人
 八王子生様

訂正

A やさしい鞭

六月九日——東雪枝さんとの対話。

「……やさしいのにねえ」

「――」

「血はキライだし」

「でも、鞭だと、傷がつくでしょう」

「ミミズ服れ、だけですわ」

「どの程度の」

「二週間ぐらい」

「――で、消える」

「ええ」

「それなら――」

「たいしたことないの」

「たいしたことない」

「限度は知っています」

「そうですね」

「おおげさんなんですわ、わめいて――」

「わめいて、ね」

「外に聞こえないかと思って……」



三月号の『虹のあじさい』に依れば、ここで、特殊な、そう、特別な猿ぐつわをするこ
とになる。

「いくじがない」

「――」

「踏んでくれて云えば、踏んであげるし、
馬にしてくれて云えば、馬にしてあげるし
……」

「やさしく、ね」

「ええ」

おトイレにして下さい、ってたのめば、や
さしく……実験台になろうかな。

「馬は、興味がないな」

「面白いわよ」

「ははあ」

「男を足で踏みつけるのって、とても気持ちが
いい」

「そうでしょう、そうでしょう」

「ギューギュー踏んづけてやる」

サービスしてあげるといふこと。

「でも、鞭のほうが、ずっとすばらしい」

「――」

「一本、一本、男の肉体に鞭のあとをつけて
いく光景なんか、説明できませんわ」

「それで、すぐ消えるなら」

「消えますわ」

「――」

「相手の男をさがすのって、むづかしいです
ね」

「そうでしょうね」

「誰か、いないかしら」

「私の相手をさがすよりむづかしいでしょう
ね」

「親切にしてあげるのにね」

「それでも、コワイかな」

「あきらめました」

「そんな気の弱いことを」

「相手の男を、やさしく飼育するんですね」

「そうしましょうか」

ふと、気がついて、

「ウイスキーではつまらないでしょうが」
と東さんが笑った。

「ははあ」

「どうぞ、ウイスキーを」

「有難う御座居ます」

体内を通過したウイスキーでもいいんです
よ、と云おうとしたが、ヤメタ。俺は、やっ
ぱり純情なんだな。

東さんは、ボーイッシュなスタイルがよく
似合う。

B シゴク

六月十三日――伊根子との対話。

「お久しぶり」

「なかなか会えないね」

「休んでいたから」

「会えて、よかった」

「うれしいわ」

ここで、キス。そういうことになっていま
す。ハイ。

「縛ってあげようか」

「うん」

「ロープが無いのよ」

「飲むだけでいいよ」

「うしろに廻して」

「――」

「手を、よ」

伊根子は、ワンピースの細いベルトをはず
すと、それで、器用に縛った。慣れてる。

「床に坐って」

顔のところに、伊根子の、二本の裸の脚の
つけ根がある。

「少し、待っててね」

しばらく、笑いながら、見下している。

「手が、痛くないの、そんなことをして」

「別に」

「へんなの」

何かが、そう、軽い羽根のようなものが、鼻をくすぐった。

押されて、勢よく、うしろにひっくり返った。頭を、床で打ったようだ。

「大丈夫」

「平気だ」

伊根子は、顔でふくつもりだったらしい。

「あと始末も、してもらわよ」

「どうぞ」

「どうぞ、だって」

また、何かが、そう、秘めた芳香を漂わせながら、鼻をくすぐった。

「私のね、どんな味がするの」

「おいしいの」

「うそ、おっしやい」

ひょいと、伊根子が、顔に腰掛けた。縛られた両手が痛みだした。

「これから、どうしよう」

鼻と口が密閉されて、苦しい、息がつかない。

「シゴクか」

眼の前に、伊根子の、小さなAが息づいていた。

C 殺菌作用

六月四日——沢井和雄氏との対話。

「十年前の君は、ニヒリストだった」

「今だって、ニヒリストですよ」

「徳川夢声的ニヒリストだ」

「陽気なニヒリスト」

「そうだ」

「ニヒリストには違いない」

「十年間の君を見てみると、非常に興味がある」

「精神科の医者としてですか」

「そう」

「博士の患者になりますか」

「もう、なってる」

「ところで、博士、あの小説（五月号）祈りの呻き（参照）のモデルは」

「実話ですよ」

「大丈夫かな」

「何が」

「患者と同じ趣味じゃない」

「だから、よくわかる」

「それもそうだ」

「とにかく、分析してみよう」

「よろしく」

「君と話をしていると、飲みたくなるな」
「よほど、飲みたい顔をしているんだな、俺は」

「この頃、飲んでる」

「毎日」

「ウイスキーの話じゃないよ」

「ああ」

「どう」

「時々ね」

「身体は——」

「こわしたくない」

「そういうものだ」

「健康」

「医学的には、接吻のほうが不潔なんだぞ」

「へえ」

「唇には、殺菌作用が無いからな」

D 高岡久人氏への返書

六月一日——高岡久人氏より手紙。

高岡久人氏の手紙と通信（五月号奇クサロン「M的ニュース」参照）を拝見すると、どなたか、S女性と交際したことがあって、神酒の経験もおありのように見受けられるのだが、くわしいことは発表してられない。

気怪に、奇クサロンにでも書かれたらいか

がですか、高岡さん。ニュースの紹介より、より以上に価値が有ると思いますし、私としても現実の話のほうが興味があります。

高岡氏の手紙の中には、昼でも夜でも気がむいたときに、奴隷の舌で奉仕させる女帝のことが書いてありましたが、空想としても面白いものです。（紹介文ですが）

群臣の居並ぶ前でも、執務の最中でも、食事をしている時でも、昼寝をしている折でも奴隷の舌で快楽にふける女帝、よりS的で刺戟的ではありませんか。

そして、その奴隷を訓練する、教育係の女官たちの存在が、かえって楽しい。奴隷に、舌によるテクニックや、より高級な技術を習得させるために、女官たちが、よってたかって、数人で、奴隷をトレーニングさせる。

便器なんて、初歩ですよ。女官たちが、集団で、一人の奴隷を、集中的に便器にしたらそれだけで絵になりますね。

こういう小説を書く為には、一応、時代を設定し、時代考証をして、歴史を調べなければなりませんから、どなたか、歴史の好きな方で、この題材を小説にして下さる方は居ませんか。私には無理です。

高岡氏に代ってお願いします。

女帝小説は、類係すぎるくらいがあるし、私の生活とあまり関係が有りませんから、そう書きたいとは思わないのです。

女官たちの群集心理を、現代におきかえて、公国のヒマな人妻たちが、一人の御用キキの青年を襲う話なら、興味がわきますけどね。別にS的でもない人妻たちが、その時だけ、その青年に対して、残酷になる。そのへんにこぼれている話を、少々性的にまとめればいいのですから話も展開し易い様に思います。

——そういうわけです。

高岡久人様。お手紙有難う御座居ました。誌上を借りて、返書に代えさせて頂きます。

E でない

六月十六日——香織との対話

「今夜も、だめ」

「だめ」

「いつも、だめ」

「だめ」

「いつになったら、いいの」

「さあ」

「いつかは、いいんだ」

「さあ」

「でないの」

「でないわ」

「香織さんが化粧室に行ったの、見たことないものね」

「見せるものじゃないわ」

「でもさ」

「でもさ」

「行くことは、行くんでしよう」

「そんなこと」

「あたりまえだよ」

「そうよ」

「そうよ、って、だから、飲ませてよ」

「飲ませてよ、って云ったって、でないもの飲ませられないわ」

「無理に、だしてよ」

「それこそ無理だわ」

「でたら」

「でたら」

「飲ませてくれる」

「あげてもいいわ」

「そんなら」

「だせ」

「そう」

「でないもの」

「困ったな」

「困った」

「困った」

「おかしな子」

「真面目ですよ」

「オッパイで我慢しなさい」

「乳くさくて」

「いたいのよ、張って」

「青筋だらけだ」

「吸って」

「しほれば、いい」

「そう」

「吸いますよ、吸えばいいんでしょう」

「いたっ」

「失礼、慣れてないものだから」

「馬鹿ね」

「まずいなあ」

「文句ばかり云ってる」

「まずいものはまずい」

「怒っているの」

「飲みたいものは飲めないし」

「飲みたくないものは飲ませられるし」

「わかっていればいい」

「こっちも」

「赤ちやんにとっておけよ」

「吸いきれないのよ」

「御主人にしてもらえばいいのに」

「毎日じゃあきるって」

「それもそうだ」

「上手だわ」

「有難う」

「あのね」

「なあに」

「まだ、でない」

「でません」

「くどいね」

「まるで赤ん坊だわ」

「ほしいものはほしい」

「少なう」

白い乳液が、乳首の先端ににじみでて、やがて大きな粒になると、青筋の浮き上がった最中を、乳房からすうっと離れて、下に流れていった。

F 八月号への返書

夜乃探郎様

八月号「公開状」と「三匹の侍」拝見しました。

御丁寧な公開状で、有難う御座居ます。頁をめくったときには、テッキリ、銃殺されるのではないかと思いました。

拝見して、大変参考になりました。現在の

私は、実に不安定な位置に居ますし何を書きだすか、私自身もわかりません。

ただ、わかっていることは、自分の性生活は、現実（空想でなく）大切にしていこうということだけです。だから、現在の私が、「生（ナマ）になりがち」になっても、私はそれでかまわないのです。申し訳けない。

その意味で『遊び』を書きました。現実と空想を混同しないように、一線を引いたつもりですが、舌足らずな文章は、最も私のトクイとするところですから、活字になったのをあとから読んでみて、私もコンガラガッテいるのです。

とはいいい、私ながらは小さな頃から、ずっと、まあホントにあきもせず、空想家で、だから、今でも、せっせと、ワケノワカラナイ小説を書いているわけです。空想の世界は、「自分の能力をどんどん広げて」くれますからね。こんな楽しいことはない。

これでは、お答えにならないでしょうが、夜乃氏御自身が「三匹の侍」の中で、この返書を書いていられたから、強いて、私がこの返書を書く必要もないのです。要は「御自分が面白く楽しむことだ」ってね。

さて、私は、ヘソマ加里ですから「濡れに

ぞ濡れし」の行間で、ニヤニヤしているもう一人の私をみつけて下さったほうが、よろしいのではないかと思ひます。

また、勝手なことを書いていると笑って下さって結構なのです。

私自身は、ツメタイ人間だと、思っています。結末をつけない放言が、何より好きです。し、ワケノワカラナイことを云って喜こんでいるのですから。

つまらない文章を、それだけ深く、読んで下さったことに感謝します。貴兄をわずらわせたことをお許し下さい。

今後とも不可解な迷文句を吐いて、皆さんを悩ますことを誓います。

黒淵賀集子夫人

八月号の「お手紙」拝見しました。

御主人嬰一氏は「反語の好きな男」だそうですね。では、

「賀集子を、金髪附、荷造り送料当方負担で、一週間——」

私に（私に、ですよ）

「貸出すべきだが、当方の意図したのと異なる目的に転用されるおそれがあるから止めておく」

とありますから、得意の「反語」で、賀集

子夫人の神酒を拝受出来るものと、私は解釈致しました。それも「一週間」ネ。

髪の色なんて問題外です。私は、ただ、貞淑な美しい賀集子夫人の神酒が飲みたい。

早く「荷造り」されて下さい。「送料」はこちらで支払います。そこまで御心配なく、気軽に、配達されて下さい。

嬰一とケンカした時など、御利用下さるとサッパリしますよ。

一生に一度ぐらい変った、経験をなさるのも面白いと存じます（これで、ラブレターのつもりなんだけど、ダメかな）

羽鳥水江夫人

「奇想天外」な八月号、「バーバての妊婦たち」拝見しました。いつも、アイデアが面白いので、楽しみにしています。

そこで、七月号の「牝鶏妻」なのですが、読んでいて、またまた贗作したくなったので書く前におことわりしておこうと思います。

ヒントを頂戴致します。

八王子生様

八月号読者通信拝見しました。

せっかく、下原八重子さん（七月号『Sの女性』参照）に呼び掛けられながら、女王様にお目にかかれなかったとは残念なことでした。

た。

読者通信だけでは、連絡方法も無く、実に女王様に面接することも出来ない現状は私とて、身にしてみてもわかるのです。

全く、SM斗争はキビシイですね。

ともあれ、今後の成功をお祈りします。報告有難う御座居ました。

下原八重子さん、彼

「女王様の御許しが頂けましたら、御命令に服したいと存じます」

と訴えておりますから、気がむいたら、どうぞ。

訂正

「贗作芳野眉美氏の優雅な生活」A Fの章Vの「生まれたままの姿の美少女と美少年を両側にかかえて——」

となつていますが、これは、マミとサクラのことですから

「美少女と美少女」

でないという意味が通じません。

彼に、二人の美女を同時に抱く趣味はあっても、男色趣味はありません。美少年はオコトワリします。美少女ならいい。美少女ならヒトカタマリ抱いてもアキナイと、彼はそう云っています。スケベで困ります。ホント。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

“自己を分析する”

△珠江抄△以前

保 藤 久 人

1

——成熟した女性の肌を想い、そして、翳りのないその部分を心に描くと、私の心は忽ち激しく揺れ動き、深奥よりゲンと突上げて来るものを感じてハッとする——

何故自分はこののだろうか。と、ふと思うことがある。一種の自己批判である。

その中には当然のことながら“反省”の意味も含まれているが、反省しなければならぬい程、今の私は自分に嫌悪を感じていない。それどころか、かえって自分のそういう心を

大切に保持し続けて行き度い、という気持ちさえある。年令的に成長した為かも知れないし、又、今日までの歳月にいろいろな人に接し、物の本を読んで得た知識の為かも知らない。

人それぞれに千変万化はあるが、人間には忘れられない過去の記憶が数々ある。嬉しい事、楽しかった時。又、恐しい出来事、悲しかったことなど。△喜怒哀楽△と言われるそれ等の記憶の中には不確かな曖昧なものも随分あるが、それ等を辿って見ると不確かなものは、楽しみや喜びに多く、恐怖や悲哀は意外に根強く意識の中に留まっていることを

知って驚くことがある。フロイド流に解釈すると、自意識のない様な子供、その遥かな頃に経験する人間関係の影響が生れ乍らの素質に加味されて、その人を形造って行くという。近頃、三才児の教育ということが重要視されているのも、この辺に要因があるらしい。

私自身、物心のつかない幼い頃は別として微かな記憶を辿って行くと様々なことがあった様である。私が八つの時に生れて間もない弟が死に“お祖母さん子”といわれ、一番可愛がって貰った祖母が亡くなったのは十一才



で、同じ頃に末の妹が生れた。兄が学校に入り寮生活を始めるともう男の子は私だけで、姉や妹とは別物の様に大切にされて我儘に育ったらしい。自分に女性向な部分があったとは思えないが、三年生頃までは姉の友達の仲間入りをして、女の子の遊びに興じたのを覚えてる。

六年生の終り近く、私は卒業生を代表して学芸会に出ることになった。元来、はにかみ屋で内弁慶であった私は、この決定に驚き魂

消たものである。が、それでも説得されてしぶしぶ承知した。劇の内容ははつきり覚えていないが卒業記念ということで、六年生と一年生の合同であったと記憶している。私の役は『父さん』であり、一年生の男の子が私を『父さん、父さん』と呼ぶことになった。そして、同じ六年の女生徒が『母さん』役になったのである。何故この様な台本が選び出されたのか、その理由は知らないが、当時の気恥しい年頃の私としては全く迷惑な役割であった。『母さん』になるH子は色白の可愛い少女であった。スラリとして脚が長く小柄な私と並ぶと彼女の方が七八厘も高いのである。担任の先生が二人を並べて見て、思わず苦笑を洩らしたのを私は今も忘れていない。

その身長差が、尚一層私を羞恥に追いやった様で、稽古を始めた四、五日というものは私は恥しさばかりが先立って練習に身が入らなかった。その上、H子の美しさが重々しく大きく私の心に乗りか

かって来るのである。女性の美しさなど判る筈のない年頃であるのに、確かにその折、私は彼女を綺麗だと思った。この感じ方は、その後で登場して来る女性達と比較して、その表情や声、態度の優しさなどから子供心に判断したのであろうと、今になって思っている。

その頃の私は、可愛い生徒であつたらしい。そしてH子も又評判の生徒であつた。小学生であり劇中の役柄とはいいい乍ら二人は一年生の少年に『父さん、母さん』と呼ばれる。つまり夫婦なのである。当然の様に同級生の間で噂が立ち始めた。

私の家は同じ学区内でも東端にあたり地理的には隣接校の方が近いのだが、私は指定された学校へ通っていた。その為、子供の足で早く歩いても三十分近くかかった。途中には野原があった。今はもうその辺り一帯住宅が並び新しい学校も出来、寸分の空地もなくなつたが、その頃は子供のよい遊び場であつた。小川もあり社の境内になる木立の道もあつた。早春とはいえ、冬の事とて日暮れは早い。午後の授業のあと、劇の練習の終る頃はもう薄暗くなっている。臆病な方である私は木立の道を一目散に駆け抜ける。或は又、廻り道でも人家の多い方を選ぶこともある。その

日も、遅くなったので私は遠道を選んだ。急ぎ足で帰る私の前に、道一杯に通せんぼをする様に四人の女生徒が手を繋いで立ちふさがったのである。

「お母さんより小さいお父さんやーい！」

それは、その当時の私にとって一番の弱点であった。

思わず「ウッ」と憤りが込上げて来て私は握り締めた拳を震わせたが、「ウフフ、可愛い、お父さん！」という大柄な生徒を認めた時、忽ちその力も萎えて行ったのである。

A女は同年生乍ら当時の軟派の代表であった。身体も大きく胸や臀も丸くふくらんでいた。或は、最早や既にA女Vであったかも知れない。何時も五、六人の仲間を連れて歩き色気づき始める年頃の一部の男生徒の好対象であった。そしてA女の仲間は六年生ばかりでなく女学生もいた様に思う。

四人は私を取囲んだ。人影はなかった。

「久人君は、もう大人でしょう。お父さんだもの」

そしてゲラゲラ笑い時々女の子にあるまじき卑猥な言葉で私をからかうのである。私は無我夢中であつた。誰か一人を、必死になつて突き飛ばして駆け出していた。羞しさより

も口惜しさよりも、その時の私は唯恐しかつたのである。逃げ出すより他、方法はなかった。家に走り込んだ時、寒い日であつたのに私の全身は汗にまみれていた。

翌日から、私は学校が嫌になり休んで仕舞つた。三日目に先生が心配して様子を見に来た。H子も一緒であつた。理由も言えず、今更嫌ともいえず、四日目から私は又登校し練習を始めた。そして帰りはあたりを窺いつつ安全そうな道を選んだ。稽古は順調に進み、次第に私も馴れて来て、練習の合間にH子と喋ることも多くなり、私は新しい女友達の出来たことを喜んだものである。

予定されている三月二日を目前にした二月の末日。私は何時もの様に四圍に注意をし乍ら帰りを急いでいた。その頃は少しでも早く帰り度いと思い、淋しくても近道を利用し、本立の道や野原は一気に駆け抜けることにしていた。その日も、私は本立の暗い道を行き小川の石橋でホッと一息ついた。そして、其処でA女達に掴まって仕舞つたのである。

彼女達は橋の蔭に潜んでいたのだ。不意にヌーッと立上った二人の姿に「アッ」と声を出し、慌てて逆行して逃げようとしたが、その私の鼻面を押える様にして、A女を真中に

した三人の女生徒が大きく手を広げて、「ワッ」と声を上げて襲いかかつて来たのである。この小川の石橋の両端には危険なので常夜灯がある。暗い道から明るい場所へ出てホッとする私の隙を狙っていたらしく、計画的であつた。

私の余り太くない肝魂は瞬時に縮み上ってしまい、逃げ場を失った私は今にも泣き出しそうになり乍ら意気地なく橋の真中で膝をついて仕舞っていた。本当に全身の力が抜けた様で、A女に手首を掴まれて引き寄せられ乍ら抵抗する術をなくしていた。彼女等の数は五人。私を引摺る様にして近くにある小さな社に追い立てたのである。

2

今迄書いた部分には記憶の誤りがあるかも知れぬが、その時からの一時間程の出来事を私はつい先頃の様に思い出すことが出来る。その総てを文字に綴ることはむづかしいが、A女達の言動はその一つ一つを克明に脳裏に浮ばせることも可能である。

私は真実に、女とは恐ろしいものだ、と思つた。灯りは用意された一本の蝋燭と、そしてA女ともう一人の女——K子という女学生で

あった——が持つ懐中電灯であった。埃のある板の間に錠が敷かれ私はその上に押付けられていた。四肢は四女が押えていて逃れようと必死になっても身動きも出来ない。A女は私の胸の上に馬乗りになった。A女の差しさず光を顔一杯に浴びて、私は泣き、そして喚いた。

「うるさいぞ、ギャアギャア泣くんじやない」

膝頭で私の腕を押え、真上から私の泣き顔を見下しつつ、A女は意地悪そうに笑い、額をコツコツと指先で小突く。他の者も一緒になってゲラゲラ笑うのである。

「どうだ、チビ父さん。降参するかい。降参してうち等の家来になるか」

「やめろッ！ ウウッ許して——」

泣き叫ぶ私の、弱い男の様子に彼女達は益々興がり乱暴が激しくなり、口々に乱暴な言葉を出したのである。私は大きな恐怖に包まれ一段と脅えた。が同時に悔しさと共に不甲斐ない自分が情なく、彼女等の虐めつけるのに許しを乞い乍らもA女の言葉には首を振って拒否していた。それを小面憎いと思うのか年上のK子が「ええい、やったれッ」と気合を掛ける。そして、彼女等の凄ましい凌辱が

始まったのである。

ズボンのバンドが抜き取られた。引剥ぐ様にして除去された肌は夕闇の冷氣の中に寒々とむき出しになり、痛い様な荒蕪の感触に私はゾーッと背筋が凍りつくのを感じた。

それでいて、冷やかな空気の中なのに、辺りはむんむんとした異様な気配が立籠めていた。

始めの内、私は恐怖と羞恥に縮み上って、たに相違ない。唯、泣き喚めくことのみで動揺した神経は全く萎縮していたのであろう。

「本当に——うるさいわね、泣き顔は嫌い」

自分の仲間の所作を良く見る為と、私の声を閉ざす目的で不意にA女は逆向になった。

顔の辺りをA女の豊かな臀部で圧されて私は思わず呻いた。息苦しい。死にもの狂いで顔を動かし鼻先を隙間から出して私は空気を貪った。大きく呼吸してから、私は忽ち大きな汚辱の中へ追いやられていった。彼女等の触手を意識し、と同時に、カーッと全身が熱く燃え上るのを感じた。

「まあ——」と誰かの声がした。彼女達は思いの言葉を口走り、キヤッキヤッと笑い騒ぎつつてんでに手を伸し、紅潮した頬を連ね瞳をみはって見詰める彼女達の姿は、誠に奇

異なものであったらうと想像出来る。だが、彼女達の奇妙なざわめきはA女の悲鳴によって冷却された。私に可能な必死の反抗は口の辺りにある部分に噛みつくことだけだったのだ。

一瞬、私の上半身の圧迫がとれ、私ははね起きて逃げようとした。だが、依然として下肢は彼女達の手で押えつけられていた。

「どうしたのよッ？」

「噛まれたのよ。痛いわ、ああ本当に痛い」

A女は仲間の前で下着をずらした。

「まあ！ 大変！、大丈夫なの」

彼女達は懐中電灯でA女の臀部を照した。

「ああ、此処ね。ひどい齒形。でもお尻で良かったわね」

誰かがウフフと笑う。

A女は振り向いて私を見た。噴りを籠めた荒々しいA女の表情を見て、私は一段と激しく脅えた。A女はそのまま真正面に私に向って来たのである。

「さあ、良く見て——。良く見てもう一度、噛んでごらん」

淡い光の中で、A女の頬は赤く上気していた。恐しい顔であった。

「さあ噛め、もう一度、力一杯噛んで見ろ」

私は身震いした。

「ああ止めて呉れ！ 堪忍！ もう……」

私は言葉半ばで閉ざされ「降参か、家来になるか？」というA女に、僅かに首を動かして肯定していた。そしてその度に私は異味を感じ気が遠くなって行く様に思った。

彼女達は交替で私をなぶっていたらしいが唯、A女だけは何時までも私の口を圧していた。私は泣く事も忘れていた。そして彼女達のなすままになっていたのである。私の臍気な記憶は二、三人が、A女と交替した様な気がするのである。

漸く私が気付いた時、辺りは真暗で彼女達の姿も気配さえもなくなっていた。

翌々日実際の予行演習が行われた。講堂には全校生徒が集まり今年の学芸会の出来は如何と見守っている。終幕近く出番になり私は舞台に出て思わずギョツとした。直ぐ近くにA女等のグループが集まり私を指差しニヤニヤ笑っているのである。脇の下から冷汗が出た。そしてその結果、何週かの練習でその一言半句まで覚えていた筈の台詞の順序を間違えるという大失態をやった。

生徒達の哄笑の中で、狼狽の為に舌が縫れてよく喋れない私の側に来て、私を助ける様

にし乍ら教えて呉れたのはH子である。

どうにか切抜けることは出来たが、私の胸の中にはあの夜命令口調で言ったA女の言葉が大きな暗雲となって拡がっていたのである。A女は、学芸会の日、終ってからこの社へ来い。と言った。そして「H子も一度、あの上品ぶった顔で泣かしてやり度い。勿論、調べてやる」と話し合っていたのを訊いている。私の喉にはA女の姿態が深く灼付いている。

H子もあの様に恐い姿をしているのか、と思うと、先日までの様に親しく馴染んで行けないのである。H子が私より大きいということが、この場合の何よりの裏付になる様な気がした。そして、会の当日、私は思いつめた気持で、とうとうH子を窃視するという、大それた、破廉恥な行為をやって仕舞ったのである。

丁度その日は講堂と教員室の間にある音楽教室が出場者の控え室になり、私等は特に教員用の便所を使用することを許されていた。殆どの者は講堂に集まり人の出入は稀であった。何とかしてH子を確かめて見たいと思いつけた私は、朝から落付けなく何度も何度も便所に入り、そして隙を見て僅かの工作もし

た。

——私は、とうとう艶やかなH子を見たのである。息をつめて……私はH子を尊いものの様に思った。

私の身体中は汗ばんでいた。併し、心は安らぎ清々し、晴れやかであった。

父兄を客にした学芸会は無事に終り、私は『お父さん』役をやり遂げた。終了後の慰安会の席上で私はH子と並んで坐り甘いケーキに舌鼓を打った。

その時の心の漲りを、今も想起することが出来る。

私はA女との約束は守らなかった。練習がなくなり早く帰る様になると校外でA女達と逢うことも殆どなかった。併し何度も呼出しの手紙を手渡された。私は無視した。もう屈辱は嫌だと思った。何よりもA女の姿態や行為が恐ろしかったのである。そして私は、卒業後、A女ともH子とも逢っていない。けれど二人の対照的な姿は長い間、私の喉にはりついてはなれなかった。

この幼い日の出来事を忘れていない、と言ったが、実際は、何時の間にか私の心から遠

ざかっていた様である。厳しい時代ではあったが、私はその後、ささやかなラブロマンスも経験したし、既に成人し『男』になってからの体験である『珠江』の方が生々しく印象的であり、その上、世の中も又、終戦から戦後へと大きく揺れ動き、人間は先ず喰べることが必要な時代であった。併し、顧みると『珠江抄』の実現したのも、その素因はこの遠い昔の事象だった様な気がするのである。

『珠江抄』より十年後、私の『性』は一段と飛躍し、又一つの出来ごとにつかる。でも、まだ、何故自分は……という冒頭の疑問に深い関心を抱かなかった。私がはつきりと

女性写真モデル募集

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年齢略歴記載の上編集部宛お申込み下されば、報酬そ

自分の性の素因に気付いたのは昨年のこと。

転宅の為押入れを片付けている時に古い写真帳を見出してからである。私の小学校卒業の記念写真で、各クラスの整列した写真と別に旅行、運動会、学芸会の写真が綴じ込んであった。——学芸会。舞台に向って稍左側、半ば客席に向って幼い私が横顔を見せて立っていた。中央から少し右よりの処にH子が何かの動作をし乍ら身体を躍め気味で私の方を見上げている。そして二人を結んだ三角点の位置、右側に私を『父さん』と呼ぶ子が悪戯盛りの元氣そうな横顔を見せて写っていた。

——私は、暫く何も忘れてその写真を見つ

の他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部△

めていた。すると、その当時の総てが、真新しい昨日の出来事のように私の脳裏に蘇ってくるのである。私は自分の記憶を確める様にクラス別の写真を見た。二枚ある女ばかりの写真の中に別々に、H子もA女も、その他A女のグループだった面々も、私の記憶にある幼なさのある顔で写っていた。

——A女の女体に恐怖を覚えた私であるが『女性恐怖症』にはならなかった。逆に身心の成長と共に、柔肌を、この上もなく尊く、愛はしいものと思う様にさえなった。が、しかし、女体に故知らぬ威圧を感じる。其処に支配権があり、私とその部位に支配される者の様に思えるのである。長い間に培われた一種の観念思想かも知れないが、支配される私は、それに相応しく常に拝崇しようとする。

A女は……私の心の奥深い辺りに、特有の威圧感を押付けて去り、H子は……神秘的な美的要素を私に教え、その種子を確実に植付けたのかも知れない。

——『花と蛇』に於ける剃髪式に、私が異常な程強く魅かれるのも、H子の播いた種子の萌芽によるものの様である。

だが、一度は美しくなっても、やがてはもとに戻ってくる。そうなると私の抱く神秘性

は残念乍ら薄れて行つて仕舞う。私の心に描かれてゐるのは△天然の美▽なのである。

——今年もまた、夏が来ようとしている。

体質的に夏を厭う私だが、視覚的には一年中で一番素敵な時候と思つてゐる。特に被服に閉ざされてゐた柔肌が、麗らかな陽光の中に解放される初夏を最も好ましいと見る。昨夏中、さんざん陽を浴びて逞ましく健やかに色づいた部分も、冬期間の長い覆いで、本来の紅白色に戻つてゐる頃合なのだ。街の道路でバスの中で、電車の中で、私は彼女達の姿に瞠目する。彼女達は凝視する私の瞳に「いやらしい男」の見本を見出しているかも知れない。併し、真実私はジロジロ見ているのではない。

成可く不作法でない様にと注意し乍ら彼女達の中から△美▽を追求めてゐるのである。

仮令、彼女達の内心に侮蔑や嘲笑があつても私自身の心中は割合に純粋であり△美▽に對しての敬意でもある。その私でさえ、除去した腋の下の手入の悪いのに遭遇すると思わず顔をそむけ度くなる。連想から、私の心に描かれてある神秘性が一瞬、忽ち崩壊して行く為なのだろうか。

——私の彼岸にあるのは成熟した女性のそ

の姿、天然の美しさである。人々は嫌惡するかも知れない。確かに、ヌードフォトで判る様に、修正され抹殺されたその姿は何処から見ても絵にならない。配色の妙を失つて、單なる偶像としか見えない場合が多い。だが、私にとつては……尊嚴な存在である。

現実に、私はまだそれを知らない。未知なので憧憬も激しい、ともいえる。併し若し、今後に巡り逢ふことが出来たなら……。その時の自分の姿を、私は今、多少の脅えと共に心の中に描くことが出来る。——瞬時に意志を失ひ、拝跪するであろう自分を想い乍ら、その自分自身に對して後悔する氣持は、さらさらないのである——。

——あとがき——

特異な自分を表現することに私は今迄可成り強い抵抗を覺えたものである。だが、私も愈々△不惑▽と謂われる四十の太台に足を踏み入れた。この文章を書かせたのは中年男の厚顔しさかも知れないが、それと同時に、自己を見つめることの出来る年令に到達し得たのだ、とも思つてゐる。そして又、現実に私の様な△性▽は珍らしいだらうと思ふ一種の自負がこれを書かせた様でもある。

SMマニアは、特にM的要素の強い人程、

兎もすれば自己をさらけ出し度い欲望に駆られる。露出的なのだ、という私の持論は變らない。——私自身、Mなのだと思ふ。そして又、F的だとも思ふ。

今、漸く自己を分析した一文を書き終へることが出来た。そして書き終へた今、自分の心の何処かに、若し運良く掲載されて、読まれた方々の何かの反応が、等という、卑しい根性が微か乍らも存在していることを私は否定出来ない。浅間しい、と思ひ乍ら書き綴る心理も、アブ心理の一端ではないだろうか。

(四〇・五・二三)

〔編集部註〕

本稿では若干の削除、加筆、訂正を試みた。勿論この程度の描写なら他の雑誌の小説にだって、さらに転つてゐるかもしれない。しかし、「青少年の健全な育成に関する諸条例」による指定を受けてはいけないという努力のため敢て削除した。十数年或は数十年後世に本稿を読まれる方のためにも筆者の附した目附と共に、ここにお断りしておく。

× × × ×

× × × ×

SM入門講座

「若き友に与う」

栗 瀬

長

△第二回▽

「マゾ」について



前回に続き、今回はマゾ的プレイへ話を進めよう。といっても、前に申しのべた通り、マゾヒズムの本質にふれるものではない。とても私ごとき者がマゾヒズムについて語る資格なぞあろう筈はなく、ただ君が、マゾ的プレイの一端にふれる事が出来たら幸いだと思うのみである。

マゾ的心理は、勿論サディズムにしても同

様であるが、多分に本質的なものであって、君がマゾヒストでないのに君の奥様に女王様として仕えることは、とても出来ないであろうし、逆に奥様が本質的にマゾヒストであつたら、如何に君が奴隷になろうとしても不可能である。

ここでは、君が一応ノーマル——世間的にいう——ノーマルな者として、君の奥様も同

様と考えてのことである。その場合、何かのきっかけで、君の心の奥底にひそむマゾヒズムの心理が、引き出されるかもしれない。

前回、君は奥様をそっと縛ることに成功した。君の奥様は抵抗するどころか、君のやさしい縛りにうっとりとして眼を細めていたではないか。女性心理特有のマゾヒズムの芽を君は発見したに違いない。

今回は逆に、君が自分にあるマゾ的心理を引き出し、同時に奥様に、サディストとしての喜びを見出させることが目的である。

といっても、君が、やたらに奥様の前にひれ伏したり、足を舐めたり、奥様に鞭打ってくれと要求したりしては台無しである。

「貴方、どうかなさったの。変ね、気味が悪いわ」

といったことに必ずなるであろう。それこそ里に帰って相談致しますわ、になりかねない。事は性急に運ばぬことが大切である。

さて心の準備が出来たと思う。兎に角、自分分は、召使いである。奴隷であるという気持ちになることだ。でも最初は奥様にそんなことは言えないし、素振も見せられないだろう。そこで、自分の気持をたしかめるために、そつと奥様の用を足してみることにだ。

先ず第一に奥様の靴を磨くことだ。眼の前でやってはまずいだろう。

「貴方、そんなことなさないでいいのよ」とくるだろうから。留守の時をねらって磨くことだ。出来れば、玄關の土間に土下座して磨くのがよい。

革の匂、靴クリームの香、いやそれより、そっと靴の中の匂をかいでみ給え。奥様の足の、むれた酸えたにおいがかぐ事が出来るだろう。気持ちが悪いって——そんなことではマゾヒスト志願は落第である。

愛する奥様の御足の香であれば、胸が悪くなるなんて申しては誠に申訳ないことだ。靴を眼の前に捧げて

「申しわけないことを申しました。お許し下さい」

と三遍言ってみ給え。それで君は立派にマゾヒストの心理の一端にふれ得たことを感ずるであろう。

靴は丁寧にみがかねばならない。泥をはらい。靴墨を塗り、よくブラッシュするのだ。でも女王様がごらんになったら、きつと、

「駄目だよ、こんな磨き方では。土ふまずの所にまだ泥がついてるじゃないか。こんな磨き方でよいと思ってるのかい。怠けると承知

しないよ」

とのお叱りが飛んでくること必定。罰がとんできたものと想像して、土間に座った膝の上に、かねて用意したまな板を置き、その上に沢庵石でものせてみることに。いわゆる石抱きの刑にも似て、その痛みに君は悲鳴をあげたくなるだろう。

その痛みをこらえつつ、もう一足の赤靴を磨いてみることに。常に口の中では

「怠けて申しわけございません。お許し下さい。今後は一生懸命働かせて戴きます」

といった意味のことをたえず繰返して唱えることだ。そして出来上ったら、むれた匂のする靴の内底に、接吻をし給え。何かえも言われぬ奴隷感情が湧き起ってくるだろう。マゾヒズムのよさ、快さが少し掴めるのではないだろうか。

今はその一例をあげたにすぎない。君が奴隷として奥様に、いや女王様と考えた方がよい——にお仕えする方法はいくらでもある。トイレの掃除、これなどは、はいつくばって手と雑布のみでやり給え。但し、衛生観念だけは理性の範囲で考慮すること、真似たり、口で唱えるのは大いに結構だが、やたらに舐めたりはしないこと。

廊下ふきもよい、窓ガラスふきでもよい。

要は命令され、無理な要求を、虐げられつつ遂行させられているのだと想像し、且つ祈るが如く、お許しを願う言葉を唱え続けることだ。

こうした一連の作業が終る頃、奥様は御帰還になるだろう。その時あまりあわててはいけない。奴隷の延長をやっては、気が違ったと思われること疑なし。やはり家庭生活は日常通りが無難である。

と同時に、日常生活の中にも、たまにマゾ的心理にひたり得る方法を、一、二お話ししてみよう。

君は一足先に、風呂から上ってくるとしよう。足の爪を切るのだ。丁度切り終ったところ奥様も、ほてった体に、バスタオルを巻きつけて上つてくると思う。そこですかさず

「湯上りに足の爪を切ると気持ちいいね、丁度よい、君のも切ってあげよう」

「あら、いいのよ、旦那様に足の爪なんか切って頂いたら罰が当るわ、いいわ、自分でするから」

ときつと拒まれるに違いない。そこで引きさがっては駄目だ。ごくさりげなく

「まあいいさ、愛する君の足の爪だ。一寸さ

わらせてくれよ、遠慮なんかするなよ」

位のことを言つて、手早く、奥様の足を引き寄せてしまふことだ。遠慮してゐては駄目だ。元来女性は愛する夫に、体をさわられることに喜びを感じる。ここまでは君がサディストであり、奥様はマゾヒストの段階、ところが、足の爪を切りはじめるや、立場が全く逆になるから不思議だ。

勿論君は、心の中で

「勿体なくも女王様の御足の御爪を切らせて戴きます。有難うございます」

と唱えながら、痛くないようにそつと丁寧に切ることだ。はじめは何かくすぐったいような感じていた奥様も、はつきり意識はしないものの、足をなげ出して、夫に爪を切らせる、何か優越感に似たものを感じているのが、必ずその顔色に読みとれるものなのだ。事と次第によつては、手の爪も切つてあげてよい。マニキュアをしてあげるのもよい。耳垢をとるのも面白いだろう。とに角、奥様の為になにか奉仕することだ。マゾ的心理に浸りつつ。

奉仕といへば、我々男性が最もにが手とするデパートへのお供も恰好の姿である。婦人服売場、雑貨売場、特売場、食料品売場と、

買い物よりも眼の保養に行かれる奥様の尻の後を追いまわすつらさは、夫たるもの経験なしとしない筈である。その苦痛さ、それが今やマゾヒストの喜びに転化されようとしているのだ。

「もういいだろう、帰ろうぜ」

なんて言つてはならない。心の中で

「私、奴隷は女王様の御命令通り、何処へても、何時間でもお供させて戴きます」

と唱えつつ、心ゆくまで奥様のデパート廻りについて行き給え。財布の口をあけるのも——勿論、そりや高いとか、こっちがいいとか、もう止めておけななど申すのは、とんでもないこと——買物を持つのも全部君の仕事だ。

そうして、一日デパートを廻つてくたしたに君が疲れる時、マゾヒズムのよさが少し分るのではないだろうか。

最後に、夜の夫婦生活の面に於ても、マゾ的立場は充分に取り得る。しかし具体的なことは公刊誌である以上さし障りもあるので、ただ一言、女上位もただけ申しておこう。

くどくどとつまらぬお話をした。本当のマゾヒストの方には、さぞあき足らないお話であつたらうし、サディストの方には、誠に馬鹿馬鹿しい誌面の浪費でしかないと思われること必定である。

しかし、私が最初に書いたように、サドもマゾもあまり御存知ない、新婚のいわゆるノーマルな君が、お二人の生活を将来よりエンジョイするための、入門の第一歩として、それも社会規範内に於て、マゾ的心理の一端にふれるべく、お話したつもりである。

勿論、君が本質的にマゾヒストであつたらそして奥様がサディストとしての素質をもつておられたら、この辺のプレイの入門第一歩が契機となつて、或いは夫婦マゾプレイが縄や鞭を使つての高度なものまで発展するかも知れない。とすれば、生活により一層の深みが出て、幸福なのではないだろうか。

一方、どうしてもマゾなんておかしくつてとなる方もあろう。サド、マゾ半々で、何れにも徹することは出来ないが、夫婦所をその時その時で変えて、プレイを楽しむ、その手がかりの一端ともなれば幸である。

次号掲載

第三回

「浣腸への導入」

麻生保氏の生活と意見

麻 生 保

本誌八月号にのった「ガン作マニヤのノート」に濡れにぞ濡れし「主題と必然性」の中で芳野眉美氏が、明らかに麻生を指して甚だしく誹謗しておられます。全く終戦直後の共産党のアジ演説の調子よろしく、口から出まかせをポンポンがなっている感じで、御当人はさぞかし気持がよいだろうと思います。文中に麻生の名を一度もあげずにエイヤッと暗討を喰わしておいて、

「失言はお許し下さい。どなたに対しても悪意はありません。お気にサワツタラごめんなさい」

など、ぬけぬけと酔っぱらいの言いわけみたいなことをおっしゃり、しかも

「まだまだエンリョしているつもりです」

と、すごんではみたり、なかなか芸がこまかいなと感じいました。

元来、麻生は議論が嫌いな方なので、売られた喧嘩も買わない主義なのですが、いくらなんでも、ああ一方的に罵倒されては面白くないので敢て筆を執りました。名にしおう論客の芳野氏のことですから、うっかりものを言えば、また毒づかれるにきまっていますけれども。

まず芳野氏は、麻生が自己と無関係なワールド、サド、マゾッホ等の名前を「親戚みたいに気軽に」かつぎ出すのは怪しからん、と言われます。しかし、思春期のかた、一日として彼等の著書を身辺から離れたことのない麻生が、どうして彼等と無関係なのでしょう。それは、駅弁大学助教授の従兄よりも、つくり酒屋の伯父よりもBG一年生の姪よりも、麻生には近い近い親戚なのです。芳野氏は「現在の私と、何等関係ありません」とのこと

ことですが、麻生は「ア、ソウ」と言うより仕方ありません。不幸な人だな、と思うだけです。しかし、芳野氏に関係ないものに麻生が関係あって何が悪いんですか。

「御本人以外、誰だって無関係」

ごもっとも。それなら、芳野氏と美歌夫人とやらだって所詮無関係ではありませんか。

第一、麻生は陣傘代議士じゃないから偉い人の名前なんか借りる必要はさらさらにないしそんなつもりもありません。

「御自分の発言に權威を持てない人は、むやみやたらに昔の偉人の名前を書きたがる」というようなからみ方を、下司のかんぐりと申します。

次に芳野氏は「小説」なるもののあり方について、いろいろと教えを垂れておられます。このくだりはいささか語るに落ちたという感じです。その上論理の飛躍の連続で、恐らく御当人以外はちよつとついて行きにくいと思います。

「人間が書かれていないで何が小説だ」

当然のことです。

「自分を表現することが、できるのは最高」(七月号所載のガン作・マニヤのノート)

全く同感です。が

「私は小説が好きです、女性の神酒はもっと好きだ。だから私は神酒を主題にした小説を書く」

とは、あまりにも粗雑な三段論法です。一体、芳野氏の書かれるものが「小説」でしょうか。御自身の体験記らしいものをよく拝見しますが、あれは手記、または手記プラス、アルファなので「小説」ではありません。何故なら、そこには「人間」または「自己」が「いる」だけで「人間が書かれ」「自己が表現」されていらないからです。「いる」ということと「書く」ということは全く別なのですが、どうも芳野氏はこのあたりを、えらく勘ちがいしておられるようです。

だから、氏の書かれるものの登場人物が類型化しているのです。類型化した登場人物というもののほど、「人間味の無い」「人間ばなれ」のした存在はありません。プラスティックの人形とあまりかわりがなく、芳野氏の言われる「生きている女体」など読者には一向に感じられません。「生活がある」と「生活を描く」のちがいも同様です。

「十年來いろいろな作品を奇ク誌上で拝見していますけど、御自分だけが力作だとカンチ

ガイしていらっしゃる作品が見受けられるように思います。御自分の作品に御自身が酔っしてしまうのは勝手だけど読まされるほうがかなわない。三百円中の十四分の作品でも、読む人がいることを考えて書いて下さいといったら云いすぎでしょうか」(五月号所載のガノン作・マニヤのノート)

全くいい気なもので、これはそのままのしをつけてお返ししたいくらいの気持です。しかしまた、氏は

「書いた本人がわからないのですから、読んだ人はゼンゼンわからないのではないかと思っています。(麻生註・読まされるほうがかわない) スミマセン。(中略) なんせ気の弱い私(麻生註!?) のことですから、ああいう遠まわしな表現になってしまって、書いた本人もわからなくなってしまうたのです。悪しからず御了承」(同七月号)

「私みたいに勝手なことばかり書いていては奇クの品位も落ちますので(後略)」(同七月号)

などと、ちよっぴり自己批判らしきことも述べておられるのは、せめてもの救いです。

八月号に於けるその他の口ぎたない罵言雑

言には馬鹿らしくてお答えする元氣もありません。よっぽど麻生を「鼻もちならない」野郎と思われたようですが、そんならそれでもかまいません。ただ、横丁の隠居さんのような、安っぽく見当ちがちな似非反骨精神こそなくもって「鼻もちならない」代物ではありませんか。こんな「やぶにらみ趣味」は、奇クの今後のために害にこそなれ、一分の益ももたらしません。奇クの執筆、投稿家の中には、麻生と「好み」の違う方が大勢おられます。しかし、麻生はそれぞれに好意と愛着を感じて読んでいます。そして必ず得るところがあるものです。芳野氏のように、おたがいの立場を認め合わず、ただ「好み」がちがうからといって石を投げるようなことがいか悪いか。どっち?

では、五月号の「濡れぞに濡れし」にのっていた次の名文句を、芳野氏にのしと、かつおぶしを添えてお返しして結語に代え、筆を置きます。

「あまりヨソサマのことは、フンゲキしないで、すべてを包んでしまうようなフトップパな人間になって、奇クの発展を進めていこうではありませんか。」

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

ビブリオテーケー
(希臘神話の再編成)

黒 淵 嬰 一

一、ギガントマキアー

「縛られた女王達の列伝」というような論文を書く人はいないだろうか。

「女王」には、皇后や太后程度迄を含むものとする。多分年代順に百人位並べられるだろう。では第一号は誰か。

筆者はビブリオテーケー(希臘神話)のヘラではないかと思う。アポロドロスに依れば、主神ゼウスはその妻ヘラと夫婦喧嘩の末にヘラを鎖で縛り、オリンポスから吊り下げた。ギリシヤの神々は感情の起伏があり、失策も犯す。甚だ親近感の持てる存在だが、最高神の夫婦喧嘩は余りにも傑作で且つ奇巧的であ

る。ゼウスは権威あるも浮気者。ヘラは貞節だが嫉妬深い。夫婦喧嘩は年中行事だが概してゼウスの方に非難される理由があった。併しヘルクレスの待遇問題でヘラの越権行為が行われた時はやはり徹底的な懲罰が加えられた。ゼウスはギガンテス(巨人達)との抗争にヘルクレスを必要としていたから彼に加えられた妻の専横を許せなかった。ビブリオテーケー(希臘神話)では航海中のヘルクレスに対し、ヘラが嵐を送ったとなっている。妻が夫の浮気を咎めるのは当然の権利だが、夫の公務に容喙すると最高女神と雖も縛られ

たり吊られたりするぞという教訓なのだろうか。だとすれば「オリンポスから吊した」のは責めるのが目的ではなく、公開的懲罰の為だった事になる。奇巧的夫婦プレイでなかった事は確かである。ヘラはS派代表のような女暴君で神々の女王だがゼウスには敵わなかった。アポロドロスは多くを語っていないが剛情で我儘なヘラが無抵抗で縛られたとは思われないから、花冠も孔雀羽の衣裳も失われ、ホメロスの云う「真白き腕」を背に高く縛られて吊るされたのだろう。

ビブリオテーケー(希臘神話)には奇巧向

きの物語が沢山ある。筆者の好みには合わないがプロメテウスのような物凄い責場もあるし、ナルティシズムの語源になったナルキソスも登場する。緊縛女性では海岸の断崖に鎖で繋がれて怪獣の餌に供せられるヘシオネやアンドロメダ、牡牛の角の間に縛りつけられて惨殺される悪女デイルケー等がある。空想の世界に陶醉するなら下手な責小説よりビブリオテーケー（希臘神話）の方が余程面白い。それは神々の女王さえも名誉と自由を奪われた姿を衆目に曝す世界である。

ヘラはアテナ及びアフロディテ（ヴィーナス）を相手に最高美を争い、トロヤ戦争の原因を作った程の美女だった。但し女らしい虚栄心にも不足していなかった。この三女神にアルテミスを加えた中で誰が美貌第一位かは買収されない限りパリスにも決められないだろう。古代ギリシヤ人の混血を反映してか、ヘラは金髪ではなかったらしいが、容姿体格共に優れていた事は間違いない。これ程の美女だから単に縛られただけでも壮観なのに、ホメロスに依れば、「絶対に解けない黄金の鎖」で幾重にも縛られ、「天空遙かな雲の間に高々と」吊られ、「両足に一つ宛、重い金属の球」を重錘に附けられた。その上更にゼ

ウスは鞭を以てヘラを散々に叩いた。ギリシヤの神々は不死だから吊られたり叩かれたりしても死ぬ気遣いはないが、逆に云えば死に依る解放もない事になる。死にはしないが責められると苦悶するし、鞭跡からはイーコー（神血）を流す。その上、自分で縛を解く能力は持たない。ゼウスを恐れて憐れなヘラを助けに来る者も現われない。息子ヘファイス托ス（鍛冶神）だけが忍び寄って鎖を切ろうとしたが忽ちゼウスに蹴落された。彼は一昼夜落ち続けてレムノス島に衝突し、それが原因で跛になったとされている。ビブリオテーケー（希臘神話）は仲々念が入っている。若し他に何事も起らなかったらヘラは何年間（何日間の談ではない）でも吊られていた事だろう。

ビブリオテーケー（希臘神話）では丁度此の時ギガンテス（巨人達）が攻めて来た事になっている。ギガンテス（巨人達）は多分先住文化民族ペラスゴイ人、又はその後裔でクレテ島に居住する海洋民だったと思われる。

ビブリオテーケー（希臘神話）に於て神々は最初にタイタン（巨神）と呼ばれる先住民を征伐した。タイタン（巨神）とギガンテス（巨人）は共にガイア（地母神）から生れ

た。ガイア（地母神）の信仰は古代オリエントの支配的宗教であり、ペラスゴイ人は地中海からインドに至るまでの初期文明を独占した基礎的先住民、H・G・ウェルズの云う「ブルネット人種」の一派だったのだろう。

近代に於ける発掘の結果、西方世界の新顔アリヤン民族は紀元前二千年頃第一次大膨張を開始し、開花地帯に大侵入したことが解った。北インド、中央アジア、イラン高原、小アジア、ギリシヤ、イタリア、西ヨーロッパが一斉に侵された。アケーヤ人（原ギリシヤ人）も此の一環として紀元前千九百年頃北ギリシヤに現われ、先住ペラスゴイ人と交戦に入り百年程で概ねギリシヤ半島を征伐した。神々のタイタン（巨神）征伐は此の過程を扱ったものだろう。登場する神々はゼウス、ポセイドン、ハデスの三兄弟とヘラ、ヘスチア、デメテルの三姉妹に限られ、アケーヤ人の原始宗教神に近いものが窺える。神話では神々がタイタン（巨神）に挑戦した事になっているが、実際にもアケーヤ人の仕掛けた征伐戦争だった。戦った神々の半数が女神だった事はアケーヤ人が一族を挙げて移住して来た事を意味するのだろうし、敵側の半数がタイタニス（女巨神）だった事も都市や村落全

体が攻撃された事に通じよう。

ビブリオテーケー（希臘神話）に於ては、タイタン（巨神）側に使役されていたヘカトンケイル（百手巨人）やキュクロプス（一眼巨人）達が寝返った為、神々の勝利になったと記されている。ヘカトンケイル（百手巨人）とは百挺以上の橈を備えた橈漕戦艦のガレスレイブ（橈漕奴隸）だろうし、キュクロプス（一眼巨人）とは工人階級でもあろうか。多分その一部はアケーヤ人の捕虜から成っていた。ヘカトンケイル（百手巨人）が巨岩を掴んで投げつけたと記されているのは、機械的な手段で石を擲射する手段が使用されていたのだろう。

神々はタイタン（巨神）を征伏したが、地上のペラスゴイ人は殺戮されたものではなかった。ビブリオテーケー（希臘神話）でもタイタニス（女巨神）は概ねゼウスの妾になっているし、子供のタイタン（巨神）はプロメテウスやアトラスのように神々の使用人となっている。ヘカトンケイル（百手巨人）が牢番になったのは字句通りに解釈して良さそうだし、キュクロプス（一眼巨人）達は城壁や武器を作って働いた事になっている。被征伏民は余りにも文化が高かったから、寧ろ文化的

にはアケーヤ人の方が同化された形跡がある。発掘された粘土板に記されてある線状B文字を解読すると、ギリシヤ的な人名と外国的な名前が社会の全階層に亘って等分に現われた。歴史時代に入った時、既にアケーヤ人はドーリヤ人と違ってブルネット人種と完全に混血していた。先住民のダー（地母神）は抹殺される事なく、別格の神としてビブリオテーケー（希臘神話）中に採用され、デメテル（農業神）及びアルテミス（狩獵神）の二女神に変化した。

ギリシヤ定着から四百年間、アケーヤ人は野蛮の状態を脱し得なかった。ギリシヤ人が海洋国民となるには千年以上が必要だった。巨船をヘカトンケイル（百手巨人）と呼んだ事自体が驚異と無理解を意味する。造船や航海は最高の技術を要するもので、当時のアケーヤ人には真似も出来ない事だった。ビブリオテーケー（希臘神話）の神々は天地創造のような大事業を行わず、完成した世界の支配権だけをタイタン（巨神）から受け継いでいる。

ギリシヤ本土でアケーヤ人と同化した以外に、多数のペラスゴイ人が海路脱出し、エーゲ海の島嶼殊にクレテ島に於て独立と文化を

維持した事は当然考えられる。既に高度の文明を築いていたクレテ王国は、これを受け入れて更に大発展した。

これに反しギリシヤ本土ではアケーヤ人が分裂と停滞の状態に沈淪していた。ギリシヤ本土は山川沼沢溪谷で居住民を細分化する地型であり、ビブリオテーケー（希臘神話）に無數の劣級神が誕生した如く、アケーヤ人は互助精神を欠く小社会に分裂した。ホメロスの描く全アケーヤ人の大同団結を誘発したものはクレテ人の襲来だった。ギガンテス（巨人）は即ちクレテ人の海軍である。

ギリシヤの神々もギガントマキアー（対巨人戦）に際しては内紛を中止し、後楽園に於けると同様のベストメンバーを以て対戦した。ゼウスは慌ててヘラの縛を解き、ヘラも怒ったり拗ねたりするのは後廻しにして戦闘に参加した。ヘラ以外にも大部分の女神が参戦し、アテナやアルテミスやモイライ（運命女神）達は特に奮戦している。これはアケーヤ人の女を含めた全社会が攻撃に曝され、存亡の戦いを交えた事を意味する。

ビブリオテーケー（希臘神話）のギガントマキアー（対巨人戦）はアケーヤ人側の一方的宣伝である。結論は「奮戦して敵を撃退」

したような大本營発表に終っているが、実態の程は解らない。全国を占領されたなら隠しようもないが、掠奪された程度なら負けても勝ったように云うかもしれない。

襲来したギガンテス（巨人）は悉く男性名詞として伝えられている。これは民族でなく正規軍の進攻を意味する。ビブリオテーケー（希臘神話）ではヘルクレスの到着まで神々が苦戦したようになっていた。ヘルクレスの登場はドーリヤ人が後になって挿入した形跡があるが、何れにしてもギガンテス（巨人）が先ず大量得点を挙げたようだ。戦争の神アレスは青銅の壺に封じ込められた。ヘラ、アフロディテ、アルテミスの三女神は捕虜になつて縛りあげられ、着衣を破られて正に犯されようとした。狩猟神アルテミスは身体が柔軟なので自ら縄を脱け、鹿に化けて（又は鹿の如く敏速に）二人の巨人の中間を駆け抜け、両方の敵を同志討させた。等と記録されているが、実際の戦況はアケーヤ人側が敗北し、物資や女を大量に掠奪された事を暗示するようだ。

ビブリオテーケー（希臘神話）は幾分小話の寄せ集めであり、同じ事件が形を変えて別個に扱われている形跡がある。筆者はギガン

トマキアー（対巨人戦）とミノス王のアッテイカ進攻は同じ事件を天上と下界で眺めたものと判断する。

強大になったクレテ人は偉大な支配者に率いられてギリシャ本土に対するロールバックポリシイ（捲返し作戦）を開始した。併し、「文化人クレテ国民」は戦争をも経済的に計算していたから「絶対戦争の意志」を持たなかった。即ち野蛮なアケーヤ人の居住するギリシャ本土に対し「領土的野心」を見せなかった。彼等の目的は、神話中に記された通り「先祖巨神の復讐」を行う事と、金髪碧眼白色のアケーヤ人を捕えて来る事だった。

希臘神話を基にして潤色してみよう。

クレテ島には「神聖な牛」を楯に描いた神殿警備隊が居た。その隊長はタウロス（牛）と呼ばれる男で、国王ミノスの不在に乘じ王后パーシファエーを誘惑しているという噂があった。彼は兵の一部を揮いて脱走し、ラコニヤに上陸して匪賊化し、浮浪者を集めながらイストモス地峡を通つてアッテイカのマトンに至り、此処に山寨を構えた。アケーヤ諸族はミノス大王に援助を懇願し、クレテの王は王太子アンドロゲオースを將として討伐させた。然るにラコニヤから移住して来たヒ

ュアキントスという男が買収されてクレテ兵を欺き、アンドロゲオースは伏兵にかかつて殺された。ミノス大王はアケーヤ人に対して怒り、國軍を挙げてメガリスとアッテイカを攻めた。

クレテ島クノススの王は代々ミノスと呼ばれた。本篇のミノス大王が第何世であるのか解らない。後述するように、クノススがクレテ全島を統一したのは紀元前二千五百年と推定されるから、その頃ミノス第一世が統治したとして、平均在位に関するニュートン卿の法則を適用の上第五十二世としておく。筆者はこれをビブリオテーケー（希臘神話）のラダマンテウスと同一人物と思つてゐる。

ミノス五十二世ラダマンテウスは東地中海の制海権を握つていた。というより寧ろ地中海世界で唯一の外航船所有者だった。フェニキヤは未だ沿岸船舶しか有せず、エジプト人は本来海洋国民でない。クレテ軍は兵力四千ガレー（撓漕）戦艦二百隻、輸送船多数を以てエーゲ海を北に押し渡った。（兵数推定の根拠は後述する）

ビブリオテーケー（希臘神話）に依れば、当時アッテイカ地方からメガリス一帯にかけては、エーゲウス、バラース、ニュソス、リ

ユコスという四人の兄弟王が分割統治していた。但し王といっても酋長程度でミノス大王のような神格的絶対権を持つわけでもなく、支配する面積も日本の郡程度で部衆は数千人位だったろう。長兄エーゲウスは現今のアテナ市に本拠を置き、アクロポリスの丘に戦時城塞を構え、新しい神アテナを祭って四人の中では最も勢力があった。但しアテネという地名は未だ無かった。

ビブリオテーケー（希臘神話）に依れば、ミノス五十二世は先ずメガラの山城に籠ったニュソスとその人民を攻めた。これは妥当な戦略である。窮局目的は全アッティカの荒掠にあるが、アケーヤ人を各個撃破するには陸海軍を以てコリント地峡を扼し、モレア半島方面からの援軍と補給を阻止しなければならぬ。且つサラミス湾に停泊せしめた艦船の安全を保証するにも、メガラの城が必要だった。

クレテ軍はメガラの城を六箇月包囲した。これは被攻側側の善戦を意味しない。ミノス五十二世は偉大な戦術家であり、それ以上に政治家であり、更に一層経済家だった。少数精鋭を旨として装備訓練されたクレテ軍の常備兵をアケーヤ蛮族相手の接戦に曝す事は不

賢明である。城外を掠奪し、獲得した捕虜を駆使して封鎖堡壘線の構築を行った。神話にギガンテス（巨人）はペリオン山の上にオッサ山を積み重ねてオリンポスに登らんとしたというのは人工の築山を作って重兵器を装備したのであるか。クレテ軍は優越せる科学技術を動員してメガラ山城の地形を克服した。防禦側は城といっても木柵に過ぎない。

狭い城内に衛生思想や経済観念の不足した群衆が詰め込まれ、饑餓に苦しみ、続々斃れて行った。オンケーストスから来援したメガレウスは一戦に敗死し、その軍は散乱した。

ミノス五十二世は軍威を誇示する一方で、アッティカやボエオティヤに居住するアケーヤ諸族に対し「侵略の意志なき」プロパガンダ（宣伝活動）を行い、政治力を以てメガラを孤立化させた。

メガラの城中で勝利の可能性を信じる者は誰もなくなった。ニュソス王だけが抗戦の意志を棄てなかったが、彼の独り娘スキュラさえも既に戦意を失っていた。籠城の苦しさ能耐えかねたスキュラは、メガラ住民を救う為という美名に自らを欺き（ビブリオテーケーではミノス大王の勇姿に惚れて、と美化してあるが）王女の身でありながら敵王に秘密の

購和運動を持ちかけた。

「メガラ住民の生命財産を保証すればミノス王にニュソスの娘を引き渡す。」という条件を過大な要求と思いながらも申し込んだ。ミノス五十二世は承諾した。彼の欲しいものはメガラの貧弱な町や領土ではない。アッティカ進攻の作戦基地でありコリント地峡制扼の要害でもあるメガラの山城を戦役期間中利用すれば事足りるから、ニュソスの娘を手元に置けば目的を達し得ると考えた。クレテの大王とメガラの小君主とでは格が違うし、ミノス五十二世は側女に不足を感じていなかったから、スキュラ的美貌を聞き知ってはいしたが、人質を用済み後も留める心算はなかった。

併しスキュラはミノス五十二世の期待以上の事を考えていた。彼女は自己の容姿に対し自惚に近い自信を持っていた。スキュラは開城の手土産に父王ニュソスの寝首を掻いた。

ミノス大王との会見に際し、スキュラは精一杯に虚飾を装った。野蛮なアケーヤ人にも王族にだけはクレテ文明やオリエント風の影響があった。亜麻布織、半透明の裾襷ある軽羅にフェニキヤ産悪鬼貝のチリアン紫染外袍を重ね、金糸刺繍の帯を締め、赤革の編靴に金鈴を飾り、袖のない剥出しの腕には銀の二

重環、広く露出した胸と頸には黒耀石と瑪瑙の連珠、大きな碧眼は睨の上にアンチモニーと孔雀石を塗って一層大きく見せ、豊富な金髪は銀の網で高く形を整え、橄欖の小枝を添えた桶を捧げて進み出た。

偉大なミノス五十二世は大箱に獅子皮を敷いた上に掛けていた。その坐った高さがスキュラの立った身長と余り違わなかった。今年四十一才。クレテ風の藍染め胴着に紅の戦袍を着て権力を象徴する双刃の戦斧セキツを持っていた。青銅の胸甲は金の透し彫で群魚を描き、牛角を飾った金板附の青銅兜は近侍に捧げさせてあった。露出している頭部と顔面には混血の特徴が見えた。髪は黒の地に赤味がかった縮れ、鼻は高く曲り、顔色は赤黒い。色彩はクレテ人だが体格は他人種の要素が入っていた。噂では母のエウローベはミノス五十一世アステリオスがフェニキヤから奪って来た女だという事だ。

「美しきニュソス王の娘御よ。余は賢明な御身の贈物を受け容れよう。父王は慈ないか。して余の為に何を持参されたのか」

ミノス五十二世は武勇だけでなく教養も優れた文化人だった。蛮族の言葉であるアケーヤ、ギリシヤ語で明瞭に云った。彼はスキュ

ラの衣裳や装身具には少しも関心しなかったが、地の彼女を間近く眺めてその美貌に感嘆し、幾分か好意以上のものを覚えた。

「陛下と私の間を隔てていた者はニュソス只一人。父は此処に参って居ります。」

スキュラは艶然と笑った。だが東洋的思想家でもある海上帝国の支配者は俄然顔色を変えた。

「其方は父の變事を平然と語るが、何をしたいのか。」

「此の手でエイレネ（平和女神）に捧げました」

「詐り申してはならぬ。娘が父を手にかけるような事があり得ようか」

併しスキュラが差し出した首は、ニュソスのものと確認しないわけに行かなかった。ミノス五十二世はアケーヤ人の王女の心理が解らなかった。強いて平静を装いながら、無然として云った。

「父なる王を討ってまで余に尽くしてくれた恐るべき娘だ。鄭重に余の身边に置くとしよう」

そして左右に合図すると三人の兵が進み出した。スキュラは兵士の形相を見て危険を感じ、恐怖に戦慄したが遁れる隙もなく左右の

腕を把られて捻じ伏せられた。他の一人が外袍を引き剥ぎ、背に組ませたスキュラの白い手首に幾重にも革紐を巻きつけた。スキュラは絶叫し、抵抗した。亜麻の上着が肩から脇まで裂けた。余り暴れるので胸から首筋にかけて太綱が加えられた。

「これが、父を討ってまでして参上した王女に対する謝礼ですか」

スキュラは朱を注ぎ、濃い眉を逆立てて怒ったが、縄尻を曳かれると忽ち後に倒れた。

「一身の安全と欲望の為に、父親さえ手にかけるような女を、余は身内に加えようとは思わぬ。アケーヤ人共も斯かる王女と共に降る事を潔しとはしないだろう。出航まで曝しておく事とする」

スキュラは尚も何かいおうとしたが、兵士二人が左右から槍の柄で背と腰を連打したので一溜りもなく悶絶した。ミノス五十二世の命令でスキュラは岸近く停泊している旗艦に曳き立てられ、半死半生の俛、帆柱の中段に半ば吊られたような姿で縛りつけられた。

メガラの町と住民は寛大に処分された。青銅製の武器は幾らもなかったが、自余の弓箭棍棒の類と共に押収された。城塞は戦役期間中に限り保証占領され、住民は作戦に協力す

る契約で助命され、百人に一人の割で人質を取られた。其他は人も物も害されなかった。但し交戦中に捕虜となった壮丁や女は返還されなかった。

これだけの処置を済ませた後、ミノス五十二世は艦隊に出動を命じた。メガラの住民は果然と、又は安堵の色を浮べてクレテの大艦隊を見送った。

スキュラは旗艦の後甲板で死んだように寝ていた。亜麻の衣裳は破れ果て、襦袢と化しながら縄に支えられて辛くも身にまつわり、金髪は乱れて顔半面を掩っていた。両手は背に、両足は揃えて固く縛られ、足首からは長い太綱が艦尾柱に延びていた。

メガラの住民は最初の間こそスキュラの行為から救済を感じていたが、寛大な処遇を受けた後では矢張り父王殺しの娘として憎悪する感情の方が勝った。ミノス五十二世はメガラ住民の人心を収服する手段として、スキュラの公開処刑が必要であると判断した。

「汝は何処までも余に随って来たいと申したな。その望みを叶えて遣すぞ」

スキュラは手足を縛られた俛、艦から海中に投げ落された。

錨揚げ。撓が水を切る。両舷前進微速。続

いて半速航行。スキュラは、水中を曳き擦られ、波間に見え隠れしつつ喘ぎ悶えた。岸からそれを望見したメガラの住民も少くとも半数は、声にこそ出さないが、心の中で快哉を叫んだ。

ミノス大王はホメロス等に依って偉大な海の支配者、公平な裁判官として賞揚されながら、後世のギリシヤ悲劇作者達から惨忍酷薄な暴君と極めつけられ、後者の意見が一般に通用している。併し筆者はホメロスに左袒する。ミノス五十二世は冷徹な計算に基いて行動する意志の人であつても性格的S派ではない。筆者の知る限りに於て海洋的思想家には温厚な人物が多く、天才兼狂人的な独裁英雄は陸上の成上り者に多いようだ。

但しミノス五十二世は潔癖症でもあつた。

「何時までもついて来るがよいぞ」

彼は水中のスキュラを睨みながら、憎悪を篋めていった。

スキュラの最期について終りまで記述する事は気の弱い筆者の能くする処ではないし、書いてみても「十三人」や「新十三人」の作者程の迫力が出せるものでないから希臘神話その儘を引用して此の話は打ち切ろう。

死んで鷺に生れ代ったニユソス王がスキュ

ラを認めて襲い掛った。両手が不自由なスキュラはこれを払う事が出来ず、遂に両眼と脳を喰い尽くされた。スキュラも死後に鳥となつたが鷺の恨みは依然消えず、今でもその姿を見ると襲い掛り、追い廻すと言う。此の鷺が本当にニユソスの化身であつたか否か筆者は知らない。

クレテ海上帝国の大艦隊は舳舻相含んでフアレロン湾に投錨した。エーゲウスの部衆はヘカトンケイル（百手巨人）の大襲来に慄え上つた。

チャリオット（二輪馬車）百輛が青銅の大鎌を回転させて海岸を掃蕩した。アケーヤ人は忽ちアクロポリスの丘に追い上げられた。

アケーヤ人は貧乏だった。船舶を持たない国の貿易が極度に不利な事は今も昔も変わらない。当時の世界で超貴重品に属する青銅の武器甲冑を装備する事は二十世紀に軍用飛行機を揃える以上に困難だったろう。ギリシヤは銅も錫も産しない。ラウリウムの銀山は未だ発見されていなかった。王族だけが青銅の鎧を持っていたが、羊毛やオリブ油の莫大量と引換えにクレテ人の言い値のコスト・フレート（運賃込価格）で買わされたものだった。

アケーヤ人は獣皮や樹皮で半身を掩っただけの無防禦であり、楯は生皮を用い、武器は神話のヘラクレスやテセウスが携行したような棍棒や木槍だった。弓もアポロンやアルテミスの神像に見るような短い狩猟弓で、鏃は骨や燧石を用いていた。

クレテ軍は全員が青銅の甲冑、手、腕、脚を着用し、アケーヤ人の骨鏃を撓ね返した。大楯は青銅の帯を巻き剣槍戦斧は青銅製だった。弓は東洋風の、有角獣の角を薄切にして膠漆で貼り合わせた長大なコンパウンドボウ（複

合弓）で、鏃も青銅だから何でも貫通した。

アケーヤ人は勇敢だったが、平地ではチャリオット（二輪馬車）に敵わなかった。此の兵器は寧ろ輸送機関で、実力より威嚇効果の方が大きいのだが、機能的な騎兵が未だ発生していない当時、於ては唯一の機動力だった。更に、クレテ軍は巨石を放つカタパルト

（擲射器）や瀝青の燃焼剤も持っていた。

エーゲウスの弟達は長兄の救援に来なかった。リュコスと部衆を率いて逃亡し、パラースはミノス大王に帰順した。コリント地峡は

遮断され、ミケネやティリノスの援助は期待出来なかった。アクロポリスの地型だけが頼みだったが、その内部にさえも食糧欠乏と悪疫に加えてデオフィーティズム（敗北主義）という大敵が侵入した。クレテ軍は全アッテイカを蹂躪し、捕虜を働かせて分捕品を艦船に積み込んだ。

エーゲウスは神託に従い、人身犠牲を以て此の災厄を免れようとした。アンドロゲオースの殺害で戦役の原因を作ったラコニヤ人ヒュアキントスが選ばれたが彼は既に戦死していた。故にその子供達が捧げられる事になったが、アプロドロスはその名を四人姉妹でアンテレース、アイグレース、リユタイア、オルタイアと記している。

数千の男女が籠るアクロポリス全体が攻囲されていたが、攻防戦は緩慢に行われていた。防禦や警備に必要な人員を除く全住民が西南角の壇に集る事が出来た。アクロポリスの城壁を築いたキュクロプス（一眼巨人）ゲライストスの墓と称する石碑の前だった。尤もゲライストスなる者は先住ペラスゴイ人の王であつたかもしれない。

碑の前に扇形の広場があり、木柵で囲まれていた。崖に近い部分に低い杭が四本、正方

春川ナミオ画 分譲用秘蔵版

女体の下敷力作M画決定版

大中判印画紙極鮮明焼付

七枚一組 三〇〇〇円 略号（ぬけ）

Mマニヤである春川ナミオが、常に豊富な女性の臀の下にありたいという見果てぬ夢を画筆に托して、ものにした傑作M画

M派マニヤなら、二度と手に入らぬこの一組を！

- 一、若き女の股間で圧死する
- 二、行水する美女の尻に敷かれる
- 三、見事な美女の臀部の下敷き
- 四、人間ハンモックになる男
- 五、尻の下に喘ぐ人間椅子
- 六、逆エビで蠟燭責にあう
- 七、臀の下に埋れて法悦に泣く

（以上七葉のM画決定版）

一概にM趣味といっても、いろいろ多種多様な傾向があります。本画集はその中でも、若くてはち切れんばかりに豊富な女性の臀部の下敷になつて屈伏することに喜びを感じる男性にピントを合せてあります。この種嗜好の方にとっては、唯一無二の文献となるでしょう。分譲中止にならぬうちに、どうぞ。

形の頂点を成して打ち並べてあった。その杭には一本に一人宛、後ろ手に縛られた少女が縄尻を繋がれていた。

ヒュアキントスは、怖らく本名ではあるまい。アポロンの例を引くまでもなく、それは美男子を意味する綽名である。故にその娘達の容姿も平凡ではなかったと考えるとよいだろう。四人共純系のアケーヤ人種で地中海人種との混血は認められなかった。故にこそクレテの王子アンドロゲオースを憎み、その暗殺に一役買ったのだろう。

アンテレーイスは十八才。草の繊維を編んだ胴着型の上着を着ていた。剥出しの白い腕は緊しく背に廻っていた。併し束にした長い金髪が背に垂れているので縛られている手首は掩われて見えなかった。膝を揃えて内側に曲げ、眼を閉じて首を垂れていた。石像のように凝^じと動かなかった。

アイグレイイスは十五才。首の部分に穴を開けた柔皮を二つ折にし、腰を革帯で締めていた。両膝を揃えて立て、その間に顔を埋めていた。背の両手首と杭を繋ぐ革紐は一杯に緊張していた。微かな啜泣が洩れて来るのは彼女のようなだった。

リュタイアは十三才。带状に切った長い樹

皮を襷状に巻き、肩から脇に廻してあった。四人の中で一人だけ粗製の皮ズボンを着ていた。暴れたのか、杭に上半身を縛りつけられ太綱が胸・腹・腰を締めていた。金髪は乱れて前に垂れ、幾度払っても顔面を掩った。鋭い碧眼がその奥に光って見えた。

オルタイアは九才。彼女だけが麻のペプロス（長衣）を纏っていた。幼少に過ぎて起りつつある事態を理解していないようにさえ見えた。杭に軽くもたれて寄りかかり、後ろに縛られている両手も自ら背に組んでいる如くに見えた。脚を揃えて前に投げ出し、時々首を左右に振って、一杯に開いた大きな瞳で周囲を見廻していた。

アケーヤ人の社会に於ては王が最高司祭を兼ねていたから、エーゲウスが式典を主宰した。神殿の青銅剣が持ち出された。屠られる犠牲が少女達であるのに、エーゲウスは比較的冷静だった。アケーヤ人の原始社会で人身犠牲は時折行われる事であるらしい。

旋風が虚空を捲いた。紅い虹の中に金色の彗星が飛んだ。アンテレーイスの首は既に一箇の物体と化して髪を拡げながら転った。

アイグレイイスは、姿勢を起そうとしなかった。抑えて首を掻き切らなければなら

なかった。

銅剣が再び弧を描いた。リュタイアは跪いたが柱に縛られているので刃を避けられなかった。斬り落された首の髪が両側に分れ、エーゲウスの真正面に転ったので剥き出した眼が睨んでいるように見えた。

エーゲウスは羊を屠るように剣を振っていたが内心は外見程に平静ではなかった。寧ろ不浄な職務を早く終らせたいかのようなうだ。その為、四番目のオルタイアを斬り損って肩を打った。最後の少女は突然泣きだした。動揺したエーゲウスは誤って頬を叩いた。三度目に漸く首が落ちた。既に蒼白となって貧血症状を呈していたエーゲウスは義務を終ると同時に眩暈を起して卒倒した。

四箇の首は、犠牲壇に捧げられた。式典の後、群衆の手で割麦が一握り宛注がれ、首を埋めた。死屍は一つの穴に葬られた。

三千四百年の後、ムーサイオン（芸術女神の丘）から若い女性と推定される骸骨が四体発掘された。その手は背中の中の腰の辺で組み合わせてあった。首は鈍い刃物で切断されていた。一体は右上膊骨が破損していた。丘の三隅から頭骨が三つ発見された。切口は一致した。その一つは顎骨が壊れていた。

アポロドロスは四人の処女の犠牲が何の役にも立たなかったと書いてある。少くとも、最初はそのように見えた。籠城側の死傷者は続出し、疫病は増加し、脱走者も相次いだ。だが間もなく疫病が攻囲軍にも伝染した。城方の脱走者が感染させたらしい。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です
毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

ミノス大王は表面的に強気を装いながら、遂に講和に耳を貸した。

外交技術はクレテ側が数等勝った。エーゲウスの屈伏は無条件降伏に近かった。併しミノス五十二世は、過重な現物資納を要求しなかった。必要な物は戦役中既に持ち去っていた。

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。

ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返されます。

た。講和条約は人身貢納と軍備制限だった。アテネ人は、五十人乗り以上の大船を建造保有してはならない。

アテネ人は、青銅の武器を保有してはならない。

本年を第一回とし、九年目毎に未婚の少年少女各七人をクレテ島に送る事。その人選はミノス王又は、その代理官が行う。輸送はクレテ側が担当する。これに附随してオリブ油、穀物、葡萄酒、羊毛類の一定量額が貢納される。人的貢納はミノタウロスの存命期間中続けられる事。

条約に従い、若い男女各七人がミノス大王自身の手で撰び出された。子供達が二列に並べられている間を、衛兵を随えた征伐者が杖を持って通過した。子供達は、或は頭を垂れて恐怖に慄え、又は拳を握って敵意と挑発を明示しつつ睨んだ。子供達の後には親や年長者が並び、危懼と諦観を以て大王の杖を見守った。

ミノス五十二世は自己の審美眼を以て犠牲者を徴した。健康そうで容姿の勝れた者は、如何に汚しても俯向いても見逃さなかった。大王の杖が指定を表すと、即時に兵士二人が襲い掛り、革紐を以って容赦なく縛りあげ

た。

少年少女各七人は、エーゲウスの部衆が数千とすれば子供達百人に一人となるだろう。農耕民族と違ってアケーヤ人は子沢山ではない。これは深刻な打撃だった。

エーゲウスはカルキオペーという若い妻を持っていたが、まだ子供が無かったから、今日の災難を家庭的には免れ得る立場に居た。

部隊の羨望と嫉視は間もなく不評や悪罵に変わった。その苦境をカルキオペーが救った。彼女は傑出せる容姿と優雅な心情の為に低い身分から迎えられる後妻で、年令の大差にも拘らず、エーゲウスを心から愛していた。三年間子供が出来なかったから、その地位は動揺しかけていたが、愛しているが故に犠牲を買って出た。年令は十九才。併し小柄なので若く見えた。その美貌はミノス五十二世の審美眼を惹きつけるに充分だった。アケーヤ人は妻を極めて大切にするし、エーゲウスの愛妻振りは以前から聞えていたので、此の結着はすべての民に感謝され、又同情を呼んだ。カルキオペーは処女でなかったから、厳密には条約違反になるのだが、その容姿はミノス大王を十分に満足させた。

犠牲者の中にもう一人、良家の娘でカルキ

オペーと仲の良い侍女だったナウクラテーが含まれていた。十六才だった。これは偶然の指名が降掛ったに過ぎないのだが、此の物語が進んだ時に再登場するから紹介しておく。

子供達がクレテ島に連れて行かれて何うなったか。これに関しては古典時代のギリシヤに於ても幾多の論議が交された。ビブリオテーケー（希臘神話）は人身牛頭の怪物ミノタウロスが子供達を喰ったと伝えている。ミノタウロスは、ミノス大王の後パースファエーがタウロス（牛）に恋して生んだ私生児とされている。

併し、ミノタウロスとはミノスのタウロス（牛）であり、クレテの島海神は牡牛の姿をしていた。クレテ王国の国力が海に依存する故に、海神は（最高神ではないが）最有力神だった。但し牡牛の崇拜は古代オリエントに普遍的なもので、エジプトのアピス（聖牛）バビロニアのイシュタール、ギリシヤのゼウス其他数えれば幾らでも出て来る。クレテ島では牡牛を神聖な動物として神域で飼った事も、発掘の結果解っているが、牛が人肉を喰べる筈もないし、牛に似た肉食獣が他に居たとも思われない。アンドロゲオースの霊を鎮める目的で、牡牛像の前で焚くか屠るかした

のを「喰った」と表現したのかもしれないが、「ミノタウロスの存命中、九年毎に各七人」に何か意味がありそうに思う。

ビブリオテーケー（希臘神話）では、ミノタウロスはラビリンス（迷宮）の奥に住んでいた。ラビリンス（迷宮）は錯雑せる迷路のある所とされていたが、アーサー・エヴァンスに依って発掘され、技術の粋を尽くした大宮殿だった事が判明した。ラビリンス（迷宮）の奥に住んだ者とは、宮殿の主人たる最高権力者だろうか。それとも祭政一致国家に於て宮殿内に祭られた牡牛型の神像だろうか。

クレテ王国に於て王は神性を備え、海神の祭祠長をも兼ねていた。ミノス王とミノタウロスは同一物の、国王と祭祠長の二面性を表すものであろう。

容姿端麗で健康な少年少女各七人、というのは生存させてこそ有効な価値である。子供達はミノス王が祭祠長として在国する際に使われたのだろう。併し九年経てば少年も少女も玩弄に適しない年令に達しよう。次の各七人が必要になり、前の者は若干の好運者を除き、一段下の目的に払い下げられる。多分闘技者にされたり神前で屠られたりしたのだら

う。ミノス大王が老死する迄、九年に一度宛貢納は反復される。尤も九年毎に各七人の貢納は子供達が入用である以上に、アツティカの民に屈伏の事実を再認識させ、九年毎に心理圧迫を加える効果を期待したものであったと思う。

七人の少年と六人の少女。それに十九才のカルキオペーはミノス五十二世の旗艦に収容され、後甲板に並べられた。非武装の子供達だから抵抗する筈はないが、絶望的に海中へ飛び込んで脱走したり自殺したりする事のないように、

いように、十四人の全部が両手を後に高く縛られ、縄尻をカタパルト（擲射器）の台に繋がれていた。

子供達はアツティカの岸に別離を告げていた。併し手を振る事も涙を拭う事も出来なかった。腕きながら叫ぶだけだった。年長のカ

ルキオペーが独り、泰然と立っていた。艦隊が解纜すると岸からは一斉に悲観の聲が起った。親や兄弟達が、連れ去られる者の名を呼んだ。群衆に隠れるようにしてエーゲウスもカルキオペーを見送った。二人は黙っ

て視線を交していた。

岸は離れる。人の姿は小さくなる。身を振じ足を踏み、伸び上って腕の不自由を歎く子供達の中で、カルキオペーだけが動かない。瞳を見開き、後ろ手の拳を固く握り、唇を噛んで彼方を見凝めている。

ミノス五十二世は橋楼の上から後甲板を見下していた。そして近侍に言った。「あの気丈な女が気に入った。クノススに着いたら余の所に連れて参れ。但しパーシファエーに気附かれないようにするのだぞ。」

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙（9×13）焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛（山原）
K 2	恍惚たる責の境地（山原）
K 3	苦悶の表情海老責（大塚）
K 4	海老責にあえぐ女（大塚）
K 5	全裸のぐるぐる巻（玉田）

K 6	豊満な臀部を晒す（刑部）
K 7	厳しき縛りに酔う（山原）
K 8	荒縄で仕置される（美木）
K 9	土壇に観念した女（美木）
K 10	ムチ打たれる女囚（美木）
K 11	縛り人形を眺める（山原）
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ（山原）
K 13	足首と首を連繫す（大塚）
K 14	後手の複雑な縛り（玉田）
K 15	裸縛りに恥らう女（山原）
K 16	夫にされる鼻責め（増田）
K 17	緊縛にあう若妻姿（増田）
K 18	猿轡で鼻を虐める（増田）

K 19	開股縛にあう女囚（美木）
K 20	罪状を訊かれる女（美木）
K 21	股間縛りの全裸像（山原）
K 22	荷造り縛りで晒す（玉田）
K 23	革拘束衣で括らる（大塚）
K 24	庭木に立縛りなる（木村）
K 25	柱に晒される裸身（玉田）
K 26	セーラー服しぼり（大塚）
K 27	高手小手首縄緊縛（山原）
K 28	黒種豊満刺青縛り（山原）
K 29	踏みにじられた女（山原）
K 30	古墳にて吊り準備（木村）
K 31	拷問にあう裸女賊（山原）
K 32	ロープブラジャー（山原）
K 33	嚴重な後手縛猿轡（刑部）
K 34	エビ縛りにあう女（木村）

K 35	イルリのある風景（大塚）
K 36	麗しき裸身を晒す（大塚）
K 37	亀甲縛り正面裸像（刑部）
K 38	豊満乳房縛り上げ（山原）
K 39	全裸を投げだして（山原）
K 40	縛しめに哭く乙女（木村）
K 41	エビ責め放置十分（木村）
K 42	豊かな全裸を緊縛（玉田）
K 43	観念アグラ縛り図（玉田）
K 44	笑顔を縛る強烈さ（刑部）
K 45	猿轡の下にあえぐ（刑部）
K 46	縛りに典子の素顔（刑部）
K 47	伸びやかな裸縛り（刑部）
K 48	エビ縛り刺青姐御（山原）
K 49	立木より逆さ吊り（木村）
K 50	裸身の緊縛と羞恥（玉田）

これは読物である

「贗作の贗作・夜乃探郎氏の優雅な生活」

夜 乃 探 郎

A 夜乃探郎氏は女の子の汗が大好きだということ、それと、浪花節のうなり声をきいてユキは呻めくこと。

彼はユキの汗をなめることが好きだから、ユキもそれを知っていて、彼の部屋に居る時はいつも大いにハッスルして汗を出すことにけなげなふんとうをするのだ。

彼は俗悪に徹しているから、人間は動物の一種だ”など言って、そのくせポピーデイモンズが作曲した『モーニンウィズヘイゼル』など舌をかむような芸術的なことを持出

すことをしない。

ユキが現われれば、彼女の気持などなんのその、「うおー」と吠えて? とびかかり、すぐさま裸にしてしまう。女は、男に裸にしてもらうために存在していると、どうまんにも計算しているからだ。どんなに親しくなっても、ユキの手でそれを脱ぐことはいやなのである。

「面倒くさいから今度からわたしは脱ぐわ」

ユキが、そんなことを言うなら、パチン! と、彼の手はユキの頬に落ちるだろう。SMのダイゴミとは、イヤガルのを責めることに

あると勝手に信じているからだ。羞恥は女の武器である。それがなかったらデクの棒に等しいと彼は思っている。だから、彼の「責めの場」はもっぱら、野人振りを発揮することになるのだ。

「嫌いは好きだということさ」

「何いってるの」

ユキは小さなオッパイを両手でかくして、

彼の顔をのぞき込む。

彼はカッ色のユキのお尻をピシャリ! ピ

シャリ! と叩きながら、

「おめえのケツはいい音するぜ」

「いや」とユキはひめいを上げる。

「なにがイヤだ。好きなくせに」

ふん——と、彼はそっぽをむく。

これ、古道具やで、ツバをとばしてカケあって、大枚三百円で買ってきた旧式の蓄音器に近づきレコードをかける。

レコードは、虎造の「森の石松」だ。

「旅行けばスルガのクニに茶の香り、名代な

る東海道」など、カスレ声でレコードはうなる。

——つと用意した赤いしごきを手にするなり、ユキを股間縛りにギユギユ縛り上げた。彼にとっては、もう股間縛り一本ばりなのだ。ナニカがはみ出すことにサジズム的なスリルがある。

女だって、被虐の倒錯した悦びに浸ること

になる。△お尻の上で食事するなどママゴト見たいなものだ。▽

彼は、ユキのカッ色のお尻にカミツク。

(このところは、カットかな)

△女ハ、白イ身体ヨリ、黒ッポイ方ガ味ガアル。▽

むーんとしたユキの生ぐさい体臭が部屋に立込め、ユキは汗を流すのである。

彼は待ってましたと、人間ミキサーから、しほり出されるあまずっぱい奇ク飲物(これは聖汗である)をなめ、すするのである。

突然ユキがかすかに呻めきだした。

「馬鹿野郎」

と、彼はどなりつけた。

「ここは、映倫じゃないぞ。もっと景気よく呻めけ! 浪花節にマケルナ」

「キスして」

ユキがその時、感激した声で口走った。

清水次郎長伝で売り出した浪曲家であり、映画などにも特出した役者でもある広沢虎造は、

「馬鹿は死ななきゃなおらない」と叫んだそうだが、ユキは馬鹿まではいってないのだから、これでいいのだろう。ユキは生きて、いつまでも彼のなぶりものである。



B

夜乃探郎氏は天気でも高下駄をはいて
 バンカラをきどっているということ、
 そしてユキが笑うとだまっとれとドナ
 りつけるということ、これは、この章
 となんの関係も無い。

ナニワブシが終ると同時に、ドアがいきな
 りあけられて、スズメがぬうーっと入ってき
 た。

彼の部屋は、いつもカギなどかけず、それ
 にノック無用を立前としている。

第一、彼の知人は、そんな水くさいヤツラ
 はいない。背の低い、クチャ、クチャとした
 面相をもってる通称スズメは、

「いよう、相変らずだな」

そんなセックスはなれているとばかり、ぶ
 えんりよな声を張り上げる。

「いつもサイフはピイピイないてやがると思
 ったから、エサをもってきてやった」

ドサリとパン包をテーブルの上に投げ出し
 た。

「貴様はけったいなやつだ。そんな小娘とな
 れあいで縛ったり、泣かれたり、——まった
 くの話」

「スズメのように、俺は同性愛の趣味はない

からな」

「バックヤロ、おれのはチゴサンあそびと言
 うんだ。女とあそぶなんて、たかが知れて
 る。セックスの最高は……まア、よそう」

スズメの職業は、風呂屋である。だから、
 女の裸なんて見あきているのだ。それに、育
 ったのが、花街のド真ん中ときてる、初恋が
 六つの時。大学の試験は、朝帰りの足でとい
 う戦歴？をもっているのだから、中年ともな
 れば趣味も超高級？になってくるのか。

C

ヤスキ節はアラエッサッサ

男の気持を盛上げる、義理と人情の渡し
 船。尾崎士郎の『人生劇場』をよむと、彼は
 いつもナミダを流し、吉良常を思い、飛車角
 を夢み、若き日の一頁におぼれる。浪花節も
 だから大好きなのだ。ハスタンダードが好き
 だと又カシながら、織田作は、屋台でやきと
 りをたべ、いつも、大阪風俗を駄べっていた
 っけ。V

ユキは、ハッスル？寸前でブレイキをとめ
 られたので、不満顔で天井をポカンと眺めて
 いた。

彼は、浪花節を、もっと、もっとかけたい

のであるが、ユキがカワイソウになったので
 サービスに、ヤスキ節のレコードを取上げた
 のである——。

ユキは、十八のくせに、アラエッサッサが
 大好きなのだ。これを聞くとしびれるという
 のである。

「おい、いつまでユキちゃんをじらしておく
 のだ。いいかげんに、処女をいただいちなえ
 よ」

「馬鹿野郎。俺がそんな男かよ」

「でも、男だから」

「俺は高級なるプレイをしていりゃ、それで
 いいんだ、そして汗をなめてりゃ」

「そうかしら」

「もう、よせ。ユキが笑ってる」

「まったく、貴様もユキも判らんやつだ……」

——アラエッサッサと、しゃがれ声が、レ
 コードより流れている。

ユキはどうして、こんなジャパニーズ・ロ
 カビリのようなものを好むのだろう、ナニワ
 節がよいのに——と、彼はため息をつくので
 ある。

縛られたユキをころがし、かたくしまった
 黒光りする（ちよっとおほげさかな）お尻の
 上に、おもむろに原稿用紙を千枚もひろげ

「贋作の贋作（ウソッパチのウソッパチと読んで下さい）夜乃探郎氏の優雅な生活」という大哲学小説を書きだしたのである。

D

夜乃探郎氏がユキのお尻に原稿用紙をひろげたのは、大哲学小説を書くはずであったということ、ボタンが誕生日のお祝に来てやっぱり脱がされてしまったので、こんなことって現実にホントにあるのかしらということ。

挿絵画家 募集！

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々のなかから、腕に自信のある方の応募を求めます。

○幻想美溢れる個性的なカット、挿絵を求めています。自作画をお送り下されば、逐次誌上に紹介いたします。

旧号の在庫について

今度倉庫を整理しましたところ

昭和36年3月号（送共一七〇円）

昭和36年11月号（定価二〇〇円）

右の二冊が若干出てまいりましたので未入手の方はお申込下さい。

千枚の原稿用紙を裸のお尻に乗せられてもアラエッサッサの踊りできたえているユキはハイチャラで、彼のほうはより深刻な顔付でウンウンうなっているのは、おかしな話で、いつになったらお尻から原稿用紙を取り、またカミツイてくれるのだろうとユキが思っている、

「だめだ」

と、叫んだので、何がだめなんだか知らないけれど

「そう、だめなの」と、ほっとして、ユキが

云ったら、

「そうなんだ」

と、ユキの腕をつねっては、

「SM現代小説とは何か」

とか、

「神酒とはなんだ」

とか、

「苦しんでいるのは、芳野眉美氏ばかりではない」

とか、わけのわからないことを云ってやらにつねるので、

「そんなことはいいかから、カミについて」

とジレッタそうに言ったら、

「夢男にも意地はある」

とコワイ顔をして、

「俺には書けない」

一声叫んで、原稿用紙をちらかすなりひょいと現われたユキのお尻に、いきなり彼はガブリとかみついた。

彼がユキのお尻にかみついたとき、ドアが乱ぼうにあけられて、まっ赤な長い襦袢が入ってきた。まっ赤な長襦袢ばかりだと思っていいたら、ちゃんと中味があって、中味は、ビールやウイスキーやブランデーなどがごちゃごちゃと入っている袋をかかえていた。

彼は、またも

「うおー」と吠えながら、ユキを離れ、突進した。

ガチャン！ パチャン！ びんのこわれる音がした。そんなことは問題じゃない。

彼は、必死の形相、すさまじく、またたく間に、芸者でもあるボタンを裸にしてしまった。

「どうした、ボタン」息をはずませている。

これが彼にとってはアイサツなのである。

「そんな子供じみたこと何が面白いんだ。スモウは表でやれよ」

スズメは、笑っている。

E

夜乃探郎氏がメイドインケニヤの黒人彫刻を十円で買ったその理由と、女を征服するのが男だという真理と、ユキの満足に就いて。

さすが、チントンシャンで夜を暮しているボタンであるから、なまめかしく、肌も青白い。ただし、「わたしを抱きたくないの」とか「男でショ」とか、「ハジをかかせるつもり」などボタンは、彼に言わない。

そんなセリフは、商売？用にとっておくのである。金銭づくでないオアソビがしたくてやってくる。

「ダブル・プレイでもしうか」

彼は元気よく言っただけ。

ボタンは片手で自分の乳房をギュウとつかんでみせながら、

「乳首責めなど、どうかしら」

ボタンも、奇クの愛読者である。

「おれ失礼するよ」

スズメが、飛ぶように出ていった。

さて、彼と、ユキとボタンのダブル・プレイがはじまるのだが、アッサリと書くことの好きな俺はどうしようか。なにウソこけ。そう言うなよ。ともかく、スゲエング。ホン

ト。

ユキもボタンも、この頃だんだん上達？して、奇クなんて高級な本をよませたから、俺もパンビタンでものんで、サア、ガンバリましょうと、張切らなければ、とてもじゃないが、アブの極致までは行きつけない。ウン。

ユキもボタンもマゾヒストとして、ますます複雑になってきた。これは見習うべきことである。いつか、スズメがニヤニヤしながらいつまでも見ていたら極端な羞恥が、極端な悦楽となって二人とも完全にコープンして、その夜十二時にわたって彼の責めを要求した。（おかげで、俺はへたばった。責めも重労働であることとを、思い知らされた。）羞恥が人一倍あるのに、いつも、あけっぴろげの彼の部屋に、やってくるのは、どうしたことか。そして俺だけでなく、だれの前でも裸を見せる。（いや、俺が脱がしてしまうのか、それなら部屋になぜ来るか……クタビレタ）ユキとボタンとの、これから開始のSMプレイでなく、書くことがクタビレタのだよ。どうせ、「贋作の贋作」は、本物？の「贋作」より、ウソッパチだからであることはきまっている。

彼が十円まで値切って、古道具やで、メイドインケニヤの女の黒人立像を買ったのも、ユキのお尻の色と、そっくりだったからである。そのまっ黒な彫刻はおんぼろ蓄音器の上から、いつも彼のS的欲望をかきたてている。ユキの色が黒いのは、生れつきであるらしい。

F

スズメが夜おそく部屋をのそいてみると、夜乃探郎氏が生れたままの姿の美少女を十人ばかりかたわらにはべらして、ぐうぐうといびきをかいて寝ているので、風呂屋でもあるスズメは、くだらねエやと舌打ちしてアキレテ帰って行ったということ、この章はこれだけしか書くことがないということ。

オヤスミナサイ。

オワリ。

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蟻涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- 顔面に女の尻が乗る

- 大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二二〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円

嗜虐の歴史

(ソバイの記録より)

三 原 寛

ソバイはシャム族の勇者だった。がっしりした骨格に、コッペパンを叩きつけた様な所謂物凄い身体だったらしい。

弓矢以外に飛道具のなかった時代に、傑出した体格のソバイは、数々の戦斗で手柄を樹てた事だろう。

戦国時代には武力こそ、全能だったから彼の地位も段々に上って、最後には不運にもペン女王の軍門に降った時には、定めし一方の旗頭といった地位にあったものと思われる。

記録はソバイが石造の牢獄に放り込まれた時から始まっているが、その後の記録に目を通してみても、これは全くソバイが幸運だった証拠と推定される。

戦斗が一段落して、両軍が今回の戦果に十

分満足し、或はも早や、このまま続斗しては全滅を免れない所迄になって、敗走して、とに角、両軍が軍勢をひいてしまうと、先ず捕虜に目をつけられるのである。

勝ったにしろ、敗れたにしろ、激しい戦の後の煮えたぎった血を鎮めるには、捕虜こそ恰好の慰さみものにちがいない。

しかも、絶対権力を握っているのが、既に紹介した様に、類稀な美と嬌慢、天性の高貴さと烈しさをもったペン女王であるから、マゾヒストにとっては、絶好のシチュエーションといえる。しかし、現実には、マゾヒストの夢想する如き、例えば捕虜を自己の乗馬代りに使用するとか、便器代りに使用するとか、舌奉仕を強要するが如き事は、期待出来

なかったのである。

その様な役割には、既に自種族の奴隷を以って当てていたのである。捕虜に対しては、如何に最大の苦痛を与えて、しかも見る目を楽しませる方法で、その生命を奪うかについてのみ考慮された。そして、ソバイの記録によると、ペン女王自身こそ、捕虜を虐殺する事に異常な興味を有していた様である。

ペン女王は革鞭の扱いが得意であったとされている。ローマ時代を描いた映画で、人を高い柵で囲まれた斗技場に追い込んで、ライオンを放つ場面があるが、ここで鞭を手にしたペン女王は捕虜を追い回したのである。

悲鳴を挙げて必死に逃げ回る捕虜を鞭で打って打って打ちのめし、打ち据えて、遂には顔死の状態で地に伏した捕虜を足で踏まえておいて、絶息する迄鞭打ったといわれる。

こうして、次々に斗技場にひきずり出されて、女王の鞭の下に絶命する哀れな犠牲者が数人に達すると流石に女王も疲労を覚えて、この遊戯を中止される。しかし、捕虜の命を奪うには必ず女王自らが手を下されねば気がすまなかったとしてあるから、恐らく、その方法は多岐多様に亘ったに相違ない。

著の“Those about to die”というペーパーバックだが、この一五〇頁程の内容がすべて、ローマ時代の暴君の虐殺場面の連続で、如何にして、鑑賞に耐える方法で人を苦しめ苛しみ、命を奪うかについての享樂的手段を網羅してあるが、ペン女王も同じ様な事を行したに違いないと思われる。

こうして、捕虜はすべて、ペン女王の手によって、その足下に絶命する事になるのだがソバイのみは幸運な例外だった。彼がずばぬけた体格をもった敵方の勇者だったからである。ペン女王は、この男を馬の鞍代りに使用した、とある。どうせ女王自身が前線を駆け回る訳でもなく、後方で指揮をとるだけであるから、この様な大男を鞍にする事によって馬の動作が鈍る事は構わなかったのだろう。

これは非常に卓越した着想である。第一に敵方で名を売った勇者を鞍代りに使用する事により、味方の士気を鼓舞し、又敵方によっては大変な屈辱となろう。それから、鞍代りとはいえ、寧ろ味方に大いに貢献し尊敬を集めていたヒーローに対しては矛先も鈍るであろうから、ペン女王にとっては、最も具合のよい盾ともなる。

馬にうつぶせになったソバイの上に、女王

がまたがったのか、或は仰向けに使用したのかは記録では不明だが、とに角この部分は翻訳していて興奮を誘った。

ソバイにとっては、これは大変な苦痛だったらしく、戦場から帰るたびに、まさに息も絶え絶えになったと記してある。ソバイが味方のヒーローであるという事から、彼は常にペン女王の傍近くおかれて、味方の士気鼓舞と敵愾心昂揚の為の恰好の材料にされたい。記録にはないが、雰囲気から察するに全部族の前で、排泄物を食べさせられる場面もあったにちがいない。

捕虜を殺すのも、必ず自分の手で以て為したペン女王を思うと、その排泄物も女王自身のものを使用した事は疑いもないのである。

嘗ての勇士ソバイも、もうすっかり恥も名も、かなぐり捨てて女王の飼犬になり下っていたのだろう。奇巧の旧号にも教養ある誇り高い令嬢を、激しい訓練の末、男の汚れた靴下を口で洗濯する迄に飼いなすストーリーがあったが、人間である以上、いかなる勇士であっても凡ゆる恐怖の前に、この様な不甲斐ない姿になったのも、無理ないと思う。

誇らしげに傲然とふんぞり返ったペン女王の足下に、首輪をつけられたソバイが、醜く

這い寄る。

「どうだ、お前はシャム族の崇敬の的だった英雄らしいが、何だい、その哀れなザマは、さあ、わたしの御馳走を恵んでやるから、お礼をお言い」

そして、床に頭をすりつけて土下座する敵方の英雄ソバイをみて群衆が歓喜するのだ。「さあ、それではお許しだ。お情で食べさせてやろう。手を使わない！」

群衆が大声をあげて嘲笑する中で、ペン女王の乱暴な仕草によって、口のまわりを黄色くして、もぐもぐと屈辱を食べるソバイの図が目につく。特に複数の女性にさげすまれながら、彼女等の神酒を飲まされ、排泄物を強制される事は、私の最高の夢であるが、生殺与奪の権をペン女王の手に握られて、あらゆる恥態を強要されるソバイなる勇士が、実在した事は実に羨ましい限りである。

記録の終りの方に、結局ソバイは廃人の如く使いふるされた身を、命だけは助けられ、部落の一隅に陋屋をあてがわれて、余生を送り、その時に、この記録を綴った事を書いてあるが、記録そのものをフランス人の手で可なり修飾した様子はある。

責絵に生涯を賭けた一匹狼

創作「伊藤晴雨画伯」

久 我 庄 一

序 章

昭和四十年六月下旬。仙台市はある団地の一角。会社員でもあり、余技として雑文を書きとばしては「奇ク」に投稿しつづけている久我庄一は、「人間、梅原北明伝」が掲載されている八月号を、今日も退社後あきもせず耽読していた。「次に先般物故された『責』の開拓者伊藤晴雨の伝記も是非マニヤの方々のため」という「編集後記」をくり返しよみ、頭をかしげた。

どちらかと言えば、風俗文献を研究する意

味ではオーソドックスな方で、動的というよりむしろ静的な方でもある彼にとって、文献史を書くような調子で筆をすべらすことが出来た北明物は比較的、書きよかったともいえる。それに、前からその準備もしていた。ところが、伊藤画伯となるとそうはいかない。動的ともいえる責めの実感が強く作者にもあり、SMプレイの豊富な経験がなければ責絵の開拓者でもあり、それに緊縛技術に於ては神技とも評される画伯の生きた人間像を揆拠することは不可能に近いのだ。成程、彼、庄一にとって、酒の力を借りて芸者をくどき、

多少は縛ったこともある。おのれの古女房に『性』の刺激を感じるため、前戯としてSMプレイのマネゴト程度は、いまもやっている。だが、それがどれだけSMマニヤとしての資格にあてはまるだろうか――。

「これは大変な事になった」と、庄一は、もう幾度目かの、ため息をもらした。

――あれやこれやと考えつづけ、その夜も深更になってから、とどのつまりは前作「梅原北明伝」試作メモに應用した小説手法を前面におし出し、伝記形式ではなく『創作』とすることにもかくメドがついたのである。

「これだ！」

庄一は、善は急げと、床より起き、「いまごろ、どうしたのさ」と、ぶつぶつねぼけ眼でこぼす妻の陽子の言葉を背にしながら机にむかった。

◇

下田の了仙寺と言うよりは、むしろ性風俗資料蒐集の「エロ寺」として知られている住職・松井大周師が「明日、御参詣になりました、十分に拝観をされ、大いなる御利益を得てお帰り下さるよう祈っております。」——と、そつのない挨拶をした後、ほろ酔い気分

で伊藤晴雨老が立上った。

「ふだんはおしゃべりをするんでありますがこういう風に、皆さんの前に出ると、根が臆病なんで、一向、何にも申し上げることはないんですが、黙っているのも工合が悪いと思いますんで——少しばかり何か申し上げないと引込みがつかないような感じがいたしております……」

ここで、晴雨老は一息つくなり、声を張り上げて言った。

「私は、女を責めることが非常に好きでありまして——裏から責める方はいけません。正面から責めております。」

性学の大家と自他共に許している存在でも

ある高橋鉄、岡田甫、ETCなどがどーっと笑い声を上げ、拍手をした。日頃口やかましい彼らも、どこか飄々とした風貌、とぼけた口調で語る責絵の開拓者、晴雨老には好意ある眼をそそいでいたのだ。

「——この、責めの四十八手なっています、ありやウソで、二十六しかない、やったか？　というところ、それがうまくいかない、なかなか……。まあこの辺のところ御免蒙りましょう。」

——それは、昭和二十六年四月二十一日にA出版社によって行われた××祭のときの、蓮台寺温泉での、大宴会の1コマではあったが。晴雨老は、しぶい御召の着物に袴、丸刈の頭には白髪がめだっていたが、しごく元気でだれ彼をつかまえてはダ洒落連発、夜明け三時まで痛飲した。

明治・大正・昭和と三代に亘って責め一筋に打ち込み、その間、生活的には不遇な、世の白眼視される頁をめくってきた彼にとっ

あったらうか——。

◇

「——この時期。風俗文獻誌『奇譚クラブ』（当時、発行所、曙書房）は、ようやく全盛期に入る前夜でもあった——。そして『全盛期。』昭和二十八年新年号。『縛った女を描く』特集。で、責めの大先輩、伊藤晴雨画伯と奇クとの連りが、『女の責場を描く時の心境』の寄稿をもって、誌上に登場するわけである。

ところが、同号に、たまたま黒井珍平氏の「この一文に対する反駁を期待する。僕の記録」。晴雨画伯の作風批判が併載されたところから、早くも、いまに語り草に残る論壇が華々しく本誌上に展開された。

◇

……久我庄一は、ペンを置き眼をつぶった。八晴雨画伯が、黒井珍平氏の一文について、すぐさま次号・二月号に「黒井珍平氏に答う」として、ズケズケとした調子の一文をものにした。この辺のところから、画伯の人間像に迫るキッカケとしようか？　彼は、姿勢を正し、ペンをかまえた。

◇作者註・昭和三六・五、本誌「伊藤晴雨・その生涯と作品・大熊清夫・によると、黒井

氏の「(1)責(僕の嫌いな言葉だ)に主眼をおいている (2)髪が嫌いであること。乱れた日本髪を見るとゾツとする。(3)血が嫌い。共產党が嫌いなのも、理論と共に、赤という連想が嫌だから。(4)時代感覚の相違。ウス気味悪いこととおびただし。もっと明朗で健康でなければならぬ。」に対して、画伯は「自分の体験から出た自己本位の日本髪排斥のお説には賛成出来ない。婦人の美は絶対毛髪にありと信じます。婦人から髪を毛を取り去って喜ぶのは印度のある地方にある野蛮人ばかりでグリグリ坊主に毛髪を剃り落して眉毛迄脱いでしまつてあるのが美人だそうです。君は野蛮人では無いだろうから現代のパーマネントの結髪にも入れ毛や付け髪をするのを御存知ですか……。私の絵を見て気味が悪いなどという君自身何んという小さな胆っ玉ナンドと申し上げたい。血が流れるのがイヤなら、そんな物は見ない方がいいではないか……」

庄一は、「奇ク」旧号の、大熊氏の画伯に關するエッセイ中の「この論争では、当時、黒井氏に同情が集つて、伊藤画伯は偏狹狹介であるとか、大人気ないとかの評が多かったが、筆者としては、大人気ないといえはたしかに大人気ないが、むしろ、画伯の純情な一

本氣を感じて、微笑を浮べた位のものであつた」に眼をとめ、「ほほう」——と、声を上げた。

「さてよ、純情な一本氣」というようなありふれた表現で、どうして七十八年に亘る責め一筋、悲願とも言える画伯のこの時の心境を解釈出来るだろうか……。つねに口ぐせにしていた「女を責めるといふことは面白いものでございますよ」——と、いう画伯の言葉は、『変態性欲者』または「氣狂い」よばわりされた年月を経た人物にしてはじめて「面白い」という文句が生きてくるもので、その実、内部に燃える責めの精神は、いつも張りつめられた一本の弦の如く、むしろ凄絶なものがあつたと思う。

おれは微笑を浮べるよりは「怖い！」ということがたしかだ。獅子は例え一匹の小動物にむかつて、全身をもつて、いどみかかるという。あの孤剣を抱えて、一人、枯野を行く野人、宮本武蔵もそうだった。晴雨画伯の全生涯は、年令などは問題でなく女を責め、描くという氣迫にささえられた生活である。こう推察しなければ「血が流れるのがイヤなら、そんな物は見ない方がいいではないか……」という晴雨老のタンカ？ の解釈しよう

も無い。

世は上げて洋服万能時代でもあるのに、あいつも変らず和服でとおし、ズングリとした身体にいがくり頭、古色そうぜんとしたものじり外トウをはおつて会合に出席、早朝氣に食わないことがあるとドテラ一枚の姿で行方定めぬ旅枕。さけばばその声、雷の如く、興のれば夕洒落風発、笑えば禪僧の如く味のある深みをチラツカセ、だれはばからず「貴女を縛らせてくれ」と、女を見ればくどき落す。しかもアイキヨウでプレイなどどこ吹く風、本氣でギョギョ縛つてしまふ。まさに、これ責めの世界の一匹狼でもあつたらうか。V

「一匹狼」庄一はペンを止め、思わず声を出した。八たしかにそうだ。先におれは、梅原北明を称して「風俗出版界の異端児」とよんだ。いま又、責絵の開拓者、伊藤晴雨画伯に對し「一匹狼」よばわりをするか、喝！

◇

——その明け方近く、執筆中ばにして、久我庄一は、まるで熱にうかされたように、はじめて陽子を全裸にむき本格的に縛りつけ責めた。おかげで、夫婦共、昼まで床から起きられなかつた。

◇「作者註・この日の夫婦プレイの詳細は、



吹輪 ふさね

乱髪 吹輪

本稿の主旨とはなれるので触れず、書いてもどうせカットものか？ ただ、熱演？ のあまり会社を休んだことのみ記す。呵々。」
——とんだ一日を迎えたわけである。

女の髪に異常な執著を示した伊藤晴雨画伯の筆

午後二時近く庄一が、かねて古書通信により、注文していた、チエザレ・ロシブロオゾオ著、辻潤訳『天才論』が配達された。彼はその中の「序文」の一節「天才を持たないで能才を持っていた——中略——人もあれば、能才を持たないで天才を持っていた——中略——人もある」と、いう二行にクギ付けされた。△それならば、伊藤晴雨画伯は、天才であろうか、能才であろうか。天才と能才について、この序文にはコムズカシイことが書いてあるが、要は、本質的に奇人であったか、どうかという問題だろうか。ズバリ、晴雨は「偉大なる奇人」であったと思う。梅原北明は、手段と本質を区別して論評することが出来た。だから、どこか奇矯な行状も見られ、アクロバットの華やかさも、その出版足跡に多々あったとしても、おれは奇人、天才の言葉を使用することをしなかった。とまれ、北明は、能才の人であり、異端児であった。◇作者註・本誌・八月号「人間、梅原北明伝」試作メモ、を参照されたし。

伊藤晴雨画伯は一匹狼であるが故に奇人であり、『天才』でもあった。そう考えられるのだ。

庄一は、また「即ち真理は必ずしも役に立

つを要しないのである。しかし多くの実際上の応用が、かかる研究から生じてきたのである。」とか「然るに天才は一方に於ける自分の発見に対しては非常により記憶を持ちながら自分の名さえ忘れることがある」——などの一節にも、興味を引かれたのである。

そしてまた彼は考えた。「金銭に執着しないで、好きな時に好きなことをする。絵は、一度はじめると、寝食を忘れてその完成まで没頭する」「モデル妻を、雪の中に二時間も置いて撮影したところ、唇はけいれんし」など、この「天才論」の序文の一節などにあてはまるのではなからうか。たしかに、晴雨画伯の生涯は、世俗的には不遇なものであったかも知れない。「何日ぶりかで家に帰えると妻は姿を消し、その日の米さえもない」というような逸話からしてもだ。ただし、充実した生き方であったことは、たしかだ——。V

◇

本郷の動坂で駒込病院を知らぬものがあっても、伊藤晴雨の気狂い振りを知らぬものはない。といっても過言ではない位、彼の変態振りは有名なものである。今から十年余り前僕は遊びに行った。

「裏の伊藤さんという画かき、気狂いです

ね。奥さんを××一つで雪の中へホウリ出して、自分は朝から若い女の人と××いるんですよ」と、

僕の顔を見るとすぐ友達の細君はそうだった。当時、浅草の背景を描いていた僕は、伊藤晴雨が公園劇場の内部の鳩の絵をかいてるところを見てよそながら彼を知っていたので、マサカと思っていたら、事実だったのである。今では、セメの研究家として、又実行者として天下にその珍を認められている。

田舎のおやじ丸出しのような彼が、年中和服でスケッチブックを懐にした異様な姿は、それだけでも、天下の珍である。その彼が、細君は勿論、細君の妹までもセメの材料にっかけているそうである。どう考えたって人間放れがしている。

此の間、山手劇場で、小生夢坊君と一緒に会った時、

「君のアレは、絵の研究のためか、それともアレだけの目的のためか」といって聞いて見たら、

「聞くだけ野暮ですよ。両方共ですよ」といっていた。

今は絵の方よりも舞台の方が主であるらしい。

◇作者註・「新国劇の沢田正二郎が、先ず関西で鳴らしていた頃、新京極や道頓堀の小屋の前で、絵看板にしては一風変わった、へんに写実味があり、而も颯爽とした看板が人目を惹いていた。これが画伯のもので、舞台装置と共に、沢正的な凄みを漲らせたものという。かくて、沢正に認められてから、新国劇や歌舞伎等の時代考証や舞台装置を依頼されるようになり、画伯の名声は上った」（大熊清夫・「伊藤晴雨」その生涯と作品による）

この一文は、昭和四年九月号・「グロテスク」・「現代異端画人伝（続）」・渋谷於寒作の中から拾ったものだが、

——そこまで書いて、久我庄一は、△「異端」という言葉は氣にいらん」と、思った。

△異端という言葉には、プロテスト（抗議）叛骨とかいう対社会的な諷刺の意味がふくまれているのだ。こと、晴雨画伯を取り上げるには、「現代奇人伝」としての中でこそ、あてはまるのだ。北明は、好きなことをやったとしても、その本質には、アナーキスト的な自由人たる思想があった。そして、とかくエロと称されていた軟派本を、同好者をつのり組織化し、風俗文献出版としての事業を成し上げた。

その点、晴雨画伯は一匹狼でもあり「責」または「責絵」及「舞台装置」などについては一見識をもっていたとしても、思想家ではあり得なかった。画伯は、SMマニアであり「芸術家」である。（識者の間で、画伯の著作「責めの話」（昭四）「いろは別風俗野史」五卷（昭五・七）・「日本刑罰絵図史」上下・（昭二三）・「責めの研究」（昭二五）・「責めの四十八手」（昭二六）・「黒縄記」（昭二六）「美女乱舞」（昭二九）、ETCなどがあり、画伯を風俗研究家としても、高く評価しているようだが——。御本尊としては、何も「研究」など、カタグルシイことを目的としてせつせと女を責め、画筆をもってアブ的な絵を描きつづけたとは思われない。だれかが「書くことは生きることだ」と、言っていたが、まさに「そこに女があったから責め、描きまくった」というより説明のしようもないことだ。あえて付け足しするなら、この方面の天才的素質が、そう然らしめたと言ふことができるだろうか。

「女の責場を研究するに芝居に限ると考えて楽屋に出入りするようになり、女形を縛って写生をしたり」などして、無理解な人からヘンタイあつかいされても馬耳東風、「目的の



本誌旧号の口絵に載せた伊藤晴雨画伯の絵

ためには手段を選ばず」というエゴイズム的な行動家でもあった。これは快楽主義の定義にも通ずるようだ。V

——庄一は、ふと、われに返った。おれは小説家の「感」を大事にしている。「梅原北

明伝」のときも、それを応用した。北明の人間像を追った時、ロマンチストである彼の一面を、すぐ捉えることができた。あんがい、それはスムーズになされた。ところが、この『創作・伊藤晴雨画伯』だけは、そうはいかない。画伯の人間像からはね返ってくるのは「青二才、ダメレ！」という激しい調子だが、その底にひやりと感じられるつめたい世界のものだ。天才は天才であるが故に、どれ程、好き放題なことをしても、充実した責め一筋という人生であったとしても、ときたまニヒル（虚無的）な影を意識する。それは芸術家の宿命でもあり、衆にすぐれているがために落込まざるを得ない殉教をも物語っているのだ。しよせん画伯は孤独な人でもあった。

夢にまで見た「出版の自由」前夜、斃れた梅原北明を、おれは惜しい人物をうしなったとは書くことはできるが悲劇とは名付けられない。彼が、ロマンチストでもあったからだろうか。この、伊藤晴雨画伯の生涯を指して、おれは「悲劇」とよぶことに躊躇しない。ただし、天才のみに許された「栄

光ある悲劇」としてだ。

◇

思想家でも無い——「行動家、伊藤晴雨画伯」の、責めの思想を論ずることはむづかしいというより、馬鹿げてる。画伯いまに有りせば、おそらくは「よけいな世話だ！」とガナリたてる位だろうか。はたまた、冷めたく「ふうん」とそっぽをむくのが落だろうか。「思想」という代物は、どだい、良かれ悪しかれ対社会的な意味が位置付けられる性質のもので、画伯のように、おのれの気のむくままに女を責め、描く、書く。自分が、そう信じているからそうなのだ。これでは、探りようも無いことである。ただし、これは、俗に言う偏狹狹介というものでなく、天才にとっては、ほっすることは真実なのである。醜即美なのである。いや、凡人には判らない善、悪を越えた別な価値判断の世界に住んでいるのである。その点、なんだ、かんだいっても合法的出版をつづけた梅原北明は、常識家でもある。（大禁止勲章を授与？）された北明を常識家とは、オカシナ話だが、画伯と比較するとそう判断が出るから不思議だ。もし、仮に、晴雨画伯が、風俗文献出版を手がけたとしたら、どうなるだろうか？ とて

つもない超出版振りをやらかすだろうが、自爆も早いだろう。ただし、そんな七面倒くさいことは絶対にやらないことだけは、たしかだ。天才肌の人間って、いつも事業を起すとなれば、イチカバチカ。さもなければ自分のカラに、ガンコにとじこもってしまう。

ズバリ！ 華やかなる「悲劇」を演出し、その主役ともなったナポレオンは前者だろうし、「日本橋上の残月」は、とてもたまらない、一つこの月を追いかけてながら、東海道五十三次をぶらつこうと、散歩の足が、とんだ長旅とはなった。そんなのんきな逸話が残されている、かの『東海道膝栗毛』の著者、十返舎一九は多分、後者の方か。そして、伊藤晴雨画伯も、この範囲に入る存在でもあろう。

× × ×

「だが」と、ペンを止め久我庄一はつぶやいた。そして考える。責めの思想というより、伊藤晴雨画伯の「責めの行動」について追求すべき道はある。それは真正面から見たそのままを描写する。——これだ。

◇

伊藤晴雨が、責めの開眼をしたのは十七才の時であった。これは、本人が、奇クの求め

に応じて、昭和二十八年、新年号誌上で告白した。当時私は彫刻師の丁稚小僧で月収二十銭、女の責めのコレクションが意の尽でないので、東京朝日新聞の挿画を業務の暇を盗んで書き添えて密かに喜んでいたので、女に縄を添えて顔を赤くしたことなどであった。其後、筆を持って生活が出来た様になって、新婚の若い妻を扱帯で縛り上げて写生した時の喜びは今に忘れ得ない。

また、昭和二十六年、三月号より創刊される「A」誌のため「伊藤晴雨画伯をかこむ性風俗座談会」に出席した晴雨画伯は（日本精神分析学会）高橋鉄・（下田了仙寺住職）松井大周の各氏に、責めについての話を種々と語ったが、責められると目はつぶらないで無表情になる。図々しく、度胸がよくなるとたいてい無表情です。だから芝居でやる責め場は全部うそです。実際には、第三者が見て、いじめられるとか責められているとかいった感じはない。女というものは度胸がいいのか捨て鉢になるのか、殴られていても最初のうちは口惜しいと思っても、そのうちに勝手にしやがれという気持になる。死刑囚の最期を見ると女の方がきれいだと思えることでも、

それがわかる。男を知った女は声を出す、生娘は出すまいと思う。

◇作者註、以上適宜抜ス。

松井住職は、

「責めの話で興味があるのは人間には人を苛虐する楽しみがある。ゲーテの言葉を借りると、人間の心は神にも通じ、悪魔にも通ずる、という面があり、またそれをされて喜ぶという面もありますね」

これについて晴雨画伯は、

「つまり「優越感」の一語に尽きる。それは大正五、六年ごろ、日本が非常な好景気になった時分は、演劇の方でいえば喜劇がはやらず、悲劇がはやった。笑うといけない、悲しませればいい。というのは、おれはこれだけ金を沢山もっているが、お前たちはもっていない、金をもっていれば何でも出来るんだという通念から、舞台の上では金のないやつは演劇を好んだということがいえる。女を責めるにしても痛くもないのに、向うが痛い々々という優越感をもつんだね」

「責められて慾情を催す女がいるはずですが……」という高橋氏の問いには、

「それは責められて、じやなくて責められなければ慾情を催さない女がいる。ぼくの知っ

ている某大衆小説作家なんかも、これにつきまともわけて困った。縛ってくれ、まだ足りない、まだ足りないというんだそうだ」と晴雨画伯は答えている。

松井「先生の『刑罰史』にあった、品川沖のキリシタンの水責め、あれは……」

伊藤「大体、キリシタン資料というものは、信仰力を強調するために書いてあって、実際に人間にはそんな生活力はない。人間が廿四時間水責めにされてもつまんじ

やない」

◇作者註・以上、適宜抜ス。

◇

——こう見てくると「責めと伊藤晴雨画伯」とは、実感的というか、体当たりというかすべて生をそのまま投げ出している。だから「女の責場」は春画ではないが醜を化して美と為すという彼我一致して居る」という言葉も出てくる。「SMプレイは、美である」というイメージをまず頭に入れて「責場」に

立つのでなく「性」

の事実のみにくさも哀しさも、そのままじかに受けとめ女を責める。もっとハッキリ言えば、女の責場は異常な世界であると肯定した上で、プレイするということになるわけだ。

かつて、いまも奇ク誌上に登場した、男で、おれの知っている範囲では、伊藤晴雨画伯にガイトウ

する人物は、残念ながら見当たらない。SとMと言う立場は違うが、マゾヒスト、古川裕子。彼女ならば、画伯とガッチリ四つに組むことの出来る女ではなからうか。

久我庄一は、ふうーと息をついた。それは開放感ではなく、さらに続く「伊藤晴雨画伯と古川裕子について」の話をすすめることの緊張さを意識してのため息ではあった。

——「人間、梅原北明伝」を書いたときには、枚数からいってもうこの辺あたりでヤマ場は終り、ほーっと一息、煙草に火を付け、後は仕上げをすればよかった。ところが、今度はそのはいかない。どう考えてみても、力ケ足ならはやつとグラントの真中近くにさしかかったところで、終着点はまだ遠い。書きよさそうで、どっこいこれ程、書きにくい人物もない。一般的に、逸話もあり、著書も数多く、告白も多い人間は書きよいと思われがちだが、作者の「書く」という新しい発見への野心を妨げる。想像力の入る余地が少いのだ。特に伊藤晴雨画伯は、天才であるが故に、エゴイズム的な「行動の人」であって、伝記・評論、またはドラマ向の主人公ではあり得ないのだ。

すべてのわくにはまらない。ただ、久我



本誌旧号の口絵原稿

庄一という作者みずからを登場させて、売られたケンカは買うべし！ というような調子で、「創作」という世界の中で、対決するやり方法がなかった。これも久我庄一、一人芝居のカラ廻り、お粗末さになってしまいう危険が無いわけでない、いや十分にある。だが結末はどうであれ、書くことは大切である。だからどの形式であれ、晴雨画伯を描くことの不可能さをふまえた上で、無理に「創作・伊藤晴雨画伯」をものすることにしたのだ。この一文は本質的には画伯讃美論ではなく、責めの開拓者、伊藤晴雨画伯のせめて足にでもカミツコウとした「久我庄一ケンカ日記」でもあるわけだ——。



「久我庄一いわく——」
 八この章のみ、創作ではない。「評論」である。いわば、劇中劇の頁。V

白いマスクの女王・古川裕子。それは、奇ク・通刊二百号突破を記念する史上にあって彗星の如き存在をかいま見せた稀有の女性だった。そしていまは、マゾヒスト・古川裕子の面影は、旧号を所持するファンの間に、伝説的な人物として、語り伝えられるのみである。

古川裕子。——それは「凌辱の幻想と期待」の中にあって、身体でもってさげんだ「マゾの牢獄にうごめく女囚」でもあったのだ。

◇作者註・「悦特」・第二集、第三集参照。

——そして、「古川裕子への手紙」吾妻新（昭和三十六・五）にもある「しかも、二つの相反する極から、放電によって中和する可能性と危険をはらみつ、われわれは近づいたのです」というような、多数の熱烈な古川裕子ファンを背景に、奇ク誌上にあって、吾妻新、古川裕子の名がクローズアップされ、火花を散らし去ったドラマもふくまれているのである。

古川裕子は「行動の人」でもあった。生々しい告白を、やつぎばやに発表したとしても文章家ではなかった。いわんや作家ではあり得なかった。「奇ク」を「孤独の広場」として生きて行くには、あまりにも現実的な被虐そのものへの慾望が強烈だった。裕子の「悲劇」は、告白の世界をはみ出したことに見られるようだ。しよせん、伊藤晴雨画伯と同じく、小説の主人公には不向な女だった。私は彼女をモデルとした創作『夜光島』・吾妻新作・を（二）（四）と読んだ。

◇昭和二九・一〇月号より、三〇年三月号に

かけて連載。

二回のみでは批評のしようもないが、「あの小説は失敗した」という吾妻新氏の言葉はうなづけるのである。

◇作者註・昭和三〇・五月号「孤独の広場」吾妻新より。



「伊藤晴雨画伯」と「古川裕子」の結び付けは、あまりにもとっぴょうしもないことのように思われるだろうが、行動の人、晴雨画伯を浮彫りにするためには、どうしても、彼女をブツケナケレバならなかった。はたしてその結果はどうだった——か。もし、晴雨画伯と古川裕子のSMプレイを実現させたとしたならば、どんな答えが出たろうか。おれは興味がある。しよせん作家・吾妻新とマゾヒスト・古川裕子の出合いは、はじめから別れ去ることが宿命付けられたものだった……。

——ここまで書いて、久我庄一は理由のわからぬ腹だたしさにおそわれた。それはおのれの内部に巣くうサジズム的な欲望でもあるうか……。

それとも「SM」と「書く」という間の距離のふく雑さを、苦しみ思い出させるものがあったのだろうか……判らない……。

だが、晴雨画伯はSMの異常さをはっきり読者の前に示してくれたことはたしかであり、また「醜を化して美」の世界を挾括してくれたことも、たしかなのである。

そして、そのことが（読者の一人でもあり）書くということに、晴雨画伯の人間像に肉薄しようとする、おれの気持を混乱、刺激させることばたしかなのだ——。

◇

「創作」。——だから、伝記の如く、終りに麗々しく「参考文献」を列記することをおれは好まない。だが、いくら小説だといっても、モデル小説であるからには、でたらめな書き振りはおれの性分が許さない。成程「奇ク・既刊号の各号」晴雨画伯に関するエッセイは参考にした。特に「伊藤晴雨——その生涯と作品——」大熊清夫氏のものには、よりお世話になった。「人間探求」第一出版社、各号の責めに直接関係はないが画伯の心情を探るため「本邦春画略史」伊藤晴雨・ETCなどもよんだ。「あまとりあ」あまとりあ社・各号・特に「伊藤晴雨画伯を囲む「性風俗座談会」」それから「グロテスク」も参考にした。

画伯の著書については、すでに六章あたりでふれている。そう「天才論」改造文庫・「変

態作家史」（全）井東憲。文芸資料研究会・ETC——もあった。

（一応、書く礼儀上として、終り近くに適当におれのひとり言として入れて置くか。）なるべくこれらの文献は文章の構成上なるべく参考程度にとどめ、久我庄一としての考え方をろこつな程に出すことにつとめたが、はたしてどういう結果が提出されるだろうか。

——久我庄一はやっと煙草に火を付けた。

そこで書きはじめてからまだ二日程よりたっていないことに気付いた。長い期間、伊藤晴雨を見つめたような気もする。いや、ただがむしゃらに、こうふんにこうふんしつづけ、一氣に書き上げたという気持もする……………。

終章

「責め絵」の開拓者でもある伊藤晴雨画伯と「奇譚クラブ」との関係は深い。画伯の本誌への寄稿だけでも昭和二十八年新年号「女の責めを描く時の心境」から、三十六年・新年号・新草双紙「地獄宿」まで、実に三十三編が発表されている。

これについて、読者の反響も大きく、それが賛否両論が極端であったという景品まで付いたが、しかしそのことが画伯の異色的な作

風を評価することこそあれ、責め絵の天才、一匹狼たる伊藤晴雨画伯の人間像を、いささかもそこなうことにはならないのだ。

明治、大正、昭和三代、七十八年に亘る生涯を、責め一筋に打ち込んだ画伯をしのび、いまは黙してただ祈るのみ。

願わくばこの一編、いまは亡き晴雨画伯の前に捧げ、過分の言葉を下された編集子とマニヤの方々に送る。期待の万分の一も約を果せない、はずかしさをもって——。（終）

『附記』

「私はキセを連れて白雪皚々たる中を府下高井戸に向った。私は挿絵に追掛けられる繁忙の中を割いて、雪責の実験を勿論納得づくではあるが、幾多の〇〇に行っている……キセは長襦袢一枚になって所持の麻縄でグルグル巻に縛り上げた。縛った女は、素肌に長襦袢一枚で、髪を振り乱して、腔を没する深い深い雪の中を三十分につけて歩かせた……それから女を雪中に押し倒して約七分間雪に半身を埋めて写真を撮影した。女の腔部を露出せしめて、寒冷骨を刺す、氷を割って足を池水に浸して暫らく其の俤に放置し……」といった具合で難行苦行はまだまだ続き、哀れ

犠牲者は「唇の色は青く眼窩の縁は蒼黒く変色して」失神しますが、晴雨老は「此の時の実験で女の体質にも依るが、気が張ってさえ居れば、女は一時間以内迄〇〇で雪中に居ても生命に別条は無い事を確め得た」と全くアッパレなものです。（傍点は筆者）

——この一節は、書誌研究家、城市郎氏が最近出版された『発禁本』桃源社・一九六頁「貴の研究」へ伊藤晴雨Vからの抜粋であるが、現在・SMマニヤの世界の外では、どのような晴雨画伯観が述べられているか、興味があるので参考引用した。（もう少し城氏の文章に触れて見よう）明治二十四年、九才の時、本所の芝居小屋で見た通し狂言の女の表情に打たれたのが、責め絵熱中の動機、と老は後年語っていますが、この本は（昭和三年刊・『貴の研究』）その三十余年の傾倒ぶりをつぶさに示しています。一部は『サンデー毎日』に発表されたもので、責め写真つき活版百部として温故書房から出版され、発売前禁止となったものです。今日残っているのは『貴の話』と題されて伏字をおいた孔版の改訂版で、責めは「最初より女に対して憎悪の感念を抱きて之をするもの」という定義にはじまり、責めの種類、見世物、芝居の

責め場の模様や雪責め実験記が本書で述べられています。伝説となった雪責めの実際をこれで見ますと——となつて、『附記』冒頭から「雪責V一節になるわけであるが——」。

また、城氏は「自分の奥さんをハリから逆さ宙吊りにしたり、或いは高手小手に縛りあげ、雪の中に放り出したりして、絵筆を揮つた奇行の画人」とも「三十年前に書いた『いろは引江戸と東京風俗野史』は現在得難い文献」そして「先年さし絵画家としての功績から『出版美術連盟賞』を授けられたものの、晩年は概して不遇だったようです。」とも

「某有名女優などをモデルにしたといわれる十二枚の責め絵入りの加虐感想文集『論語通解』を私家版で出したところ、これも全部没収処分です。実物は滅多にないようです」画伯の亡くなったことに触れて、「二、三通の週刊誌がこの嗜虐趣味の異常な生涯を伝えました」ETC、書いている。（傍点は筆者）

さて、この城氏の一文から、私は次のような点を注目、考えてみたいのである。（斎藤昌三氏亡き後、いま最も売出しの「風俗文献通」として、氏の言は定評がある）

◇晴雨画伯を江戸・明治期風俗の時代考証の第一人者、舞台装置家、さし絵画家として、

評価されているのが一般的な既成事実であつて『責場』にある行動の人（サディスト）。ズバリ「責め絵」のリアリティ（現実感）については「異常」なという通り一辺の解釈がおおむねのようで、八人間・伊藤晴雨Vに肉薄した筆致が見られないようである。（既成モラルの点からタブーとされているのか？あまり触れてない。）

既成の観念による異常なという言葉の裏面には、責める人、晴雨画伯に対する被害者は「哀れな犠牲者V」となる。または「アッパレなものです」という茶化？したような批判が出てくる。「勿論納得づくで」という言葉が見逃されている。（この伝説的？な二時間間にわたる雪責めについて、マニヤの大熊清夫氏は「伊藤晴雨」——その生涯と作品——で「これをもう一度へ筆者註・モデル妻を指すV暖めて又、撮影した。さすがにその時は今気絶するかとハラハラしながらで、責められる方より辛かった」とのこと。と、その時の画伯の心境を紹介している。すでに、マニヤの筆と、外部の筆による紹介の仕方がくい違つて居ることにお気付でしょう。）本文中晴雨画伯の「責めの開眼V」については奇々昭和二十八年新年号・「女の責場を描く時の心

境」(画伯の寄稿)によって私は「年令は十七才」とした。城氏は「九才の時」としている。私は、この二つを取って、私なりに「九才の時、芝居の責め場の女の表情に打たれたものが、いつまでも眼底に残っていて、十七才の実際に責め画を描く時の動機となっている」としたい。

◇奇ク・マニヤの世界での再評価の方向につ

女性切腹 (時代篇) 絵巻

四馬孝画

略号 (えま2)

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に発揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なりアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものです。今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

いて

私はマニヤの世界で、いま晴雨画伯が再評価されるとするならば、風俗研究家としての画伯でなく、世評ではタブー? とされているであろう責め・責め絵画家としての一匹狼・伊藤晴雨の世界に新しい解明のメスをふるうことであり、それが課題でもあると思うのである。(一例、奇ク的SMプレイと、晴雨画伯の実行したプレイとの相違関係など)

女性切腹 (現代篇) 絵巻

四馬孝画

略号 (えま1)

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表して斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性が絶対絶命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定して、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿態を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

「作者註」・本文中で、私は画伯の縛りの技術について「神技」という言葉を使ったが、「一生女を縛り続けたのだから、その縛り方は堂に入ったもの。僅か一尺足らずの紐でチヨイチヨイと女の体に触れるともう手足を縛り上げていたという。それで警保局(今の警察庁)あたりから、縛り方の講習に招かれた」という逸話を上げて置く。

× × ×

「老の死の数日前に、ある新聞が偶然インタビューしており、老は不自由な体ながら、きちんと正座して、礼儀正しい言葉で記者と応待し、はてはシバリの楽しみや、モデル探しの苦勞など、筆禍を招いた責め絵談義に花を咲かせているのがひどく印象的です。(筆者註・昭和三十六年一月二十七日死亡)享年七十八才。」という城氏の文章中、最も、画伯に好意的とも思われる一節を紹介して、私の「附記」の結びとしたい。

「編集部より」伊藤晴雨の逸話については、編集部からも若干「資料」を提供いたしますが久我庄一氏が本稿に於て「晴雨研究」の皮切りをして下さっていますので、何卒多少に拘らず今後の資料提供をお願いします。

女斗美ファンタスティック・シリーズ

デパート女子レスリング

△ゆきこ対みずえの死斗▽

芦 浦 素 舞 夫

まえがき

私は、女斗美の中では女子レスリングが最も好きである。女子レスリングの魅力は、何と言っても、その格闘美にあると言えよう。

女子柔道や女相撲には、襟や袖、禪などの斗うための手掛りがあるが、女子レスリングにはそれがない。したがって、相手の首や腕、胸、腰、足などの肉体の部分を直接手掛りにして斗わねばならない。いきおい、組んずはぐれつの格闘になりがちである。まして女性の場合は、感情がデリケートなだけに、とも

すれば掴み合いの喧嘩にさえもなりかねないのだ。羞恥のベールをかなぐり捨てた女性たちが、その凄まじい斗争本能をムキ出しにして、肉体を激しくぶっつけ合って力の限り闘い、そして相手を屈伏させる女子レスリングは、蓋し、女斗美の最高峰と言えるだろう。

また、女子レスリングには、エロチックなムードがある。赤、青、黄など色とりどりの水着をつけた女性たちが、リング上で組んずはぐれつ争う姿には、悩ましくも妖しいエロチックな美しさがある。女子レスリングこそ、女斗美の極致を究める美しい闘いと言っても

過言ではない。私は、同じ女子レスリングでも、ショー的な女子プロレスよりも、純然たる素人女性のレスリングのほうを好んでいる。

デパートの女性たちには、華やかなムードがある。にこやかな笑顔を見せて応待する彼女たちの姿は、あたかも花園に咲き競う色とりどりの花々にも似て派手で美しい。だが、この表面は華やかに見える彼女たちも、同僚の女店員同士の間では、女性特有の虚栄と嫉妬から内面的な葛藤が行われるケースも少なくないのである。女斗美のモデルに素人女性

を選んでいる私にとって、デパートの女性たちは、まさにうってつけのモデルなのだ。かくして、華やかなデパートを舞台にして、私のファンタスティックな女斗美の世界が展開てゆく……………。

一、宿命のデパート女子レスリング選手権試合のこと

或る夏の日の午後のことである。

丸洋デパートの七階ホールは、肥満ゆきこ対長身みづえの決戦を前に、緊張した雰囲気にも包まれていた。さしに広いこのホールも同デパートの女店員たちで、文字通り立錐の余地もないくらい埋めつくされ、冷房装置もいまは何の役にも立たず、それこそ、むせ返りそうな人いきれだった。

このデパートでは恒例の女子店員レスリング夏の大会が開かれており、さきほどから、各売場より選ばれた女店員たちの間で華々しい熱戦が繰り展げられていたが、いよいよこの大会のメーン・イベントとも言ふべき、S売場の肥満ゆきこ対M売場の長身みづえの選手権試合を迎えるに及んで、場内の興奮は遂にそのクライマックスに達したのである。

長身みづえは、ミス・デパートと言われて

いるほどの、美貌とスタイルを誇る女性だった。彼女には、いつも異性との間に華やかなロマンスが囁かれ、デパート中の女店員たちの羨望の的になっていた。したがって、彼女自身もまたそれを意識して、同僚の女店員たちに対しても優越感を持って振舞っており、長身みづえは、いわばこのデパートの女王的な存在だったのである。

肥満ゆきこは、長身みづえより二つ年下の明るく健康的な女性だった。彼女の、お客に対する愛嬌の良い応待ぶりは、なかなかの評があり、彼女の明朗な人柄は、同僚の女店員たちからも好感を持たれていたのである。彼女たちのデパートは、以前から女斗美が盛んだった。これは会社側が女店員の保健体育に女斗美を採用して彼女たちに奨励していたからである。いまでは、女子柔道や女相撲、女子レスリングなどは、このデパートの代表的なスポーツになっていた。そして、肥満ゆきこと長身みづえは、そのデパート女斗美の双璧と言われていたのである。

数多い女店員たちの中でも、長身みづえの一六六センチの身長と肥満ゆきこの六十キロの体重は、断然群を抜いており、実力もずば抜けて強かった。

長身みづえの体格は、むしろファッション・モデルに向きそうなエレガントな八頭身だったが、彼女は、高校時代にはスポーツの万能選手だったほどの、恵まれた運動神経の持ち主だったのである。一方、肥満ゆきこも、やはり高校時代（「註」肥満ゆきこは、長身みづえと同じN高女の出身で彼女の二年後輩だった）には運動選手をしており、太った体格に似ず、運動神経のたいへん発達した女性だった。肥満ゆきこと長身みづえが初めて対戦したのは、肥満ゆきこが入社した年の夏、同デパートで行われた女店員相撲大会の時だった。

新鋭の肥満ゆきこは、当時、同デパート女斗美のチャンピオンだった長身みづえと早くも顔が合い、これをみごと首投げに破って一躍有名になり、長身みづえの好敵手としてクローズ・アップされたのだった。そして、それ以来の各大会優勝は、ほとんど肥満ゆきこと長身みづえの二人によって争われており、彼女たちの対戦は、いまやデパートの女斗美を代表するゴールデン・カードになっていたのである。

したがって彼女たちは、お互いに激しいライバル意識を燃やしており、二人の対戦は、

いつも凄まじいデッド・ヒートを展開していたのだ。例えば、本誌二月号の『デパート女相撲』において演じた彼女たちの大相撲などは、読者の記憶に、まだ新しいところだろう。そしてついに、宿命のライバルとも言うべき二人の女性、デパート女斗美の華、女子レスリングのリング上で、メトミの女王の座を賭けた選手権試合を闘うことになったのである。それは、彼女たちにとって絶対に負けることの出来ない一戦だった。力においては、肥満ゆきこが優り、技において、長身みづえに一日の長があった。はたして、勝利はいずれの手に……興味津々として尽きない一戦だった。

二、背の高い女性と太った女性 性の対照的な体格のこと

さていよいよ、超満員の場内の万雷の拍手に迎えられて、肥満ゆきこと長身みづえの二人の女性がリング上に颯爽と登場した。

派手な水着をつけた二人の姿は、まるでリング上にパッと花が咲いたように、あでやかだった。それは、女子レスリングでなくては見ることもできない美しいシーンである。

「長身さん／＼」 「みづえさん／＼」

「肥満さん／＼」 「ゆきこさん／＼」

場内のあちこちから、女店員たちの黄色い声援が乱れ飛ぶ。二人の女性は、にこやかに手を上げてこれに答えている。ことに、美貌の長身みづえは、いかにもミス・デパートらしい誇らしげな態度である。

『レッド・コーナー、長身みづえさん、身長一六六センチ、体重四十八キロ／＼グリーン・コーナー、肥満ゆきこさん、身長一五五センチ、体重六十キロ／＼』

レフリーである私は、二人の選手を場内に紹介した。レッド・コーナーの長身みづえは、すらりとした瘦躯を似ましいピンク色の水着で包み、細い足首には識別用の赤いテープを巻いていた。これらの色が、彼女の色白の素肌とよくマッチして、鮮やかなコントラストを描き出している。髪はアップにしており、そのほっそりとした佇身に、得も言われぬお色気を漂わせている。整った高い鼻すじや、小さく引き締った口元に聡明さが窺われ、眼尻がつり上っているせいか、ちよっと冷たい感じは受けるが、カラー化粧をほどにした長身みづえの顔は、それこそ匂うがばかりの美しさだった。だが、それにもまして素晴らしいのは、彼女の肉体だった。ほっそりと

した長い首、柔らかな肩、しなやかに伸びた長い腕、ふくよかに盛り上ったバスト、よくきれたウエスト、大きなヒップ、カモシカのような細長い脚等々、長身みづえの均整のとれた美しいスタイルは、まさに現代女性の夢の理想像そのものだったのである。

これに対してグリーン・コーナーの肥満ゆきこは、はち切れそうな肥躯を眼のさめるような黄色の水着で包み、太い足首には緑色のテープを巻いていた。黄色の水着は、もともと肥えている彼女をよけいに太って見せているが、彼女の小麦色の素肌によく似合っている。髪は普通のパーマだが、肥満ゆきこは、やや眼尻の下った丸ぼちゃの愛嬌のある顔立ちで、二重になったアゴや口元がとても可愛かった。そして、彼女もカラー化粧をしているので、もともと明るい顔立ちをより引き立たせていた。だが肥満ゆきこの、太く短い首、分厚い肩、豊かな胸、太い腰、横に張ったお尻、大根脚など、そのほっそりとした体つきは、どう見ても、現代女性の理想とはおよそ隔け離れたものだった。しかし、彼女の太り方は、肥満女性によくありがちなブクブクした脂肪太りではなく、筋肉のよくひき締った健康的な固肥えだった。つまり、肥満ゆ

きこのポリュームのある身体は、メトミ選手にはまさにうってつけだったのである。

これに対して、長身みづえのエレガントな身体は、美容上からは理想的な八頭身だったが、メトミ選手としてはいささかスマート過ぎた。因みに二人の体格を比較してみよう。

	身長	体重	バスト	ウェスト	ヒップ	足
長身みづえ	一六六	四八	八〇	五八	九六	廿五・〇
肥満ゆきこ	一五五	六〇	九〇	七〇	九九	廿二・五

右の表で分るように、長身みづえの一六六センチの身長に釣りあう標準体重は、六十キロ近くなくてはならないのに、わずか四八キロしかなかった。つまり、彼女は実に十二キロも体重が不足していたのである。一方、肥満ゆきこの場合は、まったく逆だった。肥満ゆきこの一五五センチの身長に対する標準体重は、五十キロでいいのに、六十キロもあった。彼女は、なんと十キロも体重がオーバーしていたのである。

長身みづえは、明らかに痩せ過ぎており、逆に肥満ゆきこは、完全に太り過ぎだったのだ。もともと私は、背の高い痩せた女性と背の低い太った女性の対戦が好きだった。こうした意味で、肥満ゆきこと長身みづえの二人

は、私の最も理想とする女性たちだったのである。

三、長身みづえの十文半の臭いアップシューズのこと

さて、服装その他の検査や、試合についての種々の注意を与えるため、私は彼女たちをマットの中央に呼び寄せた。二人とも、身だしなみよく高級な香水をつけているのか、甘い香りが匂ってくる。いかにも女子レスリングらしいムードがあった。女子レスリングの場合は、とくに爪や頭髮の検査を入念にする必要があった。私は、まず彼女たちのユニフォームから調べ始めた。長身みづえのピンクの水着は、彼女のすらりとした身体にピッタリと合っている。痩せてはいるが、バストやヒップは豊かに盛り上っており、なかなかセクシカルな魅力があった。

一方、肥満ゆきこの黄色い水着は、彼女が太っているため今にも張り裂けそうである。頭髮を調べたのち、手の爪を検査することにした。彼女たちは、私の前に両手をさし出したが、さすがに、二人とも爪は短く切っている。長身みづえの手は、指がほっそりと長くまるで白魚のようだった。マニキュアをした

爪も美しかった。

肥満ゆきこの手は、むっちりとして短く、指も可愛いらしかった。彼女も、爪にマニキュアをしていた。私は、長身みづえの細長い腕と肥満ゆきこの太く短い腕を見比べながらおそろく彼女たちの足の文数にも、かなりの差があるだろうと判断した。

次はいよいよ、彼女たちの足の爪の検査である。ところがここで困ったことが起きた。肥満ゆきこは、素足でリングに上っていたので問題なかったが、長身みづえは運動靴を履いていたからである。もっとも、彼女が運動靴を履いていたのには深い理由があった。

長身みづえは、その美しい顔に似ず、ひどい脂足だったのである。彼女は、試合中に自分の汚れた足の裏を見せたくないかったのだ。これは彼女に限らず女性なら誰だって、自分の足の裏の汚れは人に見せたくないのは当然だが、人一倍オシヤレな長身みづえにとっで、自分の汚れた足の裏を皆んなに見られるのはたまらなく羞かしいことだった。まして彼女は人並みはずれたひどい脂足なのである。長身みづえが運動靴を履いていたのも無理なかった。だが、肥満ゆきこが素足で出場している以上、長身みづえも素足で試合する

のが当然だった。私は彼女に運動靴を脱ぐように命じた。長身みづえは不満そうな表情だったが、しかたなく運動靴を脱いで私に渡した。それを受け取った途端、蒸れたような臭い匂いが私の鼻をついた。長身みづえの運動靴は、彼女がいつも売場で履いている白のアップ・シューズだった。

私は、長身みづえが売場のショー・ケースの向うで、このアップ・シューズを脱いで足の裏を拭いているのを数回見かけたことがある。オシャレな彼女は、一回に何回となく足を拭いていたが、もともとひどい脂足なので拭いてもすぐ汗で蒸れてべとつくのだ。ことに今日は三十五度を越す、うだるような暑い日だったから、さきほどからかなり長い時間、このアップ・シューズを履いていただけに、彼女の足の蒸れも相当ひどかったのだろう。

やった。臭い！ 何とも言えない臭い匂いが私の指に沁みこんでいた。

四、運動靴で蒸れてべとつく、 長身みづえの臭い脂足の こと

次は彼女たちの足の爪の検査である。まず肥満ゆきこから調べることにした。さすがに彼女は羞しそうにそっと足を出す。肥満ゆきこの足は、甲高のむっちりとした可愛らしい足だった。文数は九文半だから、あまり大きい方ではなかったが、幅は実に広かった。足指も短くて、ことに拇指が太く短いのが特徴だった。

肥満ゆきこの足は典型的な日本女性の足だったのである。手に取って見たが、ほとんど汚れてはいずれサラッとした感じだった。

さて次はいよいよ問題の長身みづえの足である。彼女はしばらくためらっていたが、思い切って私の前に足をさし出した。よほど羞かしかったらしく、彼女は顔を真赤にしていた。長身みづえの足は、外人の女性によく見受ける幅の狭いスマートな足だった。文数は十文半で女性の足としては大き過ぎるくらいだった。足指も実に長く、おそらく肥満ゆき



ゆきこ対みづえの女斗美死斗図

長身みづえの白いアップ・シューズは、すでにうす黒く汚れていた。中底には彼女の細長い足型がくつきりとなっている。文数を書いた数字はすでに消えかかっていたが、微かに廿五という数字が読める。見栄っぱりな長身みづえは、かなり足に無理をして履いているらしく、このアップ・シューズも、少し変形していた。私は、右手の指を靴の爪先に突っこんでみた。ドロツとした粘っこい感覚だった。私は思わず指を鼻に

この倍はありそうである。それに拇指よりも次の指が長いのが特徴だった。ペデキュアをした爪も桜貝のように美しかった。だが足の匂いはたまらなかった。脂足の彼女は、長いことゴムのアップシューズを履いていたため蒸れてべとつき、鼻をつまみたくなるような臭い匂いを発散させているのだ。傍らに立っている肥満ゆきこも思わず顔をしかめたほどだった。私は長身みづえの足を手に取ってみた。彼女の足は、土ふまずの深いスマートな足だったが、その汚れ方はまったくひどかった。細長い足指の股は、汗と脂が滲み出て湿っており、指で触るとドロツとしていた。また足の裏は、滲み出た汗と脂にゴム靴の汚れがくっついて赤黒く汚れていた。だが不思議なことに、長身みづえの足は少しも不潔な感じがしなかった。それは彼女がミス・デパートと言われるほどの美貌の女性だったからである。長身みづえの場合は、その脂足の臭い匂いも、かえって性的な魅力があったのである。

最後に、私は彼女たちに足のサイズを比べさせることにした。さすがに二人とも、羞しそうな様子だったが、肥満ゆきこは、右手で長身みづえの肩につかまって自分の左足を出

す。長身みづえも、止むなく左手で肥満ゆきこの腰を抱くようにして自分の右足を出した。こうして二人の女性は、お互いの足の裏をピッタリと密着させた。私は、つぶさに彼女たちの足のサイズを比較検討した。

足の文数は、長身みづえがはるかに大きくちょうど彼女の足指の部分だけ長かった。だが足の幅は、肥満ゆきこが逆に広く、ちょうど彼女の小指の分だけ横にはみ出している。肥満ゆきこの九文半のむっちりとした足と、長身みづえの十文半のほっそりとした足は彼女たちの体格そのまま全く対照的な型だったのである。肥満ゆきこの綺麗な足の裏に、長身みづえの足の裏の脂がはいくっついたようだった。肥満ゆきこはよほど気持が悪かったのか、自分の足の裏をしきりにマットにこすりつけて拭いている。長身みづえはさすがに悔しそうな表情だった。

私は、彼女たちに試合前の握手を交させてそのコーナーに戻した。ジツと見交す二人の視線に早くも激しい火花が散った。

五、長身みづえ、スタンドで 先ずリードすること

“チーン！”

ゴングが鳴った。いよいよ、試合開始である。超満員の場内から嵐のような拍手がまき起った。最初はスタンド・レスリングで、時間は二分間である。

二人の女性は、マットの中央にオングード・ポジションの姿勢で相対した。肥満ゆきこはオーソドックスな構えだったが、長身みづえは、両手を前に出し腰を引き長身を屈めたやや変則的な構えだった。これはレッグ・リフトやウェスト・ホールドのチャンスをつかむ姿勢である。相手の肥満ゆきこが、首投げなどの強引な投げ技を得意としているのに対し、長身みづえは、その長身に似ず、足取りなどのタックルを得意としていたのである。

“ゆきこさーん！” “みづえさーん！”

場内から女店員たちの黄色い声援が飛ぶ。

二人の女性は、油断なく身構えつつ右に廻りながら慎重に相手のスキを窺っている。こうして見ると、彼女たちの身長には相当の差があった。だが肥満ゆきこは、いささかも臆することなく、自分よりもはるかに上背のある長身みづえに対し、敢然と組みつこうとする。だが長身みづえは、この相手の突進を右に廻り込んで怪くかわす。彼女は、肥満ゆきこの果敢なイン・ファイトに対し、あくまで

も接近戦を避けてアウト・レンジ戦法で斗うつもりらしい。しかし肥満ゆきこは、あくまでも組みつかうとして右手で長身みづえの首にかけようとした。だが長身みづえは、左手で肥満ゆきこの右手首を掴んでこれを防ぎながら、右手で彼女の右腕上部を内側から掴んで強く引き、肥満ゆきこの後に廻りこもうとする。

長身みづえ得意のアーム・ドラッグ（腕引き）である。しかし肥満ゆきこは、掴まれた右手で相手の左股を抑え右側に引かれるのを防ぎ、左手を長身みづえの首に巻きつけ頭を彼女の顎の下に当てて押しながら、長身みづえが後ろに廻ろうとするのをうまく防ぐ。だが長身みづえは、左手を肥満ゆきこの腰に廻して彼女を引きながら、右手で自分の首を巻いている肥満ゆきこの左手を持ち上げ、頭を彼女の左脇下に突込むや、巧みに肥満ゆきこの背後に廻り込んだ。これは脇くぐりという手である。うまく相手のバックを取った長身みづえは、左手で肥満ゆきこの腰を抱えてしっかりとロックしながら、右手を下に伸ばして彼女の股を掴んで右脚を持ち上げ、肥満ゆきこを倒そうとした。これは後抱き落しだ。

肥満ゆきこは耐えようとしたが及ばず前に

倒れる。長身みづえは、すかさず彼女をマットに抑えつけようとしたが縫れてマットの外に出てしまった。私はホイッスルを吹いて試合を中断させ、彼女たちをマットの中央に戻す。二人の女性は、再びスタンディング・ポジションで相対した。彼女たちは、こんどはお互いに頭をつけて押し合った。

肥満ゆきこが右手を長身みづえの首に巻きつける。だが、長身みづえは慌てずに身体を低くして、左肘を曲げて肥満ゆきこの右上腕を逆にロックする。そして、いきなり頭を下げて右にくぐらせ、相手の後に廻り込もうとした。肘引き（アーム・フック）である。

このあたり、長身みづえの立技のテクニクはさすがに巧かった。だが肥満ゆきこもこの手にはのらず素早く右に廻ってかわす。

彼女たちは、ふたたび離れて睨み合った。

肥満ゆきこは、またもや右で長身みづえの首を捲こうとして、上体をやや直立させたと、長身みづえは、右足を一歩踏み込むや、長身を折り曲げるように低くしながら、両手で肥満ゆきこの右股を持ち上げた。長身みづえ十八番の足取り（レッグ・リフト）である。

肥満ゆきこは、右手で長身みづえの首にし

がみつぎ左足一本で立って懸命に耐えようとしたが、長身みづえは、頭を肥満ゆきこの胸につけて押しながら、右足で彼女の左足をトリップして相手を仰向けに押し倒した。

場内から女店員たちの歓声が起る。長身みづえは、すかさずウエスト・ロックで肥満ゆきこをピンしようとしたが、惜しくもまたマットの外に出てしまう。私は、彼女たちをマットの中央に戻しスタンディングポジションを命じた。長身みづえは、態勢を低くしてふたたびタックルを狙う。肥満ゆきこは、これを警戒して右手で長身みづえの頭を下に押す。だが長身みづえは、かまわずタックルに出た。と、肥満ゆきこは、上から長身みづえの頭を右腕に抱え込んだ。チャンセリー（首巻き固め）である。これは、タックルを防ぐ最も有効な方法だった。

長身みづえは右手で自分のアゴにかかっている肥満ゆきこの右手を掴んではずし、頭を抜いて彼女の腕から懸命に逃れようとする。だが肥満ゆきこは、そうはさせじと右腋深く長身みづえの首を抱え込み、左手を彼女の右上腕内側から入れて相手の背中に廻し、がっ

ちりとロックしてしまった。こうなると、相手より十一センチも背の高い長身みづえも、やむなくその長身をエビのように折り曲げて肥満ゆきこの胸に喰い下るはかなかった。

「みづえさーん、しっかりっ！」

女店員たち声援が飛ぶ。肥満ゆきこは、両足をじゅうぶん開き、六十キロの体重をかけて長身みづえを一気に押し潰そうとする。長身みづえは、細長い両脚を踏んばって懸命に耐えようとしたが、肥満ゆきこが自ら右膝をついて、長身みづえの首を右に強く捻ったので、ついにたまらず、彼女は左膝をがっくりとついてマットに倒れた。『ワアーッ』と歓声が上がる。肥満ゆきこは、体重をかけながら長身みづえの首をこね上げて、彼女を上向きにさせようとする。だが、さすがに長身みづえも、右手を肥満ゆきこの腰にかけて素早く起き上ろうとした。と、この時ゴングが鳴った。

最初のスタンド・レスリングの終了である。

肥満ゆきこと長身みづえは、マットから起き上った。彼女たちの健斗に超満員の場内から拍手がまき起る。二人とも、すでにかなりの汗をかいている。私は、ジャッジの判定の

あるまで、彼女たちをそれぞれのコーナーに戻した。

六、肥満ゆきこ、長身みづえの足取り固めに苦戦すること

次はグラウンド・レスリングである。これは、お互いに二分間ずつ交代で攻めることになっていった。いまのスタンド・レスリングで優勢だった方に、先に攻める権利が与えられるのである。私の見たところでは、いまのスタンド・レスリングは、長身みづえがやや優勢だったように思えた。彼女は、スタンドの終了間際こそ左膝をついてマットに倒れたがその前に、肥満ゆきこのバックを取り確実にポイントを得ているのだ。どうやらスタンド・レスリングは、長身みづえに一日の長があるようだった。超満員の場内は静まり返ってジャッジの判定を待っている。デパート女子レスリングのジャッジは、三名の女店員から成っていた。まもなく、三本の旗が上った。赤旗が二本。緑の旗が一本。私の予想通り長身みづえが有勢だったのである。場内の長身みづえファンの間から盛んな拍手が起る。これでグラウンド・レスリングは、まず長身みづえの先攻と決った。私は、肥満ゆきこに

防禦の姿勢を命じた。

肥満ゆきこは、マットの中央に両膝をついて構えた。両肘はマットから離して拳に力を入れ、両脚をかなり広げた姿勢である。これは、オン・レッグス・アンド・ハンズといって、非常に強力な防禦姿勢だった。

長身みづえは、肥満ゆきこの右側に位置して立った。私はホイッスルを吹いて、グラウンド・レスリングの開始を宣した。

長身みづえは、レフリー・ポジションから直ちに攻撃を開始した。肥満ゆきこも、すばやくターンして反撃しようとしたが、長身みづえは、すばやく長い左腕を肥満ゆきこのお尻の上から伸ばし、彼女の太い左足首を取る。そして前に押しながら、右手で肥満ゆきこの右腕をブロックした。長身みづえ得意の足首取りである。彼女は、すかさず肥満ゆきこの左足首を掴んで手前に引き、相手のバランスを崩そうとする。だが肥満ゆきこは、懸命にこれを耐えた。さらばと長身みづえは、こんどは肥満ゆきこの右股を取り、自分の左股の上に持ち上げ、左脚を彼女の左脚を越えて踏み出し、足で肥満ゆきこの左脚を引き寄せてバランスを崩そうとした。これは股抱きという手だ。肥満ゆきこは、長身みづえの左

股から自分の右股をはずして、必死に逃れようとする。だが長身みづえは、肥満ゆきこの股の間に手を入れて、彼女の大根脚を持ち上げた。こうして相手の肩をマットに落してフオールしようというのだ。

これは、長身みづえが最も得意としている足取り固めである。長身みづえのサイ・リフトに肥満ゆきこは完全に逆立ちをさせられてしまった。「ワァーッ」と場内が熱狂した。

肥満ゆきこは、両手をマットについて、手で歩きながら、ぐるぐる廻って逃れようとする。長身みづえも、顔を真赤にしながら肥満ゆきこの脚を持ち上げている。六十キロもある肥満ゆきこを持ち上げるのは、男性でも並大抵のことではない。まして長身みづえは、痩せているため力が弱いのだ。ともすれば相手に逃げられそうだった。だが彼女は、歯を喰いしばって必死に相手を持ち上げながら、右足で、肥満ゆきこの右手をブロックして、その肘をマットにつかせた。

このあたりのテクニックは、非力ながら長身みづえはさすがに巧かった。ついに、肥満ゆきこの右肩がマットについた。ワァーッ！と女店員たちの歓声が上る。しかし、肥満ゆきこは、左手一本で自分の体重を支えながら

歯を喰いしばって頑張った。こうなると、彼女にとって自分の六十キロの体重がかえって怨めしかった。肥満ゆきこは、顔を真赤にしながら必死に耐えている。

「ゆきこさーん、がんばってえ！」

「みづえさーん、しっかりっ」

女店員たちも、声を限りの盛んな声援。

長身みづえも必死だった。彼女は、肥満ゆきこの股を両手でロックしながら、体重を前のほうにかけてホールドし、相手をフオールしようとした。もう一息だった。だが、わずかに力が足りなかった。長身みづえは、ついに肥満ゆきこの体重を支えきれず、足が纏れてマットの外に倒れてしまった。

非力な長身みづえは、もう一步というところまで肥満ゆきこを追い込みながら、惜しくもフオールを逸してしまったのである。私は彼女たちをマットの中央に戻し、ふたたびレフリー・ポジションを命じた。肥満ゆきこはマットの上に腰をおろして防禦の姿勢をとる。彼女は、さきほど長身みづえの足取りにあって非常に苦戦したため、こんどは、両脚を前に投げ出して座り、その両足首を自分の両手で握り、体重をやや前にかけたシティン・グ・アウトの姿勢で防禦しようとしたのである。

る。このディフェンスは、素早くスピンやターンを行うのに有利だった。私はホイッスルを吹いて、グラウンド・レスリングの再開を宣した。

長身みづえがレフリー・ポジションから攻めて出た。彼女は、肥満ゆきこの後に自らも跪まづいて座るや、両手で彼女の腰を抱えてしっかりとロックした。肥満ゆきこが両脚を前に投げ出して座っているため、うかつに足を取りにいくと、相手に首を抱えられて前に投げられる恐れがあるのだ。長身みづえは、さすがにこれを心得ていたのである。

彼女は、肥満ゆきこをウエスト・ロックで攻めながら、懸命に、右側に引き倒そうとした。だが肥満ゆきこもさるもの、彼女は左に廻りながら左手を長身みづえの左股にさし込み、自分の全体重を相手の左肩にかけて一気に廻り込もうとする。長身みづえは両手で肥満ゆきこの腰をロックして、彼女がスイッチしようとするのを防ぐ。さらばと肥満ゆきこは、左手で長身みづえの左腕を深く抱きよせ、右手で彼女の頭を抱えて強く下に引いた。ヘッド・ロール（首落し）である。長身みづえは、思わずお尻が浮き上り、前に引き倒されそうになったが、両膝を開いて必死に

防ぐ。だが、肥満ゆきこは、身体を左に廻し腕と膝で支えながら、長身みづえの左肩をマットにつけ、右腕で彼女の頭を押しつけた。

長身みづえはローリング・ポジションの姿勢を強要されてピンチに立った。キヤーッ！場内から女店員たちの悲鳴が起る。すかさず肥満ゆきこは、左腕を長身みづえの胸に巻き右腕に抱えている彼女の首を右に強く捻って、横倒しにした。美事なヘッド・ロールだった。肥満ゆきこは、すかさず長身みづえの上になり、体重をかけて一気にフォールしようとする。だが、この時ゴングが鳴った。長身みづえは、ホッとした表情で起き上がった。

七、肥満ゆきこ、執拗にネルソンで長身みづえを苦しめること

攻守ところを代えて、次はいよいよ、肥満ゆきこの攻める番である。私は、長身みづえに防禦の姿勢を命じた。彼女は、マットの上に四つん這いになって構える。長身みづえは両膝の間隔を大きくして、体重は両腕と両膝にかけ頭を後に引いて、オン・ハンズ・アン

ド・ニズ（両手と両膝による四点防禦）の姿勢だった。

この姿勢は、彼女の身体をよけいに長く見せている。膝をつき踵を立てているので、長身みづえの足の裏がまる見えだった。彼女の十文半の細長い足の裏は、滲み出た汗と脂にマットの埃りがついて、べっとりと赤味を帯びて汚れている。彼女の右背後に位置して立った肥満ゆきこは、長身みづえの汚れた足の裏をジッと見つめた。おそらく彼女は、さきほどの長身みづえのべとついた脂足の感覚とその臭い匂いを思い出したのであろう。

私はホイッスルを吹いて、グラウンド・レスリングの開始を宣した。肥満ゆきこは、長身みづえの右側から直ちに攻撃を開始した。長身みづえも、すばやくスイッチして逃れようとしたが、肥満ゆきこのほうが早かった。彼女は、左手で長身みづえの細い腰を抱いて引き寄せ、右手を相手の右腋からさし込んで長身みづえの首筋を抑えつけた。これは、ハーフ・ネルソンである。長身みづえは、右手をマットに突っぱり頭を持ち上げながら、左手で肥満ゆきこの右手の指を掴み、自分の首からはずそうとした。だが肥満ゆきこは、左手で長身みづえの左上腕を掴んで許さない。長

身みづえは、こんどは右手で肥満ゆきこの右手を必死にはずそうとした。しかし、肥満ゆきこは、攻撃の手を緩めず、右手で長身みづえの首を強く抑えつけながら、左脚を相手の身体を跨いで踏み出し、足で長身みづえの左手をフックしようとした。

これは、フアー・ネルソン（かかし攻め）という手である。だが長身みづえは、左脚を高く上げて必死にこれを防ぐ。肥満ゆきこは、ニヤ・ハーフ・ネルソンにホールドを変えて、なおも激しく攻めたてる。長身みづえは、右手を肥満ゆきこの右股に入れ、身体を廻して懸命に逃れようとする。しかし肥満ゆきこは、右手で執拗に長身みづえの首筋を抑えつけて許さない。

「みづえさん、しっかりっ！」

長身みづえファンの女店員たちが黄いろい声援を送る。長身みづえは、懸命に反撃に転じた。彼女は、右肘で肥満ゆきこの右腕を抱きしめて強く引きながら、自分の右脚を持ち上げ肥満ゆきこの胸を跨いで、一気に相手を転がそうとした。これは、サイドロール・アンド・ステップオーバー（横巻き）といってグラウンド・レスリングにおける重要な技なのである。長身みづえの鮮やかな反撃に、肥

満ゆきこは思わず身体が浮き上り、右肩からマットに転がって倒れた。

長身みづえは、すかさず肥満ゆきこの上になり、長い脚を彼女の胸に巻きつけて足絡みで攻めようとしたが、さすがに肥満ゆきこも相手と一体になって転がり、鮮やかなローリングでこれを逃れた。このあたりの彼女たちの技は、デパート女子レスリングの双壁と言われるだけあって、さすがに水際立って巧かった。だが彼女たちは組み合ったまま、マットの外に転がり出してしまったのである。私は直ちにホイッスルを吹き試合を中断させた。肥満ゆきこと長身みづえは、起き上ってマットの中央に戻る。

彼女たちの健斗に、超満員の場内から盛んな拍手が送られる。

私は、ふたたび彼女たちにレフリー・ポジションを命じた。長身みづえは、最初と同じくマットの上に四つん這いの姿勢をとる。

私の笛の合図とともに、肥満ゆきこが攻撃を開始した。彼女は、例によって、右手を長身みづえの右腋下からさし込んで首筋を抑えつけ、左手で腰を抱えて彼女の背中にのしかかり、ニヤ・ネルソンをかけた。

だが長身みづえは、すばやく身体を低くし

ながら、右肩を相手につけ、左手で肥満ゆきこの左手首を掴んで強く引くとともに、右手を伸ばして彼女の右股をとり、頭を持ち上げ身体を起そうとする。肥満ゆきこは、取られた右脚を伸ばして身体のパランスを保とうとしたが、長身みづえは、右手で肥満ゆきこの太腿を抱えて持ち上げ、彼女を左側に転がした。これは、股巻きという手である。このあたりの長身みづえの技は、彼女がデパート女子レスリングきってのテクニシャンと言われるだけあって、さすがに巧かった。

長身みづえは、すばやく肥満ゆきこの上に仰向けになってのしかかるや、右腕をしめながら彼女の左手首をしっかりとロックし、背中で肥満ゆきこの胸にのしかかり、一気にフオールしようとした。いままで攻めていた肥満ゆきこは、一瞬にしてピンチに追い込まれたのである。ワアーツ！ 場内が熱狂した。

肥満ゆきこは、顔を真赤にしながら懸命にブリッジで耐える。こうして、攻守たちまちにして一変するところに、レスリングの醍醐味があるのだ。肥満ゆきこは、右手を伸ばして長身みづえの身体を押し上げ、彼女の下から逃れようとした。長身みづえは、そうはさせじと、右脚を肥満ゆきこの左脚に絡ませな

がら、彼女を抑え込もうとした。だが、惜しいかな、長身みづえの体重のかけ方が少し足りなかった。もう一步というところで肥満ゆきこに逃げられてしまったのである。私はホイッスルを吹いて、試合を中断させた。彼女たちは、ふたたびレフリー・ポジションに戻る。

長身みづえは、マットに両手両膝をついて四つん這いの姿勢をとった。彼女は、さきほどのからの激しいレスリングで全身汗まみれだった。長身みづえは、ようやく右手で額の汗を拭いたが、首筋には玉のような汗が光っており、水着の背中やお尻のあたりも汗でびっしょり濡れている。長身みづえは痩せているくせに、たいへんな汗っかきだったのである。だが、それにもましてひどいのは、彼女の足の裏だった。その汚れ方は、さっきよりもずっとひどく、べっとりと赤黒くなっている。長身みづえもさすがに羞しいらしく、しきりに自分の足の裏を気にしている。

私はホイッスルを吹いて、彼女たちに試合再開を命じた。肥満ゆきこが間髪を入れず攻撃を開始した。彼女は、またもやネルソンで攻めて出る。長身みづえは、右脇を固めて懸命にこれを防ごうとしたが、肥満ゆきこは、

強引に右手を腋の下からこじ入れて、長身みづえの首筋を抑えつける。長身みづえは頭を持ち上げ、すばやく動いて逃れようとしたが、肥満ゆきこは、左腕を伸ばして長身みづえの左足首を掴んで引き寄せ、彼女の背中にのしかかった。このホールドは、相手を疲れさせるのが目的だった。『真夜中の女子レスリング』で、重子が昭子を苦しめたのもこの手だったのである。

長身みづえは、まったく苦しそうだった。

彼女は、大きなお尻をムクムクと持ち上げて必死にもがく。

「みづえさん、しっかりっ！」女店員たちの必死の声援が飛ぶ。

長身みづえは、左脚を伸ばして、足首を掴んでいる肥満ゆきこの手をようやくはずす。

肥満ゆきこは、ふたたび左手を相手の背中越しに伸ばして、長身みづえの左足を取ろうとしたが、彼女の身体が長いいため手が届かない。肥満ゆきこは、こんどは左手を長身みづえの胸の下から伸ばして、彼女の首の後に両手を組んだ。これはスリー・クォーター・ネ

ルソンという非常に強力なホールドである。長身みづえは、必死に頭を持ち上げようとしたが、肥満ゆきこは、逆に長身みづえの首を手前に引いて落そうとする。長身みづえは左肘でマットを支えて必死にこれを防ぐ。だが肥満ゆきこは、攻撃の手を緩めず左脚を踏み出して長身みづえの右脚にレッグ・フックをかけながら、左膝で彼女の大きなお尻を押すとともに、両手に抱えた彼女の首を強く下に引いた。この強烈な首返しに、長身みづえもついにたまらず、頭から廻転してマットに倒れる。肥満ゆきこは、すかさずエビ固めでフオールしようとする。

「キヤーツ！」

場内から女店員たちの悲鳴。だが、この時ゴングが鳴った。場内からはホッとしたりように溜息が洩れる。肥満ゆきこは、残念そうに両手で抱えていた長身みづえの首を放して起き上った。長身みづえもようやく起き上ったが、痛そうに首筋をさすりながら、ふらつく足を踏みしめて自分のコーナーに戻った。ついに勝負は、最後のスタンド・レスリングに持ち越されてしまったのだ。

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献 特集号

定価 五〇〇円 略号「文献」

○昭和37年10月号

読者「告白、手記、体験」特集号

グラビア「夢の緊縛特選集」 定価 二〇〇円

○昭和35年6月号

『哀憫美形特集号』 定価 三〇〇円

○限定版写真集

「美しき縛しめ」第三集 (残部僅少) 定価 一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版写真集

「豊満と清楚」女体緊縛グラフィ集 定価 一〇〇〇円 略号「限2」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

定価 一〇〇〇円 略号「美4」

一子雑感

「腹切供養」のことども

宗川一子



一、わたしの肉体について

本誌七月号に、私の拙い稿をさっそくお載せ下さいまして、ありがとうございます。あれが一口に言って、私の進むべき運命でございましょう。

一子の魂をわが身に入れて十六年。一子を

慕い一子に生れかわっての生活、この身体は一子になっているのだ、「一子（かずし）」ではないのだと、今はもうすっかり、その気になりきっている私でございます。

思えば、六年前の八月十五日。この田舎町での睾丸摘出手術は、世間にもはばかる感じがして、遠く名古屋のM医院まで、義姉の附

添いで出かけて、首尾よくその志を達したのでした。

あの手術の日の朝、宿で目覚めたとき、今日、わが身から離れてゆくものに対して、独りで言い聞かせました。

「お前を童貞のまままで手放すけれど、決して私を怨まないでくれ」

と、そして断頭台にのぼるような心で、手術台に上ったのでした。

もちろん、その日宿を出るまでは、いかに私でも良心上、義姉と部屋は別々でした。

さて、手術後はどうでしょうか、半年もしたら、髭は殆どなくなりました。腋毛も薄くなり、手の甲にも、脛にも殆ど毛がなくなりました。ことです。もともと、私は男性としては、毛の薄い方でしたが、手術によって、こうもはっきり変化するのかと我ながら感心いたしました。

また咽喉笛が出ていたのが、殆どなくなり乳房はホルモンの常用も手伝ってか、幾分出張った感じで、随分大きくなったようです。ヒップも少しは大きくなった感じですが、ともかく身体全体が肥ったことは事実です。そして肩なども、女のように丸味がでて、顔も女のような柔和さが増してきたと、義姉が申

します。それ故にも、一子そっくりだとさえ言われます。

それと、もう一つ、これは肝腎なことですが、異性に対する興味が全然なくなったことで、義姉と同じふとんに寝ていても、何んとも感じません。お互いに、遠い人と思ってるせいかもしれません。

亡き人を慕っての「腹切供養」は、年一回ときめてありますが、少しぐらい深く切っても縫合材を使って縫い合せていますので、そう大きな傷痕は残りません。週一回行う除毛（脱毛という名を替えました）の際や入浴時には、うっすらと跡も見られますが、全身化粧により厚目にお白粉を塗ると、全然わからなくなります。もっとも、私は町の浴場へ入ったことは一度もなく、いつも自宅の風呂で入浴しておりますので、他人には知られずにいるようなわけでございます。

二、家の新築

私は両親の残してくれた郷里の不動産を全部整理し、また若干義姉の応援を得てM市の近くの温泉場に、小さいながらも一家の家を新築しました。

平家で四畳半、六畳、地下室（三畳で換気

装置付）、洋間六畳、それに炊事兼食堂、玄関、風呂及び便所付きで、庭は二メートルの高さのブロックの塀をめぐらした二百メートル平方の芝生です。

私はこの家に常住し、義姉は時々来て泊るという仕組みです。いわば私と義姉の共同の家なのです。私と義姉は、この家を舞台として好きなことをしております。附近には、まだ民家はありません。淋しいくらい閑静な一軒家です。とにかく、四六時中、湯がこんこんと湧いておるのが、私達自慢の一つで、好きな時間に、自由に入浴できるというのが、又とない楽しみです。

三、この頃のわたし

私は義姉と共同で、アパートを経営しております。一棟に十世帯収容できるのが四棟ですが、この方の仕事は主に私が分担し、義姉は美容師として働いているわけです。もっとも義姉は美容師の外に、お茶とお花と日本舞踊を、お弟子をとって教えておりますが、この方は大した収入にはならないようです。

私はアパーに集金などに行くときは、勿論男装して出かけております。今は大体日中は男装、夜間は女装（主として和服）です。義

姉は殆ど一日中洋装ですが、おけいこの際は和服です。そして気が向いたら、荒川大尉の乗馬ズボンと長靴を素肌につけて、故人を偲んでおります。

今年は氣象異変とかで、住み心地は如何かと心配しておりましたが、新しい私達のスイートホームは、木の香も芳しく漂わせており地下の三畳の間は、三方鏡というデラックスなもので、この部屋の特徴は防音装置の完璧なことです。

それともう一つ、天気の良い日には、他人に全然見られることのない庭の芝生で、義姉と二人、日光浴を楽しむことができることです。亡き一子が、私の身体に入って十六年、世に言う十七回忌のこの年、一世一代といわれる家を新築したこと。これも何かの因縁だと思います。

この稿が本誌に掲載される頃は、また八月十五日が迫ってきます。忘れ得ぬこの記念の日、今年は少し派手にやろうと、義姉と相談して心をときめかしております。これも亡き一子を慕うあまり、その思いにふけて計画したのですが、いずれ、またの機会に報告いたしたいと思います。

交友秘録

芳野眉美氏と

野中芳久

一、神酒

思い切って芳野眉美氏に手紙を差上げたことが契機となって、折々閑談の機会を持つてゐる。いささか照れ屋の私も、氏の明朗なそして柔かい雰囲気に取り入れられ、淡々とそしてズバズバと話合えるのは実に楽しい。

私が今更言うまでもなく、氏は堂々と神酒拝受を敢行し続けて居られることは、諸姉兄の熟知されるところ。しかもそれに驚進される氏の態度は極めて明朗且つアクティブであつていささかの翳りもない。女身変貌の妖



夢”などという消極的な空想の世界にうじうじしている自分を恥ずかしく自省するのだった。『飛ぶ』ことをしないで『飛びたい、飛びたい』と言っているに過ぎないではないか。ちなみに奇ク五月号『濡れにぞ濡れし』の中に『B、洋式』という項がある。この明るさ、このさりげなさ、氏の真骨頂なのだろうか。

私が踏み切ったとしてもこうは行くまい。それは自分の心底に強烈な被虐願望が渦を巻いているからだろ。氏は楽しんで嬉々とし

て飲まれる。私は辱かしめられ汚される手段として、『無理矢理に飲まされる』ことを夢みているのだ。

女主人の前で奴隷は一糸を纏うことも許されない。後に廻した両手首は犂々と縛り上げられる、仰向けに転がされた私の顔の上に美しく輝く女神の肌が迫る。すべらかな両脚が私の顔をしめつける。奴隷は奉仕のときも、汚辱を受けるときも、目を閉じることは許されない、下から見上げる女主人の美しい顔は微笑し続けている。

「さあ、始めるのよ。」……

私の顔の上で囁やかな肢体が激しくくねり続ける。押し潰されんばかりの重圧、今にも絶息しそうな苦しさの中で私は必死に奉仕を強要される。……やがて、紅潮している顔に妖しい微笑を浮べ、上から私を覗き込むようにして女王様は命令される。

「いいこと？ すっかり飲むのよ」

私は夢中になって口を大きくあけ、次の瞬間、爽やかな音をたてて神酒は奴隷の口の中に飛沫をあげた。

「若し飲まれるならば……」と芳野氏は気軽にトルコ嬢の電話番号を教えて下さる。

「あちこちに知った子ができましたね。」

東奔西走、お忙しく飲み廻っていらつしやる。羨ましい。(羨やんでばかりでなく、何故に汝自身突進せざるや)羨やみながらも……これは聊か言いにくいことだったけれど「私は美歌夫人のような方に辱かしめて貰いたいのです。」

ぬけぬけと氏に告白してしまった。

二、悩ましき「パンティ」

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札印画紙焼付

三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐め苦しめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化しました。縄、ローソク、浣腸器などの小道具を用い、マゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。どうか、この写真集にてマゾの醍醐味を心ゆくまで味って下さい。

「市川さん、本当に贈ってきて下さいましたよ」と芳野氏。

奇々五月号「パンティ・マニヤの方々に」

(市川高夫氏)を覚えていらつしやる方々も多いことだろう。六月号誌上で芳野氏がこれを取り上げられたので市川氏の方からプレゼントされたらしい。真紅の美しいナイロン・パンティが次々と私の目前に翻る。

「思い切り汚して差上げるわ」

という市川夫人の言葉が思い出された。事実目の前の美しいパンティは汚されていた。それは垢や汗によるものでなく、明らかに美しい魅惑的な汚されようだった。(それは夫人自身によって汚されたものと確信された。

市川夫人、失礼でしたらお許し下さい。)

「間違なくお送りする事をお約束します」

という市川氏のお言葉通りだった。その御

誠実さと寛大な御心に私達は感動し合った。

「市川様から本当に送って頂いたということを私から言うよりも、あなたに言って頂いた方が真実性が強いと思いますよ。」と芳野氏。

眩くような真紅の色。そして私の官能を掻きたてるような艶美な汚れ。その印象は強く脳裏に焼付けられている。

三、受洗

「神酒拝受」の恩恵に浴することが出来る女性数人を芳野氏は私に紹介して下さいました。後は唯私が「飲ませて下さい。」と訪ねて行けば事は簡単に行われるだけだ。

「その方々と話し合う懇談会のような機会を持つたらどうでしょう。」

いきなり「飲ませて下さい」と飛び込んで行くことの気恥かしさからか、こんなことを芳野氏に提案してみたりした。空想的マニア(それは芳野氏に嘲笑されるタイプかも知れないが)の私は、男に神酒を飲ませるときの女性心理にも触れてみたい。男を存分に辱かしめ汚し虐げる数々の具体的方法を聞かせて貰うだけで私の心は歓喜に疼くことだろう。

「いかが？ 試してあげましょうか」

私を射すくめるような彼女の視線にいたずらっぽい笑が浮び、こう言われたとしたら。

和やかな淡淡とした懇談の部屋は忽ち「男奴隷」に転身の洗礼式の間となるかも知れない。総てを脱がされた私は従業員若干を有する経営者としての仮面を剥がされ、彼女達の「共同トイレ」の役目をはたすことにより奴隷としての洗礼を受けることになるかも知れない。

(完)

「人間、梅原北明伝」執筆後日談

——書誌研究家、城市郎氏の文にふれて——

久 我 庄 一

私のつたないエッセイ「人間、梅原北明伝」試作メモが、幸いにも、本誌八月号に掲載される光栄に浴した。しかも「編集後記」にて、過分にすぎるオホメの言葉をいただいたことは身にあまるよろこびである。

さて、私はエッセイにも述べていたように「悪書追放」の声、巷に上るとき、ことさら風俗文献出版界の大先駆者である梅原北明の叛骨と諷刺を学びたいと思ったから執筆したわけだ。それは、合法的手段をもって出版、通刊二百号を突破、「読む雑誌」へと脱皮しつつある「奇譚クラブ」を激励することにもなると、信じたからでもある。そして、いまこそ梅原北明の人間像を正しく再評価すべき時がやってきたことを、私はあえて提言したかったのだ。

たまたま、この本誌八月号新刊前後して、

『人物往来』七月号・人物往来社刊「特集・発禁事件の周辺」が発売された。なんと、その中に、書誌研究家、城市郎氏の手により「昭和史最大の春本製造家」とし、梅原北明についてのエッセイが研究発表されている、（筆者註・私の「人間、梅原北明伝」執筆の際に城氏の「発禁本周遊記」を参考引用させて頂いている。これは偶然というよりは、時の流れが期せずしてこのような動きを見せたものと、うれしかった。「春本」うんぬんというような題は、あまりにもセンセイショナルなもので、いただけないが（編集部の方で適当に付けたのか？）さすが、この道のベテランの筆によるものだけあって、内容はしくくマジメなもので、よく北明の当時の官憲に対する闘志と執念が描かれ、教えられるものがあった。私が、試作メモを書くにあたって

「人間・梅原北明のその秘密のすべてを解明する」とは言わないが、その一端なりとも」として、北明著『殺人会社』を上げたが——。城氏も「北明には直接的に自己の思想や信条を語ったエッセイはほとんどない——中略——その手がかりを多少とも与えるのは」として『殺人会社』を取り上げている。ただし、城氏は、ここから社会主義的なものを推察したのみで、彼、北明のアブ的な（耽美的な）文学青年たりうる野心の一端まで、つつ込んでなかったのはもの足りなかったが、この点については、SMマニアであり、自称小説家？でもある私のエッセイと比較することじたい無理な相談でもあろうか。ただし「アカ」から「ピンク」への転回に、思想的なことに付け足して「文芸市場」誌発行の経営状態にまで、彼の急転回の外的な理由は——中略——雑誌の赤字のためで——など、およんでいるのが、興味深いものがあった。また「徹底的な弾圧で狼出版が壊滅すると、チャップリンの映画を輸入したり、そのころ閑古鳥の鳴いていた日劇にライオンダンスを創始するなど、興業師として（昭和七、八年頃）才腕をふるう。戦争最中に憲兵に追われると変名で大衆雑誌に読物を書いて糊口をしのぎ、戦争末期

には科学技術振興会の牛耳をとって、海軍の技術書の翻訳と海賊版出版に従事する。奇人にはない果敢な実行力の人でもあった。など「その後の人間・梅原北明」について触れている。これは、私が、試作メモで特筆大書した「梅原北明の内部に流れる自由精神は、あくまでも芸術的な（またはアナキスト的であつたろう）人間解放であり、自由人としての真実さを」の手段と本質の問題に、別な観

☆四馬孝☆力作画

時代風俗 女体切腹図絵

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(ゆい)

一、座敷牢の美女切腹

無実の罪によって、座敷牢に押し込められた武家の美しい娘。牢内に白布を敷きつめ、双肌ぬぎとなるや、自らの潔白をあらわすため恋人の見てゐる前で、雪をあざむく真白い下腹をあらわにして、短刀できりきりと切りさばき、左の乳房の下に止めの一刺し。天晴れ覚悟の美女切腹の姿。

二、介錯に果てる美女

ふくよかな胸、まろやかな肩口、可愛いくふくらんだ腹部をあらわして肌ぬぎになつて庭に端座した娘。ふっくらと脂づいた左脇腹から臍下にかけて、脇差でたたかいた切り回せば、介錯の刃がきらりと一閃。麗わしの美

点から裏付けされたものとうれしい。とにかく晩年にも、北明らしい精一杯の生き方を見せてくれたことは、私にとって快心の一字につきるものだ。常に奇く、編集子の言葉「許容される範囲内で、最大の努力を」という意味にもこの(北明の動き)ことは通じるわけで、またしてもぐちになるが、いまの時代まで生かしておきたかったものである。△奇人トイウヨリ、ソレハ風俗文献誌ヲ出版センガ

三、駕籠の中の姫君切腹

女の細首が、さつと飛び散る血しぶきと共に身首異にする凄絶のシーン。気がそまぬ縁談の相手の家へ駕籠で送られてゆく可憐な姫君。腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹を果す。守刀を抜き放つて豊かな臍下へずぶりと突き刺し、更に鳩尾へかけて十二分にはねあげて、凄惨にして美しい十字腹の見事な姫君切腹の有様。

四、男装の美女切腹す

小姓姿もあでやかに身を変えた男装の美少女が、豊かな乳房もむきだしに着物の前をくつろげて、白く輝く下腹にしたたかに突き刺す懐刀の切先。深夜の奥御殿にくりひろげられた倒錯美切腹絵巻。

五、美女裸身の切腹

も早や逃れられないと決心した美しい腰元は、死んで操を守りぬこうと、すべすべとした柔肌のすべてをさらけだして、守刀の短刀を抜き放つと、下腹のたっぷり肉づいた皮下脂肪を切った上、咽喉元に止めの一突き。

タメノ方法、手段デアッテ、本質的ニハ良識アル、ロマンチストデモアッタロウカ。ダカラ、彼、北明ヲ称シテ叛骨と諷刺ヲ秘メル「異端児」トヨンダ方がピッタリスルヨウダ。▽

「誌友のみなさんへ」

私の既刊本誌八月号に掲載された「人間、梅原北明伝」は、異端児、北明の人間像を、彼の内面的な動きに焦点をしばって追求、書き上げたもので、是非共この際外面的な動きにポイントをおいたと思われる。城市郎氏のエッセイも併読下さることをおすすめするものである。

△附記▽

城氏によれば「近世社会大驚異史」の他に「明治、大正綺談珍聞大集成」大著出版ありと記されてあるので、ここに附記する。

△参考▽

『昭和史最大の春本製造家』城市郎「人物往来」七月号、六月二十一日発売、東京都千代田区丸の内三の二、人物往来社。

(終)

『マゾヒズム天国』

田 沼 醜 男

1 現代史のマゾヒズム

【一九三七・七——日支事変】

日本人は中国人を「チャンコロ」と呼び、頭から軽蔑していた。同じ黄色人種としては猿が柿を笑う類いであつたろう。

当時中国に援助を与えていたのは米国、英国、フランス、ソ連などの諸国であつて、当然日本はこれら白人国家に拮抗する姿勢を示した。

此処で注意すべきは、谷崎潤一郎の白人崇拜、マゾヒズムの諸傑作はその殆んどが一九一〇年代、二〇年代に発表されていたという

事実である。白人に対して我々が抱く宿命的な人種的劣等感、既に日本人知識階級の意識に深く滲透していた。

一般の青年男女もまた氾濫するハリウッド映画によって骨抜きにされていた。「パーマネットはやめましょう」の運動が展開されたことは、逆に云えば当時の娘達がすこしでも白人に似たいという動機から競ってパーマネントをかけていた事実を物語っている。

こういう白人崇拜の滔々たる流れを阻止するためにこそ日本民族優越のドグマが宣伝されたのであつた。しかし笛吹けども踊る者はなく、ハリウッド映画追放に代って氾濫した

のがナチス・ドイツの好戦映画であつた。いずれにせよ白人スターの活躍する映画であることには些かの変わりもなかったのである。

【一九四一・一二——第二次世界戦争】

この戦は当時「大東亜戦争」と呼ばれた。搾取され虐め抜かれたアジア民族を解放する戦争というわけである。白人崇拜に犯された日本が何と大それたことを考えたものではな

いか。

他のアジア民族でも、たとえばフィリピン等では白人崇拜は日本以上に深く滲透していたと思われる。白人の血を受けた混血児が上流階級を構成し一般土民を支配する。フィリ



ピンを占領した日本兵が、これら混血娘に悩殺されつれなく袖にされた話は戦後発表された数多くの記録の中に見られる。

緒戦の景気の下さも何処へやら、すぐ翌年の夏には物量を誇る米軍がガダルカナルに上陸し攻守処を変えた。戦死した日本兵の中ある者は「痴人の愛」を味読したことがあったろう。またある者はアメリカ娘の水着写真に

妄想を逞しうしたことがあったろう。

米軍はこれら虫ケラ同然の日本兵を殺戮しながら前進した。日本兵が隠れて出て来ない穴はポンプで水びたしにした上でガソリンを撒き火をつけた。

当然俘虜が続出した。連合軍の婦人兵達は薄汚い日本の俘虜を意地悪くからかった。この事実についても戦後各種の報告が発表され

ている。

【一九四五・八——無条件降伏】

占領軍は各地で日本娘に暴行を加え凌辱したが、その報道は禁じられていた。日本の男は羊のように温和しく、恋人を奪われた者も娘をキズものにされた者も反抗する勇氣のある者は殆んどなかった。

外車を追抜く者は射殺されても仕方がなかった。アメリカン・スクールが出来、日本の貧しい少年少女を羨ましがらせた。再びハリウッド映画が氾濫し、いまや白人崇拜は一部知識階級に限らず日本人

全体の通念になった。

男共は颯爽と街を行くアメリカ娘を見て溜息をついた。アメリカ人と日本人の生活水準は、現在自家用車で大学に通学する金持の子女と乞食位の差があった。当然各地に外人兵専門の娼婦、いわゆるパンパンが輩出した。

パンパンは物質的にも精神的にも一般日本人に対して優越感を持つことが出来た。日本人が芋や雑炊で空き腹を満たし上野の浮浪者が餓えて死んで行く時代に、彼女達は洋モクをふかしチョコレートを食べ散らかした。

占領軍は最高権力者であると同時にアメリカ文化の伝道者であった。彼等と関係を持ったパンパン達が一般日本人を軽蔑したのも無理はない。彼女達は大手を振り放歌高吟して街を歩いた。日本人はその榮養のいい挑発的な姿態をオズオズと盗み見るばかりだった。

復員兵達はこの状況にどんな感慨を抱いたであろうか？　そして傷病兵達は……乞食同然の傷痍軍人が今日の食事のために金を乞い歩いているときアメリカ兵とふざけ合っているパンパンの姿が対照的に見られた。祖国のために傷つき不具者になった揚句、日本の若い娘達がアメリカ兵といちゃついている姿をみせつけられたというわけだ。歴史上これは

どマゾヒスティックな状況は極く稀れなものだと思ふ。

【一九五一・九——平和条約調印】

戦後強くなったものは女権とナイロン靴下だという。女性の体位の向上は特に目ざましく大抵の中年男は新しい世代の澆漓たる女性の前に肉体的劣等感を覚えてしまう。

また売春防止法が施行された結果、女性の値段は暴騰した。バーのホステスになれば二十才前の女性でも大学出のサラリーマンの三倍位の月収は軽く稼げる。経済能力の低い男性は恒常的欲求不満に陥っている。

女性エリートで外人男性と結婚する者が激増した。淡路恵子、岸恵子、松本弘子の例をまつまでもなく、彼女達は結婚したことで人氣を落すどころか、却って尊敬される傾向がある。

芸能界には白色混血全盛の時代が近附いている。既に、ジェリー・藤尾、ミッキー・カーチス、岡田真澄、鰐淵晴子、入江美樹、服部マリ、前田美波里……といったタレントが大もてだし、この傾向は今後ますます強まるものと思われる。私はこの国の芸能界が完全に混血タレントによって征服される日を待望してやまない。

2 父親哀話

私が夕食の支度をしていると、ガラリと玄関の開く音がした。息子達夫婦のお帰りなのだ。私は慌ててエプロンをはずして迎えに出た。

真ッ赤なスーツを着た明美は、スカートさばきも荒々しくはじきとばすようにハイヒールを脱いだ。息子はかかえきれない位の買物を両手に持って明美の後を追った。私も明美のハイヒールを揃えて二人の後に従った。

「ああ、暑いったら、ありやしないわ」

明美はクーラーのスイッチを入れながら服を脱いでいた。息子が慌てて手伝っている。黒い高価なスリッパと長靴下が、はちきれそうな明美の肢体を、ほんの申しわけに包んでいる。東京でストリッパーをしていた彼女は、まだ十九才という若さだ。その若い肉体の前に私はたじろぎ、眼がくらんだ。

「爺イが妾の身体を見たわよ」

明美は目ざとくみつけて息子に云った。

「父さん、明美を見るなよ」

と息子が云った。

「いや、そんなつもりじゃなかったんだよ。

外はさぞ暑かったらうと思ってね」

「うまく云ってらァ」

明美は脂ののった逞ましい太腿から長靴下をはがしながら云った。

「反抗すると養老院に叩きこんでやるから」

「そんな殺生な……」

私は怖しくなって泣声を出す。

「この家に置いといてくれよ、何でもするか」

「無駄飯食うばかりで何も役に立たないじゃないか。年寄り臭くってムカムカするわ」

「父さん、謝まれよ、明美は機嫌が悪いんだから」

私は仕方なく明美の前に土下座する。私だってまだ六十を越したばかりだ。明美のように見事な体格をした若い女を見れば平気でいられるわけがない。第一、明美の身体は男に見せて商売になる身体なのだ。私は頭を床にすりつけて謝罪する。

「勘忍しとくれよ、私が悪かったからね」

明美の足が私の首根っこを踏んずける。

「判ったら明日っから封筒貼りでも何でもして働くんぞ、いいか」

「判った、云われた通りにするよ」

「ジャ当分飼っというてやる、だけどちよっとでも生意気な口利きやがったら、すぐ追いだ

「しちゃうからな」

明美は勝誇ったように宣告した。私は老いの眼に涙を浮かべてうなずいた。

「さァ飯だ、爺ィ、支度しな」

明美はそう云って私の尻を蹴とばした。私は慌てて台所へ行き息子たち夫婦の飲むビールが、ちょうど飲み頃に冷えているのをたしかめて食堂に運んだ。

3 亭主哀話

「勘忍、勘忍、勘忍して下さい」

私は妻に哀願した。妻は豊かな脚を高々と掲げてシームレスを脱ぎながら

「何回云ったら判るんだ。この馬鹿野郎！」

と罵った。私はその足もとに這い寄ってシームレスを脱ぐのを手伝った。妻の脚は長く豊かで日本人離れがしていた。私は匂うようなピンクの太腿に、そっと唇を触れた。妻は舌打ちして私の髪の毛を掴みスカートから引きずりだした。

「舐めさせて、舐めさせておくれよう……」

「また泣く」

妻は冷めたく素ッ気ない眼で私を睨むと、黙ってピンを抜きとり私の上にのしかかって来た。

「勘忍だよう、痛いよう……」

と私は泣声をだした。大きな妻の身体に抑えつけられては身動きも出来ない。妻は残酷に眼を輝かして私の爪にピンを突刺した。灼きつくような痛みとともに血が噴き出た。

「これでも判らなきゃ別れちゃうぞ」

妻はジッと私の眼をみつめながら云った。切れ長の嬌りたかぶった美しい眼……私はこの眼で睨まれると、催眠術にかかったみたい反抗する気持を失ってしまうのだ。そればかりか尾端骨のあたりから不思議な被虐の欲望が湧いて来て、一種の恍惚状態になってしまふのだ。

「さァ、判ったか判らないのか、どっちなんだよ」

妻は、なおもピンをこじ入れながら脅迫する。私はかすれた声で云った。

「ようく判りました。判りましたとも」

妻の留守に私が恥しい行為にふけていたことが露見して私はお仕置きを受けているのだった。妻は私に禁慾を強いた上で悩まのが好きであった。実際人間離れした欲求不満に陥れば私ならずとも妻が、その豊かな肉体で愚弄することに対して無抵抗で誘惑されるに違いなかった。その妻の命令にさからって

自分自身の行為にふけたことに妻の怒りは爆発したのだった。

「素ッ裸かになってフンドシしめとけ！」

「はい」

私は命令通りに服を脱ぎ、ヨレヨレになった赤フンドシをしめた。

夜になると義妹が帰って来た。まだ十七才になったばかりだというのに、背は私より高くボーイ・フレンドが数えきれない位いる。どうやらもう処女ではないらしい。

「お帰り」

「義兄さん、今日はどんな悪いことしたの」

義妹はからかうように云った。私のフンドシ姿の意味を十分に知っているのだ。

「またアレよ、自家発電」

妻が云った。

「わァ、イカさないったら、ありやしない」

私は薄笑いを浮かべてうずくまっていた。

「男性ってみんなそんなことするのかしら」

「この人は特別よ、何しろ妾と結婚する前は毎晩してたって云うんだから」

「人間の屑ね」

「見てて御覧なさい」

妻はそう云ってフンドシを踏んずけた。そして、スカートを少しずつたくし上げて行っ

た。白い匂いこぼれるような太腿が次第に露わになり……妻の繊細な足指がフンドシを……私は芋虫のように身体をくねらせながら法悦に達した、

キャッ！ と悲鳴をあげて義妹は逃げだして行った。私のかすんだ耳に妻の勝ち誇ったような笑声がいつまでも響いていた。

4 教師哀話

ピシヤリ！ と前田美針さんは私にピンクをくれた。私は思わずいつもの癖で

「勘忍、勘忍……」
と哀願していた。

「勘忍なんかするもんか、この能無しめ！」
美針さんはそう云うと長い豊かな脚をのばして私の胸板を蹴とばした。十六才、一六八センチもある混血児美針さんの体力である。中年の私はひとたまりもなく吹ッ飛んだ。しかし転がりながらもスカートの奥に白い清潔な下着が覗いたのは見ていた。美針さんは私の上にドカリと馬乗りになった。

「今度から、ちゃんと勉強して来ますから勘弁して下さい」

私は美針さんの巨体に、踏み潰されながら云った。

「いつだって、そう云うんじゃないか、妾はお前のおかげで数学駄目だったんだぞ、お前がちゃんと教えないからなんだぞ」

美針さんは家庭教師の私が試験に出そうだと云ってヤマをかけた処が外れたので怒っているのだった。

「お前なんかパパに云いつけてクビにしちゃうぞ、それでもいいか」

「ど、どうかそれだけはお許し下さい」

私は必死になって云った。薄給の中学教師である私にとっては美針さんの家庭教師という口は願ってもない、うまいアルバイトなのであった。

「私はもう四十二才です。いまクビにされたら女房子供を、どうやって養って行くか……当てもないのです……」

「先生、月給幾ら貰ってるの？」

「二万九千円です」

「二万九千円？」

美針さんは呆れて眼をまるくした。

「それっぽちで、どうやって暮してるの？」

「爪に灯ともす生活です」

私は哀れっぽく云った。

「妾は十六よ、でもたまにテレビに出たりすると十万は貰うわ」

「美針さんと私では人間の出来が違うんだから仕方がありません。生まれつき、その位の差がついてるんです」

「お前みたいなのが多いから、日本の教育は駄目なんだわ」

「申しわけありません」

「それじゃとにかく、クビにだけはしないでやるわ。その代り、もっと勉強して来るんだぞ」

「はい、有難うございます」

美針さんは巨体を揺すって私の胸から立ち上った。私は慌てて起きあがると彼女の足もとに這い寄って両手にしっかりと美針さんの脚を抱きしめた。

「お情けついでに、キッスさせて下さい」

私はいきなり美針さんのスカートの中に薄汚れた顔を突っこんだ。そして将来、大物を約束された若きタレントの太股にかぶりついた……

5 兇暴な白人娘

白人ストリッパーを見ると私はいつも争われぬ気高さ、人種的優越を眼のあたり感ずるのだけれども、よく考えてみるとその実彼女達は本国では手のつけられぬズベ公だったの

ではあるまいか。

日本でもストリッパーやヌード・モデルになる女性は身体こそ人一倍発達していて男心を悩殺するに足る魅力の持主だけれども、教育は十分に受けていない者が多いし、ヤクザのヒモつきだった者も少くない。

その彼女達が我々の及びもつかぬ収入を得

【代理部分譲品御注文の栞】

○本誌最近号誌上に広告してあります分譲品は全部在庫いたしておりますから、御注文次第、折返し発送申し上げます。注文殺到のため万一品切れしなすも、早速、調製の上おそくとも二、三日中にお送りします。

○代理部分譲品並に雑誌類は、すべて前金にて通信により御注文願います。直接販売あるいは代金引換などは取扱っておりません。

○ご注文金は、現金書留（現金書留の封筒は一枚三円にて郵便局で売っています）小為替（振替用紙は郵便局のときは御便利です）振替口座番号は大阪五〇〇四二番です。切手代用（四円、十円、二十円、三十円、四十円など）の小額切手で、絶対に紙にはりつけないで下さい。等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、あるいは略号の附してあるものは略号。フォトの類はすべて略号にてお申込み下さい。品名を記されまますと間違いが起り易く、且つ発送に手間とりまますから、必ず略号にて願います。

○御注文の宛先は、大阪阿倍野局私書箱第十四号、天屋社です。

て高級マンションに住み贅沢な暮らしを送っている姿はマゾヒストとしては大いに慶賀すべき現象なのだが、それは外人ストリッパーの場合もまったく同じだという事実が気がついて

ても良いのではないか。一七四センチの金髪ストリッパー、ゲイ・アバンドンは九州のキヤバレーで日本人客をはりとばしたと云う。

○分譲品の新しいものは、毎月の新刊誌上に「新版案内」として発表しておりますから、その目録にて御注文願います。

○御注文品の送り先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書き（何々方、何々社内など）がございましたら、それもおわすれなくお書き添え下さい。

○当方の発送者は「箕田京二」の個人名にて発送申し上げます故、御承知下さい。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故、御安心下さい。封筒や注文票は用済後は焼却いたします。

○局留にて郵便物をお受取りになられる方が最近、増えてきておりますが、御注文の際に封筒の裏書きを仮空のものや白紙になさらず御希望の郵便局の名の下に局留とお書き下さい。局留では御注文の際にお受取りになりたい局名をお知らせ下さい。別に局からは通知としてお送りいたします。別局から通知はありませんから到着している日を見はからって局の窓口へ出頭の上お受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間が過ぎてもお受取りにならない時は、差出人に返戻されます。一旦返戻された郵便物の再送には郵送料を御負担願います。

6 ストリッパーの亭主

日劇ミュージック・ホールやミカド、ゴールデン赤坂などで日本経済界の中堅達は、そういう白人ズベ公の肉体を仰ぎ見ていることになる。あわよくば、その白い肌にありつこうという下心をもって……。

しかしそれこそが危険極まりない真似だと云う外ない。鼻下長紳士達が考えもつかない無頼の精神を彼女達は持っているかも知れないのだ。

白人非行少年の兇暴さは、つとに伝えられる処であるけれども彼女達はその非行少年の同類であり仲間かも知れないのだ。白人ストリッパーのエキゾチックな瞳やスナリした脚に蕩然とするのもいいが氣易くなめてかかると、とんでもない目に合されて泣きッ面をかくのが落ちというものだろう。助六はストリップ劇場の楽屋口に来るとオズオズとあたりを見廻した。真冬というのに薄汚いシャツにガーディガン一枚の姿は見るからに貧相で寒そうだし、首の根っこが垢じみている。

「助六さんじゃないか、おはいりよ」

雑役のおばさんが声をかけると助六はペコリとお辞儀した。

「慢子さんだろ、たしか楽屋にいる筈だよ」

助六はおばさんにもう一度お辞儀するとノソノソ楽屋の方へ歩いて行った。

「誰よ、あれ」

若手の五月美香が眉をひそめておばさんに訊ねた。

「誰って……内緒だよ」

おばさんはグラマーの美香の耳もとに一生懸命背伸びして囁いた。

「朱雀慢子さんの旦那さんなのさ」

「ふうん」

美香は二重になった可愛らしい顎をしゃくって驚いた。

「慢子さんに全然似合わないじゃない」

「そうなんだよ、だから捨てられちゃって、あの通り、いまじゃボン引きしてるって噂だけだね」

楽屋の三面鏡にむかって衣裳を脱いでいた朱雀慢子はキツとして振返った。助六が卑屈な笑いを浮かべて立っていた。グラマーの慢子にくらべて助六は身長もボリウムも一廻り小さい。白くはりきった慢子の肉体と老いさらばえた助六の姿とは不思議な対照を織りなしていた。

「それで客は見つかったのかい？」

と慢子はパンティーとブラジャーだけの肢

体を鏡に映しながら訊ねた。助六は上目使いに慢子の顔色を窺いながら首を横に振った。

「何だって？　じゃ此処へあんた何しに来たのさ」

「お前の顔が、見たくなって……」

「馬鹿野郎！」

慢子は怒って助六の胸を突きとばした。助六はヒョロヒョロよろけると壁に頭をぶつけてころがった。

「今度っから妾の顔見たかったら入場券買っておはいり！」

「そっそんな慢子……」

「何さ、妾はもうとっくに、お前とは切れてるんだよ。誰がお前みたい落ちぶれた年寄り相手になんかするもんか」

「だって、私の財産はみんなお前に注ぎこんだんだから……」

「だから、何だって云うのよ！」

慢子はバタフライの具合をたしかめながら云った。

「男が女に金を貢ぐのは当り前じゃないか、それもただ貢がせたんじゃない。毎晩いい思いをさせてやったんじゃないか」

「そりや夫婦だったから……」

「愚図愚図云うとぶつとばすよ！」

慢子が本気で怒りかけたときドアが開いて

ヒモの次郎がはいって来た。次郎はチラッと助六を見たが黙殺して慢子に近寄った。慢子はこれ見よがしに次郎に抱きついた。

「あんた、待ってたのよ」

「変な老いばれがいるじゃねえか」

次郎がニヤニヤしながら云った。

「そうなんだよ、あんた、こいつにヤキ入れてやってよ。うるさくつきまとって来て仕様がなないんだから」

「そうだな、ちつとばかしシゴイてやるか」

「コテンコテンにのしちやいなよ、殺したって構やしないよ」

次郎は慢子を抱いたまま、震えている助六に寄り添いを掴んだ。

「どうだい、爺ィ、慢子はいまじゃ俺のものよ、お前の顔なんか見るのも嫌だって云ってるぜ」

助六は追いつめられて壁際まで後退りしていた。慢子は次郎にすがりつきながらさも憎らしそうに云った。

「男の癖に五尺そこそこっきゃないんだよ、こいつ」

「まるで猿じゃねえか。自分が慢子と釣合うと思ってるのかよ、爺ィ」

「よ、どうなのさ」

慢子は恐怖におののく助六の髪を鷲掴みにして云った。

「うるさくすると、このひとに頼んで半殺しにしてやるぞ、判ったか」

「わ、判った」

助六はかすれた声でつぶやいた。

「もつうるさくなんかないから……」

「それだけ？」

「……」

【山原清子、鈴木晃子】 SMコンビ・フォト……………

女性対女性の真迫的緊縛演技写真 分譲

MS役……………山原 清子
M役……………鈴木 晃子

鈴木晃子嬢は、山原清子のペットとして永らく飼育されていたのですが先般本誌のモデルとして紹介を受け、初めて「鼻責万華鏡」(略号「はた」)として八枚一組の鼻責めフォトを作成して好評を博しました。今回更に山原清子が実際にペットの鈴木晃子を責めている場面を写真部のアイデアを加味して撮影しました。實際を地でゆく演技は全く当初予期しなかった好結果で素晴らしい傑作が出来上りました。一見下さればお分りの通りSフォトとしてもMフォトとしてもその熱のこもったポーズは必ずや今までにない新鮮さで皆様の胸奥に迫るものと思います。

今はすでに絶版になっております十何年か以前に作成しました春日ルミ女史対伊吹真佐子嬢コンビのSMフォトが想起されますが、今回の山原清子、鈴木晃子コンビのフォトはそれ以上に迫力と若さに満ちております。純然たるプレイ写真ですが、ネガのまま放置しておくのも惜しいので、特に御希望の同好の方にお分けします。

猿轡をされるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 略号(さる) 一五〇〇円

強烈に縛りあげられた鈴木晃子の鼻をつまみ口を開けたところへ布片を押し込み、豆絞りの猿ぐつわを無理強いに噛ませてしまうまでの連続組写真である。

縛りあげられるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 略号(さあ) 一五〇〇円

抵抗する晃子の両手をうしろへ捻じあげて縄をからませ、きりきりと身動きできなくなるまで縛りあげる過程の動きのあるポーズを連続で組写真としました。

屈伏させられるまで

大手札印画紙焼付 二十枚一組 略号(さや) 三〇〇〇円

痛めつける清子のサジスチックな表情と姿態。晃子は清子の意のままになりながらも、その豊かで美しい肢体を惜しげもなく、さらけ出して見事な場面を展開する。

「この間抜け！」

慢子の平手が躍って助六の頬に鳴った。

「毎日客をつかまえて来いって云ってあるのを忘れやがって……今度あぶれて来やがったら、もう逢ってやらないぞ、ほんとに捨てちゃうぞ」

助六はペツタリと慢子の手型のついた頬を撫でながらうなずいた。

「よし、判ったらヒゲ剃らしてやる」

慢子は次郎の方を向きニツと笑った。

「な、いいだろう」

次郎が囁いていた。

「だって昼間っから……みっともないわよ」

「判りやしねえよ、鍵かけときゃあ」

「それもそうね」

慢子はふッと助六に眼をやって云った。

「ねえ、あんた」

「ウン？」

「こいつを引きずりこんで、見せつけてやるうよ」

「アハハ、お前も相当悪趣味だな」

「いいだろ？ 妾、こいつが刺戟されて苦しむのが見たいんだよ」

慢子は眼をキラキラ輝かしていた。そして震えている助六の身体をドアの向うに蹴ころ

がした。ネズミのような呻き声をあげて逃げようとする助六の身体からボロ服をむしり取った。次郎がニヤニヤしながら後手にドアを閉め、鍵をかけた。

7 女性―あるタイプ

最近私はあるタイプの女性に強く惹かれるようになった。冷めたく素ッ気なく無口で、男の機嫌なんか取結ぼうとせず、普通の女ならゲラゲラ笑う時でもニコリともしない、そのくせ妙に男心をそそる不思議なタイプの女性である。

例をあげて云った方が判りがいい。たとえばファッション・モデルの松本弘子さんだ。スラリとした見事な長身、ジッとみつめる冷めたい眼は男の魂をとろけさすが滅多に笑うことがない。結婚詐欺事件で週刊誌を賑わした日劇ミュージック・ホールのK・みなみさんも、このタイプに属する。

映画女優ではこのタイプはほとんど見当らない。演技上百面相を要求されるために、生来このタイプであってもその魅力を維持することが難しいのではあるまいか？ 強いて云えば池内淳子さんや水野久美さん等、元来このタイプの女性だったのではないかと思うの

だが……。

「ニコリともしない女性」の効用は、マゾヒストの弱点を知り抜いていて其処を飽くまで攻撃し搾りあげる女性として空想出来ることだ。

カマトト型（団令子、桑野みゆき）には何処か間の抜けた点があり、マゾヒストとしてはそれを十分承知している上で女神と仰ぎ奉る点に興味がある。逆にアマゾン型（滝瑛子、朱雀さきり）には本当に喧嘩しても大抵の男では組伏せられてしまうという現実感が嬉しい。

ただ「ニコリともしないタイプ」にしか期待出来ない素晴らしい点は、マゾ男が骨の髄まで堪能する精神的虐待にある。

このタイプは男にチャホヤされるのに慣れていてそれが当たり前と思っている。だから彼女達は滅多に笑わないし男の機嫌なんかとうとしんない。勿論いわゆる女史型の女も笑うことが少いという点で共通しているかも知れない。ただ女史型のそれは表面だけのものでハンサム・ボーイが現れ愛を囁いてやれば忽ち嬉しがってゲラゲラ笑いだし化けの皮をはがすのではあるまいか？

「ニコリともしないタイプ」が恋愛経験のベ

テランであるのに反して、女史型は恋愛経験が不快しているのだ。おそらく松本弘子さんは、フランス人の夫君にプロポーズされたときだってゲラゲラ嬉しがったりはしなかったろうと思う。

8 シゴかれた保護司

小野寺は若く逞ましい脚に取囲まれて這いつくばっていた。どの女のコもまだ二十才になるやならずの年令だろう。だがその彼女達の肉体のなんと傍若無人に発育していることか……平均身長一六五センチという踊り子キヤバレーだけのことはある。小野寺のような中年過ぎの小男は、ただもう圧倒され気押されるばかりだった。

「よう、何とか返事なさいよ」

瑛子はハイヒールをはいた足で小野寺の腿をグイグイ踏んずけた。

「いっばし保護司面しやがって」

「アハハ、もういっぺん股責めして貰いたいんじゃないのかい」

大柄な娘達はいっせいにドッと笑った。

「こんな鼻の低い男、股責めしたってちっともよかないよ」

瑛子が嘲笑った。

かつて小野寺は非行の年少女のために保護司を引受けていたことがあった。瑛子は手のつけられないズベ公だった。凄絶な性的魅力を持つ少女で本人もそれを十分知っていた。知っていた処か、それを武器に小野寺クリーニング店の従業員を片っ端から誘惑しては、ヤクザのヒモと示し合せて恐喝し、さんざん食い散らかした挙句、ある日忽然と姿を消してしまった。小野寺クリーニング店はそれが

原因で左前になり会社は、このキャバレーのシートカバーの洗濯を引受けさせて貰う下交渉に小野寺自ら出向いて来た処を掴まったというわけだった。「ふん、落ちぶれやがって、気持ちいいたらありやしないよ」瑛子はタバコの火を小野寺の額に押しつけてもみ消した。小野寺は口からダラダラとヨダレを垂らしていた。

◎本誌二〇〇号突破記念◎ ▲原稿募集▼

▽内 容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMの他、フェテツシユ、切腹、女斗美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を発揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規 定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
○以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

▲奇ク編集部▼

「妾はもう十九だからね。保護司面して何云ったって用はないのさ」

「瑛子、どうせなら、もうちょっとシゴいて楽しもうじゃない」

娘達は口々に云った。

「そうよ、腕の一本や二本へし折ってお礼しておやりよ」

「こんなみっともない男でも、女房になる女がいるのかねえ」

「フフ……これで息子までいやがるのさ」

瑛子は小野寺の髪を掴んでペッと唾を吐きかけた。

「こいつに似てチンチクリンの癖に妾を見て色気づきやがってプロポーズするんだよ」

「そ、そんな筈はない……」

小野寺がかすれた声で呻いた。

「息子に限ってそんな……」

「何イ？」

瑛子が云った。

「ほんとだったら、どうするんだよ」

「やっちゃえ、やっちゃえ……」

娘達は逞ましい腿を揺すりながら叫んだ。

瑛子は自分のロッカーから一通の手紙を取って来ると小野寺の鼻先に突きつけた。

「さア、お前の息子の手紙だよ、声をだして

読んでみな」

見覚えのある息子の筆蹟に小野寺は眼の前が真ッ暗になったように感じた。同時に女達の動物的な肢体に測り知れぬ恐怖を覚え、手紙を読みはじめた。

「お願いです、是非もう一度あなたのお腎を抱かせて下さい。瑛子さん、僕は何でもあなたの云う通りにします。金庫の金だって持ち出します。どうかもう一度あなたの真ッ白なお腎を……」

小野寺の眼から無念の泪がこぼれた。女達は腹をかかえてゲラゲラ笑っていた。

「その戯鬼幾つ位だったのさ」

「大学生よ、何勉強してたんだか、妾の此処ンとこんのぼせやがって」

そう云って瑛子は隆起した腎をむきだしてみせた。

「そのくせ親父は何も知らずに妾にむかって真面目になれだなんてさ」

女達はまたどッと笑った。小野寺は完全に打ちひしがれ、ボロ切れのように這いつくばっていた。

「しまいには手合わせて拝むんだよ、あなたは僕の女王様です……だつてさ」

「瑛子、やっちまおうよ！」

娘達の一人が昂奮して叫んだ。大体この店に出ている娘は程度の差こそあれ、ズベ公の過去を持つ者が多かったから、いまや兇暴な復讐心を刺戟されていた。大柄な娘達はいっせいに小野寺に襲いかかった。遅ましい脚が四方八方から小野寺の貧相な身体を蹴とばし踏みこじった。

「服なんかはいじゃえ！」

誰かが云った。服はビリビリと引裂かれ、素ッ裸かにされた小野寺は床の上でヒクヒク震えていた。瑛子はその身体をハイヒールで仰向けにさせて云った。

「いいか、今日のことをサツにしゃべったらお前の息子のことをバラして、就職も出来なくしてやるぞ。シート・カパーの洗濯だってさせてやらないぞ、判ったか」

小野寺は口をパクパクさせてうなずいた。

瑛子はニヤリと笑うと十九才の若々しい巨体で、ゆっくりと小野寺の顔の上に立ちほだかった。

「さア、お前の息子がやったように、いちばん恥しいことをしてみせるんだ。チンチクリンのヘボ保護司め！」

9 杏子ちゃんと私

江崎杏子ちゃんのつりあがった美しい眼……その眼はお前みたいなの、くたびれた中年男なんか屁とも思っちゃいないぞ。軽蔑してかかって悩ましてやるぞ……とでも云っているように思えた。その眼にみとれていると私はいつも猫に睨まれたネズミみたいな気持ちになり、真ッ赤にマニキュアした鋭い爪で内臓を引掻かれるような被虐の快感を覚えていつの間にかヨダレを垂らしてしまふだった。

するとマゾヒストずれしている杏子ちゃん、ソロリソロリと手を伸ばしてズボンの上から私に触れて来る。そして薄くて切れのいいお刺身みたいな唇に冷酷な笑いを浮かべるのだ。

——ホラ御覧、もうこんなになっちゃってるじゃないか。いくら我慢したって妾が覗みつけただけで、もうこのザマじゃないか。それとも我慢出来るもんならしてみろといいわ。さア、出来るもんならしてみなさいよ！

杏子ちゃんの表情は、そう云っているように思われた。私は絶え間なくヨダレを垂らしながらネズミみたいにキイキイと鳴く。

——降参、降参……そんなにしたら駄目だつたら……勘忍、勘忍、杏子ちゃん！

杏子ちゃんは私の心の動きを知り抜いているから一層力を入れて私を押さえこむ。

——ふん、勘忍なんかしてやるもんか。この色気違いの、助平親爺め！

四馬孝 倒錯美緊縛画集

(題名) 美女のいけにえ V

大中判印画紙焼付五枚一組 一〇〇〇円

略号(えと)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台上に逆エビ縛り首縄姿で載せられているのは、齡二十才の美女。身体の前面をむきだしにして、台上にころがされたのに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンバーワンであってみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然である。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その大切な顔の中心に位して女性変貌の中心を

そしてカサにかかって、あの怖いまでに綺麗な眼で睨みつけるのだ。瞬間、私はブルブルと痙攣しケツケツと鳴きながら七彩の虹を見る。その頃には杏子ちゃんは、さっさ

なすもので、男心をそそのかす中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちりとした瞳、房々とした文なす黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むっくりと肉がのっているが、全体にほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。如何にもうまそうに

五、山小屋の一夜

リュックを担いで楽しい山登りの一日が終つて、山小屋で一夜の宿泊を求めた乙女。山のけがれを知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であつた。しかし山小屋の一夜は、彼女にとっては怖い悪夢の一夜であつた。その受難のいまわしい悪夢の一夜ページが、ここに展開されている。

と他のお客さんのボックスに立去ってしまったのだった。

私は杏子ちゃんにお小遣いを捲き上げられていた。このバーはいわゆる「おさわり」バーではないのだが、杏子ちゃんはマゾッ気のある他の客からも、そうやって金を捲きあげていたらしい。

私は杏子ちゃんが好きだった。いや、好きなどという生易しい言葉では云い表せない。一目見たときから、この女の子にはかなわないぞ。虫ケラみたいに踏んずけられ、いいように小突き廻されるぞ、とハッキリ予感したのだった。

あるとき杏子ちゃんは、いつものように私がキイキイ鳴きだすと、意地の悪い眼で云った。

「あんたが、どれ位妾に惚れてるか試してみてやるわ」

そして洗濯バサミで私の鼻をつまんだ。

「口を結んで妾が許してやるまで息をしちゃ駄目よ、いいわね」

「だって、窒息しちゃうよ」

「何さ、妾の顔見ながら死ねるんだもの、喜んでいいじゃないか」

「そ、そんな無茶な……」

「何が無茶だ、ツベコベ吐かすな、ホラ、こうしてやる」

杏子ちゃんはスカートを太腿の中程まで捲くりあげて私の首に馬乗りになって来た。そしてあの魔力を秘めた眼で真近からジッとみつめた。

「さア、始めるわよ、一、二の三！」

私は仕方なく息をとめた。杏子ちゃんは、タバコの煙を、私の顔いっぱい吹きつけて来た。

「妾がいいって云うまでもちこたえたら、お臍にキッスさしてやるわよ、それからパンネット恵んでやる」

私は白眼をむきながら耐えた。杏子ちゃんはニヤニヤしながら背をクッションにもたせ私の肩に両脚をかけてのけぞった。彼女のやわらかな太腿の裏側が全部露出し、股倉に喰いこんだ細いパンティーが見えた。

「二分三十秒……」

と杏子ちゃんは云った。

私の眼の前に、暗闇が迫って来たようだった。口を開けば簡単に呼吸出来るものを、私は杏子ちゃんの約束してくれた餌につられて耐えいつの間にか気を失っていた。

10 タツノオトシゴ考

「メスが産卵管をオスの袋にさしこんで四、五十個の卵をうみつけどこかへさっさと行ってしまう。……オスの方はそれから苦勞の連続だ。……大きなお腹をかかえたオスは……二、三カ月もじっと子守り続けるのだ。お産がまた大変。体を折りまげお腹を岩にこすりつけてもがきながらうんでゆく」

——朝日新聞「タツノオトシゴ」より。

女権革命は女性から妊娠の重荷を取除いたとき、はじめて完全に遂行されたと云える。それには何よりもタツノオトシゴに習って妊娠の苦痛を異性に肩替りさせるのが効果的である。

将来更に科学が発達すればそれも可能になるだろう。既に女性は異性よりも生物学的に優れた存在であることが立証されている。形態的にみても、女性の方がずっと進化しているし、知能の点でも平等に教育された場合は、女性は男性の成績を大きく上廻ることが報告されている。それに肉体的にも強靱で適応性が強い。

種々の点から考えて高等な存在である女性

に妊娠の重荷を負わせる理由は何一つない。女性に優れた能力を発揮して貰うために、劣等な存在である男性は、喜んで妊娠の重荷を負うべきである。政治、経済、学問的研究等の社会的な活動は女性に委ね、男性はもっぱら家事、料理、育児等に生きのびる道を見出さなければならぬ。

自然、女性は男性を凌駕する雄大な体格を持つに至るだろう。既に文明国の間では、その兆が見えはじめている。雄大な女性に支配される矮小な男性の姿が将来の我々の偽らざる姿である。

ところで夫婦の間に出来た子供を、夫が育てるという単純素朴な女権社会は、やがて必然的により高度な段階に発展して行く。たとえば日本人のような劣等人種にあっては、男性は自分の妻の卵のみならず白人女性の卵を注入され妊娠するようになる。白人夫婦の間に出来た受精卵を里親として育てるのだ。いや、そればかりではない。妻が白人男性と交ってもうけた卵すら日本人男性が育てなければならぬ。

妊娠は男性の口腔か咽喉部でなされるのが将来の人類の衛生のために適当だと思う。白人男性と交配した妻は哀れな日本人の亭主の

口腔に顔面騎走することによって卵を産みつけるのだ。

日本人男性はこうして妊娠するための生きた道具と化す。日本女性には外人にはもてるからもはや日本の男など相手にしなくなる。彼女達は白人男性と遊び暮す。キャーキャー笑いながらドライブを愉しみ、ダンスを踊り、水上スキーに興じ、日本男性オフ・リミットの高級ホテルに泊る。哀れな日本の男共は彼

次号（十月号）掲載予定作品

- 御厨番秘聞「夢のまた夢」 (芳野眉美)
娘相撲物語「良男の体験」 (海野三津男)
耕土散筆「落穂拾い」 (保藤久人)
デパート女子レスリング (青浦素舞夫)
希臘神話の再編成「第二話」 (黒瀬要一)
愛読者原稿「亜紀子奇譚」 (麒麟児久)
痴人の糧「吊られて」 (山本一章)
耽美主義者の手記より……………
「暗い夜の世界の果てに」 (夜乃探郎)
入門講座「若き友に与う」 (栗瀬 長)
第三回（浣腸について）
悦庵絵灯籠「浪江大五郎」 (万田不二)
私のアブ的解釈「地獄メモ」 (久我庄一)
切腹供養予行演習 (宗川一子)
或る責めマニヤの告白 (清水義正)
贗作マニヤのノート (芳野眉美)
連載小説「花と蛇」続篇 (団 鬼六)
実録「奇譚クラブ」 (夜乃探郎)

女達の前に引きすえられて乱暴に卵を産みつけられ、咽喉を丸太のようにふくらまして家事にいそしみ、やがて他人の子供を産むのである。

こうして日本人に関する限り夫婦という觀念はまったく新しいものとなる。夫とは妻の排卵器具兼家事労働者に過ぎない。しかし排卵の瞬間こそが妻の皮膚に直接触れ得る唯一の機会である。だから妊娠の苦痛は激烈を極めるけれども、顔面騎上は天国にも値する快楽である。

殊に日本人男性の願ってやまないのは金髪女性から卵を産みつけられることである。彼女達の雪白の肌に顔面騎乗されることは日本の男の誰しもが夢にまでみて憧れる処だけけれど、誰にでもその機会が与えられるわけには行かない。

その恩典に浴するのは特に素直で従順で白人崇拝度の強い男性に限られる。しかし少しでも猥褻な舌の動かし方、吸い方をした者は「有色人種差別法」に従ってリンチを受けることになる。日本人男性の抗弁は一切許されず白人女性の「私は舌で汚された」という一言が重んじられる。

リンチを受けた男は「ボックス（箱）」と

呼ばれる。その殆んどが四肢を切断されているからだ。中には眼を抉りだされたり、耳や鼻をそぎ落された者もいる。肛門の周囲を抉り取られて大腸の露出した者もいる。ジャップを「箱」にするリンチは白人女性の間では最も人気のあるスポーツとなった。

「箱」にされた男は産院に収容され人工栄養を与えられて玉のような白人の赤ん坊を産み落す。それが彼等の寿命の終りである。もはや自分一人では動くことも残飯を漁ることも出来ないからだ。

しかし妊娠器具としての日本人男性は再生産されなければならない。そのためにいまはほとんど意味を失った日本の夫婦制度が生きて来る。日本人夫婦は抽選によって選ばれ国家管理の下に交接する。その模様はガラス張りの檻の中で行われ白人観光客の好個の見せ物となるのだ。妻はふだん外人男性と遊んでいるが抽選に当れば、いやいや日本の夫と関係しなければならぬ。夫の方はそれに反して一生に一度の機会である。日本人妻が夫をいかに軽蔑し冷たくあしらうかが、また白人観光客にとっては愉快なショウなのである。そこで妻はますます夫を残酷に扱ってチップを余計手に入れようとする。こうして日本人妻はサド性を増し、夫はいよいよマゾの度合いを深めて行くのだ。

〔代理部新版分譲品一覧〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 略号 (八〇〇円)
大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚啓子 略号 (ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のけ)

玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るに)

磔 (はりつけ)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (くし)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
愛川悦子、田中芳代 略号(らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
愛川悦子、田中芳代 略号(らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川文代 略号(らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪の悶え

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(ろめ)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ちり)

写真の中に悶える

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(けよ)

写真に埋れた裸女

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(けお)

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円

栗本ミチ 略号(ふな)

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本ミチ 略号(ふに)

前開き、ゴムオシメカバー

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(しま)

前開き布製防水オシメカバー

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号(しな)

全裸の切腹悦楽(1)

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(ひた)

全裸切腹悦楽(2)

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号(ひと)

乳房しばり

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(うい)

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(もく)

椅子責めの果て

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(いす)

哀婉血紅切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(るな)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(そう)

動感海老責地獄

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(とう)

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(はす)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号(へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川文代 略号(ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川文代 略号(ちた)

オムツ着用フオート

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号(むね)

バンド着用開股ポーズ

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(つん)

マニヤ全裸緊縛フオート

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本ミチ 略号(いな)

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子 略号(にち)

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
田中美佐子 略号(にし)

臨月腹開陳

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
田中美佐子 略号(にり)

臨月腹開陳

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子 略号(にす)

柱縛りの妊婦

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
田中美佐子 略号(にや)

臨月のヌード

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子 略号(にわ)

妊婦の裸身像

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
田中美佐子 略号(にた)

縛られた妊婦

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
田中美佐子 略号(にる)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子 略号(にお)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子 略号(にぬ)

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子 略号(にい)

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いち)

縄に悶える入墨

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いへ)

足吊り三態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いと)

剥れた腰巻

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いは)

女一匹御意見無用

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いお)

玉取姫が凄む

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いる)

全裸緊縛立像

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いに)

入墨ヌード

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いよ)

後手吊りの構図

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いほ)

黒細帯の裸身

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いわ)

黒褌を誇る

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いか)

入墨自慢

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いり)

黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(くの)

黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 略号(五〇〇円)
山原清子 略号(くな)

黒褌背面模様

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(くこ)

黒ふん手吊り責め

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(くり)

全裸入墨姿態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(いれ)

晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(ろと)

白六尺褌一本の姿

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(ろに)

白褌後手高手小手

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(ろし)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子 略号(いら)

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子 略号(いこ)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)

山原清子 略号(いさ)

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子 略号(いみ)

黒フン高手小手縛り

大手札八枚一組 略号(八〇〇円)
山原清子 略号(ひろ)

入墨女体全裸像

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子 略号(ひへ)

黒褌刺青女体美

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子 略号(ひね)

六尺褌をするまで

連続二十ポーズ組写真
大手札二十枚一組 略号(二〇〇〇円)
山原清子 略号(ひは)

白ふんどし脇差切腹

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子 略号(ひに)

白ふんどし短刀切腹

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子 略号(ひぬ)

刺青姐御腹巻脇差

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子 略号(ひほ)

刺青姐御腹巻短刀

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子 略号(ひり)

入墨女体海老責姿態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(ほか)

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子 略号(ほき)

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価 一〇〇〇円 (送共)

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。残部が僅少になりましたので、今すぐお申込み下さるよう、お待ちします。

◎緊縛女体百二十態 〔本誌優秀モデル総登場の写真集〕

樹間にさらされる (絹川)	美貌を踏みつける (絹川)	顔枷の装着中 (四方)	被虐のマゾ女性 (東浦)	首吊りのプレイ (大塚)
豆しばりの猿ぐつわ (絹川)	悦虐の園にさまよう (水本)	鼻孔ゼムピン責め (絹川)	大きな猿ぐつわ (竹野)	後手縛り猿ぐつわ (絹川)
縄目と裸身の羞らい (長野)	若肌に襲う白ロープ (若原)	鼻孔から薬液注入 (大塚)	可愛い足首 (絹川)	電光に肌は映えて (梨花)
後手首に喰込む縄目 (梨花)	蚊群の襲うにまかせ (絹川)	豊胸にまつわる黒縄 (若原)	黒髪なぶり (大塚)	囁まされる猿轡 (東浦)
荷造り縛り人形 (大塚)	きびしき縄目に喘ぐ (加茂)	ピンクカバーと豆絞 (絹川)	喰い込む柔肌に縄 (大塚)	柔肌高手小手 (梨花)
バンド着用しばり (遠藤)	麗しき裸身の縄目 (絹川)	斬首処刑フォト (新宮)	裸身に投げたタオル (加茂)	高手背高しばり (水本)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)	猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)	両手首吊りさらし (大塚)	緊縛の優美ポーズ (絹川)	後手小手股間縛り (絹川)
ゴム布に包まれて (梨花)	あえぐゴム布嵌口 (大塚)	後手足首逆エビ縛り (梨花)	くわえた赤い花 (絹川)	柱後手縛りにて (山路)
椅子利用エビ縛り (東浦)	美しい顔をなぶる (梨花)	丈なす黒髪 (大塚)	エビしばり正面 (梨花)	下げられたズロース (梨花)
厳しき胴絞 (絹川)	飛び出す双丘と後手 (長野)	責衣からのぞく乳房 (大塚)	美貌美身の緊縛 (大塚)	十文字しばり (桜井)
輝く白肌をさらして (関谷)	首縄胸縛り股間縛り (絹川)	美貌放心の表情 (梨花)	首を締めくるくさり (絹川)	木洩れ陽に白き肌 (絹川)
荒縄黒皮フンドシ (大塚)	被虐に耐えた表情 (水本)	後手強烈しばり (梨花)	手吊りのけぞり姿態 (桜井)	叫ぶ捕われの乙女 (大塚)
野性的な緊縛模様 (絹川)	生首フォト (新宮)	従順なるマゾの発散 (竹野)	乳首に咬みつく蛇 (大塚)	汗まみれの被虐 (梨花)
全裸のいましめ (愛川)	祭壇のささげもの (大塚)	手錠足錠首くさり (四方)	後手縛りと臀部 (絹川)	洋服タンスに吊る (大塚)
白晒六尺フンドシ (遠藤)	パンプス開股しばり (大塚)	白晒六尺フンドシ (大塚)	ピンクの腰巻さらし (東浦)	全裸にてもだえる (関谷)
百CC浣腸器責め (大塚)	越中フンドシ緊縛 (大塚)	ガンジガラメの縄目 (絹川)	重圧に耐える表情 (大塚)	黒縄地獄 (四方)
荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)	飛びだした双丘 (加茂)	首縄胸絞め股間縛 (桜井)	強烈アグラしばり (絹川)	るせつの裸身 (梨花)
両手吊りさらし (桜井)	塩水を無理に飲まず (大塚)	引き回される裸身 (絹川)	ポリウムの誇り (桜井)	セーラー服を縛る (梨花)
M女性の本領発揮 (梨花)	胸部と臍窩の魅力 (遠藤)	豊胸を彩る茶の縄 (大塚)	鏡にうつす裸しばり (山路)	首縄から膝縄まで (大塚)
足錠をつけられる (四方)	臍窩を狙う蛇の舌 (梨花)	捕われの女学生 (竹花)	惜しみなく晒す裸身 (大塚)	高々と上った後手 (梨花)
			ゴム帽子麗身晒し (梨花)	くびれた胸と腹部 (大塚)
			首絞めに苦しむ (大塚)	カクテルドレスの女 (絹川)
			麗身をもだえさす (絹川)	浣腸責め (大塚)
			猿ぐつわの苦悶 (加茂)	首のくさりに悶える (絹川)
			黒縄にもだえて (大塚)	黒のズロース (絹川)
			全裸の手吊り責め (大塚)	破られたズボン (梨花)
			ゴムの猿ぐつわ (絹川)	正面立姿全身縛り (大塚)
			汚れた縄と輝く白肌 (絹川)	くさりに捕縛される (山路)
			手首足首椅子しばり (梨花)	亀甲型股間しばり (大塚)
			あえぐ夫人の表情 (関谷)	長襦袢と腰巻 (館)

代理部分護品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りそ」	三〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りも」	四〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りみ」	三〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「やま」	三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「よま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「よま」	三〇〇円

安原さゆり 略号「よみ」

妊婦の股間縛り

大手札三枚一組 略号「には」

妊婦八カ月の緊縛

大手札三枚一組 略号「にあ」

妊娠五カ月の緊縛

大手札三枚一組 略号「にこ」

妊娠前裸縛り

大手札三枚一組 略号「まさ」

妊娠初期の緊縛

大手札三枚一組 略号「ぬろ」

妊婦の股間縛り

大手札三枚一組 略号「にふ」

妊婦の股間縛り

大手札三枚一組 略号「にと」

分娩後縛り

大手札三枚一組 略号「につ」

分娩後股間縛り

大手札三枚一組 略号「にて」

児玉 昌子

○女体緊縛資料の部○

全裸緊縛姿態

大手札四枚一組 略号「ゆり」

遠藤百合子

鼻をいたぶる 大手札三枚一組 略号「ゆは」

鼻の穴責め

大手札三枚一組 略号「なく」

大塚 啓子

鼻なぶり 大手札三枚一組 略号「ない」

大塚 啓子

鼻責めの陶酔 大手札三枚一組 略号「なは」

大塚 啓子

苦悶の裸身 大手札四枚一組 略号「くせ」

関谷富佐子

裸身の晒し 大手札三枚一組 略号「わあ」

関谷富佐子

全裸股間縛り 大手札四枚一組 略号「せら」

関谷富佐子

強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「えり」

大塚 啓子

蒲団に悶ゆ 大手札三枚一組 略号「なき」

関谷富佐子

悦虐の果て 大手札三枚一組 略号「なみ」

関谷富佐子

椅子エビ責め 大手札三枚一組 略号「おき」

東浦ひかる

六尺縛り 大手札三枚一組 略号「ろは」

東浦ひかる

弓吊り責め 大手札二枚一組 略号「つき」

梨花悠紀子

手足宙吊り

大手札三枚一組 略号「つつた」

梨花悠紀子

オムツの股間縛り 大手札四枚一組 略号「むく」

東浦ひかる

強烈責、被虐の果 梨花悠紀子 略号「りお」

梨花悠紀子

乳房 いじめ 大手札二枚一組 略号「とお」

大塚 啓子

激痛ノ逆エビ責め 大手札四枚一組 略号「きえ」

大塚 啓子

美貌の裸身に縄目 大手札三枚一組 略号「きん」

絹川 文代

腰元吊り責め 大手札二枚一組 略号「こり」

村井知可子

腰元間諜の拷問 大手札四枚一組 略号「こく」

村井知可子

強烈エビ縛り 大手札三枚一組 略号「もい」

関谷富佐子

乳房責の苦悶 大手札二枚一組 略号「もろ」

関谷富佐子

全裸ムチ打ち 大手札四枚一組 略号「もた」

関谷富佐子

強打に泣く裸身 大手札四枚一組 略号「むち」

関谷富佐子

狙われた和装の娘		大手札十二枚一組 略号「ねい」 一〇〇〇円
強烈エビ責め		大手札三枚一組 略号「えひ」 三〇〇円
ゴム衣緊縛		大手札三枚一組 略号「みす」 三〇〇円
バンド開股		大手札三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円
バンド責め		大手札五枚一組 略号「はん」 五〇〇円
夫人の表情		大手札三枚一組 略号「せや」 三〇〇円
後手吊り足挙縛り		大手札五枚一組 略号「うら」 五〇〇円
二つ折りエビ責め		大手札五枚一組 略号「うり」 五〇〇円
足挙げ椅子責め		大手札五枚一組 略号「うる」 五〇〇円
吊り打ち		大手札三枚一組 略号「やり」 三〇〇円
股間縛法悦境		大手札三枚一組 略号「ぬこ」 三〇〇円
踊り子緊縛		大手札三枚一組 略号「りこ」 三〇〇円
細川文代		略号「ふは」 三〇〇円
責め衣		大手札三枚一組 略号「せめ」 三〇〇円
猪吊り		大手札三枚一組 略号「いの」 三〇〇円
足挙開股責		大手札三枚一組 略号「あけ」 三〇〇円
緊縛女体撮影風景		大手札四枚一組 略号「むら」 四〇〇円
〇フエチ資料の部〇		
白晒六尺裄		（正面） 大手札四枚一組 略号「しろ」 四〇〇円
白晒六尺裄		（背面） 大手札四枚一組 略号「くま」 三〇〇円
黒裄の女		（正面） 遠藤百合子 略号「くま」 三〇〇円
黒裄の女		（背面） 遠藤百合子 略号「くま」 三〇〇円
相撲裄を締め込む		大手札三枚一組 略号「すい」 四〇〇円
変形六尺裄		細川アヤ子 略号「ふい」 三〇〇円
六尺裄開股		細川アヤ子 略号「ふは」 三〇〇円
六尺フンドシ		大手札五枚一組 略号「ろい」 四〇〇円
六尺裄の女性像		大手札四枚一組 略号「くろ」 四〇〇円
レインコートの拘束		大手札四枚一組 略号「いろ」 四〇〇円
ゴムフエチ		大手札四枚一組 略号「こま」 四〇〇円
バンドを脱ぐ女		大手札三枚一組 略号「ゆお」 三〇〇円
月経帯縛り		遠藤百合子 略号「ゆす」 三〇〇円
相撲裄着用		大手札十一枚一組 略号「すま」 一〇〇〇円
股に喰い込む黒フンドシ		大手札三枚一組 略号「とし」 三〇〇円
股を開いた黒フンドシ		大手札三枚一組 略号「とひ」 三〇〇円
バンド晒し		大手札三枚一組 略号「はと」 三〇〇円
バンド足挙げ		大手札三枚一組 略号「はそ」 三〇〇円
バンド見せ		大手札三枚一組 略号「はぬ」 三〇〇円
白フンドシ		大手札四枚一組 略号「ふん」 四〇〇円
黒フンドシ		大手札四枚一組 略号「くふ」 四〇〇円
ゴムぐるみ人形		大手札四枚一組 略号「こみ」 四〇〇円
ゴム包みの束縛		大手札四枚一組 略号「こは」 四〇〇円
ゴムと女体アップ		大手札四枚一組 略号「こあ」 四〇〇円
パリスバンド前開き		大手札三枚一組 略号「おい」 三〇〇円
パリスバンド縛り		大手札三枚一組 略号「おは」 三〇〇円
携帯用白バンド		大手札三枚一組 略号「おか」 三〇〇円
サカエ軽便型バンド		大手札三枚一組 略号「おた」 三〇〇円
パリスSSバンド		大手札三枚一組 略号「おこ」 三〇〇円
パピアバンド		大手札三枚一組 略号「おし」 三〇〇円
サカエバンド		大手札三枚一組 略号「おえ」 三〇〇円

第二回の妊娠について

九カ月の妊娠腹

三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号(にん)

九カ月の妊娠腹

三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号 (にの)

妊娠九カ月の腹

三枝一
原さゆり
略号 (にみ)

八カ月の妊婦腹

三枚一組 四〇〇円
文原さゆり 略号 (にへ)

六カ月の妊娠腹

三枚一組 三〇〇円
原さゆり 略号 (にそ)

刺青姐御脇差短刀六尺禪腰卷勇姿

禪一本艷姿脇差

山原清子 略号(てね)

禪一本艷姿短刀

十二枚一組 二〇〇〇円
略号(てし)
山原清子

腰卷一丁艷姿脇差

十二枚一組 二〇〇〇円
略号(てふ)

腰卷一丁艷姿短刀

八枚一組 一五〇〇円
山原清子 略号(てな)

鼻いじめ三態

三枚一組 四〇〇円
略号 (はね)

寝棺の中の裸婦

原清子
二枚一組 三〇〇円
略号 (ねか)

人間一人がこつそりと入る厚板
作りの寝棺の中に、生前と何ら変
らない美しい死顔を、若
女の死体が横たわっている。娘の
葬られる姿に、関心をお持ちの方
は、ごさいませんか。

裸女二人の尻の下

十二枚一組 略号(まふ)

Mモデルに志願してきた幸福な男は、豊富な全裸の美女二人から徹底的にいじめられる。遅ましい素肌の臀部が男の頭の上に無遠慮にのっかってくる。華麗なマゾ絵巻が美しいカメラ・アイによってあますところなく捉えられていきます。どうぞ貴方を、この幸福なM男に入れ替えて、Mの醍醐味を十分に御賞味して下さい。

美女から縛られる

十二枚一組 略号(まね)

暴君と化した二人の遅ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく、縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程を連続で狙いをつけてゆきます。後手高手小手に縛りあげられて身動きもできなくなつた男に、これから二人のベテラン女性に、さてどのような暴虐のムチを揮うでしょうか、詳細は写真によってお楽しみ下さい。

痛烈ムチのご馳走

十二枚一組 略号(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとっては、恰好の弄び者である。二人の美女の手にあるムチや麻縄は、激しいいきおいで男の肌の上で炸裂する。忽ち赤いシミズ腹れがふくれ上り、血がにじむ。それでも女達のむごたらしいムチの手に止みそうにもない。やがて男の口からも痛苦とも快味ともいえる呻めきが洩れる。

汚臭と足舐の強制

十二枚一組 略号(まり)

女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている身の男にとつては、どうすることも出来ない。やがて女の足指が無理矢理口へ押し込められる。拒否しようにも他の一人の女が頭を押さえて逃がさない。二人の女による強制が、いつの間にか男を恍惚たる被虐の花園へさそい込んでしまう。

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mフオト

最新作M場面決定版

Mファン待望の

超傑作集

大手札印画紙焼付

各組十二枚一組

二〇〇〇円

八組全部にて

一三〇〇〇円

力作のMフオトが待望されて久しくなりましたが、ここに山原清子と大塚啓子のコンビの協力を得て血湧き肉躍る素晴らしい傑作を完成することができました。これこそMファンの方々が心から求めたいと願っている写真集です。

二女の戯むれと男

十二枚一組 略号(まも)

跪いた男の背中の上には、二足の美しい蝶々のように戯むれる二人の裸女があった。はじめ男の存在など無視していた二人だったが抱擁に飽きると共に、尻の下にうごめく男をなぶってみようという気持になった。何ごとにも易々として従うM男に対して、二人はどのような辱しめを与えるか、写真によってとくとお確かめ下さい。

馬を乗り潰す女

十二枚一組 略号(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイハイドウドウ、いくばくもなく男の馬は潰れてしまう。乗り潰された男は、さて、これから勝負気な二人の美女から、どのような恥しい仕置を強いられるだろうか。それは面白くてたまらない女達になぐさみの遊戯であったが、M男にとつては、身も凍るような戦慄的な暴虐であった。

首締めで刺す止め

十二枚一組 略号(まむ)

いくら痛めつけても辱しめても喜んでいるM男に対しては、最後の止めとして、遅ましい太股による首締めによって昇天させてやるのが御慈悲である。苦悶にあえぐ口の中には、汚物が、足の指が押し込まれ、男の顔が鼻が、むちゃくちゃにいたぶられつくす。さんざん弄れた男は、遂に精根つき果てて女達の軍門に降るのである。

二女の臀臭に泣く

十二枚一組 略号(まみ)

遅ましくも肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしやげて、その臀臭をいやというほど嗅がされている。なおそれでも足りないかと思ふ一人は勇ましく放屁を男の顔面にふきかける。今やグロッキーになった男に対して、二女の責めは巧妙なテクニクで男が泣き叫ぶまで更に続行されるのであった。



○ 山代正友様、吉井幸男様、七月号の通信でお便りありがとうございました。私、只今お勤めに出ておりますので、昼間はちよつと暇がございます。六時すぎでしたら、よいのですが遠方の方でしたら、ちよつとおあいできませんね。夜間の外出は母が心配します。で、今のところ月に一回か二回、映画を見にゆくくらいです。いずれアパートをかりようと思っておりますので、そうすれば幾分自由になると思います。梅田の地下街の書店で七月号を求め、パラパラと

めくっている中、△伝言板▽に私の名前があるのを見て、びっくりしました。さっそく編集部へ連絡して、今日編集長様とおあいしました。これからは又ときどき写真のモデルとなつて、皆様方ののらんにいれたいと思っております。でも、以前以上にふとってきておりますので、お気に召すかどうか不安に思っております。文章も字も下手なので、直接のお便りや読者通信も、もっと出したいのですが、遠慮しております。(大阪市△東浦ひかる▽)

○ マニヤ通信の責められた私の気持ちの橋あき子様、白川公園の思い出、胸のトキメキ、縛り、緊縛、エビ責め、後手吊り、乳房責、他甲雁字搦目、足吊り等々、まんどくするまで二時間でも三時間でも責めてみたい、縛ってみたい。こんなものではどうですか。私は女性を縛った経験もあります。福井県から出かけます。すきなのです。いや、好きというより気が狂いそうです。狂いそうな二人どうし共にがんばりましょうか。三十三才、会社員、大阪には商用で月に一度は自動車で出かけますが、その日には発行日の関係で間にあわない

と思うので大垣から大阪の間の国鉄の駅でまちあわせたらと思いましたが、いかがでしょうか。京都の藤島万寿子様、指定された場所に行きました。でも、あえなかったですね。来られた事はわかっているのですが、残念でした。お渡ししたき品がありますので、ぜひ連絡して下さい。(福井県鯖江市人高橋利雄▽)

○ 初夏の候、貴誌二〇〇号突破を記念すること、喜びにたえません。編集者諸氏の努力及びひたむきに、その努力を待ち受ける読者が一身体となつて、初めてなされたことと思います。ただグラビヤもなくなった昨今、貴誌がただの空想小説とならない様に希望するのみです。我國の経済も成長して、毎日の値上りムードの日でも日々の快楽のために心身を浪費し若い男女はダンス、たわむれの恋に打ち興じて自分本来有るべき将来を忘れる。そんな今、酒ものまねば、タバコも吸わぬ。かげごともしない男といえは、善良すぎるどころかバカといっても差し支えないかもしれない。マルキ・ド・サド選集を読みふけり芽を吹き出したSMという芸術の世界に足をふ

み入れた私です。いろいろと考える楽しみを得ている時、実質的かつ目の前に迫る描写でプレイの姿を教えてくれたのは貴誌にほかならない。「両手首は後手に括られて、曲げられた両足首とともに逆えびに緊縛されて、やわらかい乳房、腰に深々とロープがくいこんでいる。ギリギリと滑車を引上げると思わず口から悲鳴がもれ、苦悶の表情が顔から足の先まで伝ってゆく。完全に浮き上った体はゆっくりと回る……」と実にリアルに教えてくれた。若年の私などはただ想像するだけで楽しく、時には夢の中にまで、なやましく身をくねらせる女性を見て思わず飛び起きたりすることもあり、あるいは新しく買い入れてきたロープを取り出して、二年間の愛誌で得た知識を引っ張り出し、豊満な女性が目の前にいるかの様に空の中に動かす。これがエビ責、股間縛り、そして、こんなところで、くすぐり責め、浣腸をしたりすると……と一つ一つ。で、今のところ感覚の刺激を求めても始まらない。多くの書物を読み映画を見て想像力への刺激を求めましたが、つまるところ、最も恐れるのはマンネリ化である。その点体験記、カメラ・

ハントなんてのは面白い。又ただ我々が人間の情緒的発達課程で、育ってきたSM的な好みのために、社会一般の諸事から、秘かにかくれ、そのために本当のたのしみを得られないとしたら、それは実に残念なことである。近ごろ次々に出てくるSM映画が珍しさのみで見られなくなることを希望する。読者通信も近ごろはぜひ分幅ひろくなつたことは驚くばかりであるが、カメラ・ハントのアイデアは実にいいと思う。又、辻村さんの筆のうまさはずばらしい。

(京都市北区八原口守)

近畿圏にお住いの奇クファンの皆様、滝れい子画伯の熱烈なるファンです。大阪市内で鍛造関係の事務の仕事の傍ら、ローライレフで芸術写真らしきものを撮影するのと、毎月刊行される奇クを綴るのが趣味の独身男性です。幼年時代から自分のアブノーマルな性格については自覚していましたが、学生時代には運動選手の所謂ハートトレーニングの中にM的な嗜虐心を見付け、専ら男性責めの傾向の作品(?)が得意だったものであります。真のマゾヒスト青年としての作品は公開を憚る結果とな

り、行き詰りを感じております。ファンの皆様の中で、私の如き人間でもよいと仰る女性のモデル志願者がいらつしやりましたら、是非ご交際を願いたいと希つています。但し飽くまで縛りと責めを主体とした正道派のモデルを御願ひ致したいもので、ネクターや嗜糞、浣腸、切腹、等といった領域の嗜好は生憎持ち合せてはおりませんので悪しからずご諒承下さい。又、正真正銘の美女でなく、本籍が男性である方でも結構で倒錯美を狙うのなら、むろブレイボーイの方が好適かとも考えているのですが、同好の方が割合に少ないと考えられますのでよろしく。又、同好の趣味の方々と文通によつて、いろいろ御指導を賜りたいと存じておりますので、ぜひご恵信下さいませようお願いします。

(大阪市八森本生)

始めて投稿致します。自分の周囲の者、友人、自分と言う人間を知っている者にはSとかMとかの話は話し難いものであります。私の場合マゾですが、自分がマゾである事を自覚し誇りに思っている位ですからそうは思いません。といつて自分と同じ境遇にある人

間をみいだすということは、それ以上難関だと思つています。せつかくこの世に宿つた生命の中にMを宿してくれたのですから、無意味に終りたくはないものです。昆虫、魚類、その他の動物にもさまざまな社会があります。人間に於ても民族風俗等に伴いそれぞれ独立した社会をもっています。民主共産、西独におけるキリスト教民主同盟、印度の国民会議派等の集団があります。ですから私達もこれらの社会の一角にSMの組織をもとうではありませんか。そして御互いに呼びかけ語り合おうではありませんか。私達の築く組織は宗教団等の組織とは異なりあくまでも余り表面化しない潜在的立場である限られた同者のみによつて。私は前にも申したように根からのMです。と言つて対男のプレイは好みません。こんな私ですから思ひ切り責めて下さる女性からの呼びかけを待っています。貴女のいかなる拷問にも耐える自信があります。ムチ打等思い切与えて下さい。容姿、顔、体付き等問いません。根からSである方を求めます。

(北九州市小倉区八飯田直志)

八月号で夜乃探郎氏の筆で芳野

女相撲と女斗美

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 略号 八〇〇円 (すか)

相撲マワシ着用

女相撲投げ業 大手札八枚一組 略号 八〇〇円 (すね)

相撲マワシ着用

裸女の争斗 大手札五枚一組 略号 五〇〇円 (めん)

白晒六尺揮着用

裸女の寝業 大手札五枚一組 略号 五〇〇円 (めき)

白晒六尺揮着用

裸女相搏つ 大手札八枚一組 略号 八〇〇円 (えく)

白晒六尺揮着用

女相撲四十八手 大手札六枚一組 略号 八〇〇円 (すは)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 略号 八〇〇円 (すむ)

女斗立業の応酬

大手札六枚一組 略号 八〇〇円 (すち)

立業の攻撃場面

大手札六枚一組 略号 八〇〇円 (すた)

寝業の女レス

大手札六枚一組 略号 八〇〇円 (すほ)

女斗連続場面

大手札九枚一組 略号 一〇〇〇円 (すく)

眉美氏に対する公開状が書かれておりました。近來になく興味深く読ませて頂きました。実践派と幻想派の意見の相違というところでしょうが、私にとっては、夜乃探郎氏の御意見については、大いに共感をおぼえるものがあります。が、さりとて、従来長らく書き続けておられる芳野眉美氏の明朗で軽快そしてモダン味あふれる文章にも、それはそれなりに共鳴される点も多く、又最近、次第に天才的とさえ見える巧妙な筆のさばきで、まるで映画の一場面を見るような錯覚にさえ誘われます。只少し独断的に独りよがりとも思われる一方的な判断が、一部の人間に批判される種を蒔いたものと思えますが、英才的な人は、とにかく、そういう独断的なところが受けるのであって、四圍に気兼ねして書いていては、ろくなものは書けないということとは、よくよく考えるべきです。夜乃氏も公開状では、表面では芳野氏の文章を批判しながら、心では同調しているように見受けられます。夜乃氏も又英才の一人というべきでしょう。奇巧の執筆者の中に、このような英才を二人までかかえられているということとは大いに意を強くする

ところとす。「空想の楽しさ」これは私もよく経験するところで、本誌の小説なんかを読んだ後、寝ころんでいろいろの空想を馳せるひとときは、無二のリクリエーションで、ストレス解消にはもってこいだと思います。しかし、又反面、「空想だけではつまらない」という気持ちが起ることも事実です。空想したような事を自分でも実際に体験してみたいという気持ちが起るのも自然の成行きです。実際に経験してみても、空想していたときの方が遙かによかったと思うこともおありでしょう。これから、こういった掲載された文章に対する真面目な批判をどしどし発表してもらいたいものです。徒らに揚足とりにならず、温かい心の籠った公開状だったら、執筆者御本人のためでもあり、本誌の発展にも資するのではないかと考えます。
(静岡県沼津市八府中逸夫)

女王様方、私の切なる望みを叶えさせてくれるのは、この欄しかないと思いついてペンを取りました。私は小さい頃よりM傾向があり、一寸口では云えないいろいろの方法で自分を痛めて喜び、満足を感じていましたが、何か満され

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

ぬものがありました。それは若い美女に思い切り、責めぬいてもらいたいからです。機会がなく我慢してきましたが、その気持ちが募るばかりで思い切って通信を書いた次第です。私は現在二十一才で、ある広告代理店に勤務し、夜、その関係の学校へ行っているので、

(東京都杉並区八石原正一)

○

ニューモデル最新版の増田みゆき夫人の鼻責めは素晴らしいものでした。但し御主人との連縛鼻責めは男性Mの方が多くて女性側に無いことが怨めしい。何卒もっともつとみゆきさんの鼻を弄んで吾々鼻責めファン垂涎の特写を御頒布願いたい。又望外の御願いかも知れませんが、彼女の瞳孔検査、歯牙点検、など顔面翻弄を御主人に御願ひ出来ないものでしょうか。刑部典子嬢などの鼻責めも魅力あるものですが、辻村様如何で御座いますでしょうか。世の鼻責めファンの方々よ、御感想なり御希望なりを誌上に載せて、鼻責めムードを盛り上げようではありませんか。

但しMの鼻責めは、どうも性に合いませんな、(東京八墨堤生)

○

橘あき子嬢の呼掛けに応ず！奇ク七月号マニヤ通信欄にて、貴女の告白文を拝読、貴女のような素晴らしい女性が身近かに(小生は名古屋市市中村区堀内町に勤務)居られるのを知り、大変頼母しく思うと同時に貴女の呼掛けに応ずるため初めて読者通信に投書した次第です。小生浣腸、股間縛りに特に興味を持って居る身長一七〇糎、体重六〇キロ、剣道三段のサド。お互いに人格と意志を尊重し、お互いの生活を侵さない前提のもとで御交際致し度く思います。通信欄で約束の場所と日時を御指定との由です。昭和四十年七月一日十

八時より十九時の間国鉄名古屋構内の金の柱にて赤表紙の本を持ちお待ちしてます。(名古屋八伊藤一夫)

○

奇クがグラビヤを廃してからかなりの月が経過しましたが、それからの内容の充実ぶりは眼を見張らせるものがあり、編集部の方々の努力のあとが眼に見えるようです。特に七月号は、旧奇ク(といつてもその全盛時代)に匹敵するような内容で、グラビヤがなくとも、充分に楽しめる事を実証しております。写真に元来あまり興味のない小生にとって、この行き方は大賛成です。ただ唯一の大きな落胆は、毎号楽しみにしている団氏の「花と蛇」が休載された

こと。もう一カ月待たねばならぬのか——という思いが、七月号の休載告知を読みながら強く胸をおそつてくるのをどうしようもありませんでした。また以前「花と蛇」前編)のように、飛び飛びになる前兆ではないかと、要らざる心配までした次第です。ようやく空白の一カ月が過ぎて、今日、八月号をお送りいただくべく、代金を同封しましたが、再び先月のような失望を味あわされたいように祈りたい気持ちでいます。どうか団氏に大いにハッパをかけて読者の期待を裏切らぬようお願い致します。つたでに注文を二、三致します。一、四馬氏による「花と蛇」画集を作ること。今出ているのは小説の内容にマッチしていな

四馬孝 妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号一〇〇〇円(しせ)

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組

略号六〇〇円(のゆ)

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号一〇〇〇円(しき)

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンドラーの浣腸
- 五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号一〇〇〇円(しえ)

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号一〇〇〇円(しい)

- 一、溜水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

いようなので、忠実にストーリーを追ったものを作る。二、最近奇クサロンに読者の方々のプレーフオトがよくのりますが、本人の承諾の上で誌上に発表されない傑作を、限定版として出す。その際は本人の感想その他を付ける。三、最近、責め映画が増加しつつありますが、そのシーンを特集号として出す。これはどうしても、スクリーンからのスナップとなり、版權の問題もからむと思いますが、何とかならないものでしょうか？以上、小生の望みを思いつくまま書いてみました。あまり熱心な読者とはいえませんが、奇クとはもう十年以上のつきあいであり、最近の世情では、唯一の心のなぐさめとなつてゐるのであえて、希望を書いたわけです。編集部の皆さんの一層の御努力を切にのぞんでいます。(石川県八長坂弘)

○ S女性へ私は今年で二十三年になるM男です。自分の性質がMであるということがはつきりわかつてから七年の月日が流れました。KK誌を愛読してからもうすでに五年間たっております。その間、多くのS女性が誌上に現われ、我々M男にMであることの喜びを与えてくれ、我々の仲間の幾人かは幸運にも、実際にS女性の馬になり尻に敷かれ、便器になつて、Mであることの欲喜にひたつたことと

思います。私も何度かS女性に呼びかけ、S女性の手によって責めさいなまされたいと思いましたが、多くのM男は私に比べかなり強度のMのようで、どんなひどいムチ打ちでもかまわないとか、便器になりたいとか、あるいは一生奴隷として奉仕したいとかと私にはとてもまねのできないようなことを言っておられるので、私のような軽度のMがS女性に呼びかけたところで、多くのM男の中から選ばれる可能性はまずないものとあきらめ、いままで一度もS女性へお願いしたことはないのですが、しかしいくらか軽度のMであるといつてもMであることには、まちがひなくS女性の手にかかつて責められ、恥ずかしめられたらという願望は一時も消え去り得ない状態です。もしS女性の方で、私のような男でも、いじめてやろうと思ひになりましたら、私にその機会を与えてやって下さい。S女性が私にMに生まれた喜びを与えてくれる日を、一日千秋の思いで待っております。(横浜市八久保田生)

木村洋子 完全逆さ吊りフオト 分譲

大中判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

○ 私は数年前に、鼻責め体験を發表いたしました古田です。その後皆様の中に私の体験を元にして種々と実験されて居られる様子、何よりと喜んで居ます。七月号には増田夫妻の貴重な体験並に実演記録が發表されました。何と云つても鼻責めは鼻中隔に穴をあけて鼻環を通じていじめるのが最高であります。勿論初めは種々な方法で鼻いじめをやりますけれども、最後には鼻環を通して責めるのが一番面白いものです。責められる側は、屈辱を感じ又最高の苦しみであります。私の鼻中隔の穴の大きさは二十ミリ近くもあります。それは毎日何年もの間、鼻責めを受けたために次第に大きくなりましたが、皆様の中にもその様な方は余り居ないと思います。是非増田様とも互いに鼻環を通して紐をつけて引張り合い競技をして何れが痛さをたえて引張り勝つか鼻綱引き競走をしたいと思ひます。或いは又誰が一番重い石等を下げられるか鼻梁の強度競技をしたいと思ひます。又一番太い棒を通す競技か種々と面白いことが出来ますが是非将来此の様な競技をしたいと思ひます。いつかも發表したことです。鼻責めにて鼻環海老責めは一番苦しく強度が強いので十分もすると氣絶をします。奴レイを持って居る方はお試し下さい。鼻翼を貫き通すことも容易ですが(簡単に貫通します)せいせい半日位通したなら取らないと跡が暫らく残りますので残念ですが、長期間は出来ません。勿論鼻中隔の穴は普通の状態では他人には見えません。鼻翼ですと穴をあけたままですと日本の現状では未だ早いと思ひます。世の中が進んで来てアクセサリーとして耳や鼻翼は勿論、鼻中隔等に大きな穴をあけて種々なものを装着する様になることと思ひますが、現状では外側に穴をあけるのは今暫らく差控えた方が良いでしょう。最近鼻責めのためのモデルには困らなくなつた様ですから是非共「宇

四馬孝画

秘蔵版

責め画集

分譲

責められる美女波津子の痴態

大判判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

白く輝く肌にどす黒い縄。

一、恐怖の浣腸責め展開す

二、柱抱きアグラ縛りの責め

可憐な美少女加奈子の羞恥責め

大判判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

捕われの美女加奈子の運命

一、ローソクの火責めにあう

二、ヨチヨチ歩きの美少女

『花と蛇』画集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えに)

略号(えに)

一、京子に芸を仕込む鬼源

二、静子令夫人への汚辱

三、操り責めにあう美津子

四、片足挙げ縛りの桂子

五、粗相を強要される京子

浣腸と排泄画集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えい)

略号(えい)

一、恐怖の浣腸台の美女

二、浣腸のあとの楽しみ

三、百CCのグリセリン浣腸

四、塩水をヤカンで飲ます

五、排便を耐えぬく美女

女体吊責め特集

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えほ)

略号(えほ)

一、弓吊りローソク責め

二、エビ縛りの宙吊り

三、股間縛りの責め

四、美女の舌の先縛り

五、股間縛り鼻孔吊り

美貌汚辱と鼻責

大判判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えは)

略号(えは)

一、美しい女の鼻をなぶる

二、一本一本女の鼻毛をぬく

三、美女の口中をほじくる

四、泥絵具にまみれた顔

五、ラーメンを食べさせる

宙の何処かで」にあった様な場面を撮って置いて貰いたいものです。増田夫妻には感謝して居ます。楽しい生活を送られて居る由喜ばしい限りです。機会がありましたら一緒にプレイをしたいと思つて居ます。愛好家の皆様是非御連絡下さい。又サジストの女性の方奴隷を求められて居る方は御一報下さい、あらゆる屈辱と苦しみ耐え抜いて御奉仕を致します。それでは又お便りします。(千葉市八古田義郎)

○

編集部の皆様、同志の皆様。ますます、お元気の様子で何よりです。小生、K誌の読者通信に便りをしようと思つてから、約十年になります。中学の頃から毎月号を楽しみに買ひだして高校、自衛隊、社会に出て現在の会社に入り、そして結婚。今では二才と二カ月になる女の子のパパになってしまいました。と云つても年令は二十八才になったばかりです。その間、K誌を手からはなした事はないほどの熱烈なファンです。他に「裏窓」「風俗奇譚」そして今はなつかしい「風俗草紙」とSMに関する雑誌は、必ず自分の物にして来まし

た。しかし読者通信に便りをしなにかぎり、なんだか仲間はずれにされたような気がするので、ようやく筆をとり、十年間の思いを書きたいと思うのです。しかし、そうなるにK誌が十冊ほど埋つてしまふので、かんたんにするつもりです。小生、結婚前に一人の男性、そしてもう一人の女性とプレイをしたことがありました。しかも度々でした。結婚と相手方の都合で今では妻とのプレイのみになりましたが、妻は本来サドでもマゾでもないようなので、小生がSになつて海老責めになると、すぐに痛がりますし、小生がMになつて責めさせても、ヒントを与えてやらないとアイデアが浮んで来ないようです。しかしこれは無理のないことでしょう。サド、マゾの素晴らしいプレイはやはりサドとマゾのみの知る、そして許されたものなのです。ですから、したがって、小生が本当にエクスタシーにひたつて居られるのは、K誌と共に有る時です。先に書いたように小生はSにも、マゾにもひたつて行ける、つまりそこに責めと云うかプレイがあるならばSでもMでも、そして男でも女性でもよいのです。そしてプレイだけでなく、同好の男女

と、いろいろと話し合うと云うのも十年來の望みです。その意味から、六月号に御意見を申された、渋谷の中村一雄氏に同調いたします。小生は柔道と空手は初段、スポーツはほとんどやりましますし、読書、音楽はモダンジャズ、ダンス、そしてボーリング、撞球、仕事も好きです。身長は大きな方でなく一米六三センチ、体重は十八貫、責める方も責められる方にも強い男性です。これからほしどし便りを出すつもりです。それに体験談や、サド、マゾの小説も書きたいと思って居ます。我々のために働いて下さる編集部の皆様、そして同志の皆様元気で頑張りましょう。(埼玉県川口市八押原英夫)

○ 七月号の須渾朔氏、六月号神戸の増田トシロー氏、その他同好の肥大美ファンの多数に力強い感があります。すべての雑誌の婦人モデルは百%若いスマートな女性ばかりの中、先日分譲フォートに水野弘氏夫人の年増美に勇気づけられ、妻をモデルに数枚撮り、幸い現像焼付器具は有りますので、手軽に焼付け夫婦共々(妻はあまりそのケはないが)楽しんでおります。妻は四〇才で八〇キロの肥満

体です。昔三流映画会社の大都映画に大山デブ子嬢が活躍しておりましたが、現在でもこういう女優の二、三人は居てもいいと思うのですが、京塚昌子は演技畑が違いますが駄目で、昨今は春川ますみのスタイルで目の楽しみにしております。我国ストリップの草分けの一人ヒロセ元美を四、五年前名古屋と京都で拝見、すっかり大年増の超ボリュームに圧倒されましたが、先日週刊現代で登場健在を知り、御誌でも下着(衣服)着用(裸にならなければ女性美は出ないとは限らない)でも口絵グラビアに採用されてはどうです。又刺青は小生小学五年の時、キングコングを見にいき同時上映映画「愛憎峠」昭和九年の劇中劇で山田五十鈴(当時十八才)の弁天小僧を見初めて興味をいだき小生少々絵心が有りますので今度妻を説得して巨体?にマジックインキ(自宅風呂ですから後の心配はない)で刺青を描き写真に撮ろうと思っております。(滋賀県八赤畑修造)

○ 七月号拝見致しました、楽しみにしていた「花と蛇」の休載は実に残念です。次号は待ちわびる事、切なる物があります。著者は、本

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ)

瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の女性切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

女体介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

下腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

業の仕事で多忙との事ですが、これを待ちわびている愛読者も多い事と思います。二、三頁でも読めばストレス解消にもなるんですから、是非来号よりは、執筆を願います。十年有余の愛読者ですが、幾度かの苦難を乗り越えての編集発行には、誠に敬意を表しております。

ます。最近のグラビヤ、写真等の廃止等に相当数の読者よりの不満が出ていますようですが、永い読者である小生等には、せい沢すぎる希望であるかと思えます。新聞等によりますと警察庁辺りでは、今年度は不良出版物?の取締り等に、二層の力を入れるということ、

最近の教育ママ達の少し逆上気味の頭には、まるで不良出版物といわれるものさえなくしさえすれば、子供達が健全に育つかの様な考えがはびこっているようです。しかし、一体全体、悪い本とは悪書とはいったい何を指すのでしょうか。女性の裸体の写真を掲載しているから、とか、閨房の様子を描写しているからとかいうのが悪書の指定の基準をなしているんだと、すれば世の親達は悪い事を自分達がしているんだと云うことをまるで世に宣伝しているようなものです。が、セックスがいけない

事であると思っている大人はいない筈です。種属保存の欲求から、いやいやセックスを行っているものはいない筈です。H・エリス著の「性の心理学的研究」によれば「性的情熱の最高潮にあり、しかもそれを満足させ得る幸福な状態にある場合には、子を生むという考えは、概して意識の奥へ押しやられていく」とあります。ある種の修行をつまれて高僧に対して、キリスト教を唱えた女性が「その僧より、御主人を腹上にのせ、こころ一発という時に、いったい神はどこにおられるか」との問いを受

け、赤面して答えるすべもなかったといわれています。最近の各地に於ける「青少年保護条例」等の制定の状況を見てみますと、それを要求するものが、最初にそれを提唱するものがPTA等を始めとする、父兄達で、それを警察がバックアップしている（なかには、これが逆の場合もある）という状態です。自分達で、自分達の一番大切な権利を、すなわち「言論の自由」を捨てているのです。何とも残念なことです。この様な状況下にあつて、発行を続けていく事は確かに非常な困難と苦勞を伴う

ものである事は十分に察しられます。現に昨年もすでに「裏窓」が廃刊となり、さびしい状態となっています。小生の如く十年余りの読者にとっては、少し位、誌面が寂しくなったからといって、文句をつけるという様な気にはなりません。色々要望、要求も多い事と思いますが、現在のままで発行を続けられます事を願っています。読者の欲求と云うものは、一をのせれば二を、二をのせれば三を、という様にまるで米軍のベトナム爆撃の如く、とどまる所がありません。編集部の確固たる自信が、態度が本誌を発展させ、何時まで続かせる事を確信してくださ

「今月の新版Mフォト」

読者M氏受難の巻

女性対象のMモデルに応募してきた愛読者のM氏が、自分が女性から、こうして貰いたいという希望をもととして実施したプレイを側面から撮影したものです。S役女性は最近頼に生長を遂げた大塚啓子嬢。豪華なホテルの一室に繰りひろげられたMプレイの写真化、特にその一部を御希望の同好者の方々に焼増いたします。

◎M組二十五態◎

MMMMMMMMMM
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

1 両股責め押え込み鼻弄り
2 足の踵で鼻の頭をつぶす
3 皮ムチを顔に浴びせられる
4 犬男になめさせる太股
5 足の指をすっぽりなめる
6 顔面騎乗の女御主人さま
7 臀臭を嗅ぎまわらせる犬
8 足の裏なめを強制する女
9 女御主人の唾液をのます
10 玄関でチンチンをする男

大手札印画紙焼付(9×13種)
各組一枚一組(送料共)

一組一枚 三〇〇円
十組十枚 二〇〇〇円
二五組二五枚 四〇〇〇円

MMMMMMMMMM
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

11 玄関で足指をなめさされる
12 私の放屁でも驚くらえ！
13 足の踵を必死になめる犬男
14 両股の下に埋れた犬の顔
15 頭を蹴られた尻尾を振る犬
16 両股の首絞めに喘ぐ犬男
17 臀部を革ムチで打ちまくる
18 ツバの御馳走を飲ませる
19 足の指先で鼻を摘みあげ
20 鼻も口も足の裏で蓋される
21 足のお味はどんな具合？
22 この犬奴踏み潰してやろう
23 股に挟まれて幸福な男の顔
24 さあ口を開けてごらん！
25 両股の下にある悦楽境

始めてお便り致します。数年来の貴誌の愛読者で御座居ます。最近は何々入手が困難になって参りました。本当に残念です。貴誌が益々発展致します様心よりお祈り申し上げます。もう一つ残念な事はグラビヤ、挿絵類が全く見られず、貴誌の価値が半減したことです。四馬孝先生の大ファンである

M生V

○

始めてお便り致します。数年来の貴誌の愛読者で御座居ます。最近は何々入手が困難になって参りました。本当に残念です。貴誌が益々発展致します様心よりお祈り申し上げます。もう一つ残念な事はグラビヤ、挿絵類が全く見られず、貴誌の価値が半減したことです。四馬孝先生の大ファンである

私に取りまして只一つの楽しみを失いがっかり致して居ります。しかしながら特別分譲品として先生の絵を私共ファンに提供下さるのには、全くもって天の助けで有り貴誌、編集部御厚情が身に感じられうれしく思います。今後共、先生の作品をより一層多く拝見させて頂く様お願い申し上げます。最後に貴誌の発展と編集部御一同様並に四馬先生の御健闘をお願いしてペン置かせて戴きます。なお別紙の通り四馬先生の作品申し込みます。一日も早く御送り下さる様お願い致します。(京都市八沼田堯子)

○
奇ク誌上で、青木順子病氣静養のことを拝承いたしましたして、手紙で伺う次第でございます。私は、若い頃から芝居が好きで、それも歌舞伎から新劇、怪演劇に及び、暇があればショーも見て歩いて、よい舞台におつかのを楽しみにしています。一昨年新宿の「内外ミュージックホール」で青木順子の舞台を見まして、感嘆しました。しかし二、三見に行っているうちに、小屋がつぶれてしまいました。そのうち、鶴見の「ベッセカイ」というヌードショーの小屋で、彼

女の舞台を見ました。これも、なかなか面白いものでしたので、私は小屋のマネジャーに頼んでスナツプを撮らせてもらいました。それ以後、もう二年近くも彼女の舞台に接することができず、どこで見ることができたらうと探していた次第でした。病氣になつてしまったとすると、まことに惜しいことです。もう回復したでしょうか。承れば、向井一也氏というパートナがある由、今はどういう企画で、あの種のショーを演じているでしょうか。何とかまた、あのような舞台を見たいものと思ひ、消息をおたずねする次第です。

(東京都八谷中市郎)

○
つれづれなるままに、法医学や犯罪に関する本を読んでみました。殺人マニヤにとつてゴキゲンな内容がいっぱいなのでうれしくなり、現在四冊目です。同じ傷でも刺、切、割、撲など写真入り解説入りで書かれてあり、古今東西の死刑方法など何度読んでも楽しいものです。実話篇で首のない乳房、その他をえぐりとられた全裸の美女？の写真がグラビヤ第一頁にあったのはすばらしく、犠牲者をいたむ心より喜びの方が先立つ

「今月の新版分譲品」
血紅使用

屠腹される女体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のる)

下腹から脇腹、更に臍の傍から鳩尾へかけて、脇差にて切りさばかれてゆく豊富な女体。やがて咽喉元止めの一刃を刺されて、あわ絶命。豊富な血紅を使用して美しい女体が命を失つてゆく有様を順を追つて、刻明に描写し、血まみれの屍体となつた女の美しさを最高度に發揮しました。

血紅使用

美しき女の屍体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のり)

下腹部を朱に染めて斃れた美しい女体。氷の刃を肌の上に残して、喉の刺傷から死屍には、胸と咽の間の刺傷から血が溢れ出ている。眼をむいて息絶えているのだ。美が全面に漂っている。

血紅切腹連続写真

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のせ)
白く輝く豊満な裸身を惜しげも

なく晒して、大勢の人達の前で女が腹を切りさばいて命を自らの手で断つ順序を連続で写真化したし、ました。下腹から手まで血だらけにした苦痛にのたうつ女体。そこには女の哀れさと美しさ、とが、渾然一体となつて、マニヤの方々の胸に迫ってくることでしよう。

血紅使用

切腹した女の死体

大手札印画紙焼付
十二枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号(のい)

自らの手で短刀によつて下腹を切りさばき、激甚な苦痛に悶えつつ切腹という崇高な儀式を終えた女は、今や全身を血に染めて屍を横たえて、血を吸つて白い肌を割る鮮烈なコントラストを作つて見る人の目を驚かす。

血紅使用

立腹に悶える女体

大手札印画紙焼付
十枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号(のさ)

一本の木の前で散る花の如く、渾然と立腹の女。壮絶なる実演を行つた。麗な女身。下腹を血まみれに、立腹したまま行かう女体切腹。溢れる血の苦痛にのたうつ姿を異性の目の前に展開したいという切腹女の性の昂揚するマゾヒズム。

のですから全く困った人間です。それでも性格異常の項に殺人狂も加っていましたが低脳やヒステリーに多いそうです。正にその通りではありませんか。死刑奇譚、事故死奇譚など、例によって想像をまぜ、一筆書こうと思っただけが、果して採用となりますかどうか。米國からのニュースによると、あちらにも同じ人間が居るらしく、昨年暮あたりからギロチンの模型が売りだされました。約一米位の高さで斧もかなり重く、実物の二分の一と言います。勿論アントワネット、コルデーらの人形がついていて、首穴にさしこみ斧を落せば、首がコロリとおちる仕掛け。希望によっては映画女優の首も斬ることができます。おねだんは十四ドル（私なら十三ドル十三セントにする）即ち約五千元。しかし更にこの何倍かの運賃を付けても我が税関を越えることはできないでしょう。せいせい山本富士子の写真に針を刺したり、吉永小百合の写真の首をチョン斬ったりするのが関の山とは情けない限りせめて彼女らの人形だけでも売ってあげれば絞首刑に処することが出来るのです。さて八月号ですが室井氏が早速「手打ち」二題をだし

てくれたので感激、次回は是非首のとんだ場面や完全に吊り下った絞首死体をお願いします。水野氏のフォトもすばらしく、今後のご奮闘をお祈りします。十九頁の挿絵がまた面白い。一歩進んで美女の下半身は鰐にくわえられ、首は蛇の口内に入っているとなれば満点以上ですが。このほか牧氏のそれと云い、今月号の挿絵は最近になく良いものでした。本文の方も「懐古趣味」「妙姫抄」が興味をひきましたが、期待の「啓子散華」が第一ラウンドだけとはものたりない。しかしまだ十四ラウンドあるのだからたっぷり楽しませていただけたらと思います。まさか啓子たるものが第二ラウンド十五秒でノックアウトにはならないでしょう。分譲フォトも今月の新版は「屠腹される女体」「美しき女の屍体」「絞首された女体」などすばらしいものが並んでいきます。特に「された」と過去形になっているものこそ我が意を得たもの。おねだんもまた良すぎて一度にはムリですが大いに期待しています。大塚啓子ガンバレ。（福島県八黒田寿）

小生、昭和二十八年頃より奇ク

血紅使用

切腹に苦悶する女

大手札印画紙焼付
十枚一組 略号（のむ）
大塚啓子 略号（のむ）

正面に坐して、静かに切腹する汚れた白磁の女体が、やがて迫りくる激痛に身悶えして、あられもなく狂態を演ずる。さまたまな場面を真迫的に印象しました。感極まった法悦の境地が、写真一杯にむんむんする妖氣と共に満ち溢れています。

血紅使用

絞首された女体

大手札印画紙焼付
六枚一組 略号（のひ）
大塚啓子 略号（のひ）

桜の樹の枝に首を吊られて縊死を遂げた女体。口からは血反吐を吐き、絞首体となつた絶命した女体。果して如何なるエキセントリックな美しさがあるだろうか。

浴室の全裸刺青

大手札印画紙焼付
五枚一組 略号（よな）
山原清子 略号（よな）

全裸の肥り肉を麻縄できりぎりしと無理に縛り上げられ、浴槽の中へ無理矢理に浸される。只でさえ力いっばいに締め上げられた麻縄は湯を吸って、肌に喰ひ込めた。熱い湯に蒸された背中、刺青は

益々鮮明な色彩を露呈してくる。刺青と素晴しい緊縛全裸美が十分に楽しめるフォトです。

海老縛りの表情

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号（えふ）
大塚啓子 略号（えふ）

エビ縛りで放置しておく、次第に苦痛が増してくる。高く持ちあげられた足首、釣りあがった後手の手首。柔軟な女体とはいえず、苦しい。のけぞって悶える表情が顔面は勿論のこと、全身に亘り足爪先まで漲っている。

乳枷貞操帯着用

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号（もや）
山原清子 略号（もや）

お碗を伏せたような大きな乳房が、革製の枷で根元を締められ、むくむく盛りが上り、前には黒光りする貞操帯がびたりと切り込んでいる。装束が正面向いて、晒され、後手は革紐で括弧に掛けられ、後手は革紐で括弧に入れられた女

檻に入れられた女

大手札印画紙焼付
二枚一組 略号（もの）
山原清子 略号（もの）

身体がやっとなるか入らないかの木製の檻に閉じ込められた女は、まるで白い肌の動物がうごめいて、いるのと変りなかった。

を愛読している一読者です。あの頃は一月毎に頁数も増し、充実してくる貴誌に本当に楽しませていただきましたが、最近は悪書追放運動とかで貴誌も、その影響を受け毎号楽しみにしていた、グラビヤが影をひそめてしまい、がっかりしています。然しグラビヤに代り、奇クサロンにて、夫婦プレイ愛好家の「夫婦のSMフォト」が次々と紹介され、心から嬉しく思っている次第です。なんといても確実に存続発行して下さることを、小生等永年のファンの熱望です。故、徒らに世評にさからうことなく、続刊されることを心からお願い致します。貴誌の今後の御発展を祈る。(静岡八長手栄)

私は成る宣伝社に勤めている一女性です。ここ一年ばかり前より御誌を読ませていただいておりますが、お便りを出すのが、今度からはじめてです。私は仕事の関係で宣伝車に乗って、京阪神地区をいろいろの商品を宣伝しながら回っておりますので、毎月号はその都度、目についたところで求めております。このごろは名古屋の橋あき子様神戸の大西良子様、名古屋の大西まさ子様はじめ、多くの同

性の方々のお便りがのっておりまして、私も気持が楽になって、はじめてのお便りを書いてしまいました。私の知っているかぎりでは、御誌の女性読者の方々も相当あるように思いますが、どうしても引込み思案で、表面に出てこないのではないかと思います。私は商売柄、人前で宣伝をしたりするので、おてんばになってしまったり、少し活発すぎるようなところがあります。中学を卒業してから、三仕事を交えましたが、今のお仕事が一番適しているように思えます。父親に早く死に別れたため、高校へはやってもらえませんでした。が、中学での成績はよかった方です。御誌は私のような世間うとい者に、いろいろと変った知識を与えて下さいますので、毎月楽しく読ませていただいております。今私は朝は早く出なくて、もよいのですが、遠方へ出かける、と、どうしても帰るのが遅くなり、お休みも不規則です。お友達もなかなか出来ないのです。これからは、ときどきお便りを出させていただきます。読者の皆さま、どうか、この淋しい私のよいお友達となって、お導き下さいませ。母と弟と三人の貧しい生活で

「今月の新版分譲品」

浣腸される清子

大手札印画紙焼付

三枚一組 五〇〇円
山原清子 略号(かろ)

蒲団の上に足を投げだして長々と寝そべった清子さんの可愛いアヌスに浣腸器の嘴管は迫ってゆく。初めて試みられた清子浣腸実施の有様をごらん下さい。

浣腸に興ずる女

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(かへ)

イルリガートル、エネマシリッジ、五十ccガラス製浣腸器という器に使用している清子嬢の艶なる姿はまことに刺戟的である。

浣腸に悶える

大手札印画紙焼付

七枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(かに)

SMに対して大きな理解をもつて没入している山原清子は、こと浣腸に關しても異常なまでの関心を抱いていることがわかった。もろもろの浣腸器に困れて、その陶酔の中にある表情をみて下さい。

乳房責め五態

大手札印画紙焼付

五枚一組 六〇〇円

山原清子 略号(てら)

刺青にばかり気がとられていたが、彼女のもう一つの大きな特徴はオッパイ小僧ばりの巨大な乳房である。内容の充実した重量感のある乳房が、縄によってどのよう料理され誇張されるだろうか。

禪美に差じらう

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円
玉田美佐子 略号(こん)

人一倍羞かしがり屋の玉田美佐子が全裸にされて、白晒の六尺フンドシをさせられたときは大変だった。大騒ぎをして恥らいながらポーズをとったが、さて、この魅力的な写真をマニヤへどうぞ。

啓子をいじめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円
山原清子と大塚啓子 略号(うの)

大塚啓子が殊の外は氣にいった山原清子が自分のSMプレイの相手に選んで縛り上げ、情容赦なく転がし蹴上げ、さんざんに弄ぶ様子は、二人とも若々しい美女だけに言うに言われぬエロチシズムがムンムンするSMの臭気を混えて画面いっぱい展開します。

啓子を縛しめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

すが心だけは豊かに暮そうと心掛けておられます。それから同性の方々も、もっと通信らんでお顔を見せて下さい。お願いします。(豊中市八守口順子)

○
六月号の奇クサロン十七頁掲載の「M男とズロース」バンドとズロース着用の私の写真、如何でしたか。私の恥しい写真が皆様の視線の前にさらしものになったのかと思うと、やるせない様な妙な気持ちですが、しかし大変嬉しい気分一杯です。よく印刷されておりますとはいえ、矢張り判然としな点もありますので一言説明申し上げます。先ず上部に黒く下っているのは、かがんだ私の口一杯につっこまれ余った部分がぶら下っている黒の月経帯です。穿いているのは前開式のメロディ婦人バンド特製二重式ズロース形という素晴らしい月経帯です。中央に白いボタンが見えます。両手にもって穿こうとしていたのは、勿論ズロースです。黒い上等のメリヤス製です。これを購入した時が傑作でした。一年前の二月頃ですが、徳山市の近くに光という人口三万位の小さい市があります。その衣料店というより田舎によくある雑貨屋

さんですが、若い奥さん一人なのを見定めてから入って行き、昂奮でからから乾いた唇をなめながら「あのうお宅にズロースはありますか?」と尋ねました。勿論一度ではわかりませんでした。まさか、この三十男がズロースを呉れという筈がないと思ったからでしょう。ようやくの思いでズロースを求めている事をわからせました。子供さんですかというので大人用ですと答えると、何んと黒のズロースを出してきて私の目の前にひろげました。それぞれ一枚宛もらう事にして代金を尋ねますと一枚二八〇円ですから五六〇円ですといつて包みかけますので、私はここぞと勇気をふりしぼって、黒いズロースをとりあげると「あのう、ここで穿きたいんですが」と云いました。「えッ、あんたが?」と絶句し、うなづく私にあきれた様なさげすんだ視線を投げかけました。「これをはくと温かいので大好きです」と云い訳をして再び頼むと、ようやく奥を指さし「そこでもいいですわ」と云ってくれました。私は靴をぬいで奥へ上りましたが、奥さんの方からまる見えで些か困りました。ズボンの下には特製のフリルのついた大き

山原清子と大塚啓子……

略号(うな)

同性愛的な親密な境地に達した二人が火花の出るような緊迫した熱烈な緊縛プレイを演じます。これは清子が啓子を縛り上げて身動きできない彼女を熱く抱擁するに至るまでの縛り過程と両女の交歓風景を連続キャッチしました。

山原を責める大塚

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子と山原清子……

略号(うな)

厳しく縛りあげた山原清子に対して、乳房責、擦り責め、逆エビ責め、首絞め、といういろいろの女体責めを敢行するベテランの大塚啓子。女から責められた清子が欲喜の叫声を挙げて身をくねらせば益々かきかかかって責めたてる啓子の巧妙な手さばき――

逆さ吊り正面背面

大手札印画紙焼付

二枚一組 五〇〇円

増田みゆき 略号(つる)

両足をはちきれんばかりに大字に開いて逆さ吊りにされた新妻増田みゆきのあからさまなポーズを前と後から写しました。

夫婦連縛鼻責

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田みゆき夫妻 略号(らか)

辻村隆氏が増田みゆき夫妻を連縛して責めるという珍しいフोटです。これは七月号のカメラ・ハントで詳しく述べてありますのでごらん下さい。

夫を責める新妻

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はや)

これはMの夫を責める新妻の生態です。みゆきがS役を努め、夫婦のいたわりを心に秘めながら、反面夫相手のこと故遠慮気兼ねなく存分に腕を揮っています。喜代司の鼻孔にはめられた牛の鼻輪など奇妙な文献といえるでしょう。

牛男をのりこなす

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はま)

鼻輪をつけられた牛男、夫の喜代司は妻みゆきの御主人様に、乗りになり、足で顔を蹴られ、足を舐めさせられ、頸にまたがられ、などして、さんざんに弄ばれる夫婦のSMプレイの生態が、鮮鋭なるレンズの目によって、いきいきと描写されています。カメラ・ハント御参照の上、Mフオトとしてお気に召したら、この幸福な御夫婦のために、どうか一度ごらんになって下さい。

なゴム付の月経帯を当てていたのですが、ままよと私はズボン脱ぎ手早くズロースを穿いてしまいました。私は靴をはくのもそこそこに出て行きましたが、全く大変な真似をしたものだ、今でもその店の前を通ることが出来ず大回りをしています。話が横道へそれましたが、そのズロースを穿こうとしているわけです。尚、足元にちらばっているのは、黒やピンクの生理バンド、真紅のズロース、パンティ等です。美柳輪様、貴方のMフोटで干している女性の下着は、右からズロース、メンスバンド、シユミーズだと思いますが、当りましたか。名古屋のG様、生理バンド御愛好の由、産後バンドお手持ありませんか。編集の方様、私の拙い文や写真をのせていただいて本当に有難うございます。御好意に甘え、もう一枚フोटをお送りします。これも口に月経帯をくわえ、ズロースを穿き、四つ這いになり頭から赤いズロースを穿いた恥しらずのスタイルです。

(徳山市八安田隆夫)

八月号入手致しました。十四頁に青木順子ショーが京都であった旨ありましたが、順子さんはもう

よくなったのでしようか。これからもショーに出られるなら出られる劇場(予定の)名等困難とは思いますが、誌上にのせて下さい。間違っても構いません。映画の紹介は以前より多く誌上に出てきて結構ですが、ピンク映画で美女の縛りの出てくる映画も多い事です。からピンク映画のストーリー(美女の縛られる)をもっとのせて下さい。スチールを載せられぬ事情は、二二六頁の御回答で判りました。「花と蛇」映画化されて楽しみにしています。十四頁にも一七八頁にも映画会社や、いつ頃から上映されるかのついでにありませんか。次号では是非知らせて下さい。(東京八熱心な愛読者)

初めてお便りします。私はSMが六対四ぐらいに感じている二十才の男子です。私の趣味は浣腸、羞恥責、緊縛、奴隷などです。もしパートナーになってくれる女性の方がいましたら、ぜひプレイをお願いいたします。私の職業は公務員です。決して遊びのつもりではありません。まじめな方なら年齢など問いません。貴女がSなら私はMに、もしMなら私がSになります。プレイによって生まれる真

☆傑作迫力Mフोट☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふそ)

臀の下に呻吟する

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふた)

二女の股責地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふぬ)

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふち)

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 二五〇〇円 略号(ふよ)

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 二二〇〇円 略号(ふり)

顔面を玩弄する

大手札八枚一組 二〇〇〇円 略号(ふわ)

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 一八〇〇円 略号(ふる)

臀臭をかかされる

大手札六枚一組 一六〇〇円 略号(ふお)

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 一六〇〇円 略号(ふね)

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 一四〇〇円 略号(ふつ)

顔面を素足で踏みつける

大手札三枚一組 一〇〇〇円 略号(ふな)

のよろこびを味わいましょう。大休土曜日、日曜日ならいつでも都合します。待合い場所は旭川駅のステーションデパートの階段の中間の所にいます。ここは人通りが少いのですぐわかります。目印は手さげカバンを持っています。時間は土曜、日曜共に午後三時三十分から四十五分までで時間厳守をお願いします。(北海道旭川市八井上保夫)

山崎英吉様、山代正友様、吉井幸男様はじめ皆さま方からの私に對するお呼びかけ、ありがとうございます。私はペンをとることが大好きなのでお便りを書きたい気持は十分ありますが、生れつきの悪筆とそれに字が下手なのでしりごみしております。今度先生についてお習字のけいこと自動車の運転を習おうと思っております。八月号のサロン楽我記で辻村さんが私のことを書いておられて、最近

忘れた頃になって東浦ひかるが手紙を出してきた。と書いてありましたが、私は辻村さんに最近、手紙をお出ししたおぼえはございません。編集長さまと読者通信に出しただけでございます。それに、東浦さんの悪いくせは、約束をすっぱかすことです。と書いておられますが、辻村さんにはたった一回、それも手紙のいきちがい、お会いできなかったことがあるだけで、あんな風に書かれると、私の信用をなくされるのじやないかと思ひます。編集長に訂正をお願いしたので、辻村さんの文章を

勝手に直すわけにはゆかないが、貴女が本当のことを通信に出されては、といわれましたので、この文章を書きました。これから、出来るだけこの通信欄に顔を出させていただきますから、よろしくお願いします。先日、一年何カ月ぶりかで大塚啓子さんと一緒に琵琶湖へ撮影に行きまして、ほんとうに楽しい一日を過ごしました。また暇のあるかぎりカメラの前に立たせていただこうと思っております。(東浦ひかる)

貴誌益々発展の由、お喜び申し

異色責写真分譲品

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一〇〇〇円

モデル MS 役 山原清子
略号 (はた)

裸女レスリング

大手札四十枚一組 三五〇〇円

モデル 山原清子、大塚啓子
略号 (れす)

入墨を踏みにじる

大手札八枚一組 八〇〇円

山原清子
略号 (いつ)

黒禪奔放姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円

刑部典子
略号 (ろち)

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円

刑部典子
略号 (のん)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原清子
略号 (いね)

白禪奔放姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円

刑部典子
略号 (ろて)

上げます。私も大の「奇ク」ファンですが、他の記事には余り興味を持たないのですが、パンティとなると、もうたまらないのです。それで七月号の読者通信の東京県鴨の市川千鶴子様の「汚れたパンティを三枚お送りしました」と云う記事にショックを受け、送っていただいた方はどんなに幸せかと空想しております。八月号にも市川様のご主人の記事が載っておりますが、貴誌の努力で何とか私も、あっせんしてもらえませんか。果敢だけではお便りも出来ず、せひ住所を教えてください。又市川千鶴子様のパンティに限らず美しい方のはいたひどく汚れたパンティならどなたのでもと思ひますが、せひともお返事下さい。お返事を一日も早く待っております。汚れたパンティを夢にみております。実現させて下さい。(埼玉県大宮市八河又光)

れしました、口惜しくて数回向いました。太股で首を絞められた揚句咽喉輪を逞しい尻に潰され参ったと云う迄責められ遂に屈伏しました。それより女性でも体重差が著しいと到底敵わない事を知り、肥った女性に憧れをいだく様になりました。サドの女性で太った人で体力的に優り責め抜いて私を屈伏させ押し潰す自信のある人を望みます。相当の事は致し積ります。連絡場所、面会場所等御知らせ下さい。(東京都浅草区八富田生)

志村善子様、その後如何お過ごしでしょうか。私が貴女へのお便りも今回で四度目になりましたね。一月号で貴女のお便りを拝読し、二月号で始めて貴女に呼びかけて以来はや半年も過ぎてしまいました。早いもんです。六月号で貴女の素晴らしい肢体をみて以来貴女が私の理想としていた女性にぴったりである事が判りました。元来私は太っている女性の方が好きで、やせて背の高い人は好みません。その上体が非常に柔らかいそうですね。私は貴女の素晴らしい肉体を思い切り責めたい。海老責、逆老責、あぐら縛りその他色んな

方法で。貴女はお腹が出てくるそう
ですが豊満な腹部を縦にきつく立
縛りにすれば素晴らしいポーズが出
来上りますよ。先日偶然三月号を
みつけ、貴女が東尻池か板宿でな
ら逢ってもよいとの辻村様の文を
読み、何故もっと早く三月号をみ
なかつたのか、くやまれてなりま
せん。まさか私に誌上で、そのよ
うに呼びかけて頂けるとは、夢に
も思っていなかっただけに、うか
つでした。八月号から編集部の方
針で、連絡場所を記載したものは
没にするとの事、従ってこの文を
貴女がお読みになったら、誌上に
てお返事を頂きたいのです。私は
貴女と逢えるのならいつでも結構
です。良家の子女である貴女は、
何度も緊縛プレイは出来ないでし
よう。一ヶ月か二ヶ月に一度で結
構です。貴女も年頃二、三年の内
にお嫁にいかれる事でしょう。そ
の間の短い時間を楽しみたいもの
ですね。それから花と蛇が映画化
されるそうですね。阪神間で上映
されたら一緒に観に行きません
か。女性一人では入りにくいでし
ようから。では志村様の良きお返
事をお待ちしております。辻村様
善子様の緊縛フォトを分譲品とし
て発表して頂けないでしょうか。

善処をお願いします。それから三
木市のSY氏、貴方も志村様に興
味をお持ちのようですね。私と二
人で志村様とプレイをしたいとの
事。実現出来ますかね。同好の男
性諸君が一堂に会して語るのもい
いものだと思います。私も貴男の
趣旨に賛成します。骨を折って頂
けませんか。貴男がお便りを出さ
れる場合は名をSYとばかさずに
出される方が相手にとっても好感
を持たれると思います、如何なも
のでしよう。(尼崎市八松岡生)

○

突然お便りさせて戴きます。小
生一昨年某大学文学部を卒業し、
平々凡々たるサラリマン生活に入
って既に三年目を迎えようとして
います。この間毎日毎日ぬるま湯
につかっている様な生活の連続の
中で「奇ク」の存在が唯一の精神
的快楽となってきました。振返え
ってみますに「奇ク」と私との交
りには既に七年の歳月を数えようと
しています。この知られざる心の
友の私に与えた影響の深さは測り
知れないものがあります。「奇ク」
を手取る度に私は何度自らの手
で女性を縛る喜びを夢想したこと
でしょう。私は決して強烈なサデ
イストではありません。私は美を

【九月号の新版分譲品】

湖畔女相撲

モデル 大塚啓子
（東浦ひかる）

雪崎京人氏から秀ノ山勝一著の
「相撲」を送って貰ったので大塚
東浦の二人に十分研究させて室内
で練習させた上で琵琶湖畔近江舞
子にて女相撲を展覧させました。
光線の豊富な湖畔ですの激しい
投げの打ち合いなども早いシャッ
タリで動作をキャッチしました。
今までの室内と違って野外です故
その点迫力が出ました。暑いの
何遍もの練習で砂まみれとなり、
渾身の間に砂が入って痛いとい
鳴を挙げ、いささかへこたれ気味
でしたが、二人とも豊富な肉味の
持主なので美しい写真が出来上り
ました。是非一見して下さい。

【第一組】 大手札印画紙焼付 略号（すや）

【第二組】 大手札印画紙焼付 略号（すゆ）

【第三組】 大手札印画紙焼付 略号（すよ）

【第四組】 大手札印画紙焼付 略号（すき）

女斗美場面

モデル 大塚啓子
（東浦ひかる）

△二人とも「水着」着用
「砂浜での格闘」

大手札印画紙焼付

十二枚一組 略号（すえ）

「叢で止めをさす」 大手札印画紙焼付 略号（すう）

十二枚一組 略号（すき）

「松林の中の死闘」 大手札印画紙焼付 略号（すき）

十二枚一組 略号（すき）

全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号（なの）

斬くの間非常に肉づきのよく
なった全裸の肢体に遠慮会釈なく
からまる厳しい縄目のむごさ。

猿ぐつわにあえぐ

大手札三枚一組 略号（なむ）

口も鼻も一緒に覆った布片の息
苦しさにあえぎもがくが、急所の
縄目に制せられて、すすり泣く。

真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 略号（なれ）

腰巻を腰に掛けようとして真紅の
ころも三ボーズを提供いたします。

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号（なに）

遅ましく盛り上った臀部をつき
だしたボーズに縛られて今まさに
暴虐の触手が迫まろうとする。

追究しようと試みる一青年です。そして妙令の女性の縛られた姿はその悶える姿態に言い知れない美の世界を感じるのです。かつて「奇ク」の懸賞小説に応募しようと試みながら遂に挫折のやむなきに到ったのも恐らく経験皆無のなせる術なのです。嗚呼、誰でもいい、私は女性を縛ってみたい。そして縛られた女の美しさに陶醉したい。誰か私のこの切ない願いをかなえてくれる方はみえませんか。プレイが駄目ならお話しをするだけでもいいんです。友達が欲しいという方がお見えになるのです。たら、八月一日か又は八月八日午後十二時半頃近鉄塩浜駅前の喫茶店「たちばな」まで来て戴けませんかでしょうか、なおその際、要した費用は当方にて負担させて戴きます。それではまだ見ぬ人に会える事を願ってペンをおきます。なおその時右手の小指に白いホウタイをしてきて戴ければ幸いです。

(原信介)

○ 五月号の読者通信に載せていた

次号(十月号)は八月二十五日に発売いたします

だきました、川崎の中村優子でございます。その後色々な男性の方から御返事がございましたが、私の最も望んでいました同性の方からの反響が無く、少し残念に思います。阿部彰様、山本和雄様、それに葉山啓様ありがとうございました。私がどれだけ貴男様方の趣好に合いますか、わかりませんが、初めは、お手紙にて、お互いの意見を交換したいと思っています。しかし良い連絡方法が無いのが残念です。東京の富田様私には貴男様の御指定に応じる勇気がありませんでした。お許し下さい。川崎の清田様、貴男様がお持ちになっておられる資料器具等是非見せていたいただきたいと思っています。そこで連絡方法を指定致します。八月一日南武線武蔵小杉駅下りホームにある東横病院のカンパンの裏に赤い紙をはさんでおきます。時間は午前八時から九時の間に探して下さい。しかし八時前には上り下り両ホームには立たないようお願いいたします。これだけは心ず守って下さいませ。(中村優子)

○ KKを拝読して三年になります。が、近年悪書追放なる運動が起り、KKの発行をやぶみました。が、グラビアは廃止されてしまった。悲しいですが、内容を充実して続刊されていることを知り、喜ぶと共に、今後とも編集者諸氏の御健闘を祈ります。僕は二十四才になる男性ですが、背も低く(一六三センチ)ハンサムとはいえないので、女性、特に着物姿の美しい女性には劣等感を感じます。KKで美しい女性たちが、緊縛されている姿は、僕の悩みをやわらげてくれます。僕も裸にした女性をKK三月号辻村氏のカメラ、ハントのS子さんのように責め緊縛したいのです。気の弱い平凡な青年である僕の夢をかなえてくれる女性のお手紙をお待ちしております。(埼玉県八宮田次郎)

○ 名古屋の橘あき子様、七月号で貴女のお便りを拝見致しました。私は岐阜市に住む、おせじにも美男子とは云えない二十七才の男です。私SMどちらでもと思います。さして云うなればS六分、M四分です。私の家は子供の頃より生活が苦しくて学費もスムーズに出す事が出来ず、世間からバカにされ

ていました(特に女性に多い)。そういった毎日の生活の中で、私の心はS的趣向に進んだのです。その反面M的な物も強く心の底にひそんでいたのです。女性からバカにされ笑われて来た事に対して女性を責めてやりたいという気持ちが強くなってきたのです。最近ではそういう事はなくなり女性の責められる時の美しさと云うものになったのです。私も一度だけ女性を縛った事が有ります。それは恋人でしたが、SMプレイをきらいますので、私としては淋しい気です。橘あき子、どうか私と友達になして下さい。SMに付いて色々話し合い又、気が合いましたらプレイをしたく思います。名古屋と岐阜では近いですから、度々逢う事も可能かと思えます。名古屋市でしたら仕事でよく行きますから少しは知っています。岐阜の青木恵子様、名古屋の大西まさ子様、京都の藤島万寿子様、どうか一度お便り下さい。近県の同好の女性の方もお便り下さい。青木恵子様は特に私と同じ岐阜市に住んで居られるのですからお逢いたいです。吉報をお待ちします。(岐阜八田中文雅)

☆編集後記☆

○懸賞「告白、手記、体験」の入選作品として今月号では二篇掲載した。「黒いコートの記憶から」(小妻容子)では、筆者の依頼の通り文章に若干の手を加えたが、内容は原文に忠実に残したつもりである。尚、原稿と同送された写真十数枚の中、誌上には数枚の掲載にとどめた。誌面の都合と条例による忌避を慮ったがためである。

○他にも数篇掲載候補作品があるのだが、いずれも、そのままでは掲載に耐え得ないので編集部の手で加筆訂正削除などをしていのだが、なかなか捗らないので発表がどうしても遅れがちになるのは、やむを得ない。「ゴム裏草履に憑かれた男の告白」(須磨孝)はたどたどしい文章だったが、とにかく特異な趣向なので手を加えてみた。

○夜乃探郎氏からの「ドラマ・奇譚クラブ」に啓発されて、別冊奇譚クラブや傍系で発行した「魅惑」「探奇」などの出版裏話を書きたい意欲にかられて倉庫を整理したが、昔の雑誌は殆ど出てこなかった。僅かに校正刷の表紙を挿入するにとどめてお茶を濁した。

○このところ、芳野眉美氏に対する関心が俄然高まってきた恰好である。先月号での公開状「濡れなくても、濡れる?」ということについて(夜乃探郎)に引き続いて今月号では「贗作の贗作、夜乃探郎氏の優雅な生活」(夜乃探郎)が現われた。更に、久方ぶりの投稿「麻生保氏の生活と意見」(麻生保)では「濡

れにぞ濡れし」についての異見が述べられた。嘗ての吾妻新対沼正三の「スポン、スラックス論争」に見られたように、論争の場は十分与えられるので、審判は読者の公平な判定に委ねたらよいのではないか。

○「人間、梅原北明伝」を物された久我庄一氏に対して、先月号の編集後記で「責」の開拓者伊藤晴雨画伯のことに言及したところ、早速、創作「伊藤晴雨画伯」(久我庄一)が送られてきた。久我庄一氏は「伊藤晴雨画伯」について「人間問題提起」という意味で皮切りをした、と言っておられるが、氏の精力的な健筆には敬意と謝意を表したい。先日、「山原清子を閉む座談会」の出席者の中にも夫婦にて伊藤晴雨氏の自宅に同居の上入資の研究をされたという方があったが、この久我氏の創作を契機として、逸話やかくれた資料が本誌によって後世に残ることは、まことに有意義ではなからうか。尚座談会の席上辻村隆氏の持参された「伊藤晴雨肉筆画」が一同に回覧されたことを附記しよう。

○八創作「伊藤晴雨画伯」の文中に挿入した挿絵は、すべて嘗て本誌に掲載した画稿の一部であるが、その中最後の「お菊の絵」の裏には、毛筆で「イソイデ此ウラエカキマシタ、画用紙ガナジムニアラズ」と書いてあり行を変えて「コレハ東京新聞の連サイのさしえに候」とあった。何か舞台装置のような絵だが、下書きの絵でもサービスするつもりでわざわざ但書きを下さったのだらうか。

○二カ月の休載で皆さまに大変気をもませた団鬼六氏の連載「花と蛇」がやっと今月号で掲載になった。氏の健筆を祈る。

☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共▽
三月分(3冊) 九〇〇円△送共▽
半年分(6冊) 一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

九月号

〔第十九巻第九号〕
〔通刊第二〇六号〕

昭和四十年八月二十日 印刷
昭和四十年九月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認証第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。